茨城県教育財団文化財調査報告第167集

一般国道354号道路改築事業地内埋蔵文化財調査報告書

下郷古墳群

作業室用

平成12年3月

茨城県
財団法人　茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第167集

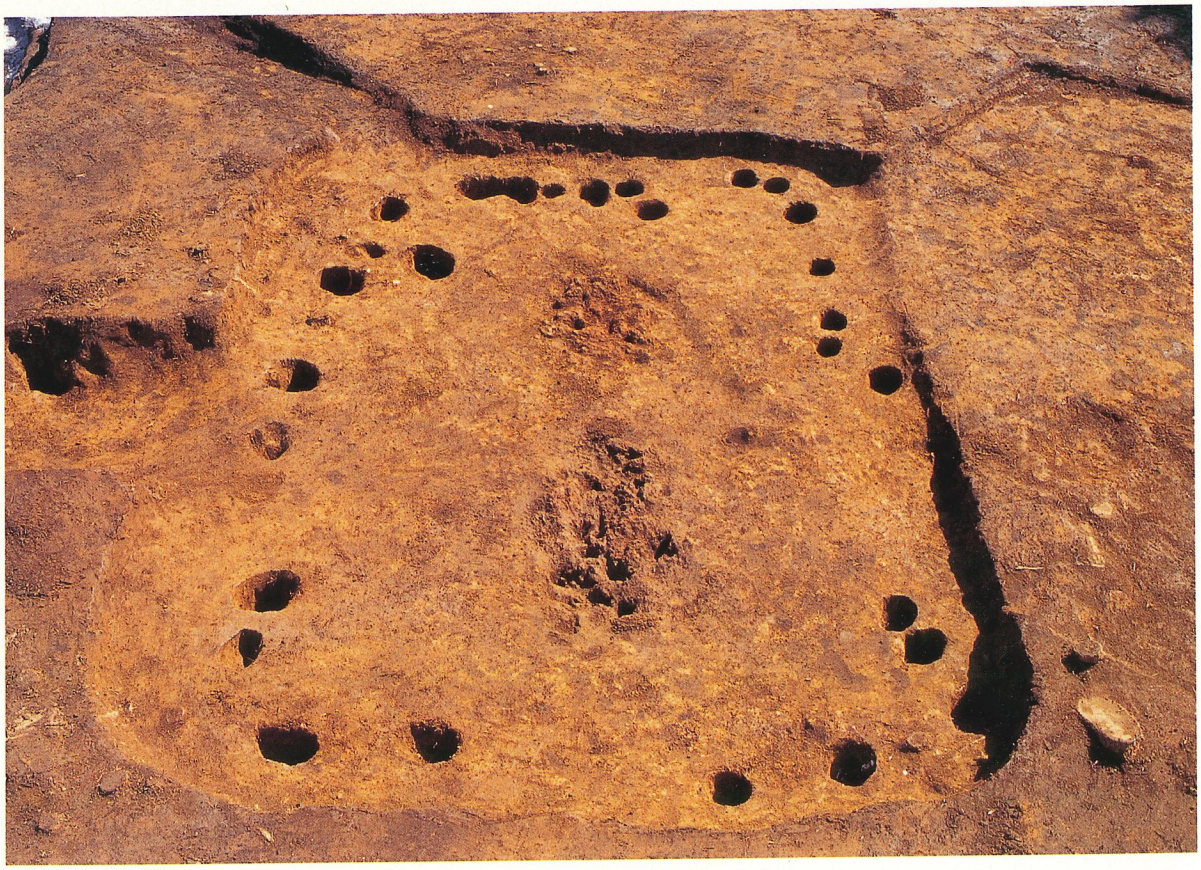
一般国道354号道路改築事業地内埋蔵文化財調査報告書

下郷古墳群（しもごうこふんぐん）

平成12年3月

茨城県
財団法人　茨城県教育財団

遺　跡　遠　景



第15号住居跡完掘状況

序

一般国道354号は，群馬県から茨城県鹿島郡大洋村に至る広域的な道路であり，産業，経済活動を支える主要な路線であります。

近年，霞ケ浦大橋が開通し，土浦市内において，慢性的な交通渋滞が発生し，その解消を図るためバイパスの整備が強く望まれているところです。その改築工事予定地内に下郷古墳群が所在しております。

財団法人茨城県教育財団は，茨城県から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け，平成９年11月から平成10年３月までの５か月にわたる発掘調査を実施いたしました。

本書は，下郷古墳群の調査成果を収録したものであります。本書が，研究の資料としてはもとより，郷土史の理解を深めると共に，教育，文化の向上の一助として広く活用されますことを希望します。

なお，発掘調査及び整理を進めるにあたり，委託者である茨城県からいただいた多大なる御協力に対し，心から御礼申し上げます。

また，茨城県教育委員会，土浦市教育委員会をはじめ，関係各機関及び関係各位から御指導，御協力をいただいたことに対し，衷心より感謝の意を表します。

平成12年３月

財団法人　茨城県教育財団
理事長　齋　藤　佳　郎

例　　言

1　本書は，茨城県の委託により財団法人茨城県教育財団が平成９年度に発掘調査を実施した，茨城県土浦市田村町字中内後に所在する下郷古墳群の発掘調査報告書である。

2　当遺跡の発掘調査期間及び整理期間は，以下のとおりである。

調　　査　平成９年11月１日～平成10年３月31日

整　　理　平成11年７月１日～平成12年３月31日

3　当遺跡の発掘調査は，調査第１課長沼田文夫の指揮のもと，調査第３班長海老澤稔，主任調査員仙波亨，平石尚和が担当した。

4　当遺跡の整理及び本書の執筆・編集は，整理課長川井正一の指揮のもと，主任調査員平石尚和が担当した。

5　本書の作成にあたり，弥生土器については，東茨城郡大洗町立祝町小学校教諭の海老澤稔氏に御教示をいただいた。

6　発掘調査及び整理に際し，御指導，御協力を賜った関係各機関並びに関係各位に対し，深く感謝の意を表します。

凡　　例

1　当遺跡の地区設定は，日本平面直角座標第Ⅸ系座標を原点とし，Ｘ軸＝＋10,020m，Ｙ軸＝＋37,060mの交点を基準点（Ａ１a1）とした。

大調査区は，この基準点を基に遺跡範囲内を東西南北各々40m四方の大調査区に分割し，さらに，この大調査区を東西，南北に各々10等分し，４m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は，アルファベットと算用数字を用い，北から南へＡ，Ｂ，Ｃ…，西から東へ１，２，３…とし，「Ａ１区」，「Ｂ２区」のように呼称した。大調査区内の小調査区は，北から南へａ，ｂ，ｃ…ｊ，西から東へ１，２，３…０とし，名称は，大調査区の名称を冠し，「Ａ１a1区」，「Ｂ２b2区」のように呼称した。

2　遺構，遺物，土層に使用した記号は，次のとおりである。

遺構　　住居跡-ＳＩ　古墳-ＴＭ　土坑-ＳＫ　溝-ＳＤ　道路跡-ＳＦ　掘立柱建物跡-ＳＢ　陥し穴-ＴＰ

遺物　　土器-Ｐ　土製品-ＤＰ　石器・石製品-Ｑ　金属製品・古銭-Ｍ　拓本土器-ＴＰ　その他-Ｙ

土層　　撹乱-Ｋ

3　遺構・遺物の実測図中の表示は，次のとおりである。

赤彩　焼土　炉　繊維土器　黒色処理・粘土

● 土器　　○ 土製品　　□ 石器・石製品　　△ 金属製品・古銭

4　土層観察と遺物における色調の判定は，『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著　日本色研事業株式会社）を使用した。

5　遺構・遺物実測図の作成方法と掲載方法については，次のとおりである。

(1)　遺跡の全体図は縮尺200分の１とし，各遺構の実測図は，60分の１の縮尺で掲載することを基本とした。

(2)　遺物は原則として３分の１の縮尺にした。種類や大きさにより異なる場合もあり，それらについては，個々に縮尺をスケールで表示した。

(3)　「主軸方向」は，長径方向とし，その軸線が座標北からみて，どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した。（例Ｎ－10°－Ｅ，Ｎ－10°－Ｗ）なお，〔　〕を付したものは推定である。

(4)　土器の計測値は，Ａ－口径　Ｂ－器高　Ｃ－底径　Ｄ－高台(脚台)径　Ｅ－高台(脚台)高とし，単位はcmである。なお，現存値は（　）で，推定値は〔　〕を付して示した。

(5)　遺物観察表の備考の欄は，土器の残存率，出土位置及びその他必要と思われる事項を記した。

抄　　録

ふりがな	いっぱんこくどう354ごうどうろかいちくじぎょうちないまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ
書名	一般国道354号道路改築事業地内埋蔵文化財調査報告書
副書名	下郷古墳群
巻次	
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告
シリーズ番号	第167集
著者名	平石尚和
編集機関	財団法人　茨城県教育財団
所在地	〒310-0911　茨城県水戸市見和1丁目356番地の2　　TEL　029-225-6587
発行機関	財団法人　茨城県教育財団
所在地	〒310-0911　茨城県水戸市見和1丁目356番地の2　　TEL　029-225-6587
発行日	2000（平成12）年3月21日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村番号	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
しもごうこふんぐん 下郷古墳群	いばらきけんつちうらし 茨城県土浦市 たむらまちなかうちご 田村町中内後 930番地ほか	1800 － D－27	36度 5分 20秒	140度 14分 42秒	25～ 27m	19971101 ～ 19980331	6,520m²	一般国道354号道路改築事業に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
下郷古墳群	集落跡	旧石器	石器集中地点1か所	スクレイパー，剥片	旧石器時代から中世にかけての複合遺跡である。特に縄文時代前期の住居跡からまとまった資料が確認され注目される。
		縄文	竪穴住居跡　32軒 竪穴状遺構　3基 陥し穴　3基 土坑　6基	縄文土器(深鉢),石器(石鏃,石斧,磨石,剥片)	
		弥生	竪穴住居跡　7軒	弥生土器(壺)，土製品(勾玉,紡錘車,球状土錘)	
		古墳	竪穴住居跡　5軒 方形周溝遺構1基	土師器(坏,器台,甕,台付甕) 須恵器（坏,𤭯,甕)	
	古墳	古墳	古墳　5基		
	墓域	中世以降	土坑　15基 集石　4か所	石製品(五輪塔,宝篋印塔),古銭	
	その他	時期不明	掘立柱建物跡1棟 溝　4条 道路状遺構　1条 土坑　46基	縄文土器片	

目　　次

序
例言
凡例
抄録
第１章　調査経緯 …… 1
　第１節　調査に至る経過 …… 1
　第２節　調査経過 …… 1
第２章　位置と環境 …… 2
　第１節　地理的環境 …… 2
　第２節　歴史的環境 …… 2
第３章　調査の成果 …… 7
　第１節　遺跡の概要 …… 7
　第２節　基本層序 …… 7
　第３節　遺構と遺物 …… 8
　　１　旧石器時代 …… 8
　　(1)　調査の概要と方法 …… 8
　　(2)　石器集中地点 …… 8
　　(3)　遺構外出土遺物 …… 14
　　２　縄文時代 …… 17
　　(1)　竪穴住居跡 …… 17
　　(2)　竪穴状遺構 …… 63
　　(3)　陥し穴 …… 67
　　(4)　土　坑 …… 69
　　(5)　遺構外出土遺物 …… 73
　　３　弥生時代 …… 81
　　(1)　竪穴住居跡 …… 81
　　(2)　遺構外出土遺物 …… 96
　　４　古墳時代 …… 98
　　(1)　竪穴住居跡 …… 98
　　(2)　方形周溝遺構 …… 111
　　(3)　古　墳 …… 112
　　(4)　遺構外出土遺物 …… 129
　　５　奈良・平安時代 …… 129
　　(1)　遺構外出土遺物 …… 129
　　６　中世以降 …… 130
　　(1)　土　坑 …… 131
　　(2)　集　石 …… 139
　　(3)　遺構外出土遺物 …… 149
　　７　時期不明遺構 …… 153
　　(1)　掘立柱建物跡 …… 153
　　(2)　土　坑 …… 153
　　(3)　溝 …… 153
　　(4)　道路状遺構 …… 156
　第４節　まとめ …… 161
写真図版

挿図目次

第１図　周辺遺跡分布図 …… 4
第２図　基本土層図 …… 7
第３図　旧石器調査区設定図 …… 8
第４図　石器集中地点遺物出土分布図 …… 10
第５図　旧石器時代の遺物実測図(1) …… 11
第６図　旧石器時代の遺物実測図(2) …… 12
第７図　旧石器時代の遺物実測図(3) …… 13
第８図　旧石器時代の遺物実測図(4) …… 15
第９図　旧石器時代の遺物実測図(5) …… 16
第10図　旧石器時代の遺物実測図(6) …… 17
第11図　第５号住居跡実測図 …… 18
第12図　第５号住居跡出土遺物実測・拓影図(1) …… 19
第13図　第５号住居跡出土遺物実測・拓影図(2) …… 20
第14図　第６号住居跡・出土遺物実測・拓影図 …… 22
第15図　第７号住居跡・出土遺物実測・拓影図 …… 22
第16図　第８号住居跡実測図 …… 23
第17図　第８号住居跡出土遺物実測・拓影図 …… 24
第18図　第９号住居跡・出土遺物実測・拓影図 …… 25
第19図　第10号住居跡実測図 …… 26
第20図　第10号住居跡出土遺物実測・拓影図 …… 26
第21図　第11Ａ・11Ｂ号住居跡・出土遺物実測・拓影図 …… 27
第22図　第11Ｂ号住居跡出土遺物実測・拓影図 …… 28
第23図　第15号住居跡実測図 …… 29
第24図　第15号住居跡出土遺物実測・拓影図 …… 30
第25図　第16Ａ・16Ｂ号住居跡実測図 …… 32
第26図　第16Ａ号住居跡出土遺物実測・拓影図(1) …… 33
第27図　第16Ａ号住居跡出土遺物実測・拓影図(2) …… 34
第28図　第16Ｂ号住居跡出土遺物実測・拓影図 …… 35
第29図　第17号住居跡実測図 …… 36
第30図　第17号住居跡出土遺物実測・拓影図 …… 37
第31図　第19号住居跡実測図 …… 39
第32図　第19号住居跡出土遺物実測・拓影図 …… 39
第33図　第20Ａ・20Ｂ号住居跡実測図 …… 41
第34図　第20Ａ号住居跡出土遺物実測・拓影図 …… 41
第35図　第20Ｂ号住居跡出土遺物実測・拓影図 …… 42
第36図　第23号住居跡実測図 …… 43
第37図　第23号住居跡出土遺物実測・拓影図 …… 43
第38図　第24号住居跡実測図 …… 45
第39図　第24号住居跡出土遺物実測・拓影図 …… 45
第40図　第27号住居跡実測図 …… 46
第41図　第27号住居跡出土遺物実測・拓影図 …… 46
第42図　第28号住居跡・出土遺物実測・拓影図 …… 47
第43図　第29号住居跡実測図 …… 48
第44図　第29号住居跡出土遺物実測・拓影図 …… 49
第45図　第30号住居跡実測図 …… 50
第46図　第30号住居跡出土遺物実測・拓影図 …… 51
第47図　第31号住居跡実測図 …… 52
第48図　第31号住居跡出土遺物実測・拓影図 …… 52
第49図　第32号住居跡・出土遺物実測・拓影図 …… 53
第50図　第35号住居跡・出土遺物実測・拓影図 …… 54
第51図　第36号住居跡・出土遺物実測・拓影図 …… 55
第52図　第38号住居跡実測図 …… 56
第53図　第39号住居跡・出土遺物実測・拓影図 …… 57
第54図　第43号住居跡・出土遺物実測・拓影図 …… 58
第55図　第44号住居跡実測図 …… 59
第56図　第44号住居跡出土遺物実測・拓影図 …… 59
第57図　第45・46号住居跡・出土遺物実測・拓影図 …… 60
第58図　第47号住居跡実測図 …… 62
第59図　第47号住居跡出土遺物実測・拓影図 …… 62
第60図　第１号竪穴状遺構実測図 …… 64
第61図　第１号竪穴状遺構出土遺物実測・拓影図 …… 64
第62図　第２号竪穴状遺構・出土遺物実測・拓影図 …… 65
第63図　第３号竪穴状遺構・出土遺物実測・拓影図 …… 66
第64図　第１・２・３号陥し穴実測図 …… 67
第65図　第１号陥し穴出土遺物実測・拓影図 …… 68
第66図　第10・21・32・38・47・53号土坑実測図 …… 70
第67図　第10・21・32・38・47・53号土坑出土遺物実測・拓影図 …… 71
第68図　縄文時代遺構外出土遺物実測・拓影図(1) …… 74
第69図　縄文時代遺構外出土遺物実測・拓影図(2) …… 75
第70図　縄文時代遺構外出土遺物実測・拓影図(3) …… 76
第71図　縄文時代遺構外出土遺物実測図(4) …… 77
第72図　縄文時代遺構外出土遺物実測図(5) …… 78
第73図　第１号住居跡実測図 …… 81
第74図　第１号住居跡出土遺物実測・拓影図 …… 82
第75図　第13号住居跡実測図 …… 83
第76図　第13号住居跡出土遺物実測・拓影図 …… 84
第77図　第14号住居跡実測図 …… 86
第78図　第14号住居跡出土遺物実測・拓影図 …… 87
第79図　第18号住居跡実測図 …… 89
第80図　第18号住居跡出土遺物実測・拓影図 …… 89
第81図　第21号住居跡実測図 …… 90
第82図　第21号住居跡出土遺物実測・拓影図 …… 91
第83図　第34号住居跡実測図 …… 93
第84図　第34号住居跡出土遺物実測・拓影図 …… 93
第85図　第37号住居跡実測図 …… 95
第86図　第37号住居跡出土遺物実測・拓影図 …… 95
第87図　弥生時代遺構外出土遺物実測・拓影図 …… 97
第88図　第２号住居跡実測図 …… 99
第89図　第２号住居跡出土遺物実測・拓影図 …… 100
第90図　第３号住居跡実測図 …… 101
第91図　第３号住居跡出土遺物実測・拓影図 …… 102
第92図　第４号住居跡実測図 …… 103
第93図　第４号住居跡出土遺物実測・拓影図 …… 104
第94図　第12号住居跡実測図 …… 106
第95図　第12号住居跡出土遺物実測図 …… 107
第96図　第33号住居跡実測図(1) …… 109
第97図　第33号住居跡実測図(2) …… 110
第98図　第33号住居跡出土遺物実測図 …… 110

第99図　第１号方形周溝遺構実測図 ……112
第100図　第１号墳実測図(1) ……113
第101図　第１号墳実測図(2) ……114
第102図　第１号墳実測図(3) ……115・116
第103図　第１号墳埋葬施設実測図 ……117
第104図　第１号墳出土遺物実測・拓影図(1) ……117
第105図　第１号墳出土遺物実測・拓影図(2) ……118
第106図　第２号墳実測図 ……122
第107図　第10号墳実測図 ……123
第108図　第10号墳埋葬施設実測図 ……124
第109図　第11号墳・出土遺物実測・拓影図 ……125
第110図　第12号墳実測図 ……127
第111図　第12号墳埋葬施設実測図 ……128
第112図　第12号墳出土遺物実測図 ……128
第113図　古墳時代遺構外出土遺物実測図 ……129
第114図　奈良・平安時代遺構外出土遺物実測・拓影図 …130
第115図　第９・17・19・24・27・29号土坑実測図 ……133
第116図　第30号土坑出土遺物拓影図 ……134
第117図　第30・31・39・40・41・52・54・63号
土坑実測図 ……137
第118図　第66号土坑実測図 ……139
第119図　第１～４号集石実測図 ……139
第120図　集石出土遺物実測図(1) ……140
第121図　集石出土遺物実測図(2) ……141
第122図　集石出土遺物実測図(3) ……142
第123図　集石出土遺物実測図(4) ……143
第124図　集石出土遺物実測図(5) ……144
第125図　集石出土遺物実測図(6) ……145
第126図　集石出土遺物実測図(7) ……146
第127図　集石出土遺物実測図(8) ……147
第128図　中世以降遺構外出土遺物実測・拓影図(1) ……150
第129図　中世以降遺構外出土遺物実測図(2) ……151
第130図　中世以降遺構外出土遺物実測・拓影図(3) ……152
第131図　第１号掘立柱建物跡実測図 ……154
第132図　第１～４号溝実測図 ……155
第133図　第１号溝出土遺物実測・拓影図 ……155
第134図　第１号道路状遺構跡・出土遺物実測・拓影図 …157
第135図　集落変遷図 ……163
付　図　下郷古墳群全体図

表　目　次

表１　下郷古墳群周辺遺跡一覧表 …… 5
表２　石材別石器一覧表 …… 9
表３　竪穴住居跡一覧表 ……157
表４　竪穴状遺構一覧表 ……159
表５　陥し穴一覧表 ……159
表６　縄文時代　土坑一覧表 ……159
表７　古墳一覧表 ……159
表８　中世以降　土坑一覧表 ……159
表９　時期不明　土坑一覧表 ……160
表10　溝一覧表 ……161

写真図版目次

ＰＬ１　石器集中地点，第５・６・７・10号住居跡完掘状況，第５・６・７号住居跡遺物出土状況
ＰＬ２　第11Ａ・11Ｂ・15・16Ａ・16Ｂ・17・19号住居跡完掘状況，第16Ａ・19号住居跡遺物出土状況
ＰＬ３　第20Ａ・20Ｂ・30・39・47号住居跡完掘状況，第１・２号陥し穴完掘，第１号住居跡遺物出土状況
ＰＬ４　第13・34・12号住居跡完掘状況，第13・２・４号住居跡遺物出土状況
ＰＬ５　第33号住居跡・第１号方形周溝遺構・第１・２・10号墳・第１号墳埋葬施設完掘状況，第12号住居跡，第１号墳内遺物出土状況
ＰＬ６　第11・12号墳完掘，第12号墳埋葬施設完掘，第17号土坑完掘，第１・３号集石，第１号掘立柱建物跡完掘状況，第２号溝完掘状況
ＰＬ７　第５・８・９・16Ａ・16Ｂ・17号住居跡出土遺物
ＰＬ８　第５・10・15・16Ａ・19号住居跡出土遺物
ＰＬ９　第６・７・11Ａ・11Ｂ・16Ａ・19・23・27号住居跡出土遺物
ＰＬ10　第29～32・35・36・39・43～47号住居跡出土遺物
ＰＬ11　第１・３号竪穴状遺構，第１号陥し穴，第10・21・32・53号土坑，縄文時代遺構外出土遺物
ＰＬ12　縄文時代遺構外出土遺物
ＰＬ13　第１・13・14・18号住居跡，縄文時代遺構外出土遺物
ＰＬ14　第１・２・12・13・18・21・34・37号住居跡，弥生時代遺構外出土遺物
ＰＬ15　第２・４・12・33号住居跡，第１号墳，古墳時代・奈良・平安時代遺構外出土遺物
ＰＬ16　第１号墳，第１号溝，第１号道路状遺構，縄文時代・奈良・平安時代・中世以降遺構外出土遺物
ＰＬ17　第２・11・13・21号住居跡，第１号墳，集石，縄文時代遺構外出土遺物
ＰＬ18　住居内出土石鏃，第10・38号土坑，第１号墳，旧石器時代・縄文時代・弥生時代遺構外出土遺物
ＰＬ19　旧石器時代，縄文時代遺構外出土遺物
ＰＬ20　旧石器時代，第1・12号墳出土遺物

第1章　調　査　経　緯

第1節　調査に至る経緯

一般国道354号は，群馬県から古河市，土浦市を経て大洋村に至る幹線道路である。霞ケ浦大橋が開通してから沿線地域の交通量の増加を招き，慢性的な渋滞が生じてきた。この解消を目指して行くには道路網の整備を図る必要が生じた。そうしたなか，茨城県道路建設局は，土浦市内の一般国道354号道路改築事業を計画した。

工事に先立ち，茨城県土浦土木事務所は，平成7年12月25日に土浦市教育委員会に対し，この予定地内における埋蔵文化財包蔵地の有無及び取り扱いについて照合した。同年12月26日に土浦市教育委員会は，茨城県教育委員会に一般国道354号道路改築事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照合文を進達し，両者で協議を行った。これを受け，茨城県教育委員会は，平成8年7月8日に現地踏査を実施し，同年10月14日に土浦市教育委員会あてに事業地内に下郷古墳群が所在することを回答した。平成9年2月20日，茨城県土木部と茨城県教育委員会は，埋蔵文化財の取り扱いについて，文化財保護の立場から慎重な協議を重ねてきた。その結果，茨城県教育委員会は，同年3月17日，下郷古墳群については，記録保存とする旨を茨城県土木部に回答をし，調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。

茨城県教育財団は，茨城県と埋蔵文化財発掘調査に関する業務委託契約を締結し，平成9年11月1日から下郷古墳群の発掘調査を実施することとなった。

第2節　調査経過

下郷古墳群（6,520㎡）の発掘調査は平成9年11月1日から平成10年3月31日までの5か月間で実施した。以下，調査の経過について，その概要を記述する。

11月　発掘調査を開始するための諸準備を行う。4日に調査区の現地踏査を行う。5日から方眼杭打ちを行った。7日から試掘範囲の設定を行う。11日から補助員を投入して試掘を開始し，第1号墳の墳丘測量を行った。試掘の結果，古墳群以外に縄文時代の集落跡の存在を確認した。

12月　1日から第1号墳のトレンチ試掘を開始した。15日から重機による表土除去及び遺構確認作業を行う。桜や杉，欅等の切り株が多く，表土除去も思うように進まなかったが，25日に東側調査区の表土除去を終了した。

1月　6日から第1号墳の盛土の除去を重機で行った。竪穴住居跡44軒，古墳5基が確認され，調査を進めたが，降雪のため遺構調査は遅れがちであった。21日から竪穴住居跡等の遺構調査と第1号墳の調査を並行して進めた。

2月　2日から第2・10・11・12号墳の遺構調査を並行して進めた。21日までに弥生時代及び古墳時代の竪穴住居跡の調査をほぼ終了する。縄文時代の竪穴住居跡及び土坑の調査を進めた。

3月　2日から西側の重機による表土除去を開始した。9日から第10・12号墳の埋葬施設の調査を進めた。18日には航空写真撮影を実施し，19日から撤収の準備を開始した。19日から補足調査と旧石器の調査を始めた。26日には遺構調査が終了した。

調査区域内の安全対策を行い，30日には現場事務所を撤収した。

第2章　位置と環境

第1節　地理的環境

下郷古墳群は，茨城県土浦市田村町中内後930番地ほかに所在し，ＪＲ常磐線土浦駅の北東約3.5kmに位置している。

土浦市は，茨城県南部に位置し，東は新治郡霞ケ浦町に，南は牛久市・稲敷郡阿見町に，西はつくば市・新治郡新治村に，北は新治郡千代田町に接している。地形的にみると，西茨城郡岩瀬町の鏡池を源に発する桜川が中央部を南東流して霞ケ浦に注ぐ。この川によって形成された沖積低地は台地を，新治台地と呼ばれる北部の台地と，筑波稲敷台地と呼ばれる南部の台地に二分している。

土浦市の東部から霞ケ浦町にかけて，霞ケ浦の土浦入と高浜入に挟まれた半島状を成す新治台地は，筑波山塊の東方に延び，標高25～27mの洪積台地である。新治台地には幾つかの河川とその支谷との浸食作用により複雑に入り組んだ舌状台地が形成されている。台地上は畑地や山林として利用され，霞ケ浦に面した広大な低地は蓮田として利用されている。

新治台地の地質は，成田層と呼ばれる海成砂層及び礫層が主体をなし，その上に常総粘土層と呼ばれる灰白色粘土層，その上に関東ローム層が堆積し，最上部は腐食土層となっている。

当遺跡は，土浦入北岸の新治台地の一角の標高約26mの台地上に立地する。台地の中に小河川によって開析された樹枝状の谷が入り込んでいる。周辺は，宅地と畑地及び山林として利用されている。

第2節　歴史的環境

茨城県南部，とりわけ霞ケ浦を中心に利根川下流域は，古くから人々の絶好の生活の場であり多くの遺跡が所在している。なかでも霞ケ浦周辺は，陸平貝塚(1)（美浦村），安食平貝塚(1)（霞ケ浦町），上高津貝塚(1)（土浦市）など著名な遺跡が所在する，縄文時代の遺跡の宝庫である。

下郷古墳群(3)の存在する台地も，南に霞ケ浦を望み，生活の場として適しており，遺跡の密集した地域である。

旧石器時代の遺跡として，荒屋型彫刻刀やガラス質黒色安山岩を中心としたブロックが発見された寺畑遺跡〈2〉，東内野型尖頭器やチャートのブロックが発見された前谷東遺跡〈3〉，焼土跡の発見された金澤遺跡〈4〉，瑪瑙のブロックの発見された石橋南遺跡〈7〉，寿行地遺跡〈8〉，ナイフ形石器の出土した壱杯清水西遺跡〈6〉などがある。

縄文時代の遺跡は，早期の遺跡として田戸式や茅山式土器の出土しているゴリン山遺跡(4)〈9〉や原ノ内遺跡(4)〈12〉，真木ノ内遺跡(4)〈13〉，夏島式や稲荷台式の撚糸文土器の出土している壱杯清水西遺跡や長峯遺跡(6)〈14〉，条痕文土器の出土している金澤遺跡などがある。前期の遺跡としては，浮島式土器の出土している清水遺跡(2)〈15〉やゴリン山遺跡，黒浜式から浮島式土器の出土している壱杯清水西遺跡や長峯遺跡，前谷西遺跡〈16〉，金澤遺跡，尻替遺跡〈17〉などが挙げられる。中期では，加曽利Ｅ式土器の出土している上縄遺跡〈18〉や神立遺跡〈19〉，下小野式土器の出土した壱杯清水西遺跡や寺畑遺跡，長峯遺跡，阿玉台式期の竪穴住居跡の検出した前谷西遺跡や前谷東遺跡，加曽利Ｅ式期の竪穴住居跡の検出された八幡脇遺跡〈20〉などが挙げられる。後・晩期では，富士塚遺跡〈21〉，堀之内式期の土坑の検出された新堀東遺跡〈22〉と安行式土器の出土した壱杯清水西遺

跡のみである。

弥生時代の遺跡は，集落として宝積遺跡〈23〉や六十塚遺跡〈24〉が確認された程度である。弁ノ内遺跡〈25〉や壱杯清水西遺跡，金澤遺跡，入ノ上Ａ・Ｂ遺跡[7]〈26〉では住居跡が一軒検出されたのみである。

古墳時代にはいると遺跡数は増加する。前期の遺跡としては，県内で最も古い鍛冶工房跡が検出された八幡脇遺跡や尻替遺跡，五斗落遺跡[4]〈27〉などがあり，方形周溝墓が検出された壱杯清水西遺跡がある。古墳では王塚古墳[2]〈28〉や后塚古墳[2]〈29〉，田村船塚古墳群[2]〈31〉が前期古墳と考えられる。中期では寺畑遺跡で住居跡が２軒検出されている。後期になると集落として五斗落遺跡や大儘遺跡[4]〈32〉，金澤遺跡，石橋南遺跡，尻替遺跡，分布調査から柏原遺跡〈33〉や広月遺跡〈34〉，木ノ内久保遺跡〈35〉などである。古墳では田村上郷古墳〈36〉や柏原南古墳〈37〉，東原古墳〈38〉，寿行地古墳[5]〈39〉，東台古墳群〈40〉などがある。これらの集落群と古墳群との対応関係については不明である。

奈良時代以降も台地上に集落が形成されて多数の遺跡が散在している。

本古墳群の位置する土浦市田村町は，『常陸国風土記』によると大化前代には国造制の「茨城国」に属しており，大化５年(649)評制施行に際しては「茨城評」に編成された。また，律令制下では「常陸国茨城郡大津郷」に編成されていることが『和名類聚抄』からわかる。

註

1　茨城県教育委員会　『茨城県遺跡地図』　1991.3

2　土浦市史編纂委員会　『土浦市史』　1980.10

3　土浦市教育委員会　『下郷古墳調査報告書』　1981.3

4　茨城県教育財団　「霞ケ浦用水建設事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第43集　1987.3

5　土浦市・出島村教育委員会　『寿行地古墳調査報告書』　1995.3

6　土浦市教育委員会　『長峯遺跡』　1997.3

7　土浦市教育委員会　『入ノ上遺跡』　1997.3

参考文献

(1)　土浦市教育委員会　『土浦市の遺跡－埋蔵文化財包蔵地－』　1984.3

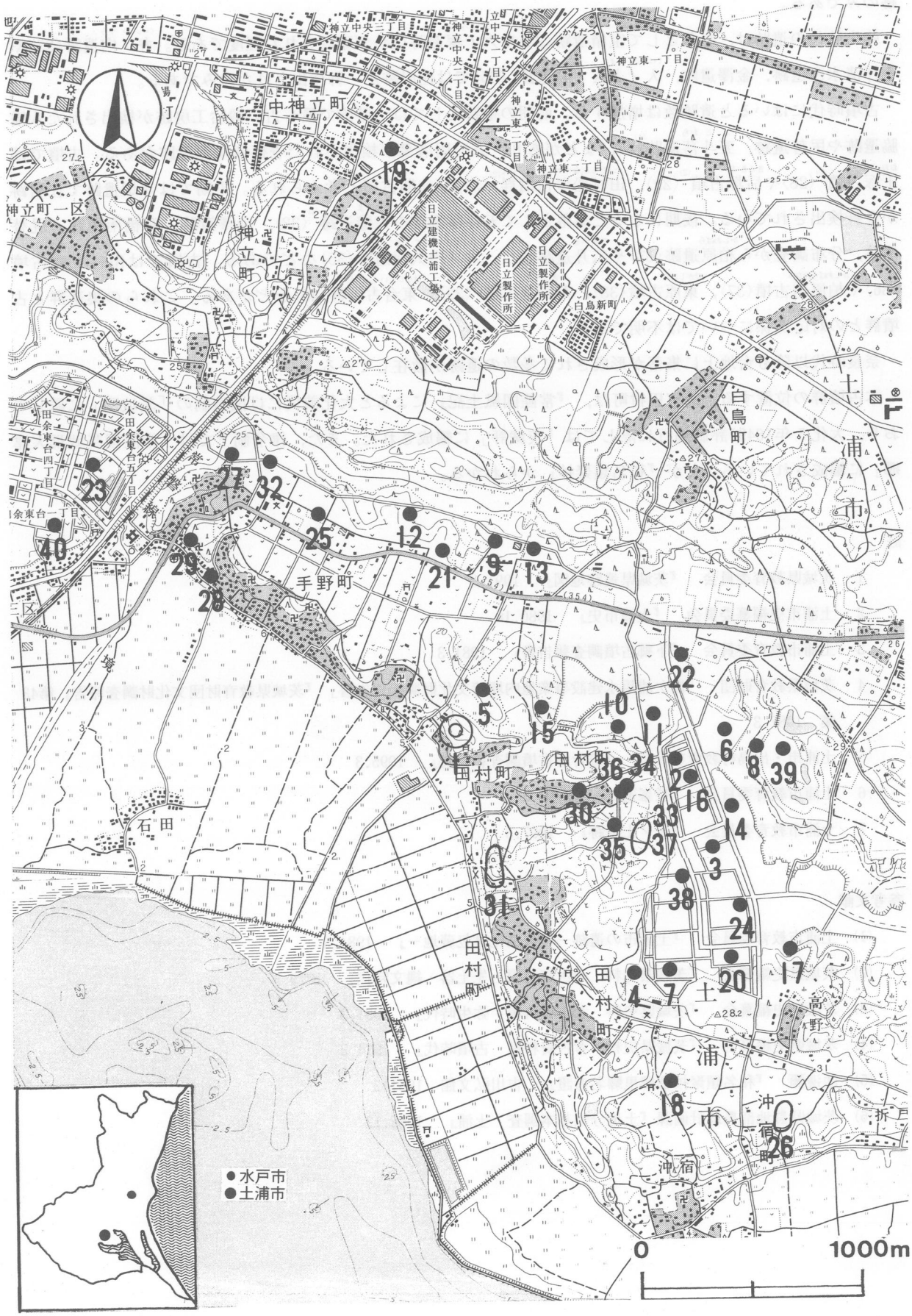
(2)　茨城県史編纂会　『茨城県史料　考古資料編　先土器・縄文時代』　1979.3

(3)　茨城県史編纂会　『茨城県史料　考古資料編　弥生時代』　1991.3

(4)　茨城県史編纂会　『茨城県史料　考古資料編　古墳時代』　1974.2

(5)　池邊彌　『和名類聚抄郡郷里驛名考證』　吉川弘文館　1981.2

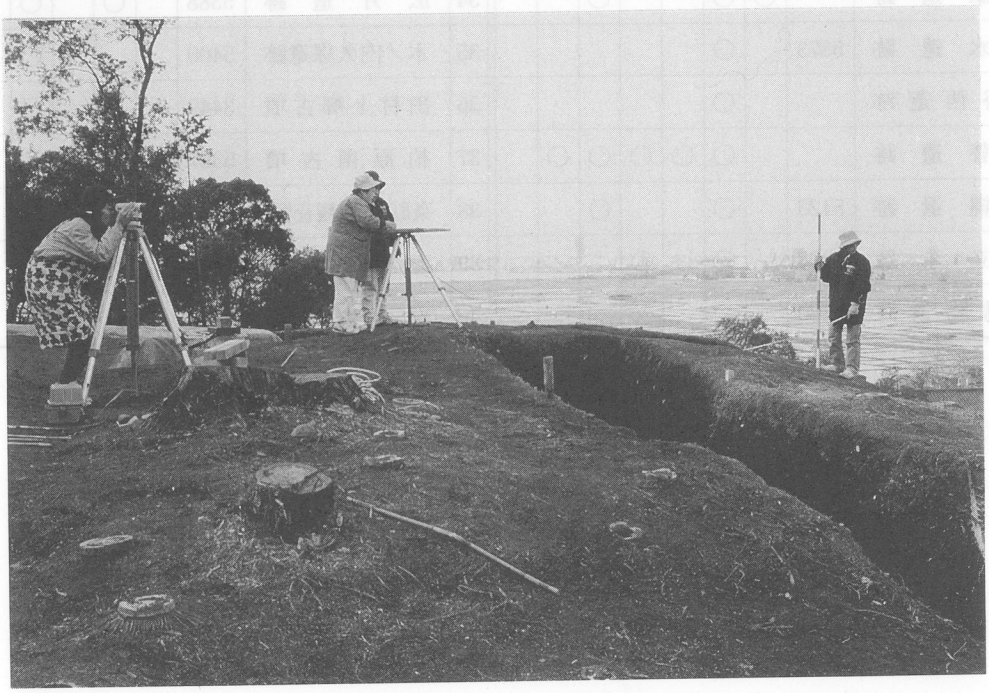
(6)　茨城県農地部農地計画課『土地分類基本調査　土浦』　1982.12


中神立町
神立町一区
神立町
手野町
石田
田村町
白鳥町
土浦市
高野
沖宿町
沖宿
神立中央二丁目
神立中央一丁目
神立東一丁目
神立東二丁目
日立建機土浦工場
日立製作所
白鳥新町
木田余東台四丁目
木田余東台五丁目
木田余東台一丁目
桜川
(354)
●水戸市
●土浦市
0
1000m

第１図　周辺遺跡分布図

表１　下郷古墳群周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	県遺跡番号	時代 旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平	鎌・室	江戸	番号	遺跡名	県遺跡番号	時代 旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平	鎌・室	江戸
①	下郷古墳群	当遺跡	○	○	○	○	○			21	富士塚遺跡	5349		○	○	○			
2	寺畑遺跡	5381	○	○		○	○	○		22	新堀東遺跡	5377		○					
3	前谷東遺跡	5383	○	○		○				23	宝積遺跡	5299		○	○	○			
4	金澤遺跡	5411	○	○	○	○				24	六十塚遺跡				○				
5	(田村町)向原遺跡	5372		○						25	弁ノ内遺跡	5345			○	○		○	
6	壱杯清水西遺跡	5379	○	○	○	○	○			26	入ノ上A・B遺跡	5428･9	○	○	○	○	○	○	
7	石橋南遺跡	5413	○	○		○				27	五斗落遺跡	5342				○	○		
8	寿行地遺跡		○							28	王塚古墳	1798				○			
9	ゴリン山遺跡	5350		○						29	后塚古墳	1797				○			
10	三夜原西遺跡	5375		○		○				30	山王古墳	5466				○			
11	三夜原東遺跡	5376		○		○				31	田村船塚古墳群	1801				○			
12	原ノ内遺跡	5348		○		○				32	大儘遺跡	3543		○		○			
13	真木ノ内遺跡	5468		○	○	○	○			33	柏原遺跡	5386				○			
14	長峯遺跡		○	○			○			34	広月遺跡	5388		○		○			
15	清水遺跡	5373		○						35	木ノ内久保遺跡	5400				○			
16	前谷西遺跡			○						36	田村上郷古墳	3449				○			
17	尻替遺跡			○	○	○	○	○		37	柏原南古墳	5387				○			
18	上縄遺跡	5423		○			○			38	東原古墳(観音塚)	5385				○			
19	神立遺跡	3998		○		○				39	寿行地古墳					○			
20	八幡脇遺跡	5380		○		○				40	東台古墳群	1802				○			



作業風景

第3章　調査の成果

第1節　遺跡の概要

下郷古墳群は，霞ケ浦を南に臨む土浦市北側の標高約25～27mの新治台地上に位置しており，縄文時代から古墳時代にかけての集落跡と古墳時代後期の古墳群からなる複合遺跡である。現況は山林で，調査面積は6,520㎡である。

今回の調査によって，調査区から旧石器集中地点1か所，縄文時代の竪穴住居跡32軒，弥生時代の竪穴住居跡7軒，古墳時代の竪穴住居跡5軒，掘立柱建物跡1棟，竪穴状遺構3基，土坑70基，溝4条，古墳5基を確認した。

遺物は，遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に60箱出土している。縄文時代の遺物は，前期の花積下層式，黒浜式，浮島式などを中心とした縄文土器（深鉢，小形鉢）及び石製品（凹石，磨石，石斧等）である。弥生時代の遺物は，屋代式と呼ばれる弥生土器や土製品（勾玉，紡錘車）である。古墳時代の遺物は，土師器（坏，器台，甕等），須恵器（坏，甕，瓶）等である。また，金属製品として，鉄鎌及び古銭（半両銭，皇宋通寶）なども出土している。その他，旧石器の剝片や中世の五輪塔なども出土している。

第2節　基本層序

調査区内にテストピットを設定し，第2図に示すような土層の堆積状況を確認した。

第1層は，20～30cmの厚さで，黒褐色の耕作土層である。

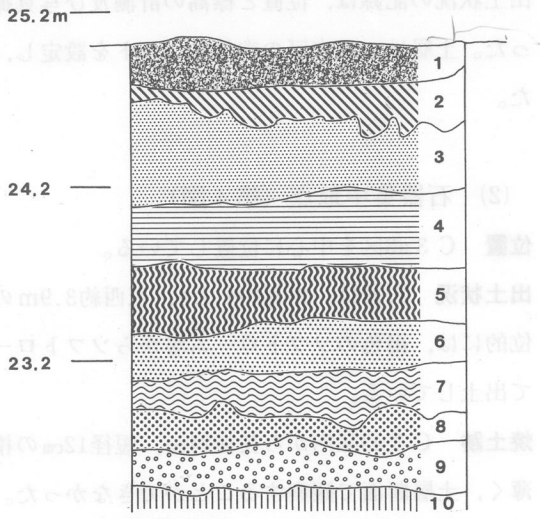
第2層は，5～30cmの厚さで，褐色をしたソフトローム層である。

第3層は，30～60cmの厚さで，にぶい褐色をしたソフトロームからハードロームへの漸移層である。

第4層は，30～50cmの厚さで，明褐色をしたハードローム層である。

第5層は，25～50cmの厚さで，褐色をしたハードローム層である。

第6層は，小石をやや含む褐色をしたハードローム層である。



第2図　基本土層図

第7層は，20～40cmの厚さで，褐色をしたハードロームから粘土への漸移層である。

第8層は，15～25cmの厚さで，にぶい褐色の粘土化しつつある層である。

第9層は，20～30cmの厚さで，さらににぶい黄橙色の粘土化の進んだ層である。

第10層は，10～20cmの厚さで，褐色をした砂層である。

住居跡などの遺構は，第2層上面で確認した。

第３節　遺構と遺物

１　旧石器時代

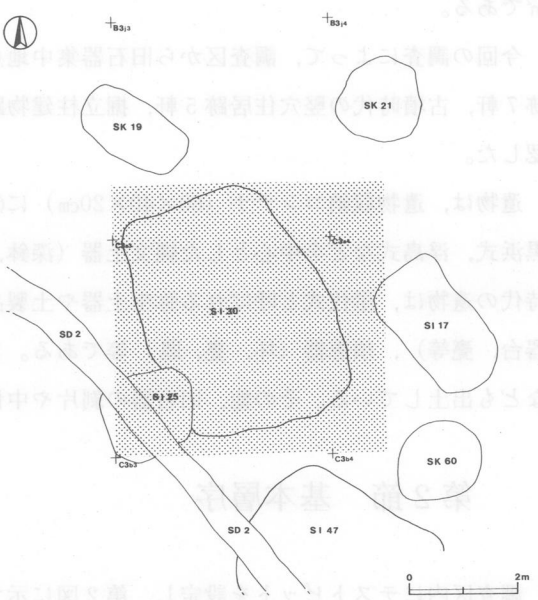
今回の調査で，石器集中地点１か所が検出された。以下，調査の方法，出土状況等について記載する。

(1)　調査の概要と方法

遺構確認時に，調査区東側の確認面から瑪瑙製石刃１点，黒曜石・トロトロ石の剥片などが出土した。また，調査が進行するにしたがって，第30号住居跡の覆土中から旧石器時代の石器と思われる安山岩のナイフ形石器１点と剥片５点が出土した。

そこで，竪穴住居跡等の遺構調査終了後に，最も石器が出土しており，文化層を確認できると思われる地点に調査区を設定して（第３図），ローム層を掘り下げた。調査区は東部（Ｃ２ｊ3区～Ｃ３ａ4区）の標高26ｍの台地上の平坦部である。

調査の過程で出土した石器は柱状に残したまま原位置を保持し，旧石器時代の遺構にも注意して掘り下げた。出土状況の記録は，位置と標高の計測及び写真撮影を行った。土層は，調査区の南部にベルトを設定し，観察した。



第３図　旧石器調査区設定図

(2)　石器集中地点（第４図）

位置　Ｃ３ａ3区を中心に位置している。

出土状況　石器は，南北約4.1m，東西約3.9ｍの円形状の範囲内に存在し，特にＣ３ａ3区に集中している。層位的には，褐色のソフトローム層からソフトロームとハードロームの漸移層の標高25.182m～25.619ｍにかけて出土している。

焼土跡　Ｃ３ａ3区内から長径24㎝，短径12㎝の楕円形で明赤褐色の焼土跡が確認された。焼土の厚さは数㎝と薄く，土層断面で観察することができなかった。焼土跡は，標高25.250ｍの漸移層にあり，石器分布のほぼ中心に位置していることから，旧石器時代の炉跡と思われる。

遺物　スクレイパー４点，石刃１点，細石刃３点，細石核１点，石核２点，二次加工のある剥片11点，剥片152点，砕片58点，台石１点の合計233点が出土している。石材は，安山岩217点，硬質頁岩４点，チャート12点である。第５～７図１は安山岩のスクレイパーで，下端からの押圧剥離による刃部加工が施されている。２は安山岩のスクレイパーで，縦長剥片を素材に両縁部に刃部調整が施されている。６～９は安山岩の剥片で，母岩を上方からの打撃による荒割り時の剥離片である。10は安山岩の細石核で，縦長剥片を折り取り側縁部からの剥離が施されている。11～13は，縦長剥片を素材にして側縁部に沿って剥離された安山岩の細石刃である。14・35は縦長剥片に整形加工された安山岩の剥片である。15は表裏に打面を持つ安山岩の横長剥片である。16は両極から打面を持ち，素材剥片と思われる安山岩の縦長剥片である。17～27は，両端部に押圧剥離による二次加

表２　石材別石器一覧表

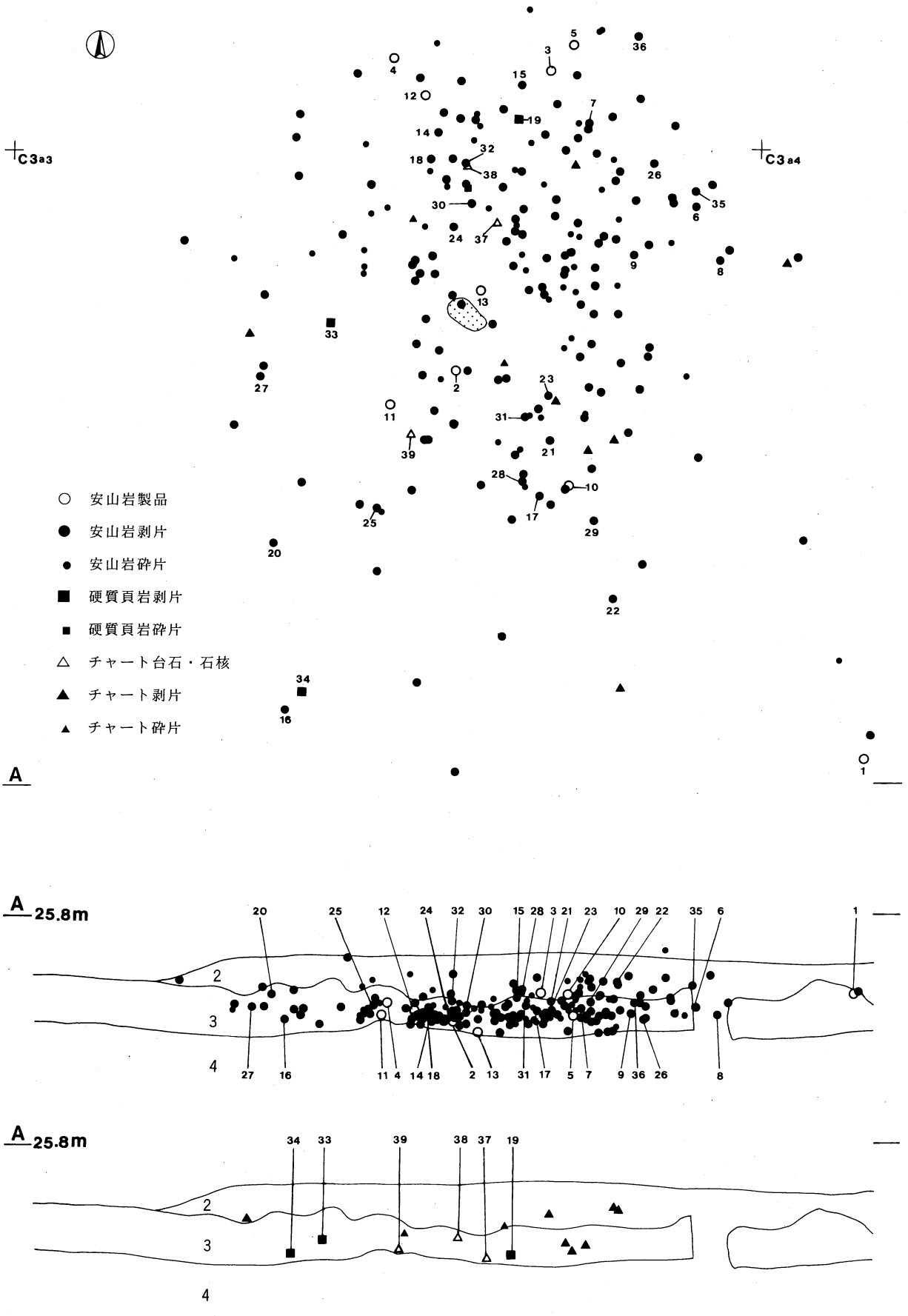
	安山岩	硬質頁岩	チャート	合　計
スクレイパー	4			4
石錐刃	1			1
細石核	1			1
細石刃	3			3
二次加工のある剥片	１０	1		１１
剥片	１４２	2	8	１５２
石核			2	2
砕片	５６	1	1	５８
台石			1	1
合計	２１７	4	１２	２３３

工のある安山岩と硬質頁岩の剥片である。39は石器制作時に使用されたチャートの台石である。

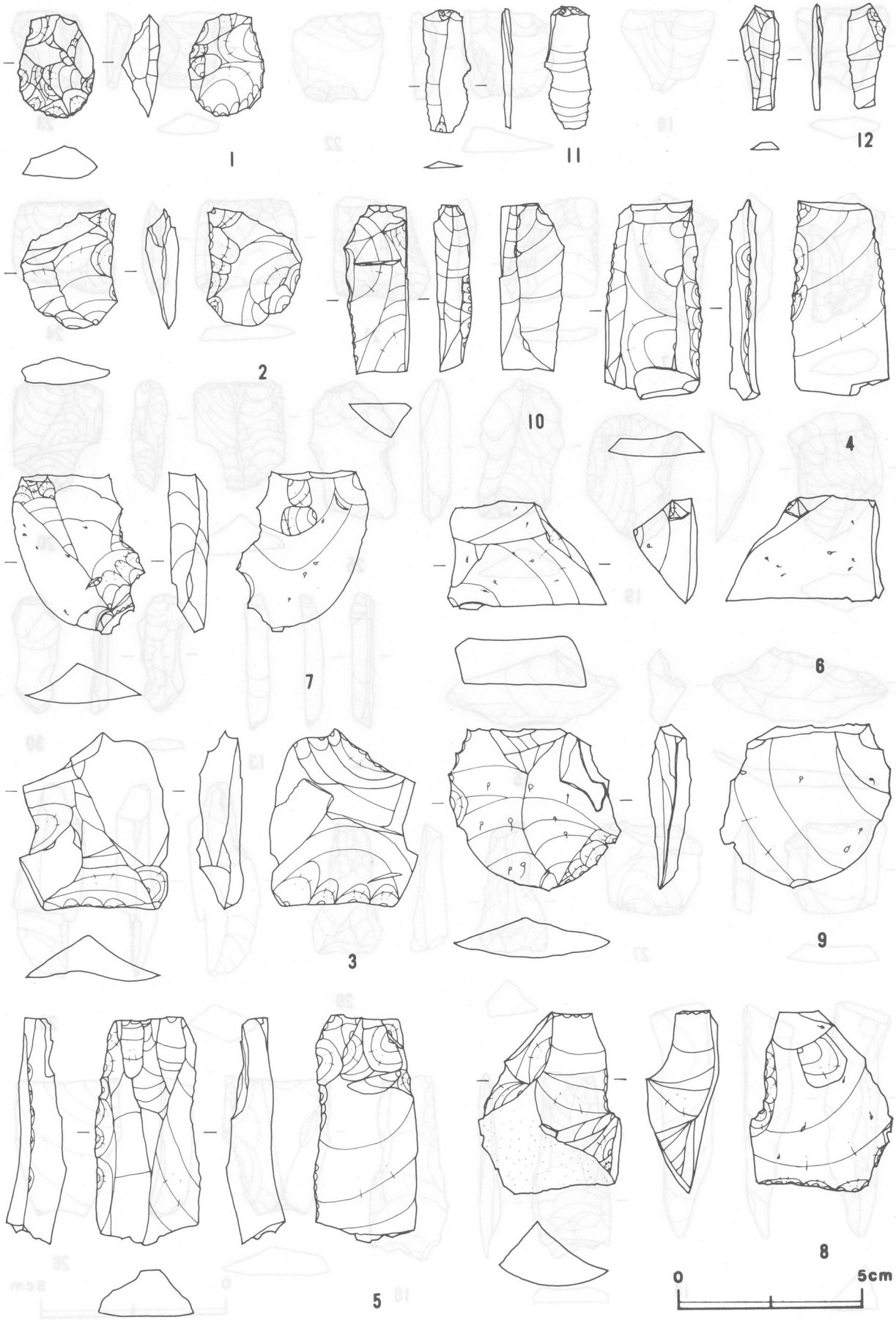
所見　当集中地点は，安山岩の剥片と砕片が主体である。接合できる遺物は確認されなかった。遺物が漸移層を中心に出土していることから，同一時期の可能性がある。台石や多量の剥片や砕片の出土状況から，炉を伴う石器製作跡の可能性が高いと考えられる。

旧石器時代　石器観察表（石器集中地点出土）

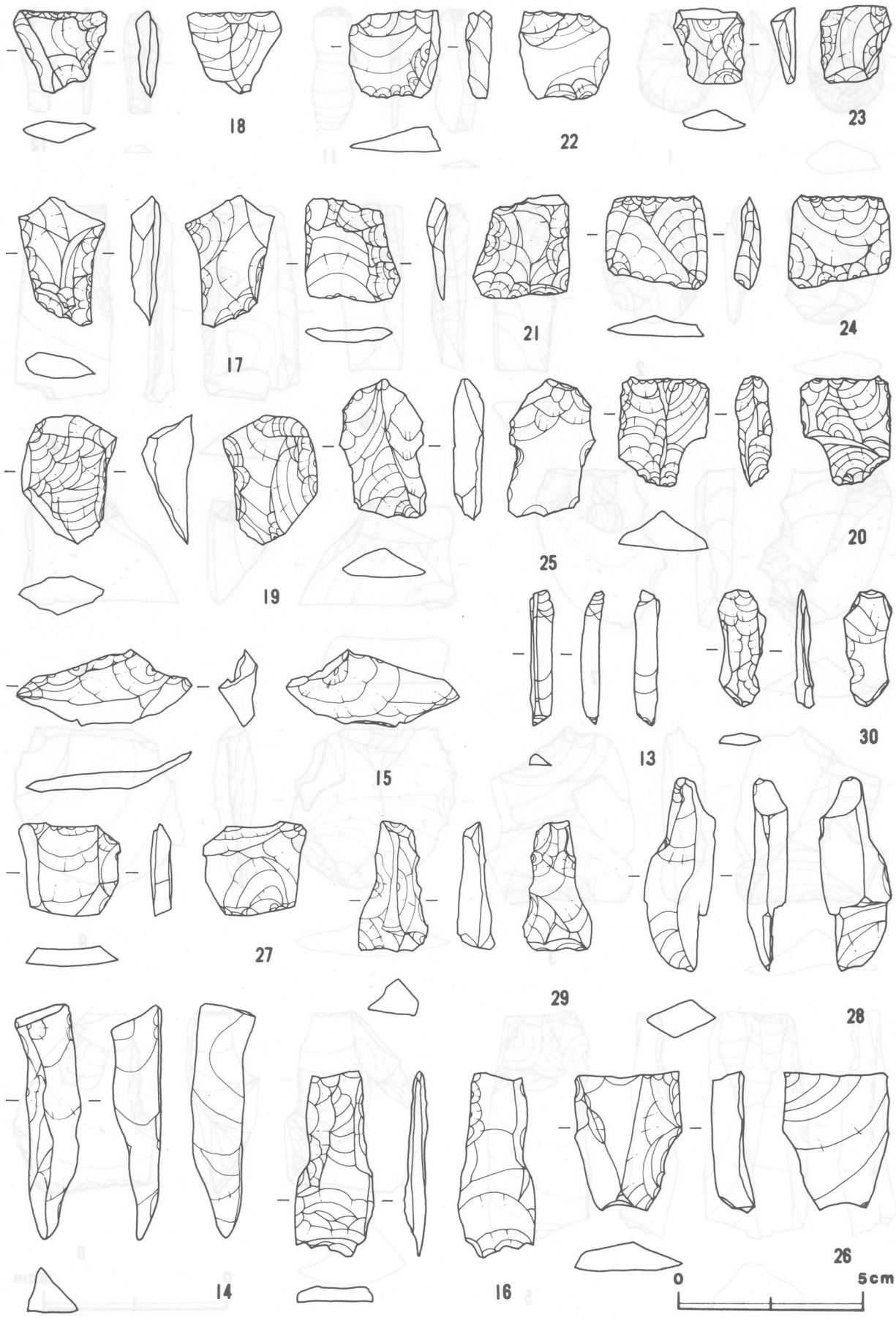
図版番号	器種	計測値				石質	出土地点		備考	遺物番号
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		出土地区	標高(m)		
1	スクレイパー	2.8	2.0	1.0	4.7	安山岩	C3a4	25.387		Q174
2	スクレイパー	3.3	2.7	0.9	5.4	安山岩	C3a3	25.232		Q178
3	エンドスクレイパー	4.8	4.0	1.3	23.6	安山岩	C2j3	25.364		Q242
4	サイドスクレイパー	5.4	2.6	0.75	13.5	安山岩	C2j3	25.332	両側縁及び下端から細かい二次加工調整が加えられている。	Q183
5	石刃	6.4	2.9	1.6	23.5	安山岩	C2j3	25.284	上部から表裏同じ打点を持つ。10と比較すると細石核の素材と考えられる。	Q185
6	剥片	2.9	4.3	1.7	18.6	安山岩	C3a3	25.314	荒割時の剥離。	Q243
7	剥片	4.3	3.6	1.0	13.2	安山岩	C2j3	25.247	荒割時の剥離。	Q244
8	剥片	4.9	3.9	2.0	24.0	安山岩	C3a3	25.279	荒割時の剥離。	Q245
9	剥片	4.4	4.6	1.2	18.4	安山岩	C3a3	25.272	荒割時の剥離。	Q246
10	細石核	4.5	1.9	0.9	8.9	安山岩	C3a3	25.375	細石刃をとるための調整剥片。	Q188
11	細石刃	3.3	1.2	0.3	1.0	安山岩	C3a3	25.252		Q177
12	細石刃	2.8	1.0	0.3	0.6	安山岩	C2j3	25.282		Q186
13	細石刃	3.6	0.6	0.6	1.1	安山岩	C3a3	25.172		Q187
14	剥片	6.4	1.8	1.3	9.7	安山岩	C2j3	25.237		Q180
15	横長剥片	2.0	4.7	1.1	4.0	安山岩	C2j3	25.399		Q173
16	縦長剥片	5.0	2.1	0.6	5.0	安山岩	C3a3	25.267		Q171
17	二次加工のある剥片	3.5	2.3	0.8	5.9	安山岩	C3a3	25.314	楔形石器の可能性あり。	Q175
18	二次加工のある剥片	2.3	2.6	0.6	2.5	安山岩	C3a3	25.314	楔形石器の可能性あり。	Q176
19	二次加工のある剥片	3.5	2.6	1.1	8.6	硬質頁岩	C2j3	25.212	楔形石器の可能性あり。	Q179
20	二次加工のある剥片	2.9	2.4	1.0	5.4	安山岩	C3a3	25.373	楔形石器の可能性あり。	Q237
21	二次加工のある剥片	2.8	2.6	0.55	3.3	安山岩	C3a3	25.337	楔形石器の可能性あり。	Q239
22	二次加工のある剥片	2.4	2.5	0.7	4.1	安山岩	C3a3	25.444	楔形石器の可能性あり。	Q240
23	二次加工のある剥片	2.1	1.95	0.75	2.7	安山岩	C3a3	25.282	楔形石器の可能性あり。	Q241
24	二次加工のある剥片	2.5	2.75	0.7	4.8	安山岩	C3a3	25.257	楔形石器の可能性あり。	Q247



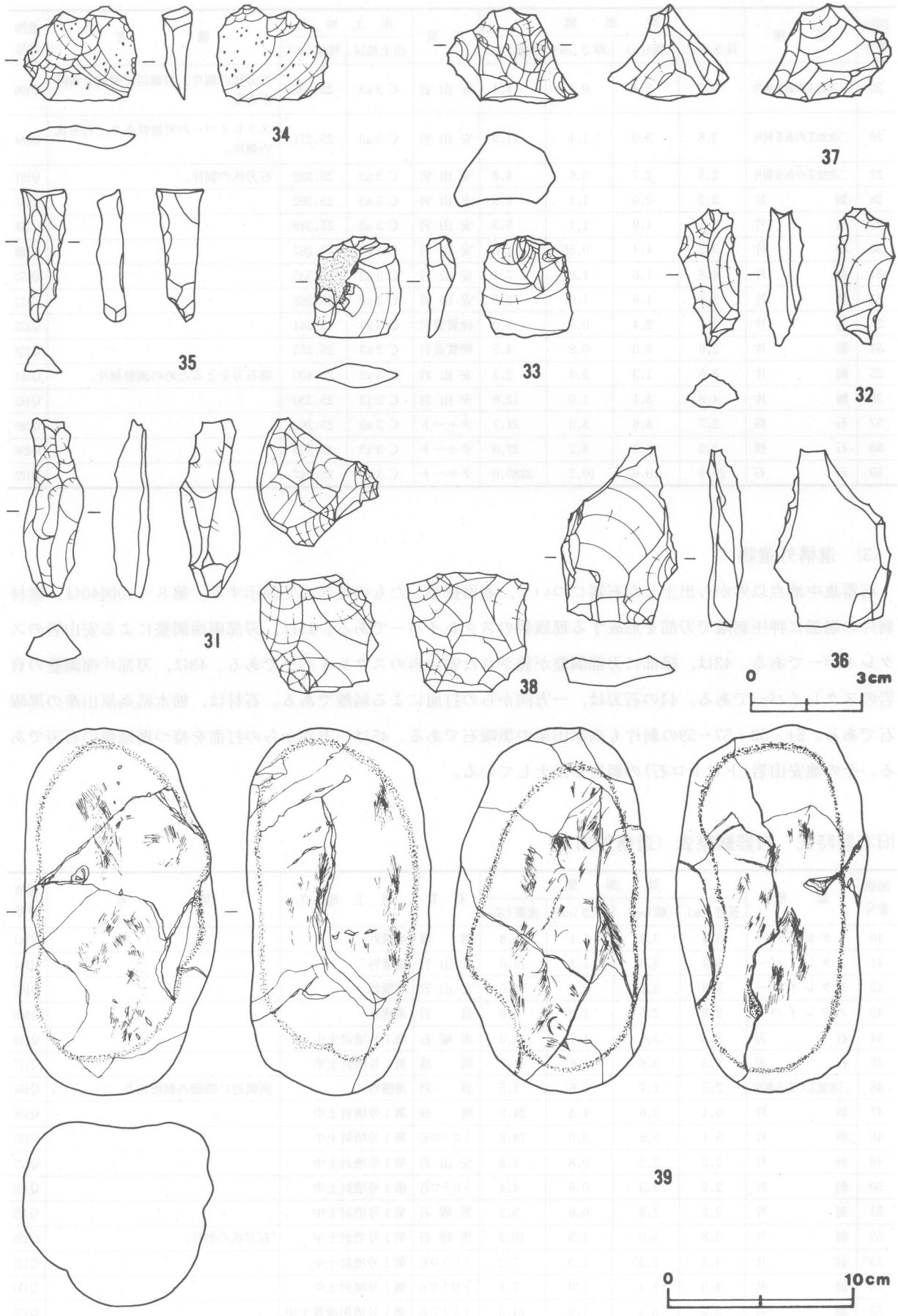
第4図　石器集中地点遺物出土分布図



第５図　旧石器時代の遺物実測図(1)



第6図　旧石器時代の遺物実測図(2)



第７図　旧石器時代の遺物実測図(3)

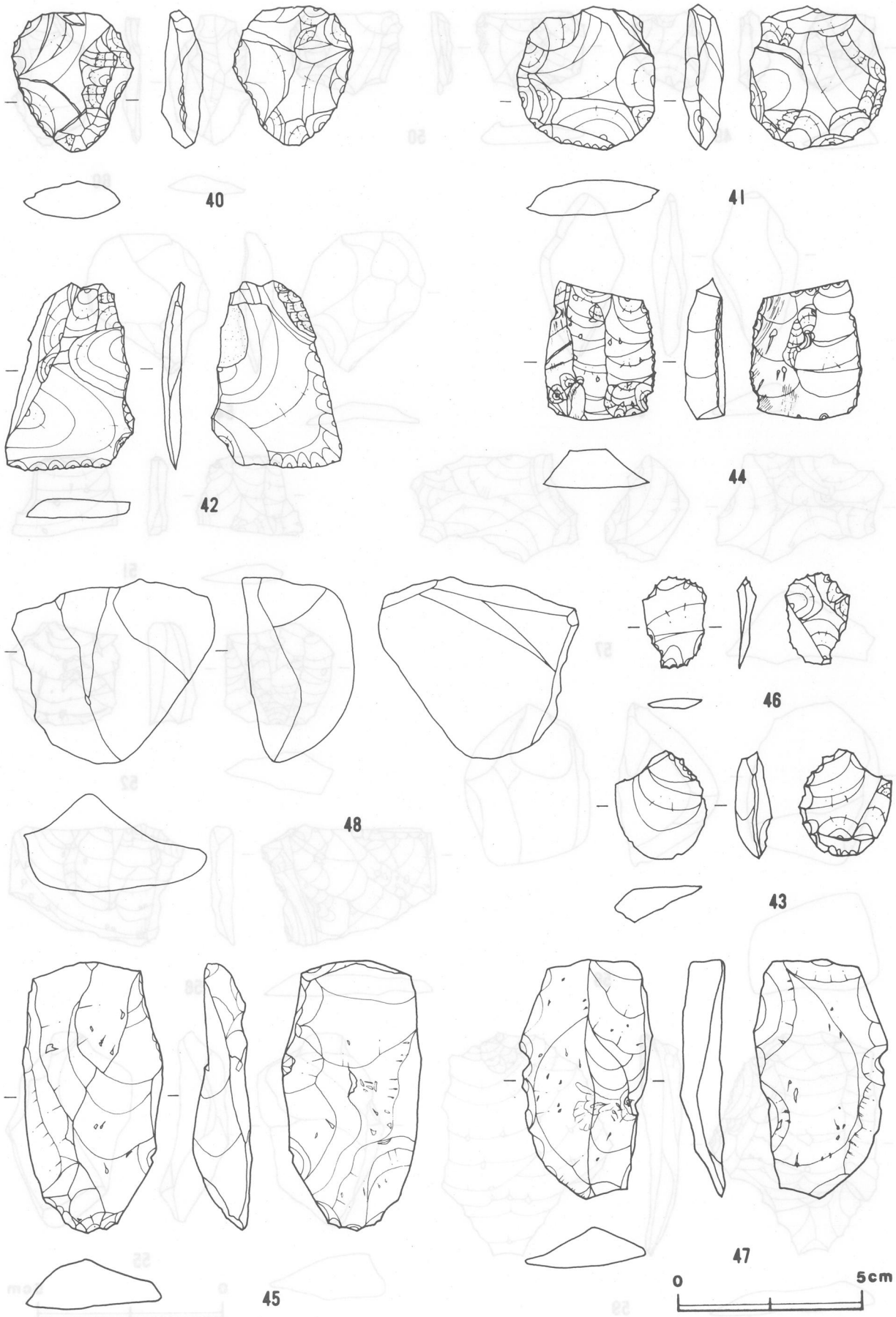
図版番号	器種	計測値				石質	出土地点		備考	遺物番号
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		出土地区	標高(m)		
25	二次加工のある剥片	3.7	2.4	0.8	7.1	安山岩	C3a3	25.333	石刃状の剥片。右側辺に微細な剥離がある。	Q190
26	二次加工のある剥片	3.8	3.0	1.1	11.9	安山岩	C3a3	25.271	スクレイパーの可能性あり。石刃状の剥片。	Q184
27	二次加工のある剥片	2.5	2.7	0.6	4.6	安山岩	C3a3	25.322	石刃状の剥片。	Q191
28	剥片	5.2	2.0	1.1	6.5	安山岩	C3a3	25.392		Q167
29	剥片	3.5	1.9	1.1	5.3	安山岩	C3a3	25.349		Q168
30	剥片	3.2	1.4	0.55	1.9	安山岩	C3a3	25.267		Q169
31	剥片	4.8	1.6	1.0	7.1	安山岩	C3a3	25.335		Q170
32	剥片	3.8	1.6	1.0	3.7	安山岩	C3a3	25.268		Q172
33	剥片	2.7	2.4	0.8	5.0	硬質頁岩	C3a3	25.344		Q235
34	剥片	2.6	3.0	0.8	4.5	硬質頁岩	C3a3	25.252		Q238
35	剥片	3.5	1.3	0.8	2.3	安山岩	C3a3	25.400	細石刃をとるための調整剥片。	Q181
36	剥片	4.8	3.1	1.0	12.0	安山岩	C2j3	25.330		Q182
37	石核	2.7	3.6	3.3	21.7	チャート	C3a3	25.262		Q189
38	石核	3.2	3.2	3.2	37.0	チャート	C3a3	25.303		Q236
39	台石	20.0	10.6	10.2	3280.0	チャート	C3a3	25.247		Q192

(3) 遺構外遺物

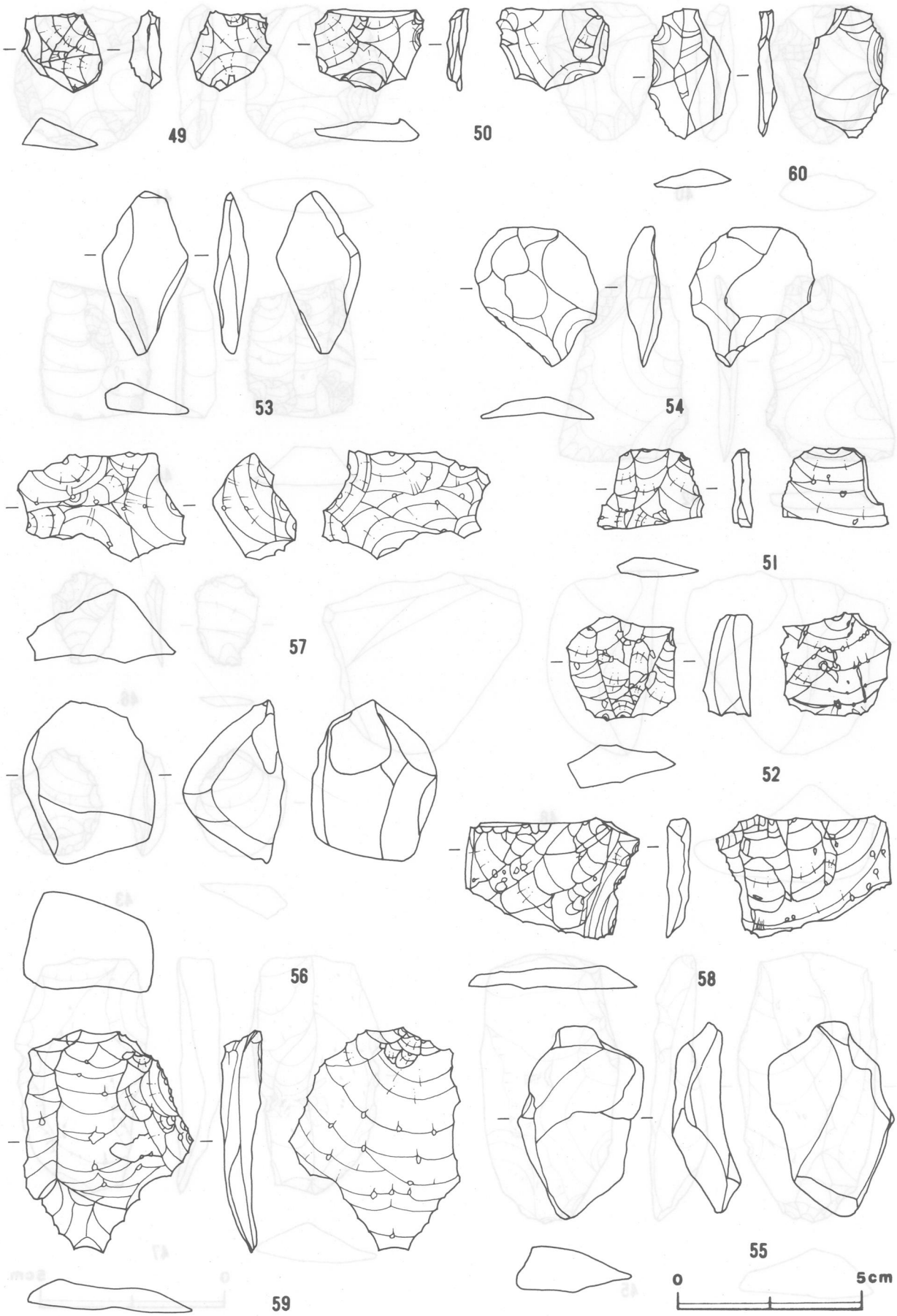
石器集中地点以外から出土した石器について，表面採集したものを含めて図示する。第8～10図40は，素材剥片の端部に押圧剥離で刃部を形成する瑪瑙製のスクレイパーである。41は，刃部両面調整による安山岩のスクレイパーである。42は，縁部に刃部調整が施された安山岩のスクレイパーである。43は，刃部片面調整の頁岩のスクレイパーである。44の石刃は，一方向からの打面による剥離である。石材は，栃木県高原山産の黒曜石である。51・52・57～59の剥片も高原山産の黒曜石である。45は一方向からの打面を持つ瑪瑙製の石刃である。その他安山岩(トロトロ石)の剥片が出土している。

旧石器時代　石器観察表（遺構外出土）

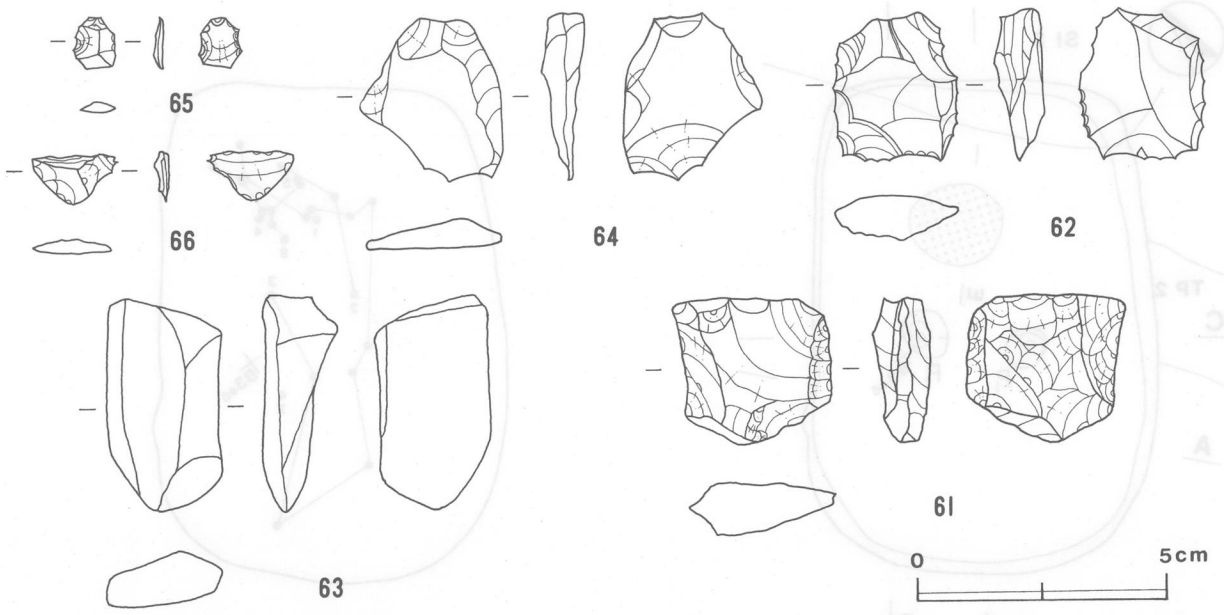
図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考	遺物番号
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
40	スクレイパー	3.8	3.3	1.1	14.8	瑪瑙	遺構外		Q143
41	スクレイパー	3.9	3.3	1.1	19.0	安山岩	遺構外		Q144
42	スクレイパー	5.0	3.5	0.6	10.0	安山岩	遺構外		Q162
43	スクレイパー	2.9	2.5	1.0	6.9	頁岩	遺構外		Q166
44	石刃	3.8	3.0	1.1	13.3	黒曜石	第1号墳封土中		Q113
45	石刃	7.3	3.6	1.6	41.5	瑪瑙	第1号墳封土中		Q117
46	二次加工のある剥片	2.5	1.7	0.6	1.5	頁岩	遺構外	両側辺に微細の剥離あり。	Q164
47	剥片	6.4	3.6	1.3	24.9	瑪瑙	第1号墳封土中		Q116
48	剥片	5.1	5.6	3.0	74.8	トロトロ石	第1号墳封土中		Q125
49	剥片	2.2	2.2	0.8	3.8	安山岩	第1号墳封土中		Q127
50	剥片	2.2	3.3	0.6	4.4	トロトロ石	第1号墳封土中		Q128
51	剥片	2.2	2.8	0.6	3.2	黒曜石	第1号墳封土中		Q129
52	剥片	2.8	3.0	1.3	10.3	黒曜石	第1号墳封土中	石刃状の剥片。	Q130
53	剥片	4.4	2.35	1.0	7.2	トロトロ石	第1号墳封土中		Q131
54	剥片	4.0	3.4	1.0	7.8	トロトロ石	第1号墳封土中		Q134
55	剥片	5.2	3.5	1.9	21.0	トロトロ石	第1号墳周溝覆土中		Q135
56	剥片	4.4	3.5	2.8	43.1	トロトロ石	第1号墳周溝覆土中		Q136



第 8 図　旧石器時代の遺物実測図(4)



第９図　旧石器時代の遺物実測図(5)



第10図　旧石器時代の遺物実測図(6)

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考	遺物番号
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
57	剝片	2.9	4.5	2.2	18.2	黒曜石	遺構外		Q145
58	剝片	3.2	4.7	0.65	10.7	黒曜石	遺構外	石刃状の剝片。	Q146
59	剝片	5.9	4.6	1.1	22.7	黒曜石	遺構外	石刃状の剝片。	Q147
60	剝片	3.6	2.2	0.5	2.9	トロトロ石	遺構外		Q151
61	剝片	3.0	3.1	1.1	12.1	瑪瑙	遺構外		Q152
62	剝片	3.0	2.5	0.9	6.4	安山岩	遺構外		Q163
63	剝片	4.3	2.3	1.5	15.7	トロトロ石	遺構外		Q165
64	剝片	3.4	2.8	1.0	6.3	トロトロ石	第11号墳周溝覆土中	石刃状の剝片。	Q137
65	砕片	1.0	0.8	0.2	0.2	安山岩	遺構外	強い衝撃で飛び散った石片。	Q153
66	砕片	1.0	1.7	0.3	0.4	チャート	遺構外	強い衝撃で飛び散った石片。	Q154

2　縄文時代

縄文時代の遺構としては，竪穴住居跡32軒，竪穴状遺構３基，陥し穴３基，土坑６基が検出された。以下，検出された遺構の特徴や遺物について記載する。

(1)　竪穴住居跡

第５号住居跡（第11図）

位置　調査区の東部，Ｂ３e6区。

重複関係　第３号住居跡に掘り込まれており，本跡が古い。また，第２号陥し穴を掘り込んでいる。

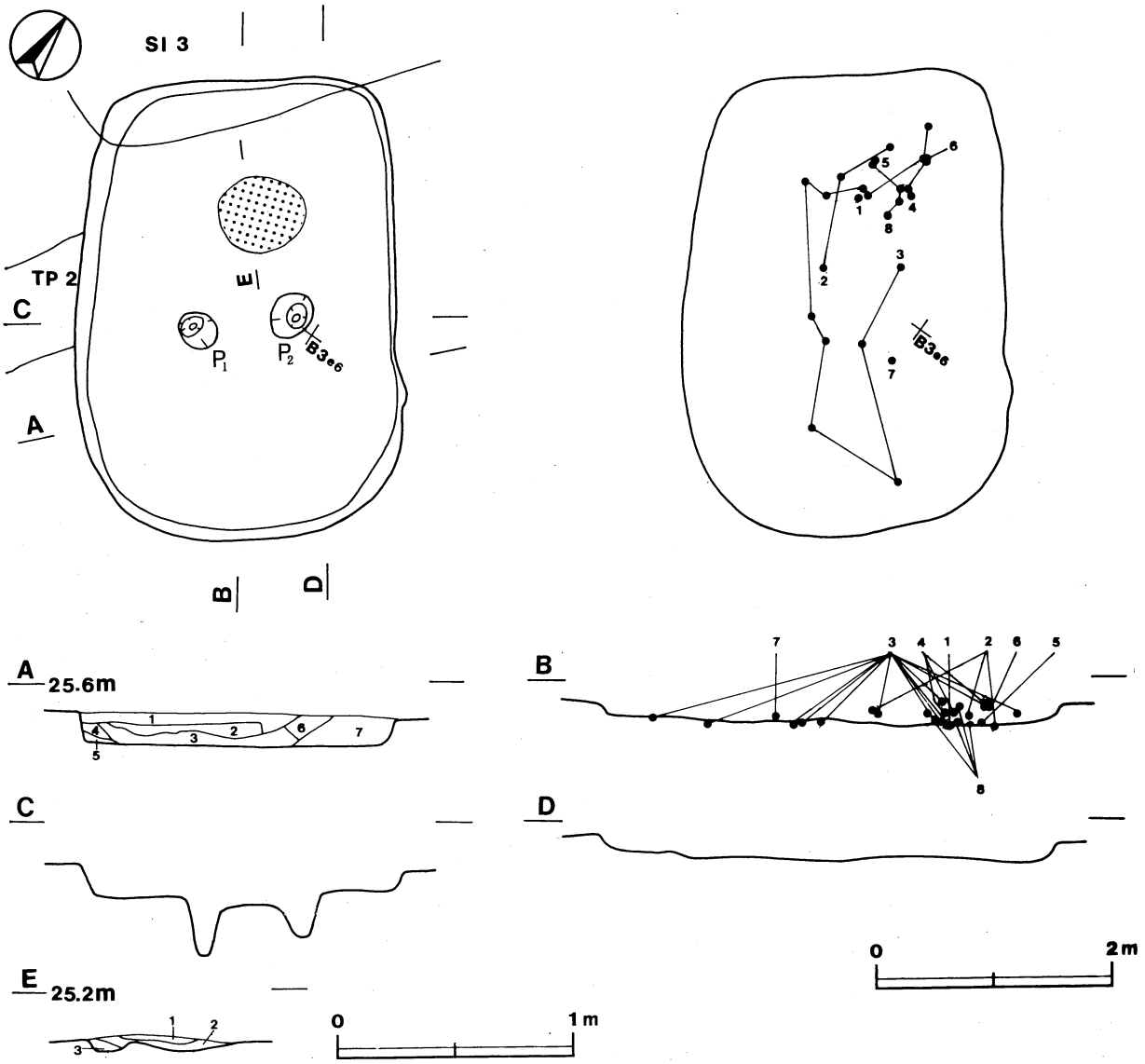
規模と平面形　長軸3.94m，短軸2.75mの隅丸長方形である。

主軸方向　Ｎ－34°－Ｗ

壁　壁高は20～25cmで，外傾して立ち上がる。

床　ほぼ平坦で，全体的に硬化した面がある。

ピット　２か所（Ｐ1・Ｐ2）。Ｐ1は，長径35cm，短径25cmの楕円形で，深さが50cmである。Ｐ2は，長径45cm，



第11図　第５号住居跡実測図

短径35cmの楕円形で，深さ38cmである。Ｐ１・Ｐ２は位置から主柱穴の可能性が考えられる。

炉　中央部からやや北西に位置し，長径80cm，短径68cmの楕円形で７cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床は，火熱を受けた焼土が薄く，短期間しか使用されなかったと思われる。

炉土層解説
1　黒褐色　焼土粒子・ローム粒子少量，炭化粒子微量
2　暗褐色　焼土粒子中量，ローム粒子少量，炭化粒子微量
3　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子微量

覆土　７層からなり，暗褐色土がレンズ状の堆積をしているので自然堆積である。

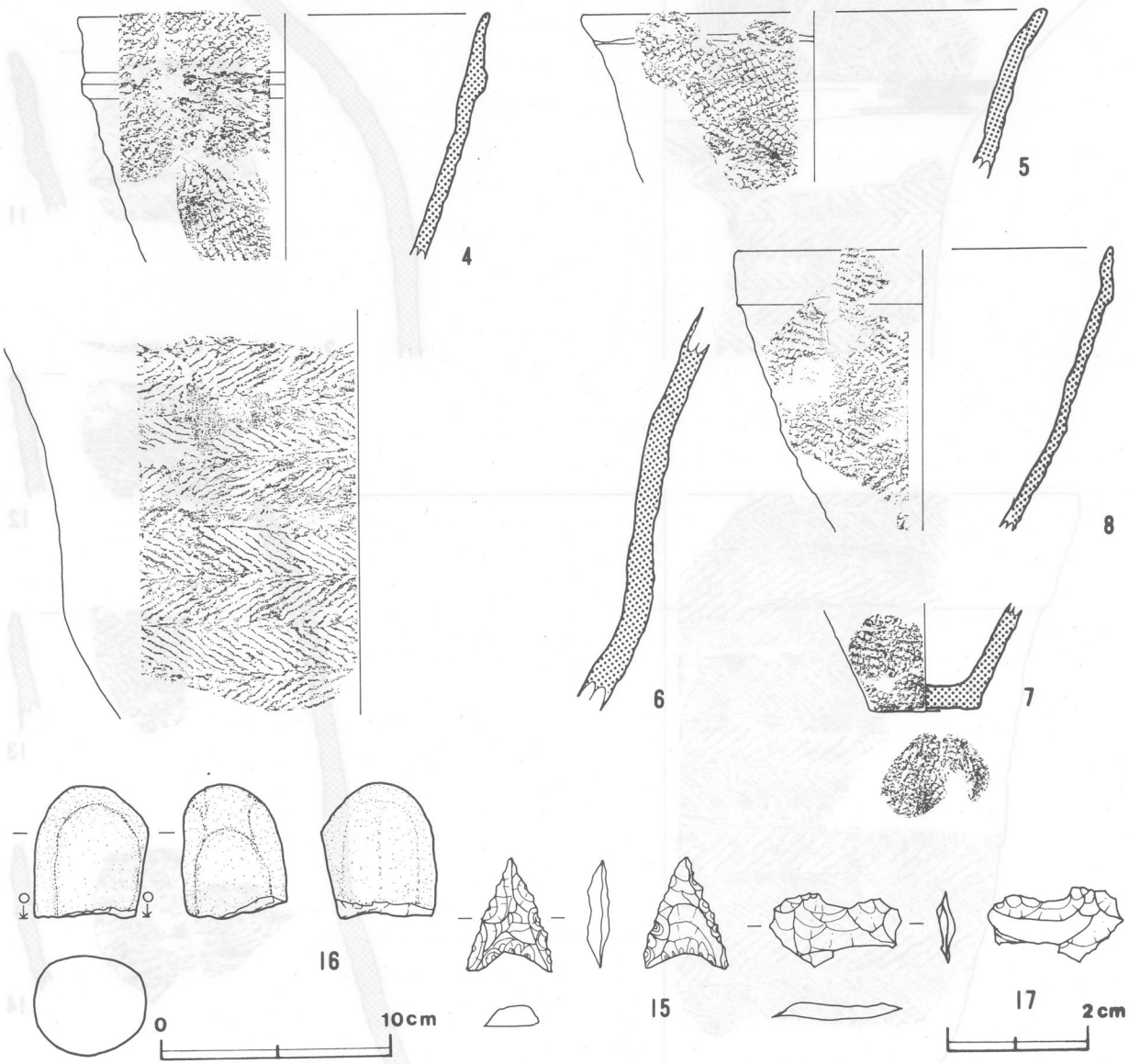
土層解説
1　黒褐色　ローム粒子微量
2　暗褐色　ローム粒子少量
3　暗褐色　焼土粒子・ローム小ブロック・ローム粒子微量
4　暗褐色　ローム粒子微量
5　褐　色　ローム粒子少量
6　暗褐色　ローム粒子微量
7　褐　色　ローム粒子少量

遺物　中央部を中心に縄文土器片115点，石器１点，剝片３点，礫14点が出土している。第12・13図２の深鉢は，北部の床面に散在するように出土している。１の深鉢は，北東部の床面直上につぶされた状態で斜位で出土している。３の深鉢は，住居跡内全体の覆土下層から床面にかけて散在するように出土している。４と６の深鉢は，炉上部の覆土上層から出土している。５の深鉢は，北部の床面から出土している。７の小形深鉢は，

第12図　第５号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)

中央部の床面から出土し，８の小形深鉢は，北部の床面から出土している。９～14は縄文土器片の拓影図で，いずれも口縁部から胴部片である。９は深鉢の口縁部片で，口唇部に隆帯貼付け後ヘラ状工具による刻みが施され，その下位に組紐の押圧が巡らされている。口縁部にはヘラ状工具による斜格子状に沈線を施文後，組紐を２条一組の蕨手状に押圧し，円形刺突文が施されている。２と同一個体と思われる。10・13は，深鉢の口縁部片で結節羽状縄文が施されている。11は深鉢の口縁部片で，単節ＲＬとＬＲの縄文を交互に横位に施文し，羽状構成をとる。12は小形深鉢の口縁部片で貝殻背圧痕文が施させれている。14は深鉢の口縁部片でループ文が施されている。１～14は胎土に繊維を含む土器である。15の石鏃は南西部の床面から出土している。17の剝片は中央部南側の床面から出土している。

所見　１～14の遺物は本跡に伴うものと考えられる。時期は，出土土器の特徴から，縄文時代前期前半(花積下層式期)と考えられる。



第13図　第５号住居跡出土遺物実測・拓影図(2)

第５号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第12図 1	深鉢 縄文土器	A〔30.0〕 B(15.8)	口縁部から胴部にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がり，口縁部は外反する。口唇部には沈線を巡らし，口縁部から胴部にかけて，単節ＲＬとＬＲの縄文が交互に横位で施されて，羽状構成をとる。口縁部下端に隆帯を貼り付け，ヘラ状工具によるキザミが施されている。内面繊維脱痕あり。	石英・長石・雲母 にぶい橙色 普通	P18 10% 北東部床面
2	深鉢 縄文土器	A〔38.8〕 B(17.0)	口縁部から胴部にかけての破片。平口縁で口唇部に１条の隆帯を貼り付け，ヘラ状工具でキザミが施され，その下に組紐状の縄文を押圧し巡らす。口縁部には矢羽状沈線文を施文後，組紐状の縄文を２条一組として蕨手状の押圧が施されている。その後，竹管による円形刺突文が施されている。口縁部と胴部の境に２条の隆帯を貼り付け，ヘラ状工具によるキザミが施され，隆帯間に組紐状の縄文の押圧が巡らされている。胴部には多条ＲＬとＬＲの縄文が交互に横位で施文されて，羽状構成をとる。内面繊維脱痕あり。	石英・長石 にぶい橙色 普通	P17 5％ 北東部床面
3	深鉢 縄文土器	A〔35.4〕 B(17.0)	口縁部から胴部下位にかけての破片。口縁部は断面三角形になる。胴部は外傾して立ち上がり口縁部はわずかに外反する。口唇部から胴部下位までＬＬの撚り戻し縄文と無節Ｒの縄文が交互に横位で施文され，器面全体に羽状構成をとる。内面繊維脱痕あり。	石英・長石 にぶい橙色 普通	P19 15% 全体の覆土下層
第13図 4	深鉢 縄文土器	A〔17.6〕 B(10.6)	口縁部から胴部にかけての破片。胴部は外傾して口縁部に至る。口縁部と胴部の境に隆帯を貼り付け，外面には単節ＬＲとＲＬの縄文が交互に横位で施文され，羽状構成をとる。内面繊維脱痕多い。	石英・雲母 にぶい橙色 普通	P20 10% 炉上覆土下層
5	深鉢 縄文土器	A〔20.0〕 B(7.8)	口縁部から胴部にかけての破片。胴部は内彎気味に立ち上がり，口縁部はわずかに外傾する。口縁部に沈線を巡らし，外面には単節ＬＲとＲＬの縄文が交互に横位で施文され，羽状構成をとる。内･外面繊維脱痕あり。	石英・雲母 にぶい橙色 普通	P21 5％ 北部床面
6	深鉢 縄文土器	B(17.5)	胴部片。胴部は内彎気味に立ち上がり，上半で外傾する。外面には無節ＬとＲの縄文が交互に横位で施文され，羽状構成をとる。内面繊維脱痕多い。	石英・長石 白色粒子 にぶい赤褐色 普通	P22 5％ 炉上覆土上層
7	小形深鉢 縄文土器	B(4.8) C〔 4.8〕	胴部から底部にかけての破片。胴部は底部から外傾して立ち上がる。底部は上げ底になっている。胴部と底部外面に貝殻背圧文が施されている。	石英・長石 にぶい赤褐色 普通	P23 5％ 中央部床面
8	小形深鉢 縄文土器	A〔16.2〕 B(12.2)	口縁部から胴部にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がり，口縁部はわずかに内彎する。外面には単節ＲＬとＬＲの縄文が交互に横位で施文され，羽状構成をとる。内・外面繊維脱痕多い。	石英・長石 黒褐色 普通	P24 10% 北部床面

石製品観察表

図版番号	種別	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	出土地点	備考
15	石鏃	1.6	1.2	0.3	0.4	チャート	南西部床面	Q15
16	磨石	5.7	4.3	4.8	198.9	砂岩	覆土中	Q17
17	剝片	1.0	1.9	0.3	0.4	チャート	中央部南側床面	Q18

第６号住居跡（第14図）

位置　調査区の東部，Ｂ３ｇ7区。

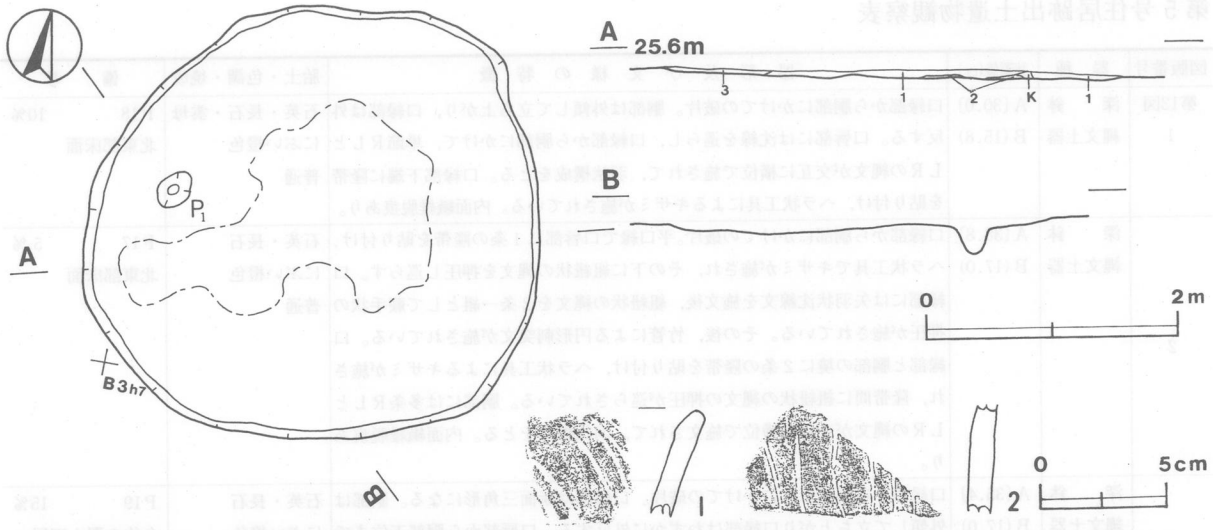
規模と平面形　長径3.68m，短径3.54mの円形である。

壁　壁高は８cmで，なだらかに立ち上がる。

床　東側にわずかに傾斜して，中心部周辺がよく踏み固められている。

ピット　Ｐ1は，西壁近くで検出され，長径35cm，短径25cmの楕円形で，深さが25cmである。性格は不明である。

炉　確認されなかった。



第14図　第６号住居跡・出土遺物実測・拓影図

覆土　３層からなり，ロームブロックが不均一に混入して堆積しているので人為堆積である。

土層解説
1　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，ローム中ブロック微量
2　黒褐色　炭化粒子・ローム粒子少量
3　暗褐色　ローム粒子中量，炭化粒子微量

遺物　縄文土器片15点，土師器片３点，礫10点が出土している。第14図１・２は縄文土器片の拓影図である。１は深鉢の口縁部片で，口唇部にキザミが施され，口縁部にはヘラ状工具による平行沈線文が施されている。２は深鉢の胴部片で，ヘラ状工具による縦位の沈線文が施されている。

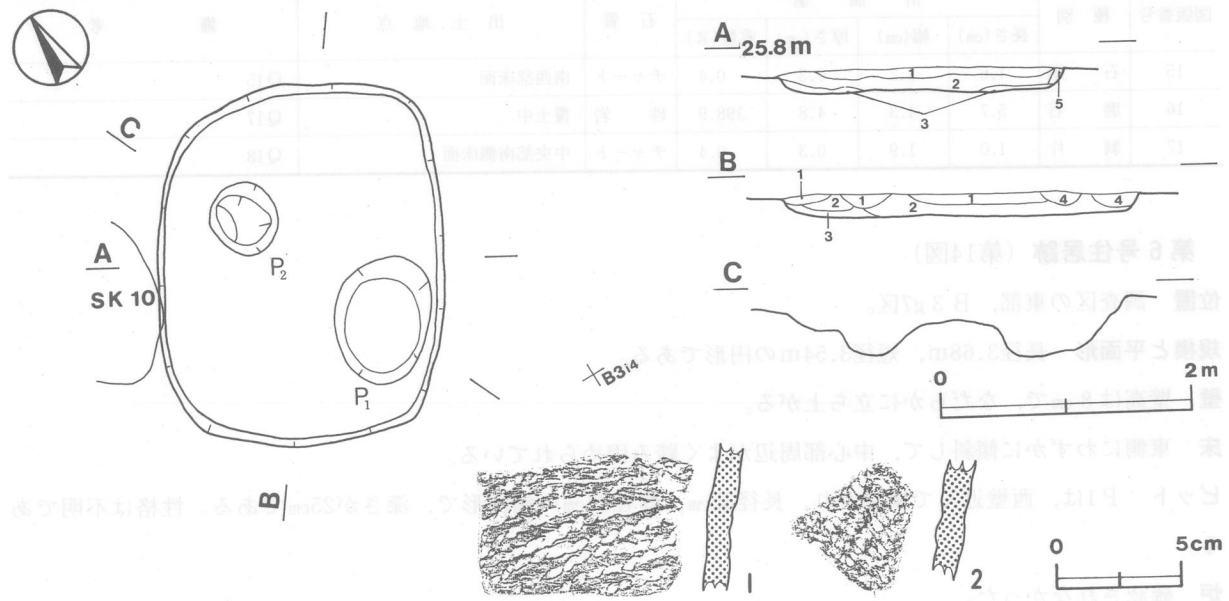
所見　本跡の時期は，出土遺物が少なく限定するのは難しいが，出土土器の特徴から縄文時代前期後半（浮島Ⅰ式期）と思われる。

第７号住居跡（第15図）

位置　調査区の東部，Ｂ３h3区。

重複関係　第10号土坑に掘り込まれており，第10号土坑より古い。

規模と平面形　長軸2.94m，短軸2.37mの隅丸長方形である。



第15図　第７号住居跡・出土遺物実測・拓影図

主軸方向　N－38°－E

壁　壁高は15cmで，外傾して立ち上がる。

床　ほぼ平坦であり，軟弱なローム土の床である。

ピット　2か所（P1・P2)。P1は長径100cm，短径85cmの楕円形で，深さが30cmである。P2は径55cmの円形で，深さ30cmである。いずれも性格は不明である。

炉　確認できなかった。

覆土　5層からなり，ロームが不均一に堆積しているので人為堆積である。

土層解説
1　暗 褐 色　ローム粒子少量，炭化粒子微量
2　褐　　色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，炭化粒子微量
3　褐　　色　ローム粒子多量
4　極暗褐色　ローム粒子少量
5　暗 褐 色　ローム粒子中量，焼土小ブロック少量，焼土粒子微量

遺物　土師器片8点，縄文土器片11点が出土しているが，胴部片がほとんどである。第15図1・2は縄文土器片の拓影図である。1・2は深鉢の胴部片で，外面に太い撚糸文で施文し，内面に横位のヘラミガキが施されている。1・2は胎土に繊維を含む土器である。土師器片は後世の撹乱による混入と思われる。

所見　本跡の時期は，少数の出土土器から縄文時代前期前半(黒浜式期)と思われる。

第8号住居跡（第16図）

位置　調査区の東部，B3e9区。

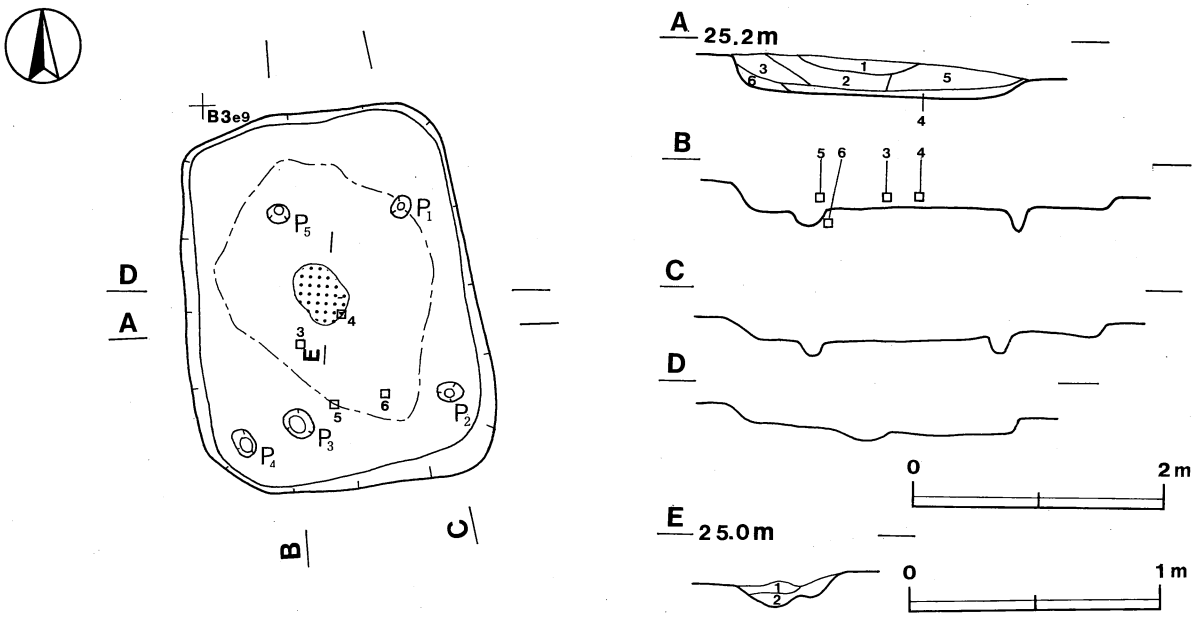
規模と平面形　長軸3.08m，短軸2.40mの隅丸長方形である。

主軸方向　N－4°－W

壁　壁高は8cmで，外傾して立ち上がる。

床　ほぼ平坦である。中央部がよく踏み固められている。

ピット　5か所（P1～P5)。P1は径15cmの円形で，深さ16cmである。P2は長径20cm，短径15cmの楕円形で，深さ15cmである。P3は長径30cm，短径20cmの楕円形で，深さ18cmである。P5は径20cmの円形，深さ12cmである。いずれも主柱穴と思われる。主柱穴を結ぶ線は長方形となる。P4は長径25cm，短径15cmの楕円形，深さ10cmである。性格は不明である。



第16図　第8号住居跡実測図

炉　ほぼ中央に位置し，長径50㎝，短径35㎝の楕円形で，床面を10㎝掘りくぼめた地床炉である。炉床は赤変硬化している。

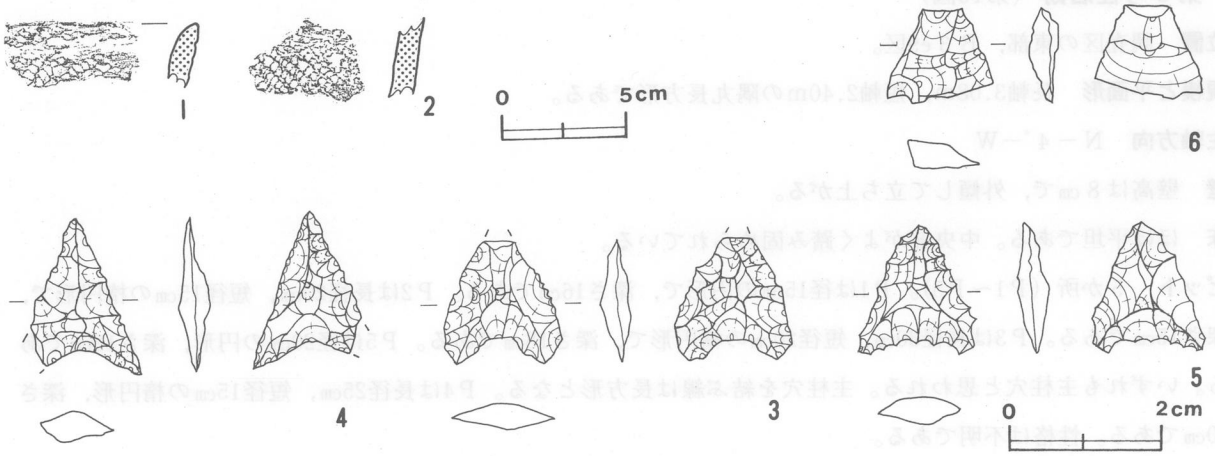
炉土層解説
1　赤 褐 色　焼土小ブロック・焼土粒子中量，ローム粒子少量，焼土中ブロック微量
2　暗赤褐色　ローム小ブロック・ローム粒子多量，焼土粒子少量

覆土　6層からなり，ロームが不均一に堆積しているので人為堆積である。

土層解説
1　黒 褐 色　焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子微量
2　黒 褐 色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子微量
3　暗 褐 色　ローム粒子少量，焼土粒子･炭化粒子微量
4　褐　　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量
5　暗 褐 色　ローム粒子中量,ローム小ブロック少量,焼土粒子微量
6　褐　　色　ローム小ブロック・ローム粒子中量

遺物　縄文土器片が17点，石器３点，剝片５点，礫２点が出土している。第17図１・２は，縄文土器片の拓影図である。１は小形深鉢の口縁部片で，単節ＬＲの縄文が施されている。２は深鉢の胴部片で，結節羽状縄文が施されている。１・２は胎土に繊維を含む土器である。３・５の石鏃及び６の剝片は中央部の炉南側の床面から出土している。４の石鏃は中央部の炉内から出土している。

所見　時期は，出土遺物が少なく特定が難しいが，１・２の出土土器から縄文時代前期前半(黒浜式期)と思われる。



第17図　第８号住居跡出土遺物実測・拓影図

第８号住居跡出土石製品観察表

図版番号	種　別	計　測　値				石　質	出 土 地 点	備　　考
		長さ(㎝)	幅(㎝)	厚さ(㎝)	重量(ｇ)			
第17図３	石　鏃	(1.6)	1.5	0.4	(0.7)	チャート	炉南側床面	Q19
4	石　鏃	2.1	(1.5)	0.5	(0.7)	チャート	中央部炉内	Q20
5	石　鏃	1.7	1.6	0.4	0.8	チャート	中央部南側床面	Q21
6	剝　片	1.2	1.5	0.4	0.6	チャート	中央部南側床面	Q22

第９号住居跡（第18図）

位置　調査区の南東部，Ｂ３f8区。

規模と平面形　長軸1.95m，短軸1.90mの不整方形である。

主軸方向　Ｎ－60°－Ｗ

壁　壁高は８㎝で，外傾して立ち上がる。

床　ほぼ平坦であり，全体的に硬化している。

炉　中央部より西側に位置し，平面形は長径35㎝，短径30㎝の楕円形の地床炉である。炉床は，中央部が火熱を受け赤変している。

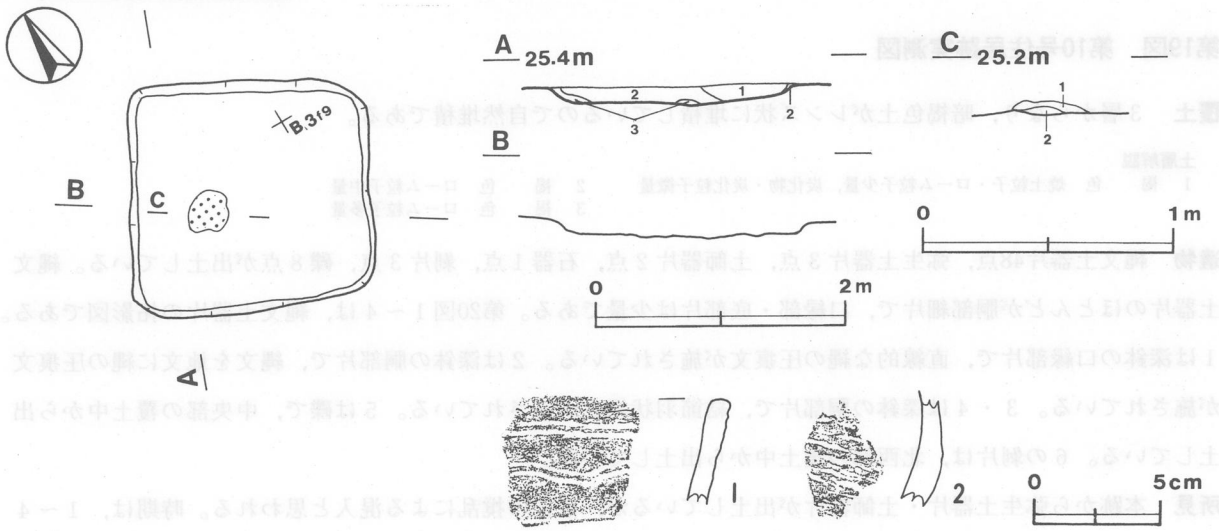
炉土層解説
1　暗赤褐色　焼土粒子中量，焼土小ブロック少量
2　褐　　色　ローム粒子多量

覆土　3層からなり，ロームブロックの不均一な混入から人為堆積と思われる。

土層解説
1　褐　　色　ローム粒子多量
2　褐　　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量
3　明 褐 色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量

遺物　縄文土器片3点と出土遺物は少ない。第18図1・2は，縄文土器片の拓影図である。1は深鉢の口縁部片で，無文地に半截竹管による平行線文と連弧文が描かれている。2は深鉢の胴部片で，撚糸文が施されている。

所見　本跡の時期は，1・2の出土土器から縄文時代前期後半(浮島Ⅰ式期)と思われる。



第18図　第9号住居跡・出土遺物実測・拓影図

第10号住居跡（第19図）

位置　調査区の南部，B3i3区。

重複関係　第27号土坑に掘り込まれており，本跡が古い。

規模と平面形　長軸3.42m，短軸3.32mの不整方形である。

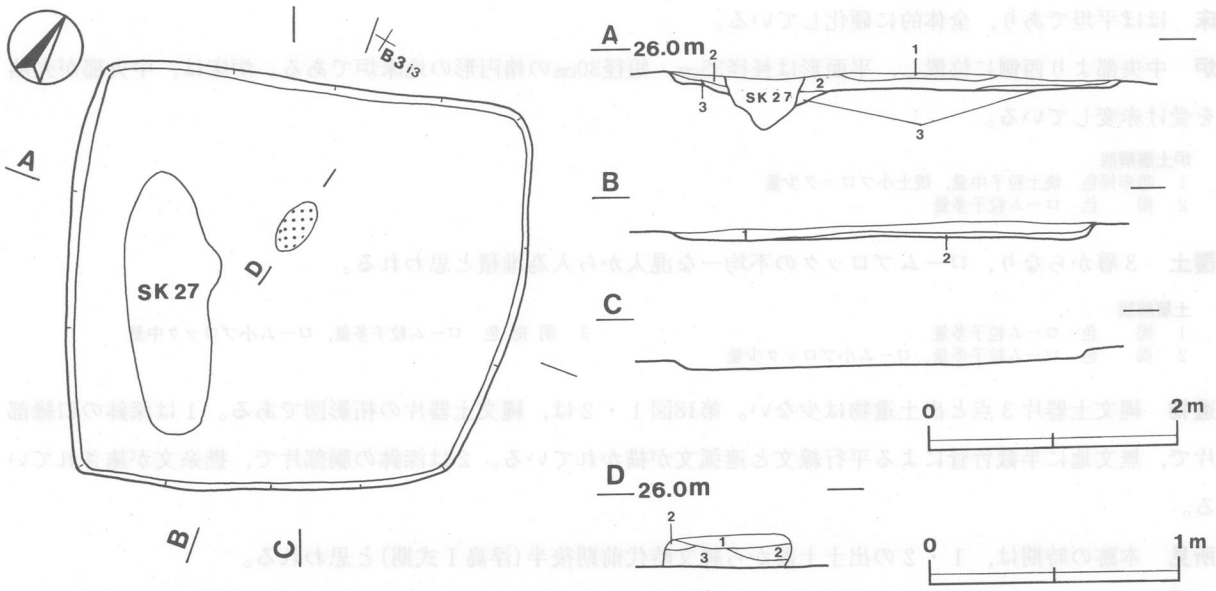
主軸方向　N－60°－E

壁　壁高は12㎝で，外傾して立ち上がる。

床　ほぼ平坦である。

炉　中央部からやや北寄りにあり，長径50㎝，短径25㎝の楕円形の地床炉である。炉床は火熱を受け赤変している。

炉土層解説
1　極赤褐色　焼土粒子・炭化粒子少量，焼土小ブロック微量
2　赤 褐 色　ローム粒子少量，焼土粒子・焼土小ブロック微量
3　褐　　色　ローム粒子多量



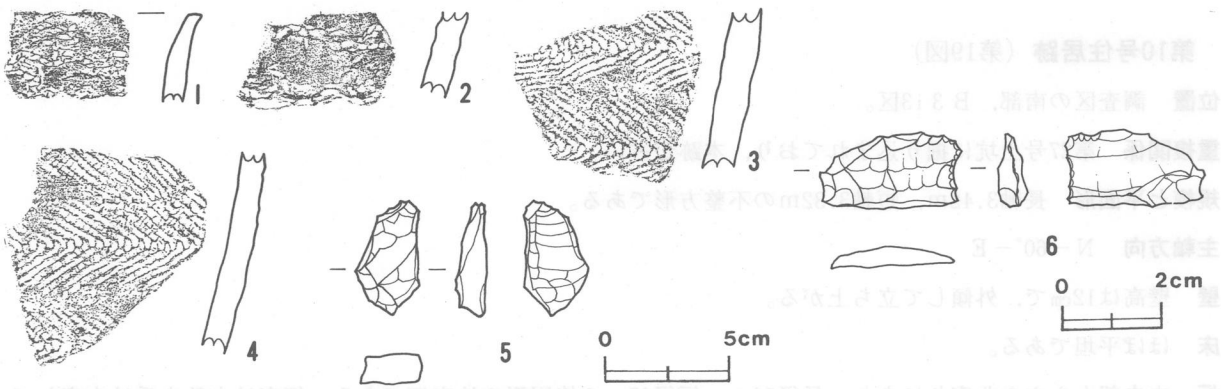
第19図　第10号住居跡実測図

覆土　3層からなり，暗褐色土がレンズ状に堆積しているので自然堆積である。

土層解説
1　褐　　色　焼土粒子・ローム粒子少量，炭化物・炭化粒子微量
2　褐　　色　ローム粒子中量
3　褐　　色　ローム粒子多量

遺物　縄文土器片48点，弥生土器片3点，土師器片2点，石器1点，剝片3点，礫8点が出土している。縄文土器片のほとんどが胴部細片で，口縁部・底部片は少量である。第20図1～4は，縄文土器片の拓影図である。1は深鉢の口縁部片で，直線的な縄の圧痕文が施されている。2は深鉢の胴部片で，縄文を地文に縄の圧痕文が施されている。3・4は深鉢の胴部片で，結節羽状縄文が施されている。5は礫で，中央部の覆土中から出土している。6の剝片は，北西部の覆土中から出土している。

所見　本跡から弥生土器片・土師器片が出土しているが，後世の撹乱による混入と思われる。時期は，1～4の出土土器から縄文時代前期後半(粟島台式期)と思われる。



第20図　第10号住居跡出土遺物実測・拓影図

第10号住居跡出土石製品観察表

図版番号	種別	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第20図5	礫	4.7	2.6	1.3	15.7	石英	覆土中	Q24
6	剝片	1.5	2.8	0.6	2.3	チャート	覆土中	Q25

第11Ａ号住居跡（第21図）

位置　調査区の南部，Ｃ３a5区。

重複関係　第11Ｂ号住居跡に掘り込まれており，第11Ｂ号住居跡より古い。

規模と平面形　長径(3.00)ｍ，短径(1.40)ｍの小判形と推定される。

主軸方向　Ｎ－15°－Ｗ

壁　壁高は12～20㎝で，外傾して立ち上がる。

床　ほぼ平坦である。

ピット　Ｐ1は径35㎝の円形で，深さ16㎝である。性格は不明である。

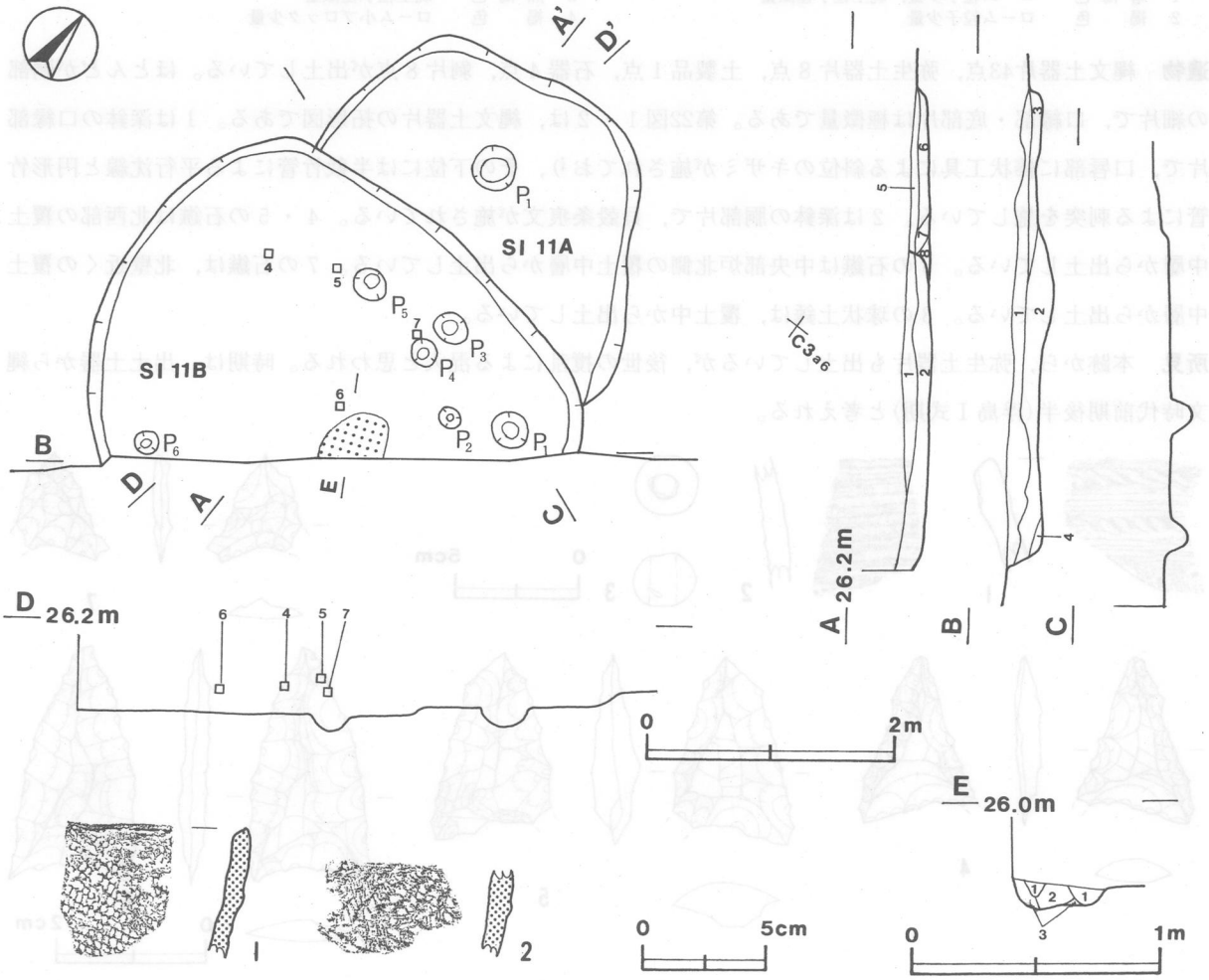
炉　第11Ｂ号住居跡に掘り込まれて不明である。

覆土　４層からなる。ロームブロックが不均一に堆積していることから人為堆積であると思われる。

土層解説
5　暗 褐 色　ローム粒子少量，焼土粒子微量
6　褐　　色　ローム小ブロック中量
7　褐　　色　ローム小ブロック・ローム粒子中量
8　褐　　色　ローム小ブロック少量

遺物　出土遺物は少なく，縄文土器片８点が出土しているのみである。第21図１・２は，縄文土器片の拓影図である。１は深鉢の口縁部片で，西壁中央部の床面から出土し，縦位の単節ＲＬの縄文を地文に半截竹管の刺突文が二段に施されている。２は深鉢の胴部片で，北東部の床面から出土し，羽状縄文が施されている。１・２は胎土に繊維を含む土器である。

所見　本跡の時期は，出土土器から縄文時代前期前半(黒浜式期)と思われる。



第21図　第11Ａ・11Ｂ号住居跡・出土遺物実測・拓影図

第11Ｂ号住居跡（第22図）

位置　調査区の南部，Ｃ３a5区。

重複関係　本跡が，第11Ａ号住居跡を掘り込んでおり，本跡が新しい。南東部は調査区域外へ延びている。

規模と平面形　長径(3.60)ｍ，短径(3.00)ｍの小判形と推定される。

主軸方向　Ｎ－87°－Ｗ

壁　壁高は30㎝で，外傾して立ち上がる。

床　ほぼ平坦で，炉の北西部が踏み固められている。

ピット　６か所（Ｐ1～Ｐ6）。Ｐ1は径30㎝の円形で，深さ15㎝である。Ｐ5は径25㎝の円形で，深さ15㎝である。Ｐ6は径20㎝の円形で，深さ16㎝である。いずれも主柱穴と思われる。Ｐ3は長径30㎝，短径25㎝の楕円形で，深さ15㎝である。出入口施設に伴うピットと考えられる。Ｐ2は径20㎝の円形で，深さ13㎝である。Ｐ4は径23㎝の円形で，深さ13㎝である。性格は不明である。

炉　中央部やや東寄りにあり，東西50㎝，南北(45)㎝で，床面を８㎝ほど掘りくぼめた地床炉である。炉床は，赤変硬化している。

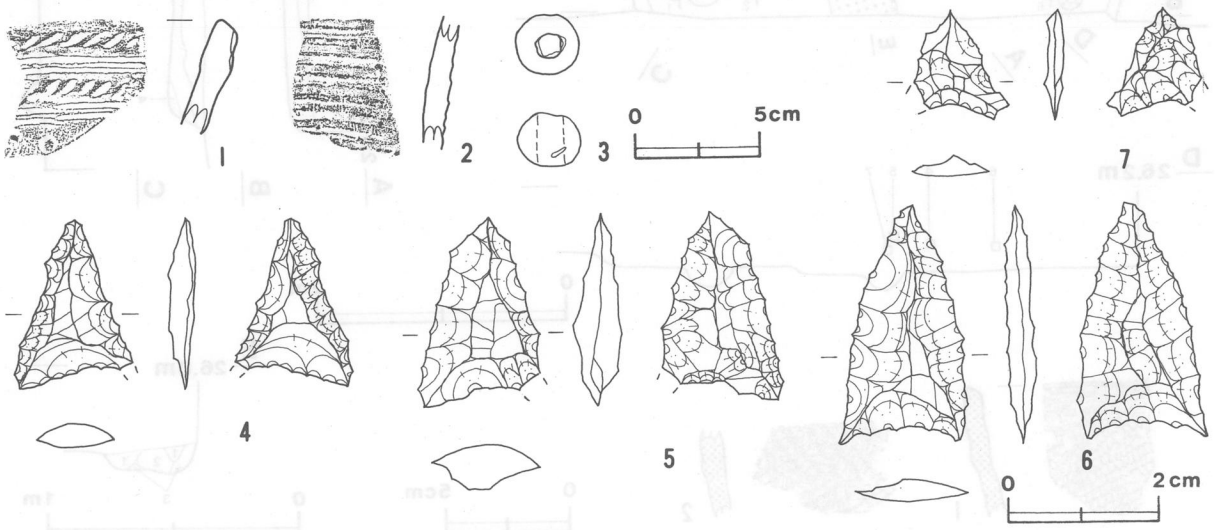
炉土層解説
1　暗赤褐色　焼土粒子中量，焼土中ブロック・炭化粒子少量，炭化物微量
2　極暗赤褐色　炭化粒子中量，焼土粒子少量，焼土小ブロック微量
3　褐　色　ローム中ブロック中量，焼土粒子少量

覆土　４層からなり，レンズ状に堆積していることから自然堆積と思われる。

土層解説
1　暗褐色　ローム粒子少量，焼土粒子極微量
2　褐　色　ローム粒子少量
3　黒褐色　焼土粒子極微量
4　褐　色　ローム小ブロック少量

遺物　縄文土器片43点，弥生土器片８点，土製品１点，石器４点，剝片８点が出土している。ほとんどが胴部の細片で，口縁部・底部片は極微量である。第22図１・２は，縄文土器片の拓影図である。１は深鉢の口縁部片で，口唇部に棒状工具による斜位のキザミが施されており，その下位には半截竹管による平行沈線と円形竹管による刺突を施している。２は深鉢の胴部片で，貝殻条痕文が施されている。４・５の石鏃は北西部の覆土中層から出土している。６の石鏃は中央部炉北側の覆土中層から出土している。７の石鏃は，北壁近くの覆土中層から出土している。３の球状土錘は，覆土中から出土している。

所見　本跡から，弥生土器片も出土しているが，後世の撹乱による混入と思われる。時期は，出土土器から縄文時代前期後半(浮島Ⅰ式期)と考えれる。



第22図　第11Ｂ号住居跡出土遺物実測・拓影図

第11B号住居跡出土土製品観察表

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考	
		径(cm)	長さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)			
第22図3	球状土錘	2.5	2.4	1.1	10.8	覆土中	DP2	100%

石製品観察表

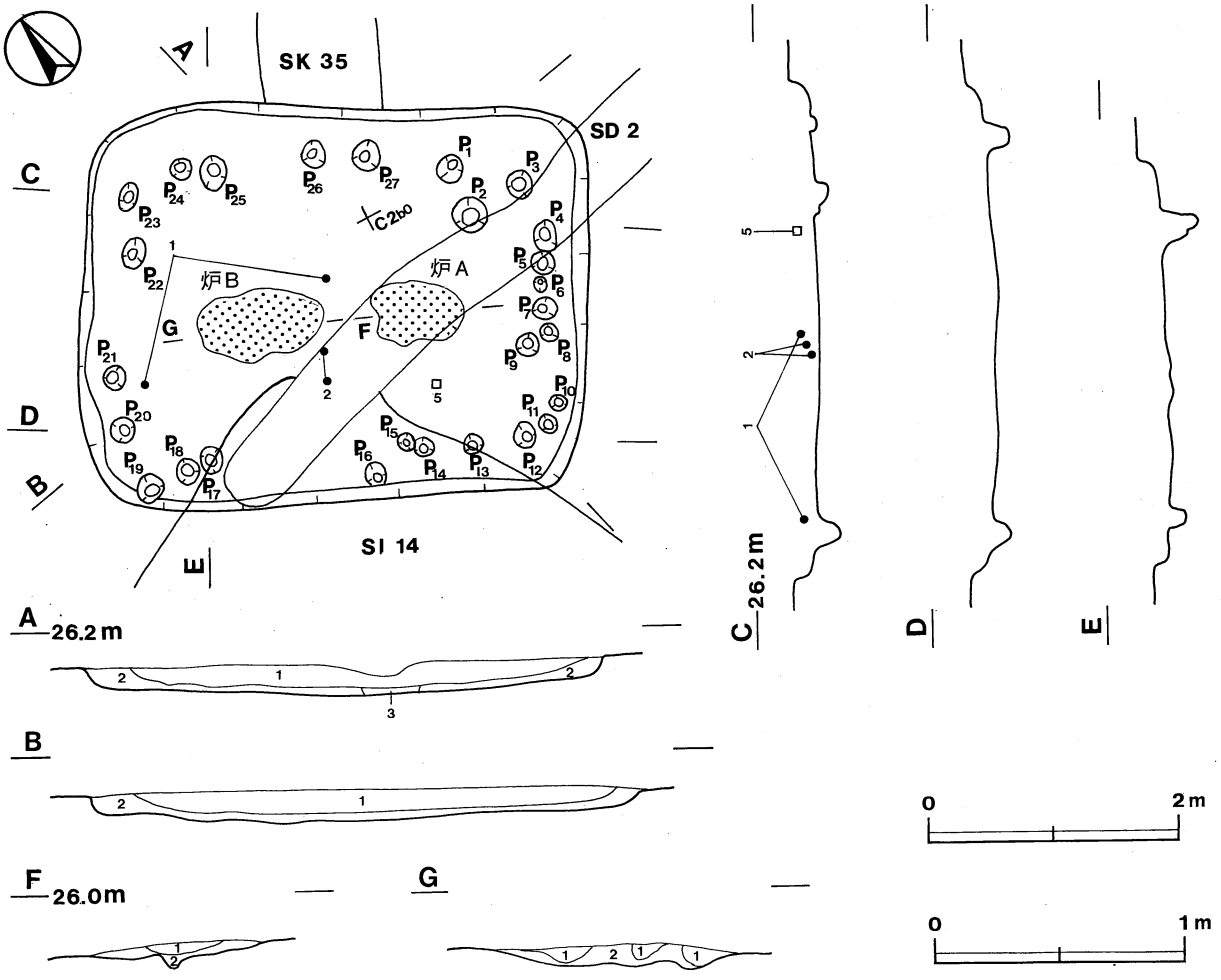
図版番号	種別	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
4	石鏃	2.2	(1.6)	0.4	(0.9)	安山岩	北西部覆土中層	Q26
5	石鏃	2.5	(1.6)	0.7	(1.7)	頁岩	北西部覆土中層	Q27
6	石鏃	3.2	1.6	0.4	2.0	チャート	中央部炉北側覆土中層	Q28
7	石鏃	1.5	(1.3)	0.3	(0.3)	チャート	北壁付近覆土中層	Q29

第15号住居跡（第23図）

位置　調査区の中央部，C2b0区。

重複関係　第14号住居跡，第2号溝に掘り込まれており，本跡が古い。また，第35号土坑を掘り込んでおり，本跡が新しい。

規模と平面形　長軸4.08m，短軸3.32mの隅丸長方形である。



第23図　第15号住居跡実測図

主軸方向　N－62°－W

壁　壁高は25～38cmで，わずかに外傾して立ち上がる。

床　ほぼ平坦であるが，炉を中心に硬化した面がある。出入口施設の北部が特に硬い。

ピット　27か所（P1～P27）。P1，P3，P4，P8，P10，P12～P14，P17，P18，P20～P24，P25，P27は長径15～30cm，短径約15～20cmの楕円形及び円形で，深さ15～31cmである。これらは配列から壁柱穴と思われる。P5，P6，P9，P11，P15，P16，P19，P24，P26は長径15～25cm，短径15～20cmの円形及び楕円形で，深さ9～21cmで，壁柱穴の立て替えたピットと思われる。P2は径30cmの円形で，深さ14cmである。性格は不明である。

炉　2か所。炉Aは，中央からやや東側に位置し，長径80cm，短径60cmの楕円形で，床面を10cm掘りくぼめた地床炉である。炉床は，火熱を受け赤変している。

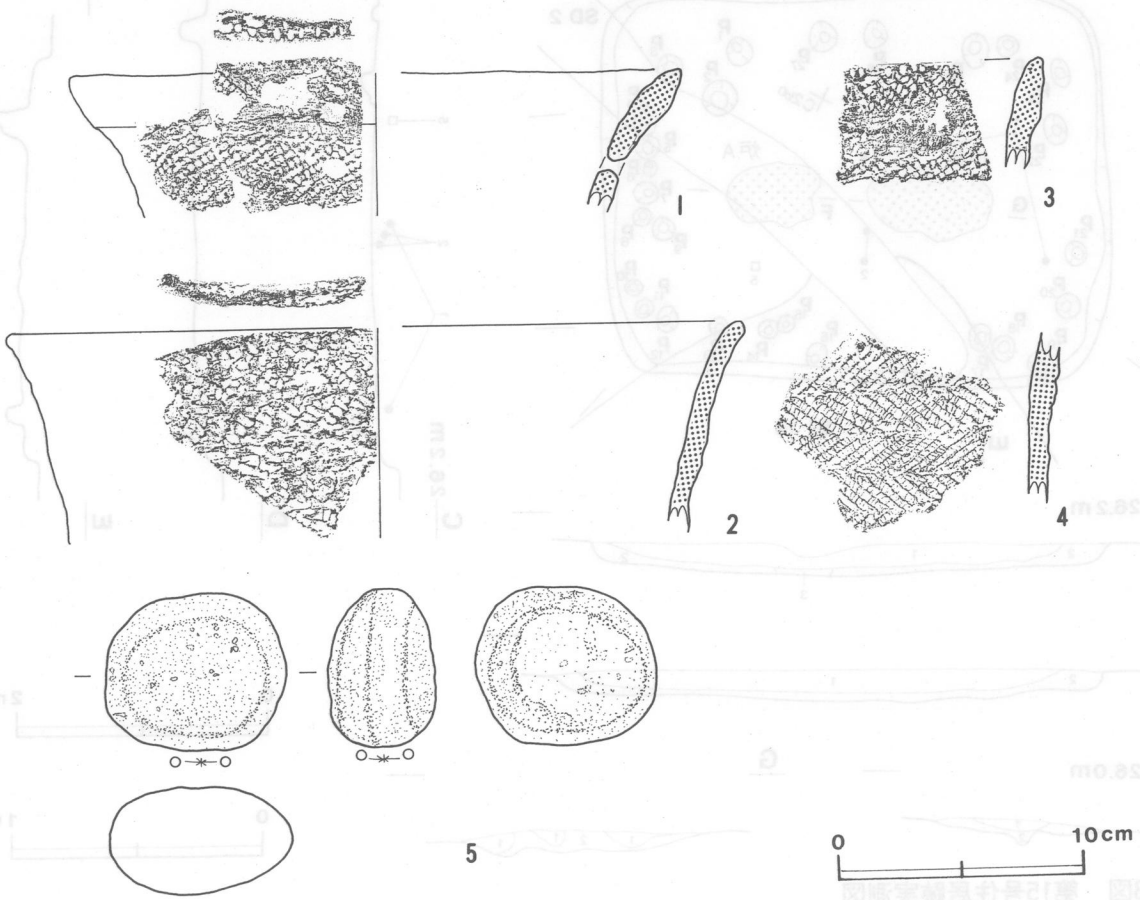
炉Bは，長径100cm，短径55cmの楕円形で，床面を15cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床は，火熱を受け赤変硬化し，長期間使用したと思われる。

炉A土層解説
1　極暗赤褐色　焼土粒子多量，焼土小ブロック少量
2　赤　褐　色　焼土大ブロック多量

炉B土層解説
1　極暗赤褐色　焼土粒子多量
2　赤　褐　色　焼土大ブロック多量，焼土粒子少量

覆土　3層からなり，暗褐色土がレンズ状に堆積するので自然堆積である。

土層解説
1　黒 褐 色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　暗 褐 色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
3　褐　　色　焼土小ブロック・焼土粒子少量，炭化粒子微量



第24図　第15号住居跡出土遺物実測・拓影図

遺物　縄文土器片40点，弥生土器片３点，石器１点，礫８点が出土している。第24図１・２は縄文土器である。１の深鉢は，炉Ｂ付近の覆土中層から出土している。２の深鉢は，炉Ｂ東側の覆土下層から出土している。３・４は，縄文土器片の拓影図である。３は深鉢の口縁部片で，口唇部には棒状工具によるキザミが施され，外面には縄文が施されている。４は深鉢の胴部片で多条ＬＲとＲＬの縄文が交互に横位で施文されている。１～４は胎土に繊維を含む土器である。５は磨石で，炉Ａ南側の覆土下層から出土している。

所見　遺物は，特に中央部から多く出土している。時期は，出土土器から縄文時代前期前半(花積下層式期)と考えられる。

第15号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第24図 1	深　鉢 縄文土器	A〔24.4〕 B(5.8)	口縁部から胴部にかけての破片。胴部は外傾して口縁部は外反する。口唇部にはヘラ状工具によるキザミが施され，口縁部外面は無文とし，胴部には単節の縄文が施されている。胴部上位に穿孔あり。内・外面繊維脱痕多い。	長石・赤色粒子 黒褐色 普通	P35　5％ 炉Ｂ南側覆土中層
2	深　鉢 縄文土器	A〔29.6〕 B(8.6)	口縁部から胴部上位にかけての破片。胴部は外傾し，口縁部は外反して立ち上がる。口縁部から胴部には結節羽状縄文を施文している。内面繊維脱痕あり。	長石・白色粒子 橙色 普通	P36　5％ 炉Ｂ東側覆土下層

石製品観察表

図版番号	種　別	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石　質	出土地点	備　考
5	磨　石	6.4	7.2	4.4	307.0	砂　岩	炉Ａ南側覆土下層	Q45

第16Ａ号住居跡（第25図）

位置　調査区の東部，Ｂ３g1区。

重複関係　本跡が，第16Ｂ号住居跡を掘り込んでおり，本跡が新しい。

規模と平面形　長径3.76m，短径2.63cmの隅丸長方形である。

主軸方向　Ｎ－43°－Ｗ

壁　壁高は25～30cmで，外傾して立ち上がる。

床　平坦なロームで，炉の周囲が踏み固められている。

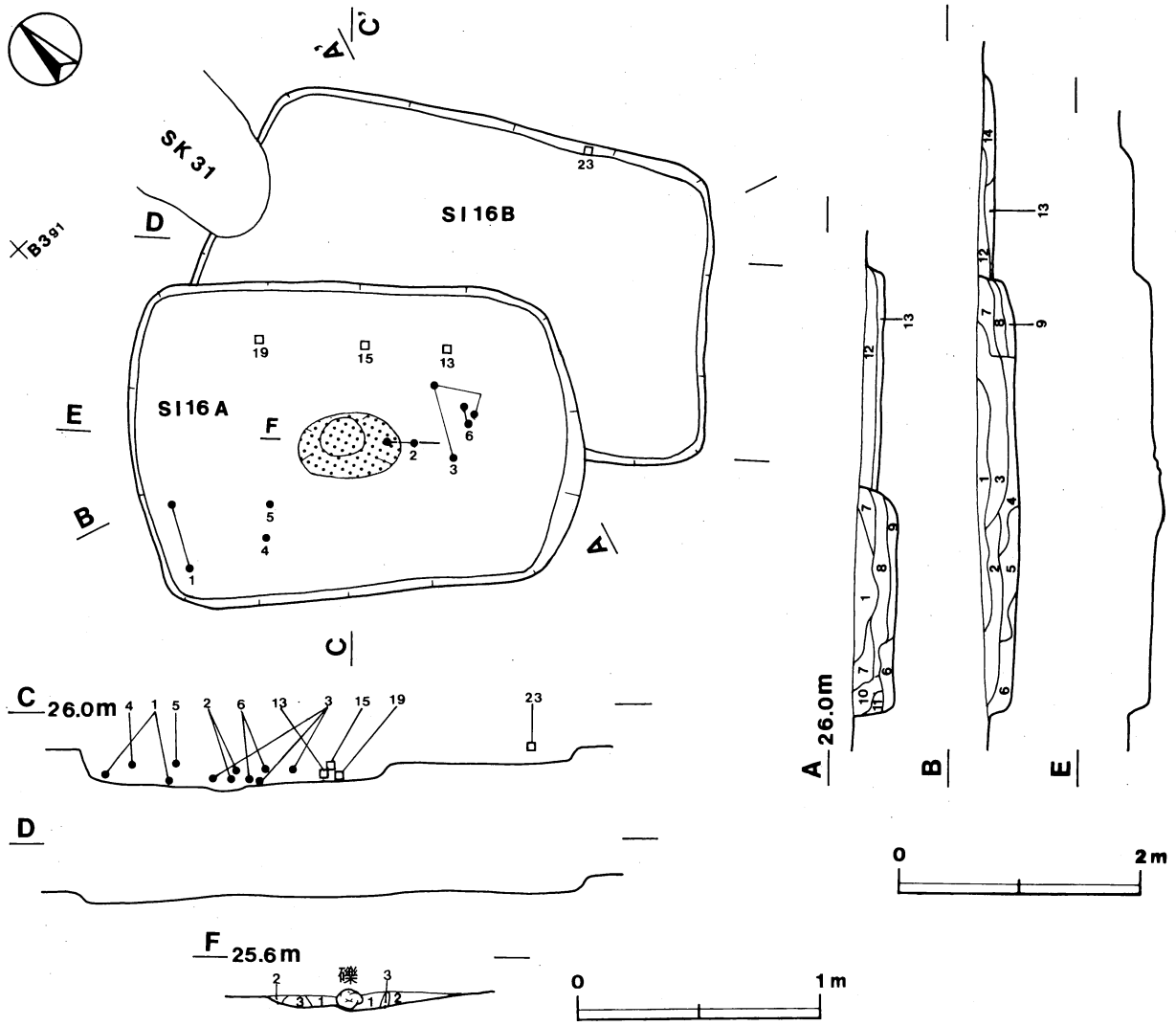
ピット　確認することができなかった。

炉　ほぼ中央部に位置し，長径85cm，短径55cmの楕円形で，床面を８cmほど掘りくぼめている地床炉である。炉床は火熱を受け赤変している。中央部に円礫を付設している。

炉土層解説
1　黒褐色　焼土粒子中量，ローム粒子微量
2　極暗褐色　焼土粒子少量，ローム粒子極微量
3　赤褐色　焼土小ブロック中量，焼土粒子少量，ローム粒子微量

覆土　11層からなり，焼土やロームブロックを含み不均一に堆積しているので人為堆積である。

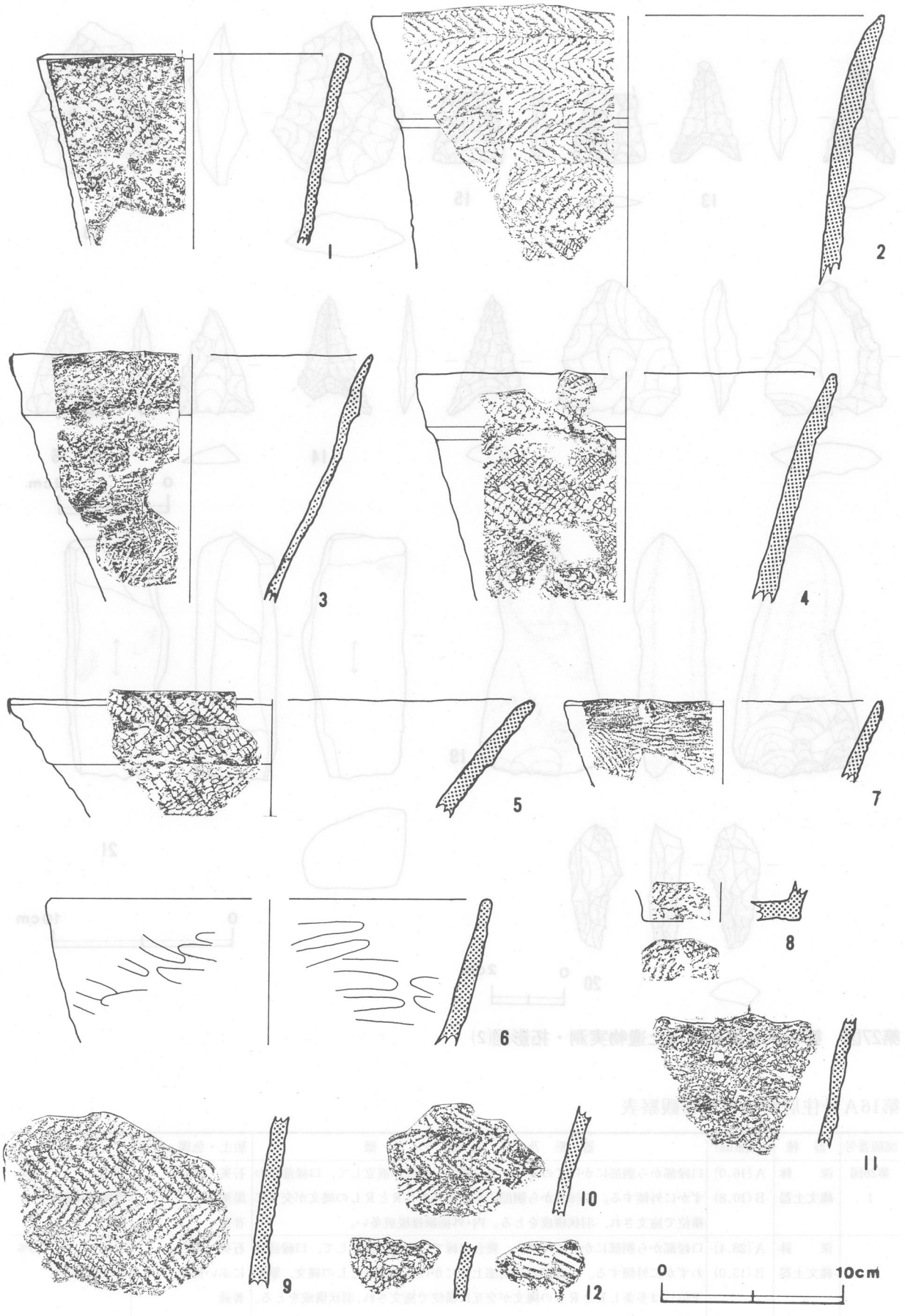
土層解説
1　暗褐色　ローム粒子微量
2　暗褐色　ローム粒子少量
3　黒褐色　ローム粒子少量，炭化粒子微量
4　暗褐色　ローム粒子少量，焼土粒子微量
5　暗褐色　焼土粒子・ローム粒子微量
6　褐　色　ローム粒子少量
7　褐　色　ローム粒子微量
8　褐　色　焼土粒子・ローム粒子極微量
9　暗褐色　ローム粒子中量，焼土粒子少量
10　暗褐色　焼土粒子極微量
11　褐　色　ローム小ブロック中量



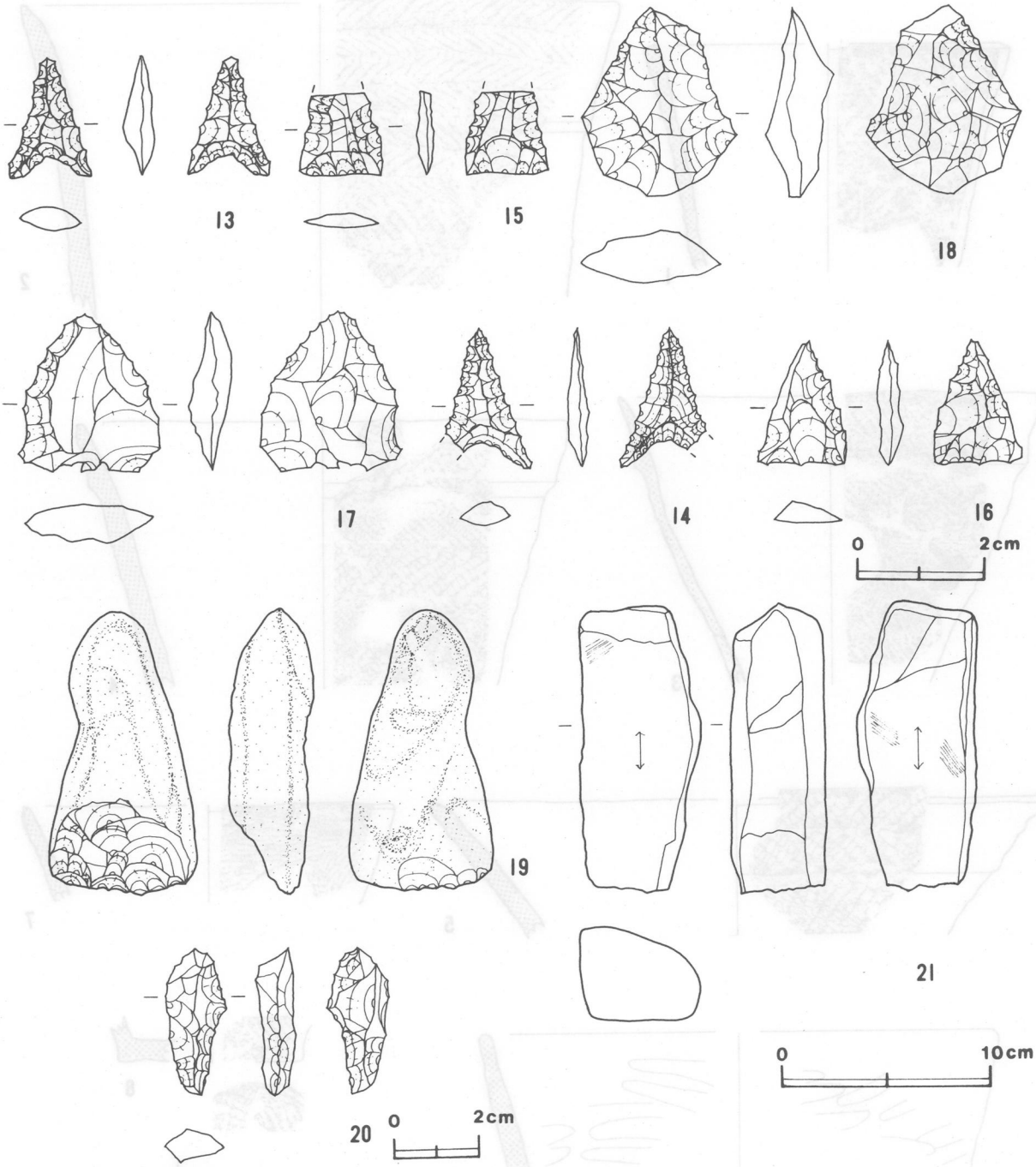
第25図　第16A・16B号住居跡実測図

遺物　縄文土器片306点，石器４点，剝片34点が出土している。第26・27図１～８は縄文土器の深鉢である。１の胴部から口縁部片は，南西部の床面から出土している。２の口縁部から胴部片は，中央部の床面から出土している。３・６の口縁部から胴部片は，中央やや南側の床面から散在して出土している。４の胴部片は，南西部の覆土中層から出土している。５の口縁部片は，南西部の覆土下層から出土している。７の口縁部片と８の底部片は，南西部の覆土中から出土している。９～12は，縄文土器片の拓影図である。９・10は深鉢の胴部片で，多条ＲＬとＬＲの縄文が交互に横位で施され，羽状構成をとる。11は深鉢の胴部片で外面に貝殻圧痕文が施されている。12は深鉢の胴部片で外面に羽状縄文で内面に貝殻条痕文が施されている。１～12は胎土に繊維を含む土器である。13～18は石鏃である。13は北東部の，15は北壁中央付近の床面から出土している。14，16～18は覆土中から出土している。19の打製石斧は北東部の覆土下層から出土している。21の砥石は南東部の覆土中層から出土している。20の石錐は覆土中から出土している。

所見　時期は，出土土器の文様などから縄文時代前期前半(花積下層式期)と考えられる。第５号住居跡出土の土器と合わせて，この時期のまとまった土器の出土は貴重である。



第26図　第16Ａ号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)



第27図　第16A号住居跡出土遺物実測・拓影図(2)

第16A号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第26図 1	深鉢 縄文土器	A〔16.0〕 B(10.8)	口縁部から胴部にかけての破片。平口縁で，胴部は直立して，口縁部はわずかに外傾する。口縁部から胴部にかけて多条ＬＲとＲＬの縄文が交互に横位で施文され，羽状構成をとる。内･外面繊維脱痕多い。	石英・長石 黒褐色 普通	P41 40% 西壁際床面
2	深鉢 縄文土器	A〔28.4〕 B(15.0)	口縁部から胴部にかけての破片。複合口縁で，胴部は直立して，口縁部はわずかに外傾する。口縁部から胴部上位にかけて無節ＲとＬの縄文，胴部下位には多条ＬＲとＲＬの縄文が交互に横位で施文され､羽状構成をとる。内面繊維脱痕あり。	石英・長石 にぶい褐色 普通	P42 10% 中央部床面

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第26図 3	深鉢 縄文土器	A〔18.8〕 B(13.7)	口縁部から胴部にかけての破片。複合口縁で，胴部から外傾して口縁部に至る。口縁部から胴部にかけて貝殻背圧文を施文している。内・外面繊維脱痕多い。	石英・長石 暗赤褐色 普通	P43 10% 中央部南側床面
4	深鉢 縄文土器	A〔23.0〕 B(12.5)	口縁部から胴部にかけての破片。複合口縁で，胴部から外傾して口縁部に至る。口縁部から胴部にかけて細い単節ＬＲと太い単節ＲＬの縄文が交互に横位で施文され，羽状構成をとる。内・外面繊維脱痕あり。	石英・長石 にぶい赤褐色 普通	P44 5% 南東部覆土中層
5	深鉢 縄文土器	A〔28.6〕 B(6.4)	口縁部から胴部にかけての破片。平口縁で，胴部から外傾して口縁部に至る。口縁下端で稜を持つ。外面には太い単節ＲＬとＬＲの縄文が交互に横位で施文され，羽状構成をとる。内面繊維脱痕多い。	石英・長石 にぶい橙色 普通	P45 5% 南西部覆土下層
6	深鉢 縄文土器	A〔23.8〕 B(8.0)	口縁部から胴部にかけての破片。口唇部を指圧により小波状口縁とし，口縁部から胴部には内・外面ヘラミガキを施し，無文である。	石英・長石・白色粒子・赤色粒子 灰赤色 普通	P46 5% 中央部南側床面
7	小形深鉢 縄文土器	A〔17.4〕 B(4.5)	口縁部から胴部にかけての破片。胴部には貝殻背圧文，内面にはヘラミガキを施している。	石英・長石・赤色粒子 にぶい褐色 普通	P47 5% 覆土中
8	小形深鉢 縄文土器	B(2.2) C〔 8.4〕	胴部から底部にかけての破片。胴部は底部から外傾して立ち上がる。底部は上げ底である。内・外面繊維脱痕あり。	白色粒子 橙色 普通	P48 5% 覆土中

石製品観察表

図版番号	種別	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	出土地点	備考
第27図13	石鏃	1.9	1.3	0.4	0.6	チャート	北東部床面	Q46
14	石鏃	2.2	(1.4)	0.4	(0.6)	チャート	覆土中	Q48
15	石鏃	(1.3)	1.4	0.4	(0.6)	チャート	北壁中央付近床面	Q49
16	石鏃	2.0	1.4	0.4	0.9	チャート	覆土中	Q50
17	石鏃	2.5	2.2	0.6	2.9	チャート	覆土中	Q53
18	石鏃	2.9	2.3	1.0	4.9	チャート	覆土中	Q109
19	打製石斧	13.3	7.1	4.1	411.3	ﾌｫﾙﾝﾌｪﾙｽ	北東部覆土下層	Q51
20	石錐	(3.4)	(1.4)	0.9	(3.9)	チャート	覆土中	Q52
21	砥石	13.6	5.7	4.5	538.3	砂岩	南東部覆土中層	Q61

第16Ｂ号住居跡（第25図）

位置　調査区の南部，Ｂ３g1区。

重複関係　第16Ａ号住居跡，第31号土坑に掘り込まれており，本跡が古い。

規模と平面形　長軸3.78m，短軸2.60mの隅丸長方形である。

主軸方向　Ｎ－33°－Ｗ

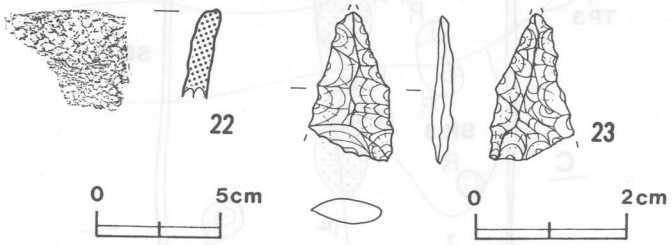
壁　壁高は15～21cmで，垂直に立ち上がる。

床　ほぼ平坦であるが，踏み固められた部分は認められなかった。

ピット　確認できなかった。

炉　第16Ａ号住居跡に掘り込まれて不明である。

覆土　３層からなり，褐色土がレンズ状に堆積しているので自然堆積である。



第28図　第16Ｂ号住居跡出土遺物実測・拓影図

土層解説
12　褐　色　ローム粒子微量
13　褐　色　ローム粒子極微量
14　暗褐色　ローム小ブロック少量

遺物　縄文土器片８点，石器２点，剝片７点が出土している。第28図22は縄文土器片の拓影図である。深鉢の口縁部片で，多条ＬＲとＲＬの縄文が交互に横位で施され，羽状構成をとる。胎土に繊維を含む。23は石鏃で東壁中央部の覆土下層から出土している。

所見　出土遺物が少なく時期決定は難しいが，第16Ａ号住居跡との重複関係から縄文時代前期前半(花積下層式期)以前と考えられる。

第16Ｂ号住居跡出土石製品観察表

図版番号	器　種	計　測　値				石　質	出　土　地　点	備　　考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第28図23	石　　鏃	2.0	(1.1)	0.4	(0.6)	チャート	南東部覆土下層	Q47

第17号住居跡（第29図）

位置　調査区の中央部，Ｃ３a2区。

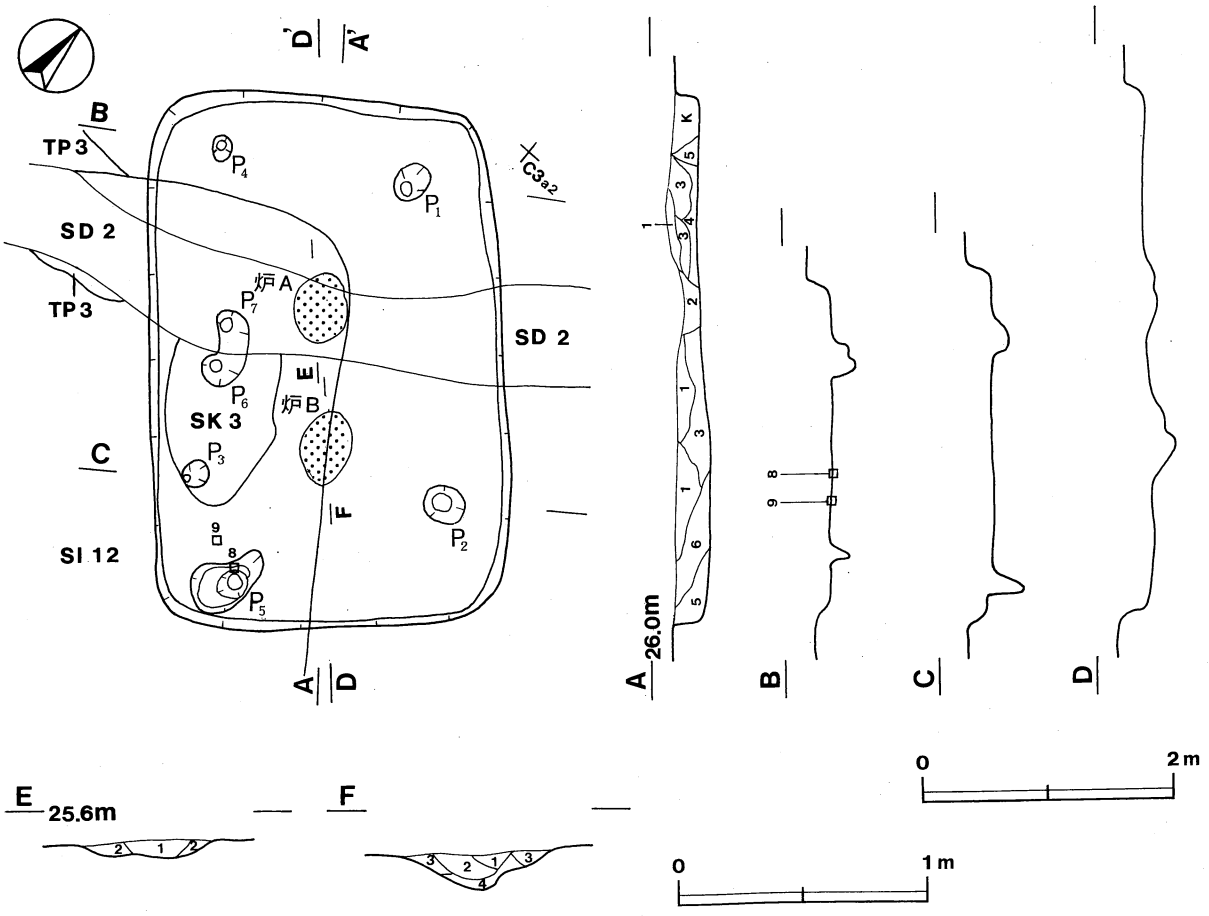
重複関係　中央部を東西に第２号溝に，南西部を第12号住居跡，第３号土坑に掘り込まれており，本跡が古い。第３号陥し穴を掘り込んでいる。

規模と平面形　長軸4.28m，短軸2.88mの隅丸長方形である。

主軸方向　Ｎ－38°－Ｗ

壁　壁高は20～25cmで，外傾して立ち上がる。

床　ほぼ平坦であるが，踏み固められた面は確認できなかった。



第29図　第17号住居跡実測図

ピット　7か所（P1～P7）。P1は径30cmの円形で，深さ20cmである。P2は長径30cm，短径25cmの楕円形で，深さが13cmである。P3は径20cmの円形で深さ25cmである。P4は長径20cm，短径15cmの楕円形で，深さ17cmである。P1～P4は主柱穴と思われる。P5は直径60cm，短径40cmの楕円形で，深さ18cmである。P6，P7は長径60cm，短径30cmの不整楕円形で，深さ9～13cmである。いずれも性格は不明である。

炉　2か所。炉Aは中央部からやや北西寄りにあり，平面形は長径52cm，短径40cmの楕円形で，床面を5cm掘りくぼめた地床炉である。炉床は，火熱を受け赤変している。

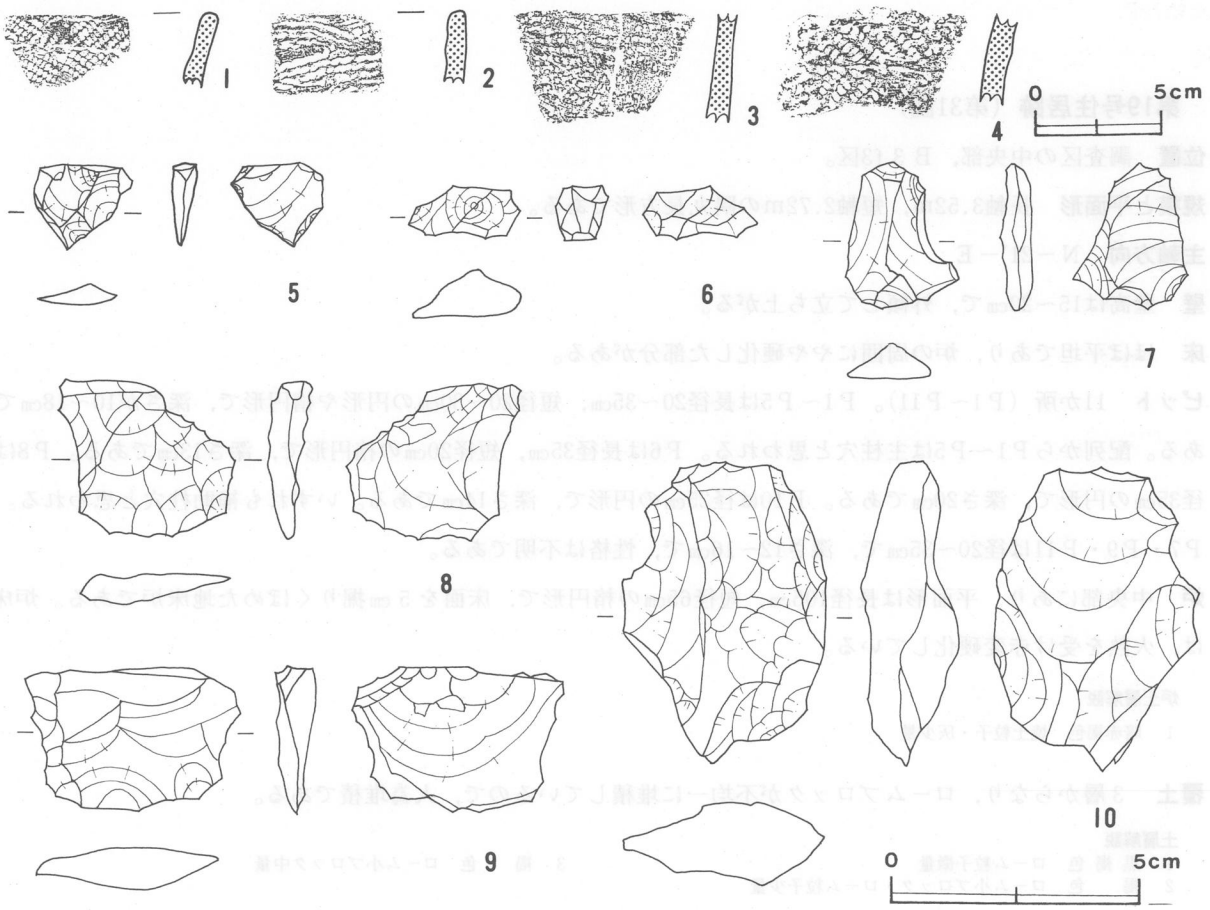
炉Bは中央部やや南東寄りにあり，平面形は長径65cm，短径40cmの楕円形で，床面を15cm掘りくぼめた地床炉である。炉床は，火熱を受け赤変硬化している。

炉A土層解説
1　暗赤褐色　焼土粒子中量，焼土中ブロック・ローム粒子少量
2　にぶい赤褐色　焼土小ブロック・ローム粒子中量，焼土粒子極微量

炉B土層解説
1　暗赤褐色　ローム粒子微量，ローム小ブロック極微量
2　褐　色　焼土粒子・ローム粒子少量
3　褐　色　焼土粒子少量，ローム粒子極微量
4　褐　色　ローム粒子中量

覆土　6層からなり，暗褐色土のロームが不均一に堆積しているので，人為堆積である。

土層解説
1　黒褐色　ローム粒子微量
2　暗褐色　焼土粒子・ローム粒子微量
3　暗褐色　ローム粒子極微量
4　褐　色　ローム粒子中量
5　暗褐色　ローム小ブロック微量
6　暗褐色　ローム粒子微量



第30図　第17号住居跡出土遺物実測・拓影図

遺物　縄文土器片85点，剝片６点，礫８点が出土しているが，ほとんどが胴部片で，口縁部，底部片は微量である。第30図１～４は縄文土器片の拓影図で，深鉢である。１は口縁部片で結節羽状縄文が施されている。２は口縁部片で，上位に貝殻背圧痕文が施され，下位に横位の単節ＲＬの縄文が施されている。３は胴部片で無文地にアナダラ属の貝殻腹縁文が施されている。４は胴部片で太めの結節羽状縄文が施されている。１～４は胎土に繊維を含む土器である。５～10は剝片である。６は北東部の覆土下層から，５・７・10は覆土中から，８・９は南東部の覆土下層から出土している。

所見　１～４の縄文土器片は本跡に伴うものと思われる。時期は，出土土器から縄文時代前期前半(花積下層式期)と考えられる。

第17号住居跡出土石製品観察表

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第30図５	剝片	1.7	1.9	0.4	1.2	安山岩	覆土中	Q62
6	剝片	1.1	2.3	1.0	2.5	安山岩	北東部覆土下層	Q63
7	剝片	3.0	2.2	0.7	3.4	安山岩	覆土中	Q64
8	剝片	3.1	3.5	0.9	6.1	安山岩	南東部覆土下層	Q65
9	剝片	2.9	4.3	0.9	9.6	安山岩	南東部覆土下層	Q66
10	剝片	6.1	4.0	1.9	38.0	安山岩	覆土中	Q67

第19号住居跡（第31図）

位置　調査区の中央部，Ｂ３ｆ3区。

規模と平面形　長軸3.52m，短軸2.72mの隅丸長方形である。

主軸方向　Ｎ－21°－Ｅ

壁　壁高は15～20cmで，外傾して立ち上がる。

床　ほぼ平坦であり，炉の周囲にやや硬化した部分がある。

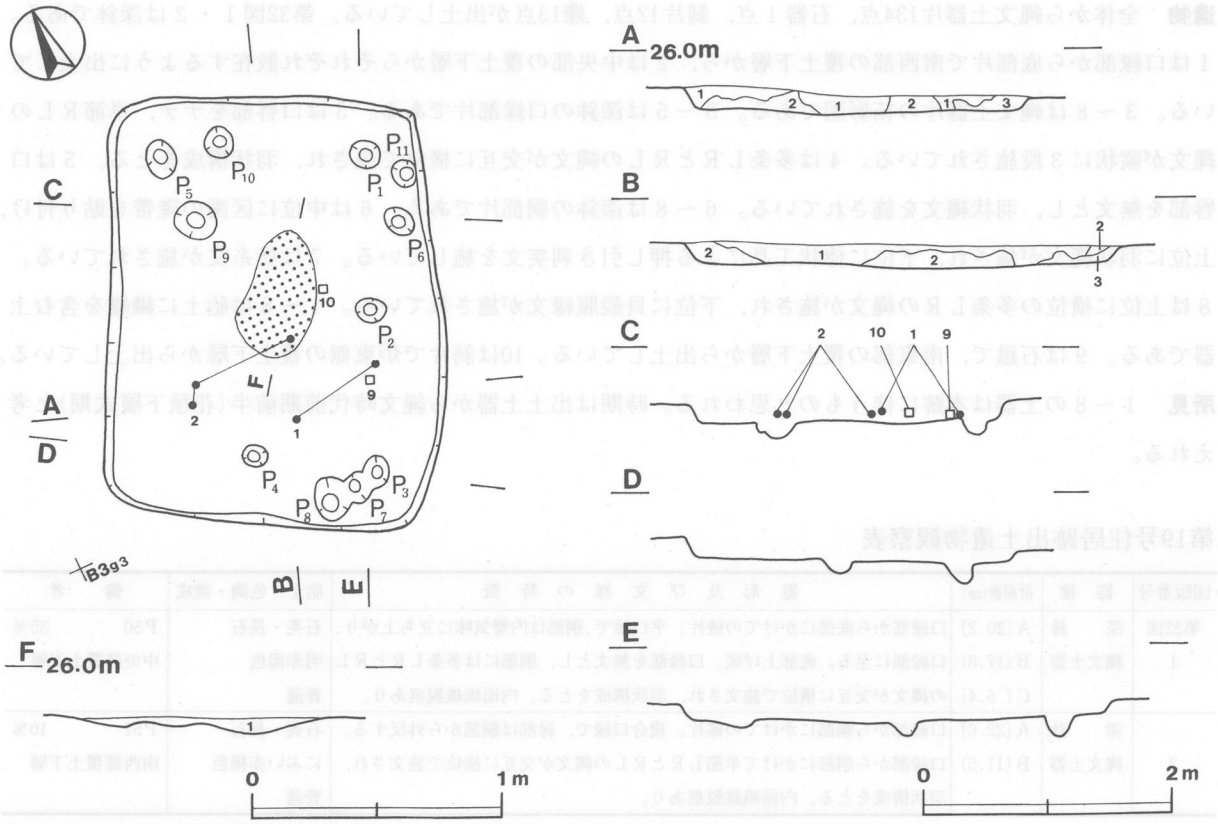
ピット　11か所（Ｐ1～Ｐ11)。Ｐ1～Ｐ5は長径20～35cm，短径20～30cmの円形や楕円形で，深さが10～18cmである。配列からＰ1～Ｐ5は主柱穴と思われる。Ｐ6は長径35cm，短径20cmの楕円形で，深さ13cmである。Ｐ8は径35cmの円形で，深さ20cmである。Ｐ10は径25cmの円形で，深さ14cmである。いずれも補助柱穴と思われる。Ｐ7・Ｐ9・Ｐ11は径20～35cmで，深さ12～16cmで，性格は不明である。

炉　中央部にあり，平面形は長径105cm，短径65cmの楕円形で，床面を５cm掘りくぼめた地床炉である。炉床は，火熱を受け赤変硬化している。

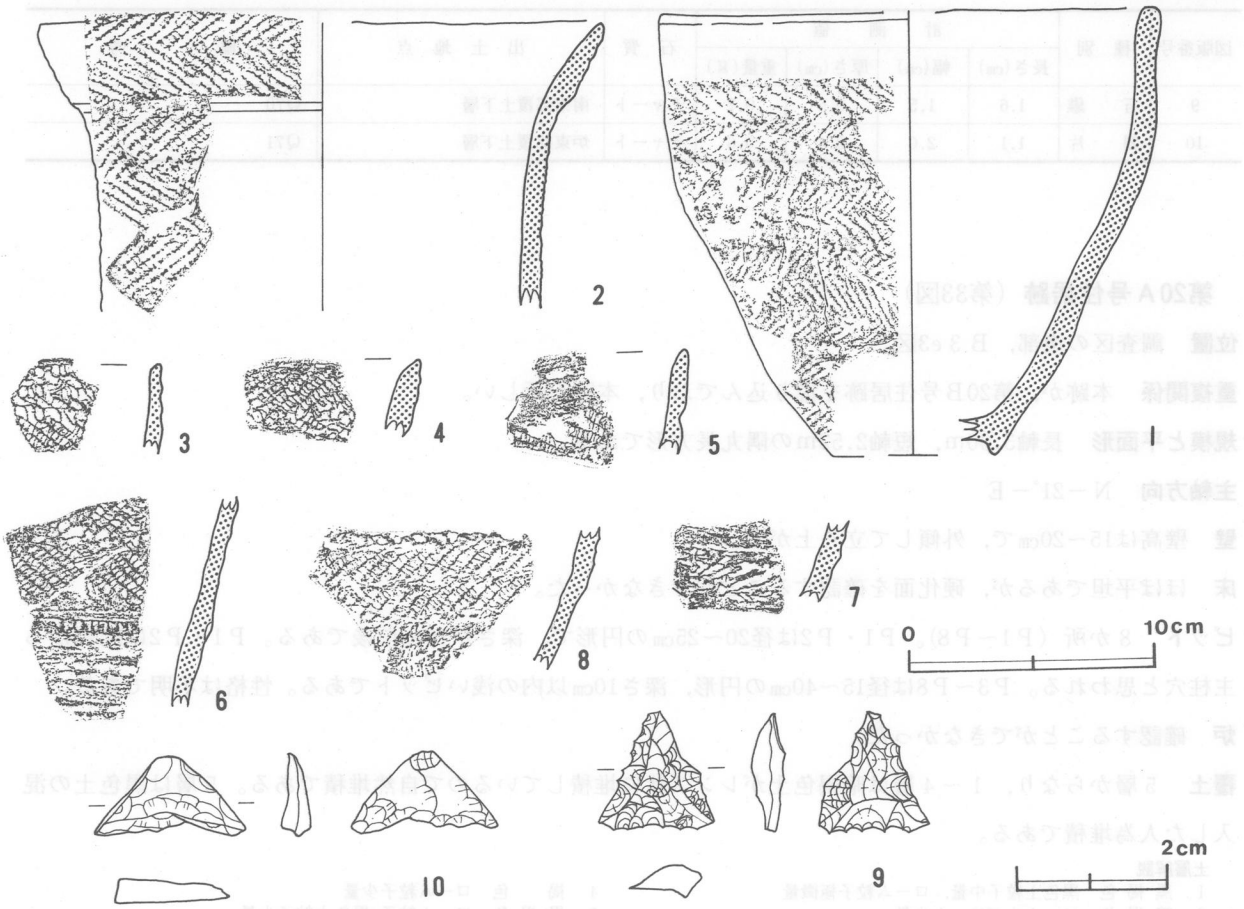
炉土層解説
1　暗赤褐色　焼土粒子・灰少量

覆土　３層からなり，ロームブロックが不均一に堆積しているので，人為堆積である。

土層解説
1　黒褐色　ローム粒子微量
2　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子少量
3　褐　色　ローム小ブロック中量



第31図　第19号住居跡実測図



第32図　第19号住居跡出土遺物実測・拓影図

遺物　全体から縄文土器片134点，石器１点，剝片12点，礫13点が出土している。第32図１・２は深鉢である。１は口縁部から底部片で南西部の覆土下層から，２は中央部の覆土下層からそれぞれ散在するように出土している。３～８は縄文土器片の拓影図である。３～５は深鉢の口縁部片である。３は口唇部をナデ，単節ＲＬの縄文が蕨状に３段施されている。４は多条ＬＲとＲＬの縄文が交互に横位で施され，羽状構成をとる。５は口唇部を無文とし，羽状縄文を施されている。６～８は深鉢の胴部片である。６は中位に区画の隆帯を貼り付け，上位に羽状縄文が施され，下位に棒状工具による押し引き刺突文を施している。７は撚糸文が施されている。８は上位に横位の多条ＬＲの縄文が施され，下位に貝殻腹縁文が施されている。１～８は胎土に繊維を含む土器である。９は石鏃で，南東部の覆土下層から出土している。10は剝片で炉東側の覆土下層から出土している。

所見　１～８の土器は本跡に伴うものと思われる。時期は出土土器から縄文時代前期前半(花積下層式期)と考えれる。

第19号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第32図 1	深　鉢 縄文土器	A〔20.2〕 B(17.8) C〔 6.4〕	口縁部から底部にかけての破片。平口縁で,胴部は内彎気味に立ち上がり，口縁部に至る。底部上げ底。口縁部を無文とし，胴部には多条ＬＲとＲＬの縄文が交互に横位で施文され，羽状構成をとる。内面繊維脱痕あり。	石英・長石 明赤褐色 普通	P50　35% 中央部覆土下層
2	深　鉢 縄文土器	A〔22.6〕 B(11.5)	口縁部から胴部にかけての破片。複合口縁で，縁部は胴部から外反する。口縁部から胴部にかけて単節ＬＲとＲＬの縄文が交互に横位で施文され，羽状構成をとる。内面繊維脱痕あり。	石英・長石 にぶい赤褐色 普通	P51　10% 南西部覆土下層

石製品観察表

図版番号	種　別	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石　質	出土地点	備　考
9	石　鏃	1.6	1.5	0.5	0.7	チャート	南東部覆土下層	Q70
10	剝　片	1.1	2.0	0.4	0.6	チャート	炉東部覆土下層	Q71

第20Ａ号住居跡（第33図）

位置　調査区の南部，Ｂ３e3区。

重複関係　本跡が，第20Ｂ号住居跡を掘り込んでおり，本跡が新しい。

規模と平面形　長軸3.00m，短軸2.52mの隅丸長方形である。

主軸方向　Ｎ－21°－Ｅ

壁　壁高は15～20cmで，外傾して立ち上がる。

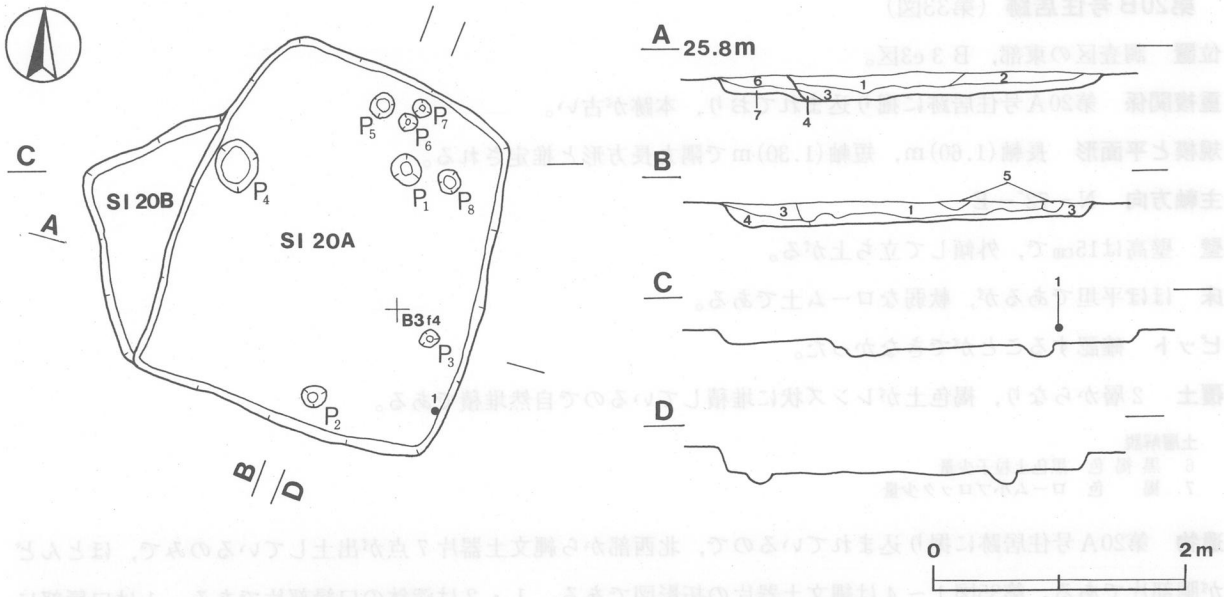
床　ほぼ平坦であるが，硬化面を確認することができなかった。

ピット　８か所（Ｐ1～Ｐ8)。Ｐ1・Ｐ2は径20～25cmの円形で，深さが10cm前後である。Ｐ1・Ｐ2は配列から主柱穴と思われる。Ｐ3～Ｐ8は径15～40cmの円形，深さ10cm以内の浅いピットである。性格は不明である。

炉　確認することができなかった。

覆土　５層からなり，１～４層は暗褐色土がレンズ状に堆積しているので自然堆積である。５層は黒色土の混入した人為堆積である。

土層解説
1　黒褐色　黒色土粒子中量，ローム粒子極微量
2　暗褐色　ローム小ブロック少量
3　褐　　色　ローム小ブロック少量
4　褐　　色　ローム粒子少量
5　黒褐色　ローム粒子･黒色土粒子少量



第33図　第20A・20B号住居跡実測図

遺物　全体に縄文土器片23点，礫4点が出土しているが，ほとんどが胴部片である。第34図1は深鉢の底部で，南東部壁近くの覆土中層から出土している。2～5は縄文土器片の拓影図である。2は外反する深鉢の口縁部片で，縄文を地文に2条の結節文が施文されている。3～5は深鉢の胴部片である。3は上位に撚糸文を施し，下位に縄文を地文に縄の圧痕文が施されている。4はヘラ削り後，撚糸文が施されている。5は縄文を地文に2条の結節文が施されている。

所見　1～5の遺物は本跡に伴うものと思われる。時期は，出土土器から縄文時代前期後半(粟島台式期)と考えられる。

第34図　第20A号住居跡出土遺物実測・拓影図

第20A号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第34図 1	深　鉢 縄文土器	B (1.9) C 〔9.4〕	胴部下位から底部にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がる。外面にはナデが施されており，無文である。平底。	石英・長石 にぶい黄橙色 普通	P53　5％ 南東部覆土中層

第20Ｂ号住居跡（第33図）

位置　調査区の東部，Ｂ３e3区。

重複関係　第20Ａ号住居跡に掘り込まれており，本跡が古い。

規模と平面形　長軸(1.60)ｍ，短軸(1.30)ｍで隅丸長方形と推定される。

主軸方向　Ｎ－72°－Ｅ

壁　壁高は15㎝で，外傾して立ち上がる。

床　ほぼ平坦であるが，軟弱なローム土である。

ピット　確認することができなかった。

覆土　２層からなり，褐色土がレンズ状に堆積しているので自然堆積である。

土層解説
6　黒 褐 色　黒色土粒子少量
7　褐　　色　ローム小ブロック少量

遺物　第20Ａ号住居跡に掘り込まれているので，北西部から縄文土器片７点が出土しているのみで，ほとんどが胴部片である。第35図１～４は縄文土器片の拓影図である。１・２は深鉢の口縁部片である。１は口唇部に貝殻腹縁文を施し，外面には結節羽状縄文が施されている。２は口唇部に縄文を転がし，外面には太めの撚り戻しＲＲの縄文が施されている。３・４は深鉢の胴部片である。３は内面に貝殻条痕文が施され，外面に横位の単節ＲＬの縄文が施されている。４は結節羽状縄文が施されている。１～４は胎土に繊維を含む土器である。

所見　１～４の土器は本跡に伴うものと思われる。時期は，出土土器から縄文時代前期前半(黒浜式期)と考えられる。

第35図　第20Ｂ号住居跡出土遺物実測・拓影図

第23号住居跡（第36図）

位置　調査区の東部，Ｂ３e2区。

重複関係　本跡が第43号住居跡を掘り込んでいるため，本跡が新しい。

規模と平面形　長軸2.58m，短軸2.55mの不整方形である。

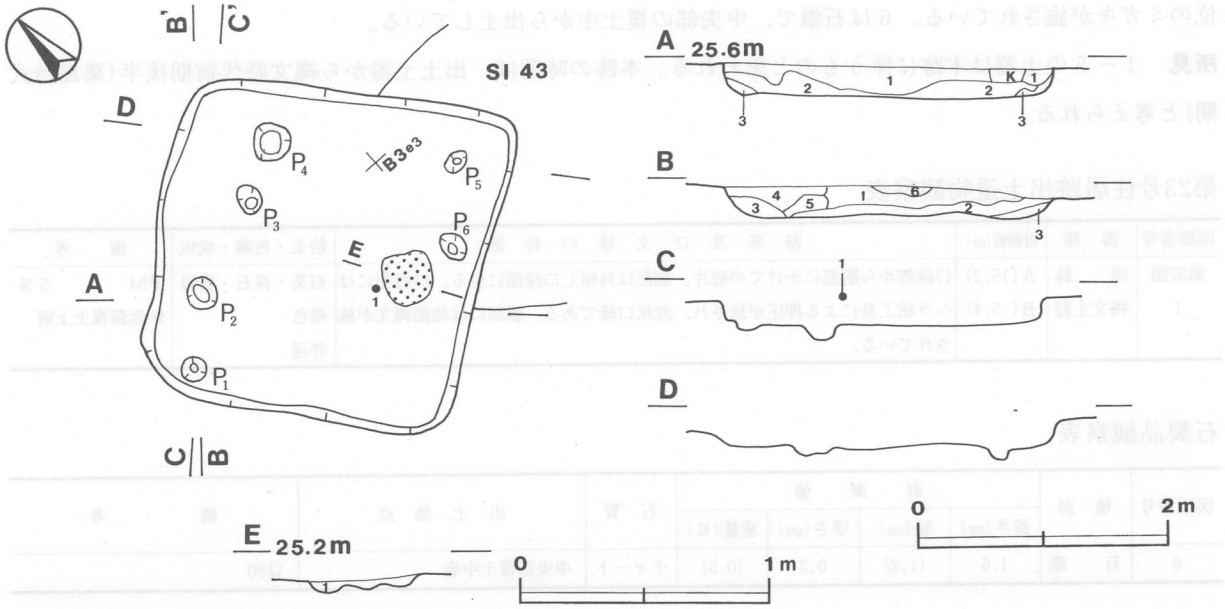
主軸方向　Ｎ－45°－Ｅ

壁　壁高は25㎝で，外傾して立ち上がる。

床　ほぼ平坦であるが，硬化面は確認できない。

ピット　６か所（Ｐ1～Ｐ6）。Ｐ2は径25㎝の円形で，深さ16㎝である。Ｐ6は長径30㎝，短径20㎝の楕円形で，深さが25㎝である。Ｐ2･Ｐ6はピットの深さから主柱穴と思われる。Ｐ1・Ｐ3～Ｐ5は径15～30㎝の円形で，深さ６～12㎝である。いずれも性格は不明である。

炉　中央から南東寄りに位置し，平面形は径40㎝の円形で，床面を５㎝掘りくぼめた地床炉である。炉床は，火熱を受け赤変している。



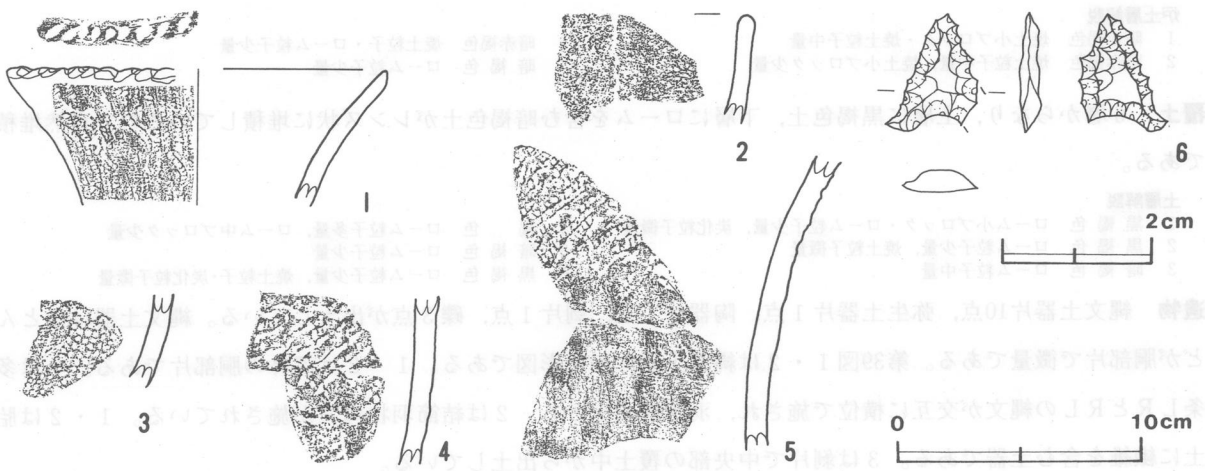
第36図　第23号住居跡実測図

炉土層解説
1　暗赤褐色　焼土粒子・ローム小ブロック少量

覆土　6層からなり，ロームが不均一に堆積しているので，人為堆積である。

土層解説
1　極暗褐色　ローム粒子微量
2　黒 褐 色　ローム小ブロック少量
3　褐　　色　ローム粒子中量
4　黒 褐 色　ローム粒子・黒色土粒子微量
5　極暗褐色　ローム粒子少量
6　黒 褐 色　ローム粒子少量

遺物　縄文土器片60点，石器1点，礫5点が出土している。ほとんどが胴部片で，口縁部，底部片は微量である。第37図1は深鉢で，炉北側の覆土上層から出土している。2～5は縄文土器片の拓影図である。2は深鉢の平口縁部片で，無文である。3～5は深鉢の胴部片である。3は横位の単節ＬＲの縄文が施されている。4は無節Ｌが横位に施文され，結節縄文が2段に施されている。5は上位に単節ＬＲの縄文が施され，下位に縦



第37図　第23号住居跡出土遺物実測・拓影図

位のミガキが施されている。6は石鏃で，中央部の覆土中から出土している。

所見　1～5の土器は本跡に伴うものと思われる。本跡の時期は，出土土器から縄文時代前期後半(粟島台式期)と考えられる。

第23号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第37図 1	深鉢 縄文土器	A〔15.2〕 B(5.4)	口縁部から胴部にかけての破片。胴部は外傾し口縁部に至る。口唇部にはヘラ状工具による押圧が施され，波状口縁である。胴部には結節縄文が施されている。	石英・長石・雲母 橙色 普通	P54　5％ 炉北側覆土上層

石製品観察表

図版番号	種別	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	出土地点	備考
6	石鏃	1.6	(1.2)	0.3	(0.5)	チャート	中央部覆土中層	Q80

第24号住居跡（第38図）

位置　調査区の中央部，C2d8区。

規模と平面形　長軸〔4.80〕m，短軸3.08mの隅丸長方形と推定される。南東部及び北コーナーは撹乱により不明である。

主軸方向　N－58°－W

壁　壁高は20cmで，外傾して立ち上がる。

床　ほぼ平坦である。硬化面が炉の周りや出入口ピット周辺で確認された。

ピット　3か所（P1～P3)。P1・P2は長径35cm，短径25cmの楕円形で，深さが28cmである。P1・P2は配列から主柱穴と思われる。P3は径25cmの円形で，深さ13cmである。位置から出入口施設に伴うピットと考えられる。

炉　中央よりやや南東部で，平面形は長径65cm，短径(35)cmの楕円形で，床面を10cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床は，火熱を受けて赤変している。

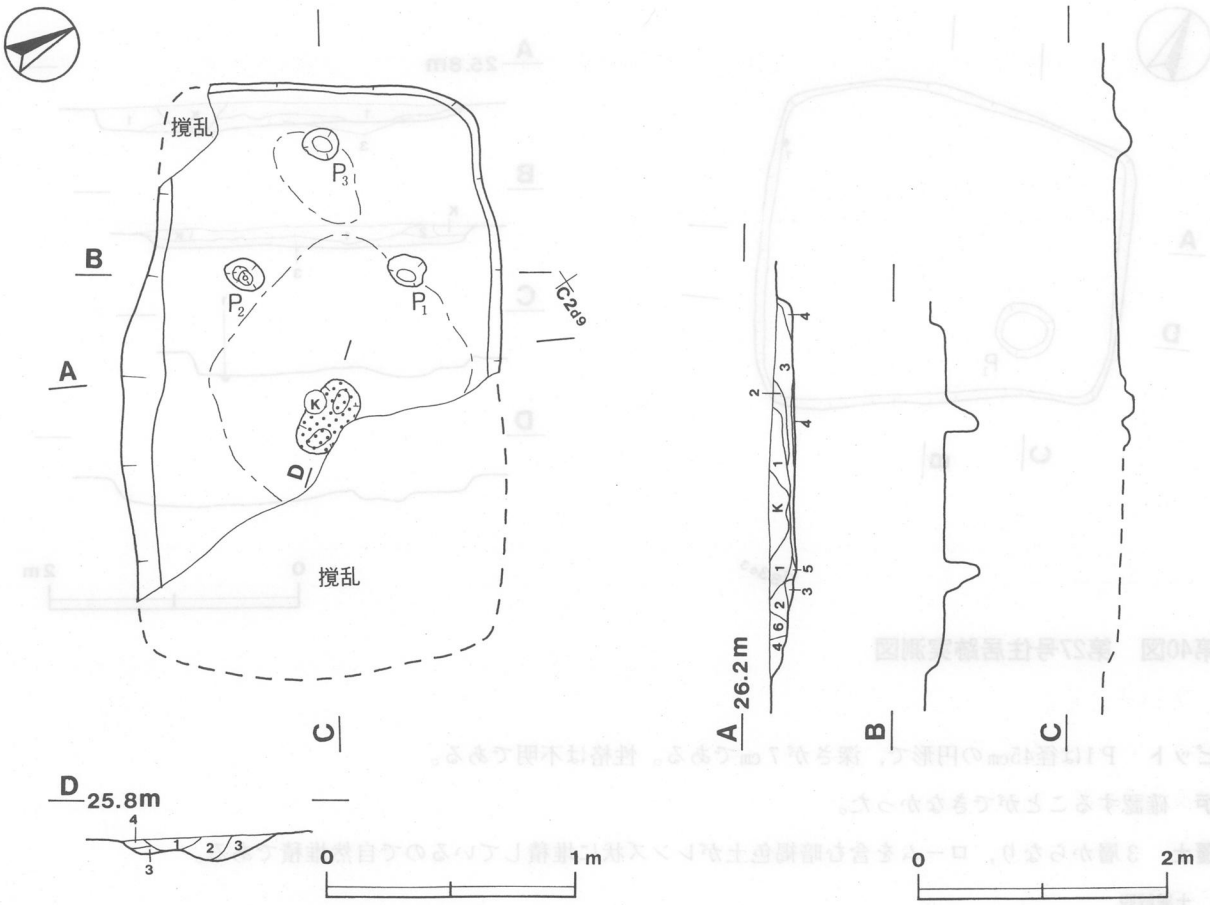
炉土層解説
1　暗赤褐色　焼土小ブロック・焼土粒子中量
2　暗赤褐色　焼土粒子中量，焼土小ブロック少量
3　暗赤褐色　焼土粒子・ローム粒子少量
4　暗褐色　ローム粒子少量

覆土　6層からなり，上層に黒褐色土，下層にロームを含む暗褐色土がレンズ状に堆積しているので自然堆積である。

土層解説
1　黒褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，炭化粒子微量
2　黒褐色　ローム粒子少量，焼土粒子微量
3　暗褐色　ローム粒子中量
4　褐　色　ローム粒子多量，ローム中ブロック少量
5　暗褐色　ローム粒子少量
6　黒褐色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量

遺物　縄文土器片10点，弥生土器片1点，陶器片1点，剝片1点，礫3点が出土している。縄文土器はほとんどが胴部片で微量である。第39図1・2は縄文土器片の拓影図である。1・2は深鉢の胴部片である。1は多条ＬＲとＲＬの縄文が交互に横位で施され，羽状構成をとる。2は結節羽状縄文が施されている。1・2は胎土に繊維を含む土器である。3は剝片で中央部の覆土中から出土している。

所見　弥生土器片や陶器片は南東部の撹乱により混入したものと思われる。遺物が少なく時期決定の資料は乏しいが，出土土器から縄文時代前期前半(花積下層式期)と思われる。



第38図　第24号住居跡実測図

第39図　第24号住居跡出土遺物実測・拓影図

第24号住居跡出土石製品観察表

図版番号	種別	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第39図3	剝片	2.2	2.8	1.0	2.8	チャート	覆土中	Q81

第27号住居跡（第40図）

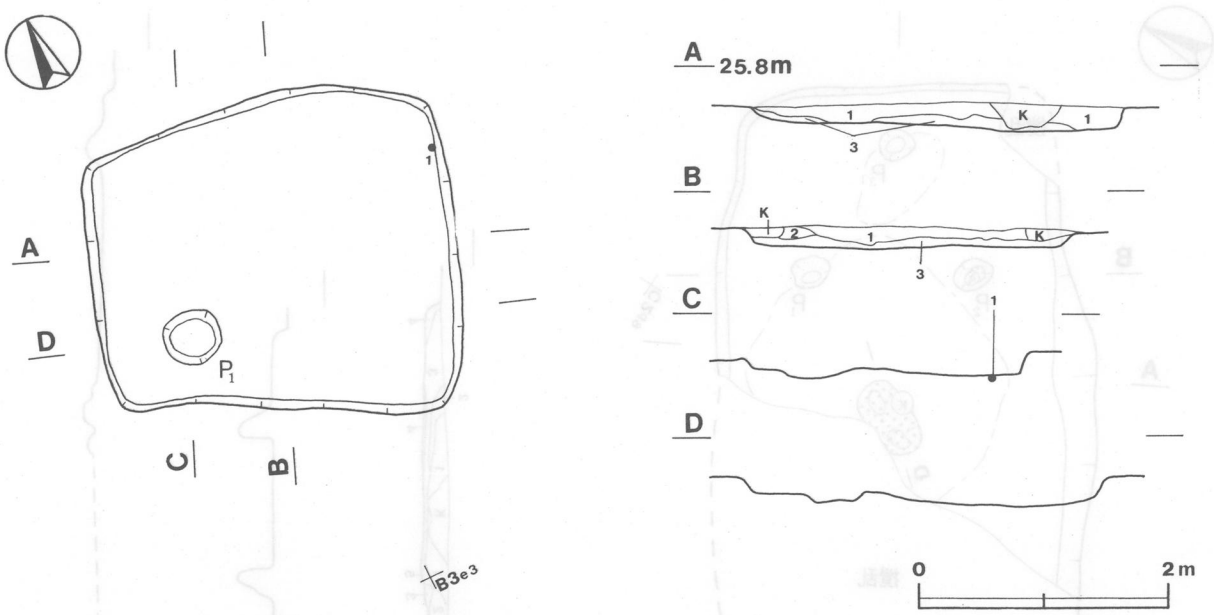
位置　調査区の東部，B 3 d2区。

規模と平面形　長軸3.02m，短軸2.60mの不整方形である。

主軸方向　N－68°－W

壁　壁高は15～20cmで，外傾して立ち上がる。

床　ほぼ平坦であるが，南側にやや傾斜している。



第40図　第27号住居跡実測図

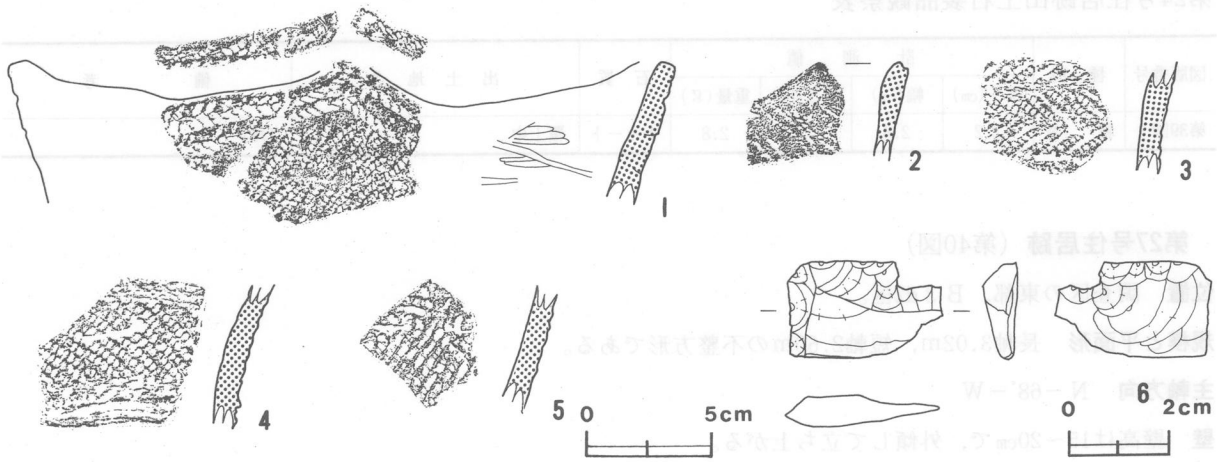
ピット　P1は径45cmの円形で，深さが7cmである。性格は不明である。

炉　確認することができなかった。

覆土　3層からなり，ロームを含む暗褐色土がレンズ状に堆積しているので自然堆積である。

土層解説
1　暗褐色　ローム小ブロック少量
2　暗褐色　ローム粒子微量
3　褐　　色　ローム小ブロック中量

遺物　縄文土器片36点，剥片4点，礫6点が出土しているが，ほとんどが胴部片で，口縁部，底部片は極微量である。第41図1は深鉢の平口縁部片で，北東コーナーの床面から出土している。2～5は縄文土器片の拓影図である。2は深鉢の波状口縁部片で撚糸の押圧文が施されている。3～5は深鉢の胴部片である。3は，結節羽状縄文が施されている。4は上位に単節ＲＬの横位の縄文が施され，下位に半截竹管による平行沈線文が施されている。5は撚り戻しＬＬの縄文が横位に施されている。1～5は胎土に繊維を含む土器である。6の剥片は，北西部の覆土中から出土している。



第41図　第27号住居跡出土遺物実測・拓影図

所見　1～5の遺物は本跡に伴うものと思われる。時期は，出土土器から縄文時代前期前半(黒浜式期)と考えられる。

第27号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第41図 1	深鉢 縄文土器	A〔25.6〕 B(5.7)	口縁部破片。波状口縁で外傾する。口唇部に縄文を施し，口縁部に2条の単節の押圧縄文が施され，下位には単節ＬＲの縄文が横位に施されている。内面には横位のヘラミガキが施されている。	石英・長石・雲母 橙色 普通	P57　5％ 北東コーナー部床面

石製品観察表

図版番号	種別	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	出土地点	備考
6	剝片	2.0	3.1	0.8	4.4	安山岩	覆土中	Q82

第28号住居跡（第42図）

位置　調査区の東部，Ｂ3h5区。

重複関係　第2号住居跡と第12・13号土坑に掘り込まれているため，本跡が古い。

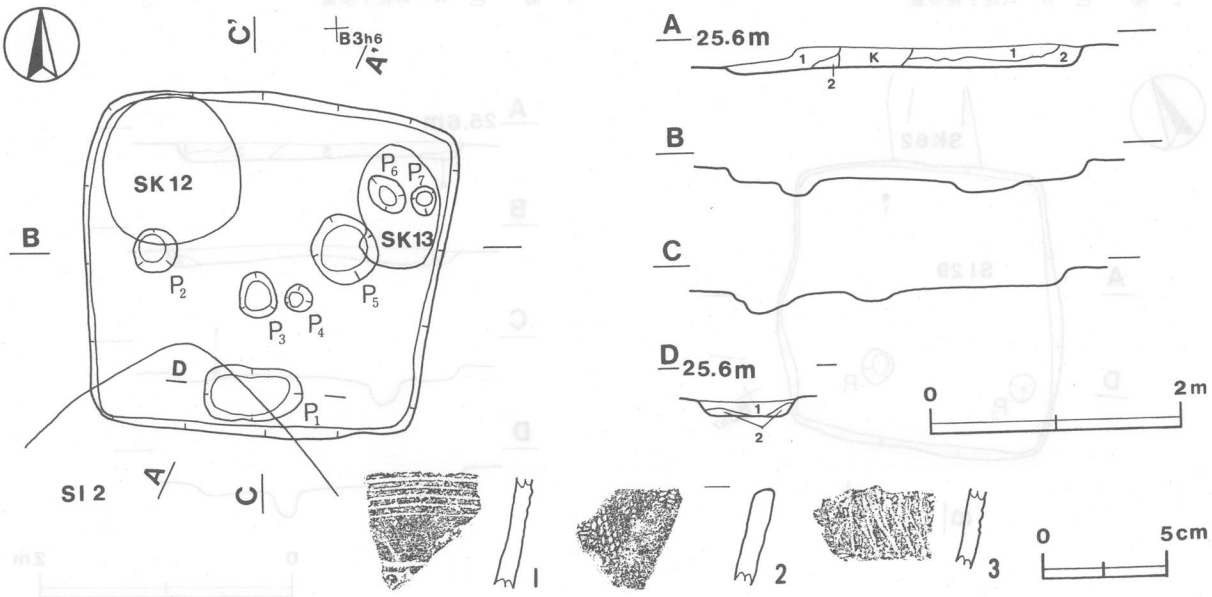
規模と平面形　長軸2.98m，短軸2.80mの不整方形である。

主軸方向　Ｎ－38°－Ｗ

壁　壁高は14～30cmで，外傾して立ち上がる。

床　ほぼ平坦であるが，小さな凹凸がある。

ピット　7か所（Ｐ1～Ｐ7）。Ｐ2は径34cmの円形で，深さが12cmである。Ｐ5は径50cmの円形で，深さ8cmである。主柱穴と思われる。Ｐ1は長径80cm，短径42cmの小判形で深さ13cmである。Ｐ3は長径38cm，短径30cmの楕円形，深さ9cmである。Ｐ4は径24cmの円形で，深さ10cmである。Ｐ6は長径40cm，短径25cmの楕円形で，深さ13cmである。Ｐ7は径20cmの円形で，深さ10cmである。いずれも性格は不明である。



第42図　第28号住居跡・出土遺物実測・拓影図

P1土層解説
1　暗褐色　ローム小ブロック少量
2　褐　　色　ローム中ブロック微量

炉　確認することができなかった。

覆土　2層からなり，ロームがレンズ状に堆積しているので自然堆積である。

土層解説
1　暗褐色　ローム粒子中量，ローム中ブロック極微量
2　褐　　色　ローム粒子多量，ローム中ブロック中量

遺物　中央から北部を中心に縄文土器片8点，土師器片20点，土製品1点が出土しているが，ほとんどが胴部片である。第42図1～3は縄文土器片の拓影図である。1は深鉢の胴部片で，貝殻条痕文が施されている。2は深鉢の口縁部片，3は深鉢の胴部片で，波状貝殻腹縁文が施されている。

所見　全体的な遺物の出土状況からみて土師器は混入の可能性が考えられる。時期は，遺構の形態及び出土土器から判断して縄文時代前期後半(浮島Ⅱ式期)と考えられる。

第29号住居跡（第43図）

位置　調査区の南東部，B3h6区。

重複関係　本跡が，第62号土坑を掘り込んでいるため，本跡が新しい。

規模と平面形　長軸2.34m，短軸2.28mの不整方形である。

主軸方向　N－27°－W

壁　壁高は10～15cmで，外傾して立ち上がる。

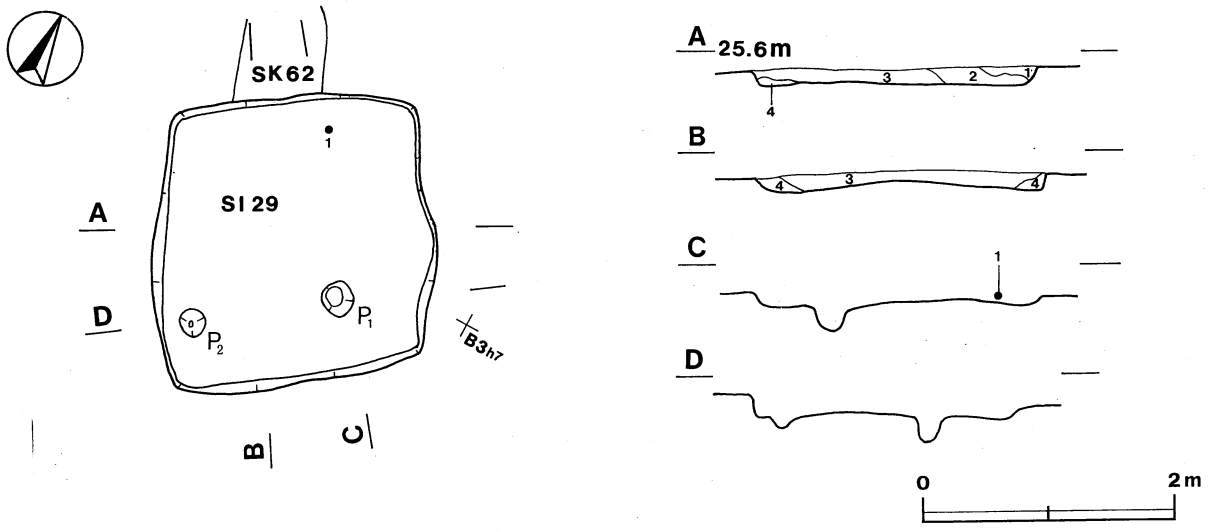
床　ほぼ平坦なローム土であるが，硬化面は確認することができなかった。

ピット　2か所（P1・P2)。P1は長径30cm，短径25cmの楕円形で，深さが20cmである。P2は径20cmの円形で，深さ10cmである。P1・P2は主柱穴と思われる。

炉　確認することができなかった。

覆土　4層からなり，下層にロームブロックを含んでいることから人為堆積と思われる。

土層解説
1　暗褐色　ローム粒子少量
2　褐　　色　ローム粒子極多量
3　暗褐色　ローム粒子中量，炭化粒子・黒色土小ブロック微量
4　褐　　色　ローム粒子多量



第43図　第29号住居跡実測図

遺物　縄文土器片30点，土師器片９点，礫14点出土しているが，ほとんどが胴部片で，口縁部，底部片は極微量である。第44図１は深鉢の口縁部片で，北壁付近中央の床面から出土している。２～４は縄文土器片の拓影図である。２は深鉢の口縁部片で，口唇部に縄文での押圧が施され，外面に結節縄文で横位に施文されている。３・４は深鉢の胴部片である。３は縄文を地文に縄の直線的圧痕文が施されている。４は結節縄文が横位に施文されている。

所見　１～４の遺物は本跡に伴うものと思われる。時期は，出土土器から縄文時代前期後半(粟島台式期)と考えられる。

第44図　第29号住居跡出土遺物実測・拓影図

第29号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第44図	深　鉢	B (5.0)	胴部下位から底部にかけての破片。胴部は底部からわずかに外反して立ち	長石・白色粒子	P58　5％
1	縄文土器	C 〔9.6〕	上がる。器面は無文で，粗くヘラ削りで縦位に整形されている。底部には	にぶい橙色	北壁中央床面
			ヘラミガキが施されている。	普通	

第30号住居跡（第45図）

位置　調査区の中央部，Ｃ３a3区。

重複関係　南西部を第25号土坑に掘り込まれているので，本跡が古い。

規模と平面形　長軸4.48m，短軸3.36mの隅丸長方形である。

主軸方向　Ｎ－18°－Ｗ

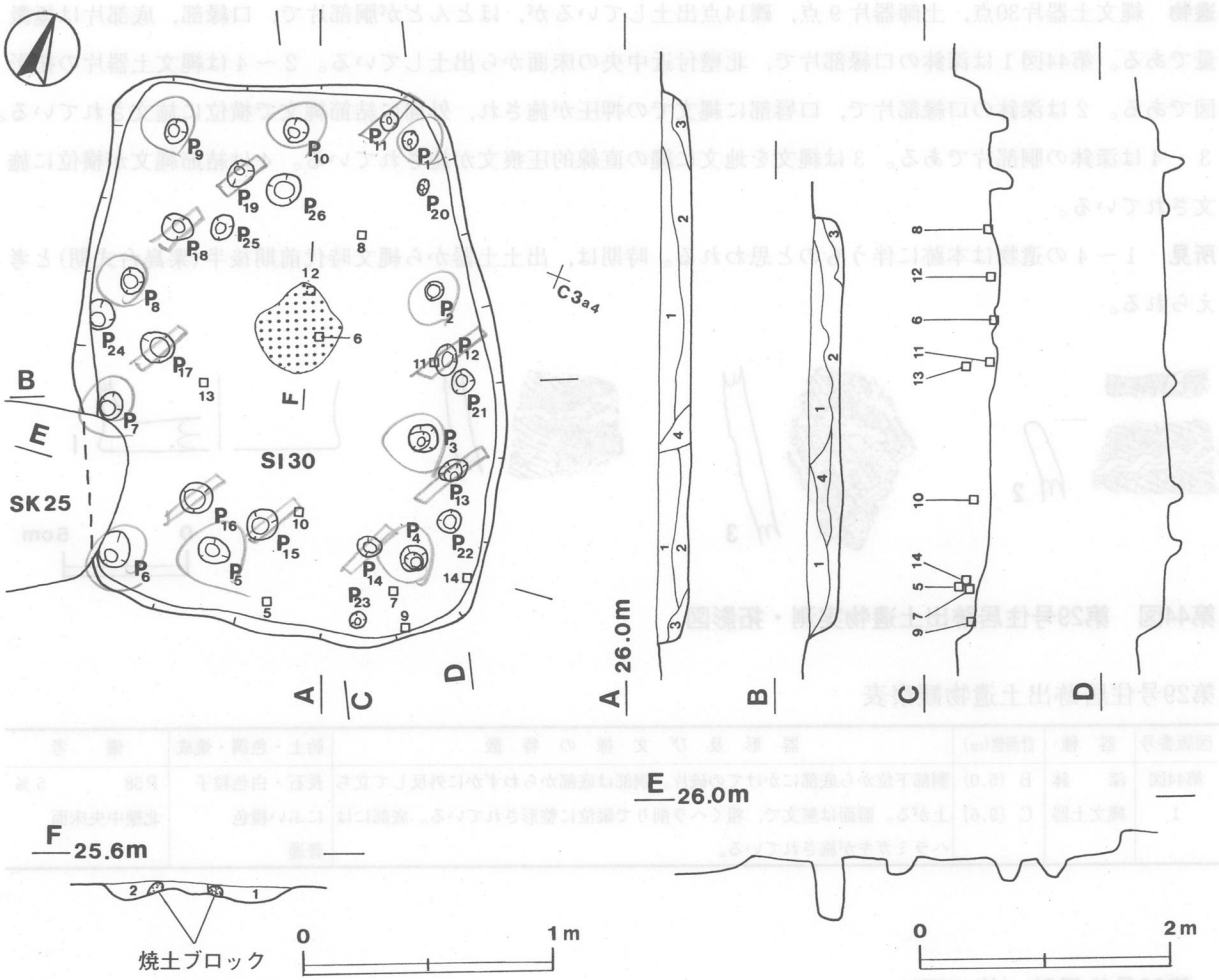
壁　壁高は30cmで，外傾して立ち上がる。

床　ほぼ平坦であるが，硬化面は確認することができなかった。

ピット　26か所（Ｐ1～Ｐ26）。Ｐ1～Ｐ10は長径15～30cm，短径15～25cmの円形及び楕円形で，深さが15～48cmである。配列からＰ1～Ｐ10は主柱穴と思われる。Ｐ11～Ｐ19は長径15～30cm，短径15～25cmの円形及び楕円形，深さ14～46cmで，位置から補助柱穴と思われる。Ｐ20～Ｐ26は径10～30cmの円形で，深さ10～82cmである。性格は不明である。

炉　中央からやや北部に位置し，長径80cm，短径70cmの不整楕円形で，床面を6cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床は火熱を受け，赤色硬化している。長期間使用されたものと考えられる。

炉土層解説
1　暗褐色　ローム小ブロック中量，焼土粒子少量
2　暗赤褐色　焼土粒子少量



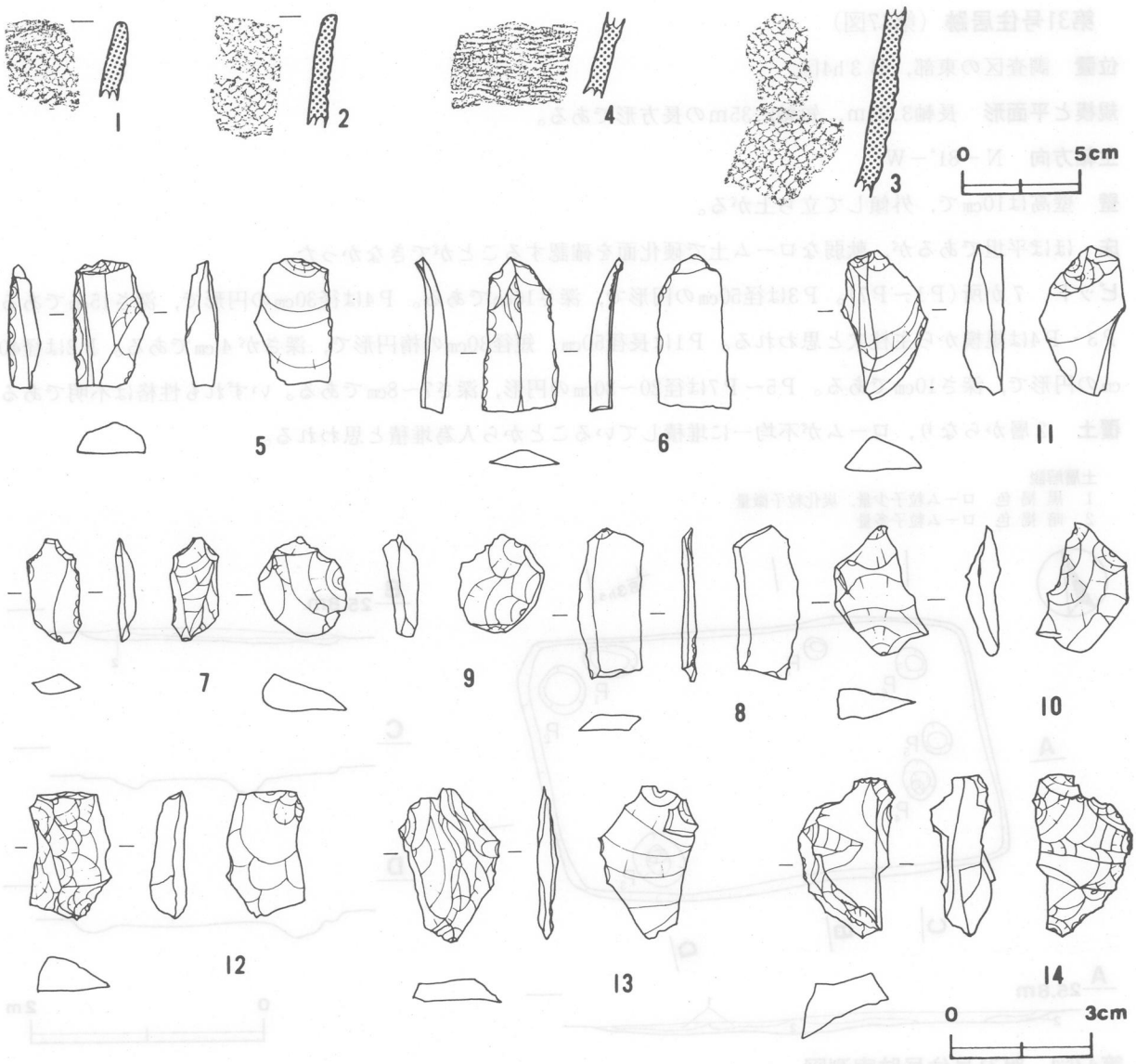
第45図　第30号住居跡実測図

覆土　4層からなり，ロームを含む暗褐色土がレンズ状に堆積しているので自然堆積である。

土層解説
1　暗褐色　ローム粒子少量，炭化粒子微量
2　暗褐色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量，炭化粒子極微量
3　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック微量，ローム中ブロック極微量
4　暗褐色　ローム粒子少量

遺物　縄文土器片43点，石器2点，剥片18点，礫5点が出土しているが，ほとんどが胴部片で，口縁部，底部片は微量である。第46図1～4は縄文土器片の拓影図である。1は深鉢の口縁部片で，単節縄文ＲＬが施されている。2は深鉢の波状口縁部片で，結節羽状縄文が施されている。3は深鉢の胴部片で，単節縄文ＲＬが施されている。4は小形深鉢の胴部片で，貝殻圧痕文が施されている。4は縄文時代前期(花積下層式期)に比定されると思われる。1～4は胎土に繊維を含む土器である。5・7の剥片は南壁中央部の覆土中層から，6のナイフ形石器は炉内から出土している。8の剥片は北東部の，11の剥片は東壁付近の床面からそれぞれ出土している。9・14の剥片は南東コーナー部の，10の剥片は中央部南寄りの，13の剥片は炉西側の覆土下層からそれぞれ出土している。12の剥片は炉の直上から出土している。

所見　1～3の遺物は本跡に伴うものと思われる。時期は，出土土器から縄文時代前期前半(黒浜式期)と考えられる。



第46図　第30号住居跡出土遺物実測・拓影図

第30号住居跡出土石製品観察表

図版番号	種別	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第46図5	剝片	(2.7)	(1.6)	0.7	(3.1)	安山岩	南壁中央付近覆土中層	Q83
6	ナイフ形石器	(3.3)	1.7	0.6	(2.4)	安山岩	炉内	Q84
7	剝片	2.2	1.1	0.4	0.9	チャート	南壁中央付近覆土中層	Q85
8	剝片	3.2	1.4	0.3	1.9	安山岩	北東部床面	Q86
9	剝片	2.1	1.9	0.8	2.6	黒曜石	南東コーナー部覆土下層	Q87
10	剝片	2.8	1.7	0.8	2.6	チャート	中央部南寄り覆土下層	Q88
11	剝片	3.2	1.8	0.9	3.7	安山岩	東壁付近床面	Q89
12	剝片	2.7	1.8	0.8	3.8	安山岩	炉直上	Q90
13	剝片	3.3	2.2	0.5	3.2	安山岩	炉西側覆土下層	Q91
14	剝片	3.4	2.1	1.4	7.3	瑪瑙	南東コーナー部覆土下層	Q92

第31号住居跡（第47図）

位置　調査区の東部，Ｂ３h4区。

規模と平面形　長軸3.94m，短軸2.35mの長方形である。

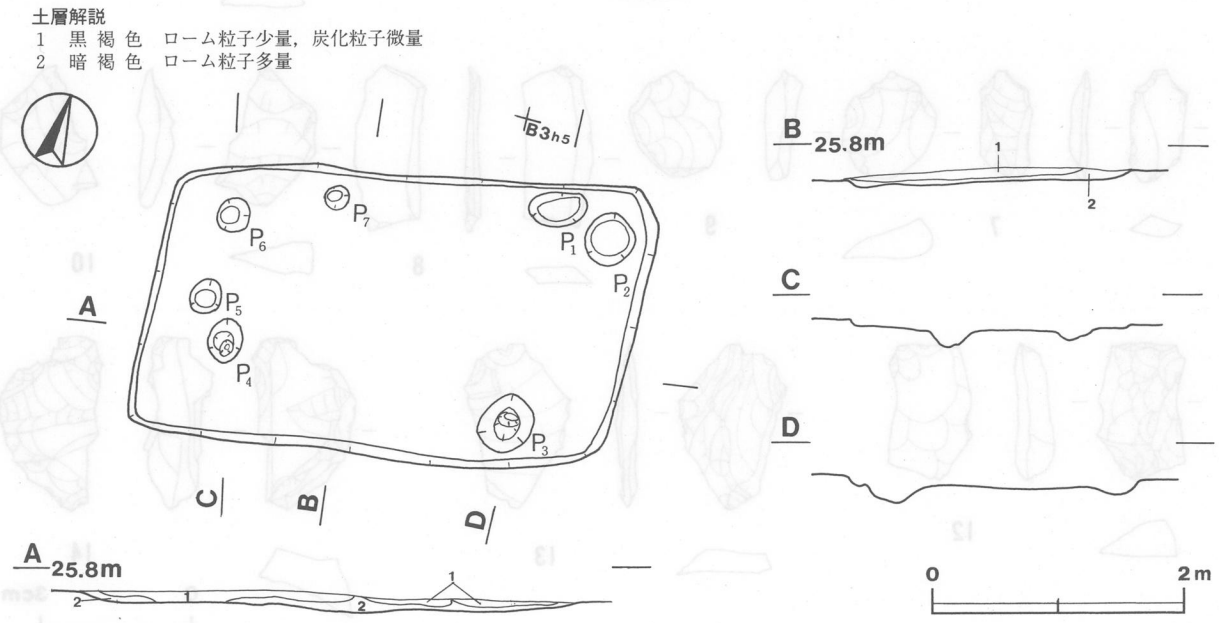
主軸方向　Ｎ－81°－Ｗ

壁　壁高は10cmで，外傾して立ち上がる。

床　ほぼ平坦であるが，軟弱なローム土で硬化面を確認することができなかった。

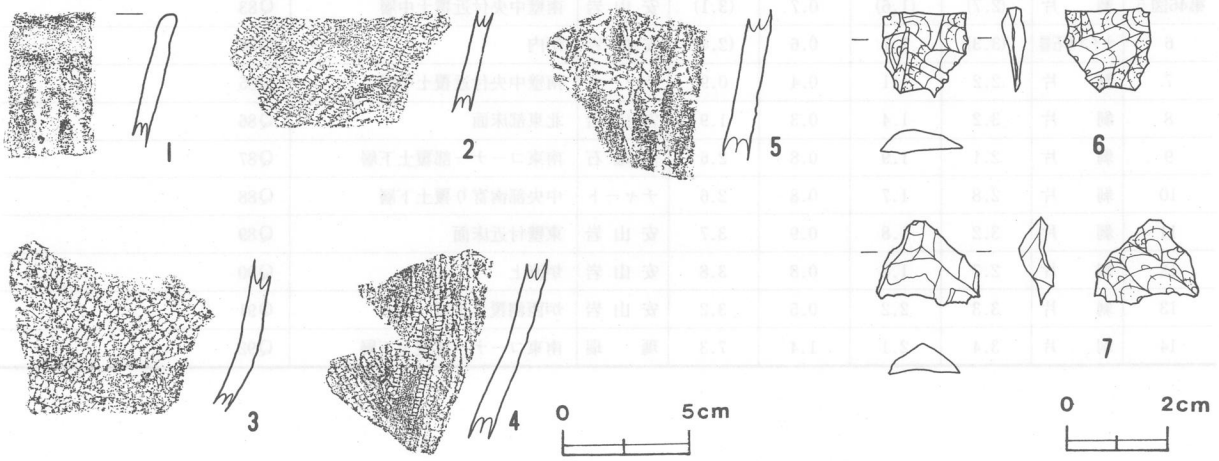
ピット　７か所（Ｐ1～Ｐ7）。Ｐ3は径50cmの円形で，深さ16cmである。Ｐ4は径30cmの円形で，深さ15cmである。Ｐ3・Ｐ4は規模から主柱穴と思われる。Ｐ1は長径50cm，短径30cmの楕円形で，深さが４cmである。Ｐ2は径40cmの円形で，深さ10cmである。Ｐ5～Ｐ7は径20～30cmの円形，深さ7～8cmである。いずれも性格は不明である。

覆土　２層からなり，ロームが不均一に堆積していることから人為堆積と思われる。



第47図　第31号住居跡実測図

遺物　住居跡内全体から縄文土器片55点，剥片６点，礫15点が出土しているが，胴部片がほとんどである。第48図１～５は縄文土器片の拓影図である。１は深鉢の口縁部片で，貝殻腹縁文が施されている。２～５は深鉢の胴部片である。２は単節ＬＲの縄文が施されている。３は単節ＲＬの縄文が施されている。４は木目状撚糸



第48図　第31号住居跡出土遺物実測・拓影図

文が施されている。5は波状貝殻文が施されている。3・5は縄文時代前期の浮島Ⅱ式期に比定されると思われる。6・7は剝片で覆土中からの出土である。

所見　1・2・4の遺物は本跡に伴うものと思われる。時期は，出土土器から縄文時代前期後半(粟島台式期)と思われる。

第31号住居跡出土石製品観察表

図版番号	種別	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第48図6	剝片	1.7	1.8	0.5	1.2	チャート	覆土中	Q93
7	剝片	1.7	2.0	0.7	1.2	チャート	覆土中	Q94

第32号住居跡（第49図）

位置　調査区の北部，B2d8区。

重複関係　第10号墳に掘り込まれており，本跡が古い。北側は撹乱されている。

規模と平面形　長軸2.36m，短軸(1.90)mで隅丸長方形と推定される。

主軸方向　N－8°－E

壁　壁高は16cmで，外傾して立ち上がるが，北壁の一部と西壁は不明である。

床　ほぼ平坦である。

ピット　確認できなかった。

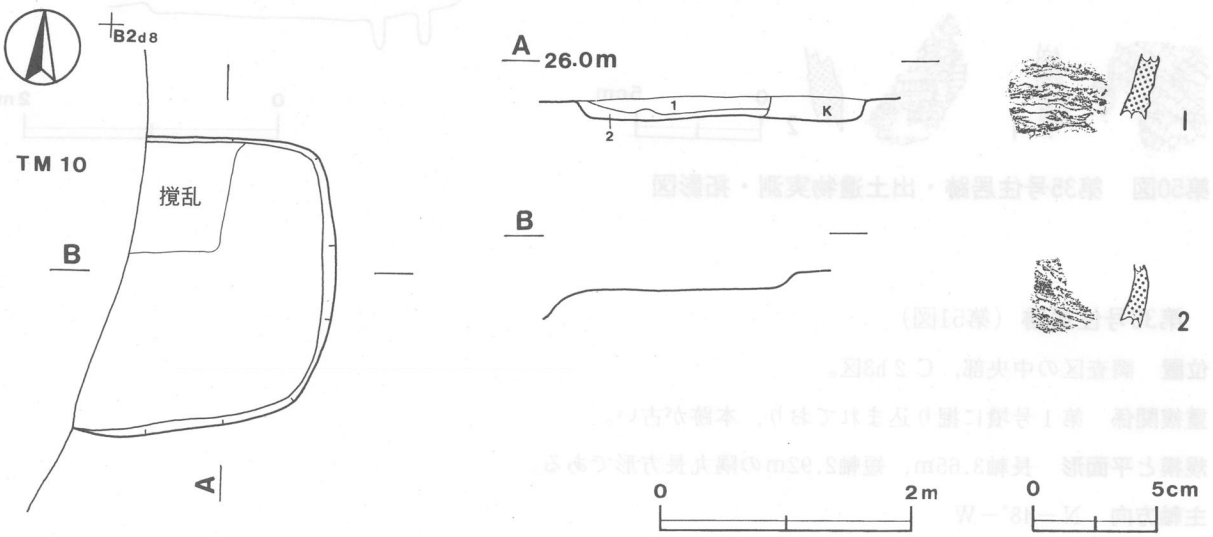
炉　確認することができなかった。

覆土　2層からなり，暗褐色土がレンズ状に堆積していることから自然堆積である。

土層解説
1　暗褐色　ローム粒子少量，炭化粒子微量
2　褐　色　ローム粒子中量

遺物　縄文土器片7点，礫5点が出土しているのみである。第49図1・2は縄文土器片の拓影図で，深鉢の胴部片である。1・2とも胎土に繊維を含み，外面に貝殻条痕文が施されている。

所見　出土遺物が少なく時期決定が難しいが，出土土器から縄文時代前期後半(黒浜式期)と思われる。



第49図　第32号住居跡・出土遺物実測・拓影図

第35号住居跡（第50図）

位置　調査区の南部，Ｃ２a6区。

規模と平面形　長軸3.20m，短軸1.98mの隅丸長方形である。中央部と南東部は撹乱されている。

主軸方向　Ｎ－80°－Ｅ

壁　壁高は18cmで，なだらかに立ち上がる。

床　ほぼ平坦であるが，西側と北東部でしか確認できなかった。

ピット　４か所（Ｐ1～Ｐ4）。Ｐ1は径20cmの円形で，深さが18cmである。Ｐ2は長径15cm，短径10cmの楕円形で深さ10cmである。Ｐ3は径18cmの円形で，深さ28cmである。配列から，Ｐ1～Ｐ3は主柱穴と思われる。Ｐ4は径16cmの円形で，深さ28cmである。性格は不明である。

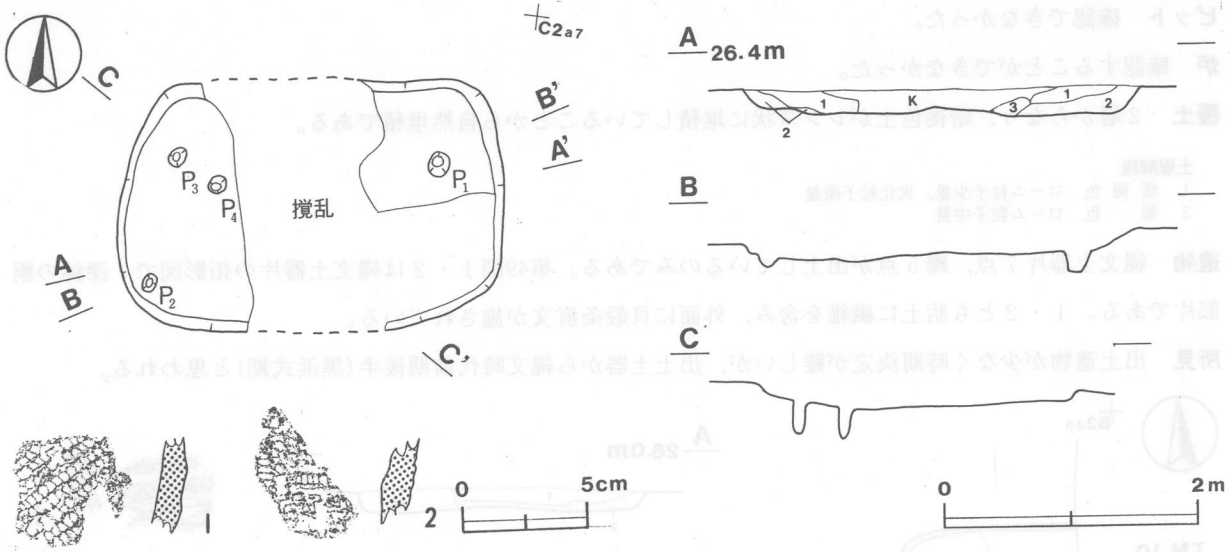
炉　中央部が撹乱されていて，確認することができなかった。

覆土　３層からなり，暗褐色土がレンズ状に堆積していることから自然堆積である。

土層解説
1　黒 褐 色　炭化粒子・ローム粒子少量
2　暗 褐 色　ローム粒子多量
3　極暗褐色　ローム粒子少量

遺物　縄文土器片11点，弥生土器片１点，礫９点が出土しているが，ほとんどが胴部片で，口縁部，底部片は微量である。第50図１・２は縄文土器片の拓影図である。１は深鉢の胴部片で，単節ＬＲの縄文が施されている。２は深鉢胴部片で，結節羽状縄文が施されている。１・２は胎土に繊維を含む土器である。

所見　本跡は出土遺物が少なく時期を決定するのが難しいが，出土土器から縄文時代前期後半の(黒浜式期)と考えられる。



第50図　第35号住居跡・出土遺物実測・拓影図

第36号住居跡（第51図）

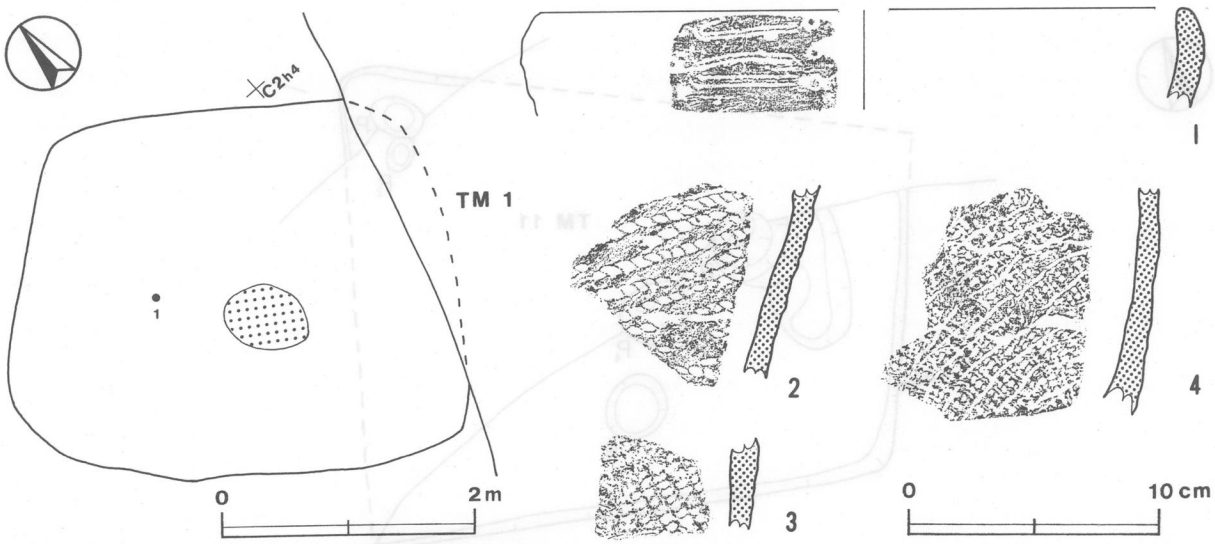
位置　調査区の中央部，Ｃ２h3区。

重複関係　第１号墳に掘り込まれており，本跡が古い。

規模と平面形　長軸3.65m，短軸2.92mの隅丸長方形である。

主軸方向　Ｎ－48°－Ｗ

壁　第1号墳に掘り込まれ，範囲を確認したのみである。



第51図　第36号住居跡・出土遺物実測・拓影図

床　ほぼ平坦である。

ピット　確認できない。

炉　中央部で暗赤褐色の長径60㎝，短径50㎝の楕円形の炉跡の範囲だけを確認する。

覆土　第１号墳の盛土で不明である。

遺物　縄文土器片14点が出土している。ほとんどが胴部片で，口縁部片は少量である。第51図１の深鉢の口縁部は，中央部北西寄りの床面から出土している。２～４は縄文土器片の拓影図で，深鉢の胴部片である。２は太い絡条体による縄文が施されている。３は結節羽状縄文が施されている。４は附加条縄文が施されている。１～４は胎土に繊維を含む土器である。

所見　本跡の時期は，床面から出土している出土土器から縄文時代前期後半(黒浜式期)と思われる。

第36号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(㎝)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第51図	深　鉢	A〔25.6〕	口縁部から胴部にかけての破片。胴部から内彎しながら立ち上がり，口縁	雲母	P68　5％
1	縄文土器	B(4.0)	部に至る。口縁部には半截竹管による楕円文と円形竹管文を施文している。	にぶい褐色	中央部床面
			内面にはヘラミガキが施されている。内・外面繊維脱痕あり。	普通	

第38号住居跡（第52図）

位置　調査区の中央部，Ｂ２g6区。

重複関係　中央部を東西に第11号墳の周溝に掘り込まれているので，本跡が古い。

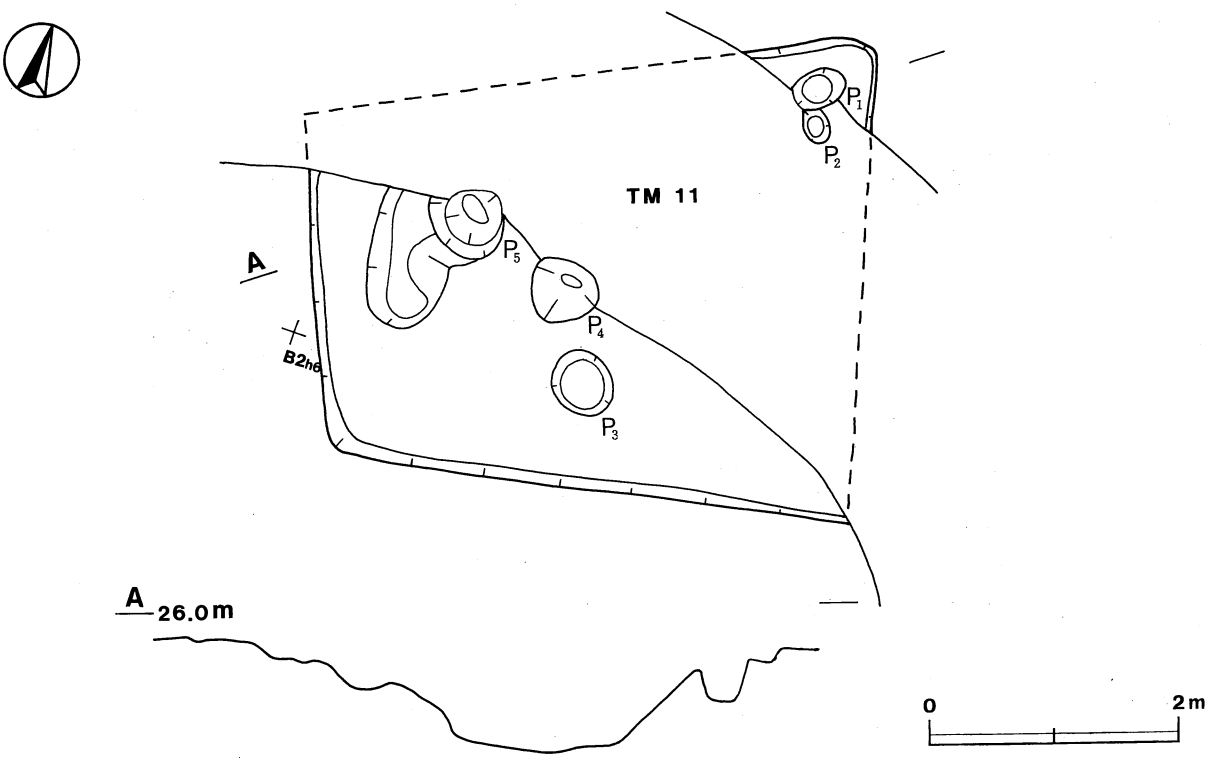
規模と平面形　長軸〔4.40〕m，短軸〔3.80〕mの不整台形と推定される。

主軸方向　Ｎ－70°－Ｅ

壁　壁高は15㎝で，外傾して立ち上がる。

床　確認できる範囲ではほぼ平坦である。

ピット　５か所（Ｐ1～Ｐ5）。Ｐ1は長径42㎝，短径30㎝の楕円形で，深さ35㎝で，主柱穴と思われる。Ｐ2～Ｐ5は長径30～60㎝，短径20～45㎝の円形や楕円形で，深さが10～40㎝である。いずれも性格は不明である。



第52図　第38号住居跡実測図

炉　確認することはできなかった。

覆土　第11号墳の周溝の掘り込みで確認することができなかった。

遺物　本跡に伴う遺物は出土していない。

所見　出土遺物がなく，明確な時期を決定することができないが，第11号墳との重複関係から古墳時代以前の縄文時代と思われる。

第39号住居跡（第53図）

位置　調査区の中央部，Ｂ２ｊ6区。

重複関係　本跡の上に，第11号墳による盛土がなされており，本跡が古い。北壁と南壁の一部は撹乱を受けている。

規模と平面形　長軸〔3.35〕ｍ，短軸2.43ｍの隅丸長方形と推定される。

主軸方向　Ｎ－7°－Ｅ

壁　壁高は15～18㎝で，わずかに外傾して立ち上がる。

床　ほぼ平坦であるが，炉周辺がわずかにくぼんでいる。

ピット　２か所（Ｐ1・Ｐ2）。Ｐ1は径30㎝の円形で，深さ12㎝である。Ｐ2は長径25㎝，短径20㎝の楕円形で，深さ28㎝である。配列から主柱穴と思われる。

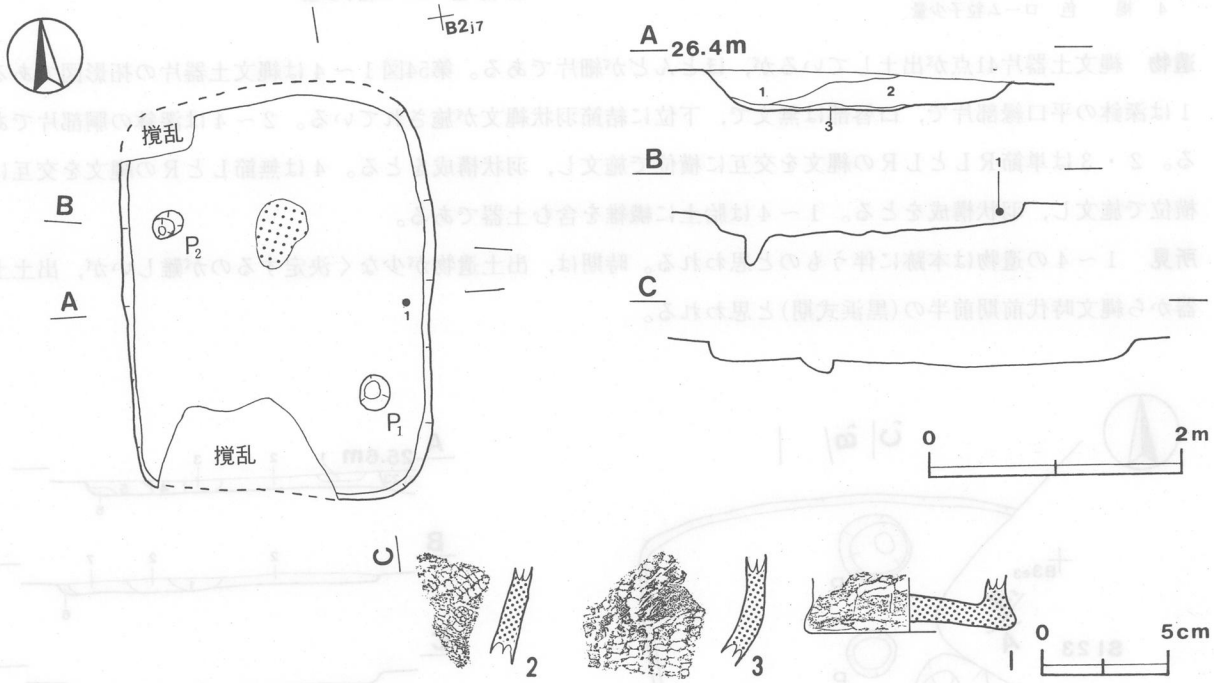
炉　中央より北側に位置し，長径55㎝，短径40㎝の楕円形で，床面を数㎝掘りくぼめた地床炉である。炉床は赤変硬化している。

覆土　3層からなり，ローム粒子を含む褐色土がレンズ状に堆積していることから自然堆積である。

土層解説
1　黒 褐 色　ローム粒子少量，炭化粒子微量
2　暗 褐 色　ローム粒子中量，焼土粒子微量
3　褐　　色　ローム粒子多量

遺物　撹乱されているが，中央から縄文土器片14点，土師器片１点，剝片４点が出土している。第53図１の深鉢は東壁中央の覆土下層から出土している。２・３は，縄文土器片の拓影図で，深鉢の胴部片である。２は羽状縄文が施されている。３は単節ＬＲの縄文が施されている。１～３は胎土に繊維を含む土器である。

所見　本跡の時期は，出土土器から縄文時代前期後半(黒浜式期)と考えられる。



第53図　第39号住居跡・出土遺物実測・拓影図

第39号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第53図	深　鉢	B (2.2)	胴部下位から底部にかけての破片。胴部は底部からわずかに外反して立ち	石英・長石	P70　5％
1	縄文土器	C〔8.4〕	上がる。胴部には複節の縄文を施文している。底部は張り出し気味で上げ底である。底部にはヘラミガキが施されている。内面繊維脱痕あり。	橙色 普通	南壁中央覆土下層

第43号住居跡（第54図）

位置　調査区の東部，Ｂ３e3区。

重複関係　第23号住居跡に掘り込まれており，本跡が古い。

規模と平面形　長軸(3.30)ｍ，短軸2.50ｍで隅丸長方形と推定される。

主軸方向　Ｎ－88°－Ｅ

壁　壁高は10㎝で，外傾して立ち上がる。

床　ほぼ平坦である。

ピット　5か所（P1～P5）。P1は径30cmの円形で，深さが15cmである。位置から主柱穴と思われる。P2は長径35cm，短径25cmの楕円形で，深さ25cmである。P3は長径75cm，短径60cmの楕円形で，深さ55cmである。P4は径40cmの円形で，深さ15cmである。P5は径55cmの円形で，深さ25cmである。性格は不明である。

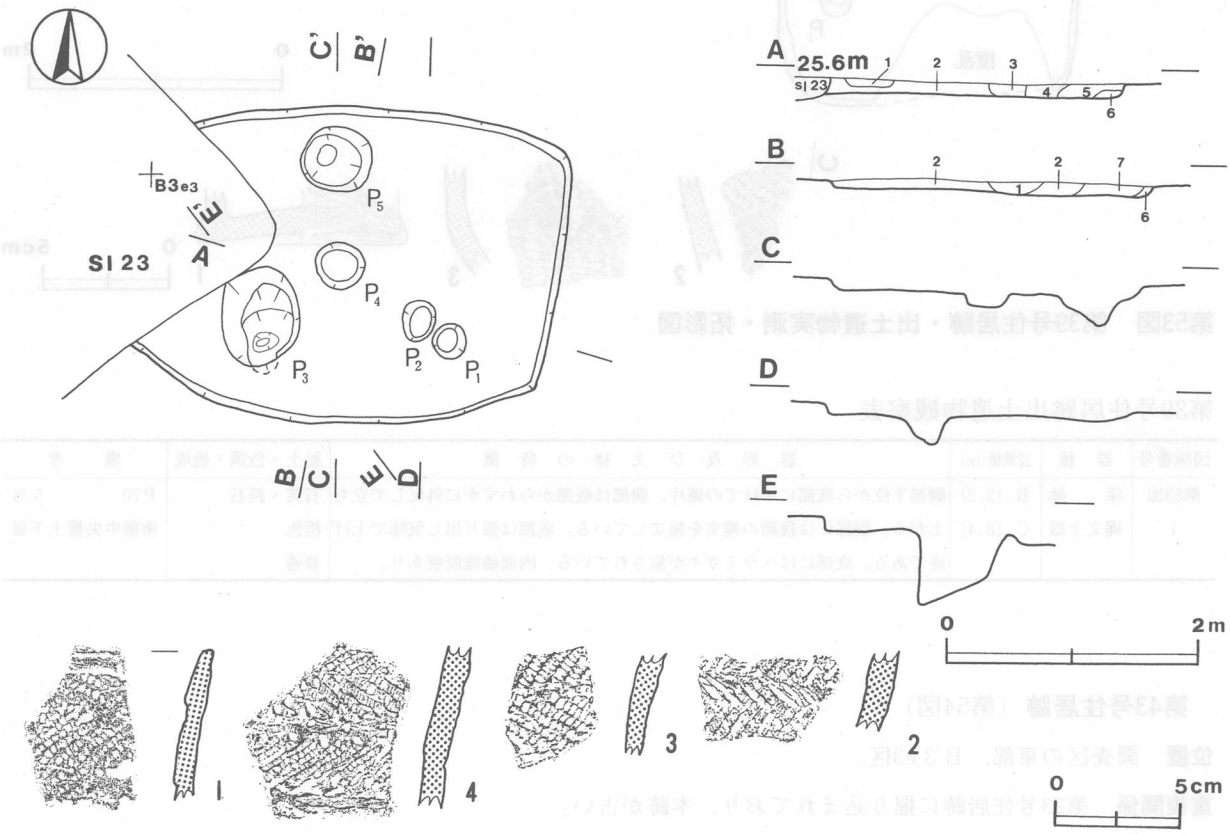
炉　確認することができなかった。

覆土　7層からなり，不均一な堆積をしていることから，人為堆積と思われる。

土層解説
1　暗褐色　ローム粒子微量
2　暗褐色　ローム粒子少量
3　褐　色　ローム粒子中量
4　褐　色　ローム粒子少量
5　褐　色　ローム粒子少量，ローム小ブロック極微量
6　褐　色　ローム小ブロック少量
7　黒褐色　ローム粒子少量

遺物　縄文土器片41点が出土しているが，ほとんどが細片である。第54図1～4は縄文土器片の拓影図である。1は深鉢の平口縁部片で，口唇部は無文で，下位に結節羽状縄文が施されている。2～4は深鉢の胴部片である。2・3は単節RLとLRの縄文を交互に横位で施文し，羽状構成をとる。4は無節LとRの縄文を交互に横位で施文し，羽状構成をとる。1～4は胎土に繊維を含む土器である。

所見　1～4の遺物は本跡に伴うものと思われる。時期は，出土遺物が少なく決定するのが難しいが，出土土器から縄文時代前期前半の(黒浜式期)と思われる。



第54図　第43号住居跡・出土遺物実測・拓影図

第44号住居跡（第55図）

位置　調査区の南西部，B3e4区。

重複関係　本跡が，第1号陥し穴を掘り込んでおり，本跡が新しい。

規模と平面形　長軸3.56m，短軸2.68mの隅丸長方形である。

主軸方向　N－16°－E

壁　壁高は10cmで，外傾して立ち上がる。

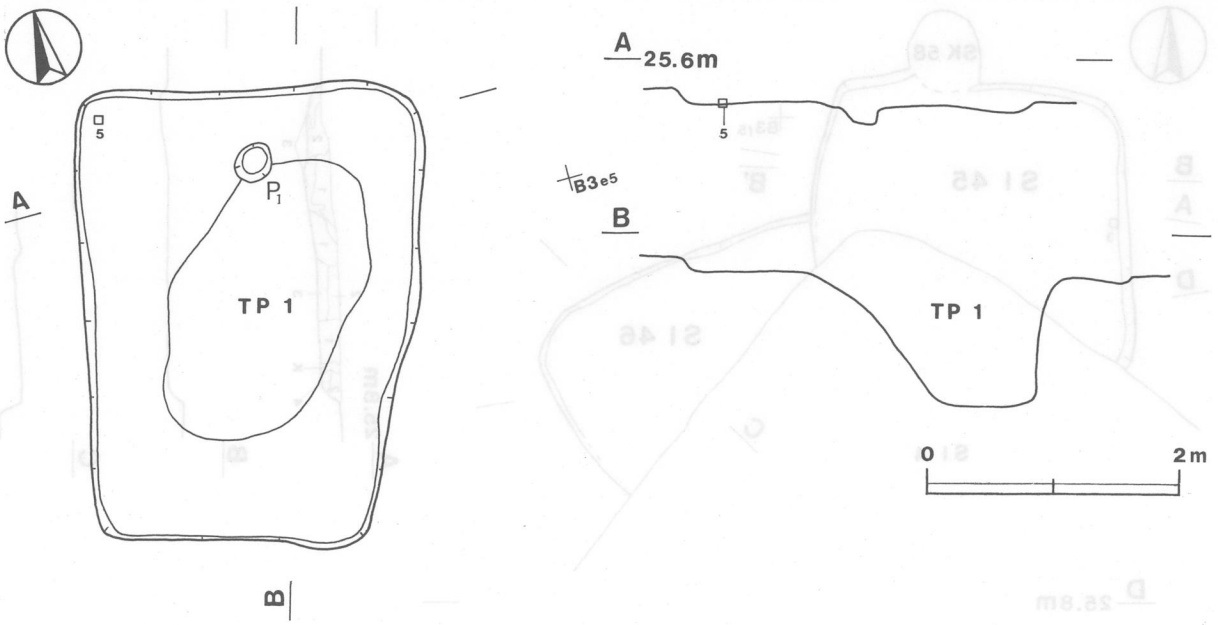
床　ほぼ平坦であるが，北東部にやや傾斜している。硬化面は確認できなかった。

ピット　P1は長径36cm，短径28cmの楕円形で，深さ18cmである。主柱穴と思われる。他は確認することができず不明である。

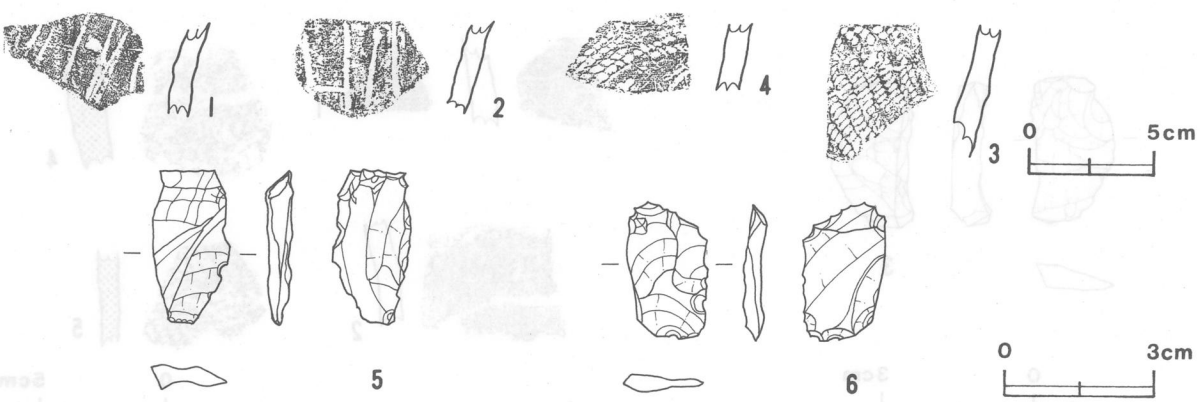
炉　確認することができなかった。

遺物　縄文土器片45点，須恵器片１点，剥片７点が出土している。縄文土器片のほとんどが胴部細片で，口縁部は少量である。第56図１～４は，縄文土器片の拓影図で，深鉢の胴部片である。１・２は棒状工具による沈線文が施されている。３は内面に縦位のヘラミガキを施し，外面に横位の単節ＲＬの縄文が施されている。４は単節ＬＲの縄文が施されている。４は縄文時代前期(黒浜式期)に比定されると思われる。５は剥片で，北西コーナーの床面から出土し，６の剥片は覆土中から出土している。

所見　床面が露出した状態で確認されたので，覆土の堆積状況は不明である。出土遺物が少なく時期を決定することが難しいが，１～３の土器から縄文時代前期後半(粟島台式期)と思われる。



第55図　第44号住居跡実測図



第56図　第44号住居跡出土遺物実測・拓影図

第44号住居跡出土石製品観察表

図版番号	種　別	計　測　値				石　質	出　土　地　点	備　　考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第56図5	剝　片	3.1	1.5	0.6	2.9	チャート	北西コーナー部床面	Q103
6	剝　片	2.8	1.6	0.5	2.1	チャート	覆土中	Q104

第45号住居跡（第57図）

位置　調査区の南西部，Ｂ３f4区。

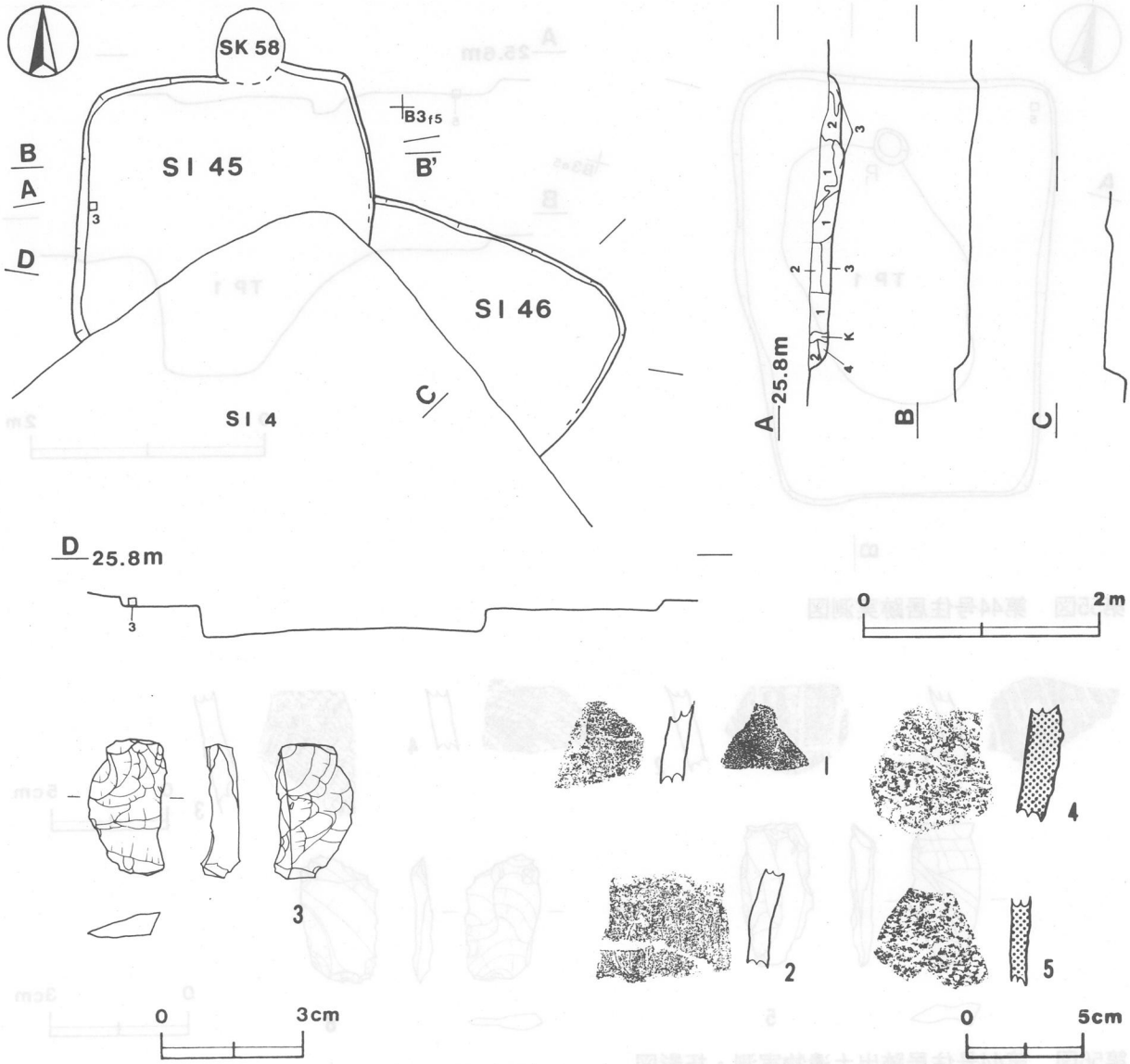
重複関係　第４号住居跡，第58号土坑に掘り込まれており，本跡が古い。また，本跡が，第46号住居跡を掘り込んでいる。

規模と平面形　長軸2.55m，短軸(2.10)ｍで隅丸長方形と推定される。

主軸方向　Ｎ－89°－Ｗ

壁　壁高は15～20㎝で，外傾して立ち上がる。

床　ほぼ平坦であるが，東側にやや傾斜している。



第57図　第45・46号住居跡・出土遺物実測・拓影図

ピット　確認することができなかった。

炉　第４号住居跡に掘り込まれていると思われ，確認できなかった。

覆土　４層からなり，不均一な堆積をしていることから人為堆積であると思われる。

土層解説
1　暗褐色　ローム粒子少量
2　褐　　色　ローム粒子微量
3　褐　　色　ローム粒子中量
4　褐　　色　ローム粒子微量

遺物　出土遺物は少なく，縄文土器片８点，剝片１点が出土しているのみである。第57図１・２は，縄文土器片の拓影図で，深鉢の胴部片である。１は内面を縦位のミガキが，外面に結節縄文が施されている。２は外面縦位のミガキが施されている。３の剝片は西壁中央部の覆土中層から出土している。

所見　本跡は，出土遺物が少なく時期を決定することが難しいが，重複関係と１・２の出土土器から縄文時代前期後半(粟島台式期)と思われる。

第45号住居跡出土石製品観察表

図版番号	種別	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第57図３	剝片	2.9	1.7	0.9	3.5	チャート	西壁中央部覆土中層	Q105

第46号住居跡（第57図）

位置　調査区の南部，Ｂ３f5区。

重複関係　第４・45号住居跡に掘り込まれており，本跡が古い。

規模と平面形　長軸(2.40)ｍ，短軸(1.35)ｍで，平面形は不明である。

壁　壁高は５cmで，外傾して立ち上がる。

床　ほぼ平坦である。

ピット　確認できなかった。

遺物　遺物は少なく，縄文土器片４点が出土しているのみである。ほとんどが胴部の細片である。第57図４・５は，縄文土器片の拓影図で，深鉢の胴部片である。４は結節文が施され，縄文時代前期(黒浜式期)に比定されると思われる。５は羽状縄文が施され，縄文時代前期(花積下層式期)に比定されると思われる。４・５は胎土に繊維を含む土器である。

所見　本跡は，床面がほぼ露出した状態で検出されたため，炉や覆土の堆積状況は不明である。時期は，重複関係から縄文時代前期前半(黒浜式期)以前と思われる。

第47号住居跡（第58図）

位置　調査区の中央部，Ｃ３b3区。

重複関係　第２号溝に掘り込まれており，本跡が古い。

規模と平面形　長軸3.25m，短軸2.76mの隅丸長方形である。

主軸方向　Ｎ－62°－Ｗ

壁　壁高は15cmで，わずかに外傾して立ち上がる。

床　ほぼ平坦であり，炉を中心にやや硬化した面がある。

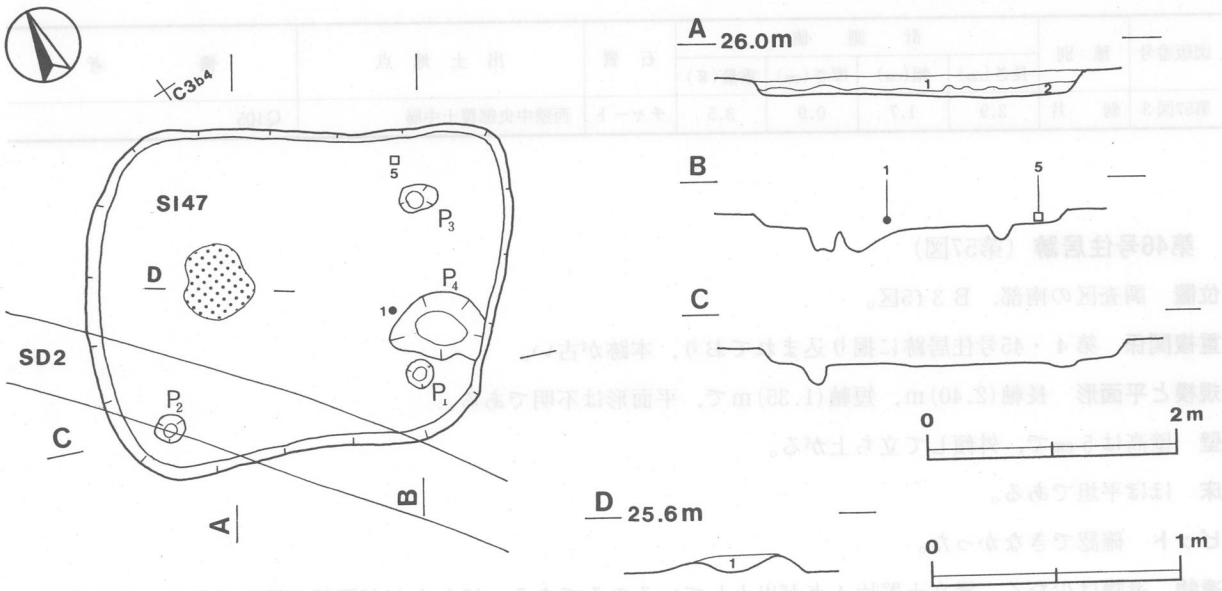
ピット　4か所（P1～P4）。P1は長径25cm，短径20cmの楕円形で，深さ20cmである。P2は径20cmの円形で，深さ5cmである。P3は長径35cm，短径25cmの楕円形で，深さ14cmである。配列からいずれも主柱穴と思われる。P4は長径80cm，短径55cmの不整楕円形で，深さ20cmである。性格は不明である。

炉　中央からやや北寄りに位置し，径55cmの不整円形で，床面を7cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床は，火熱を受け赤変している。

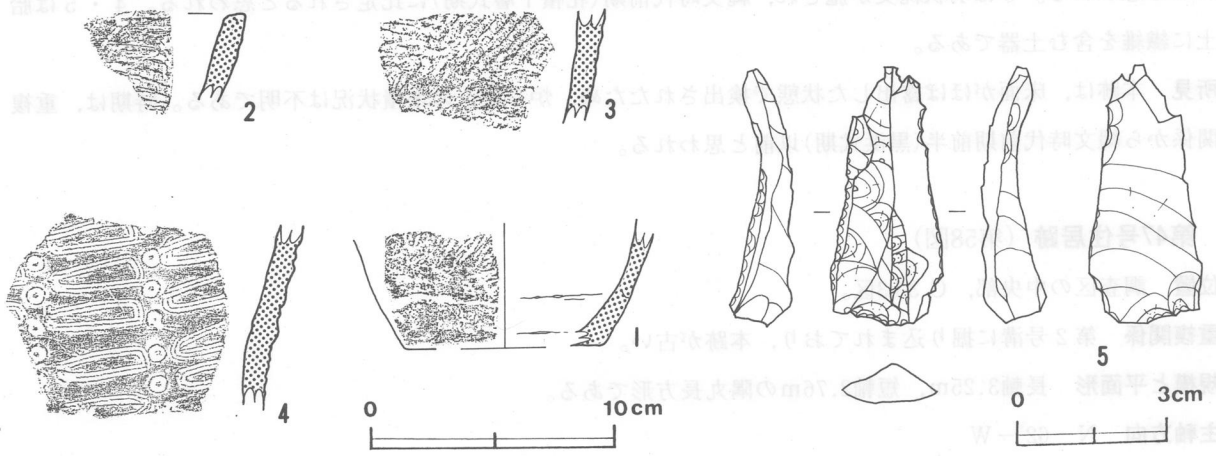
炉土層解説
1　黒 褐 色　焼土粒子少量

覆土　木の根の撹乱を受けているが，2層からなりレンズ状に堆積していることから自然堆積である。

土層解説
1　暗 褐 色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
2　褐　　色　ローム小ブロック少量，焼土粒子極微量



第58図　第47号住居跡実測図



第59図　第47号住居跡出土遺物実測・拓影図

遺物　縄文土器片16点，土師器片３点，石器１点，礫５点が出土している。胴部の細片がほとんどで口縁部・底部片は微量である。第59図１の深鉢は，中央部東寄りの床面から出土している。２～４は，縄文土器片の拓影図である。２は深鉢の口縁部片で，口唇部は無文で，無節Ｒの縄文が施されている。３・４は深鉢の胴部片である。３は無節Ｌの縄文が施されている。４は半截竹管による楕円区画文と円形竹管文が施されている。５はナイフ形石器で北部の床面から出土している。

所見　遺物が少なく時期を決定するのは難しいが，出土土器から縄文時代前期前半(黒浜式期)と考えられる。

第47号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第59図	深　鉢	B (5.0)	胴部下位から底部にかけての破片。胴部は底部からわずかに内彎気味に立	長石・赤色粒子	P71　5％
1	縄文土器	C 〔8.0〕	ち上がる。胴部には半截竹管による沈線を施文されている。底部は平底で，	明赤褐色	中央部床面
			ヘラミガキが施されている。内面にわずかに繊維脱痕あり。	普通	

石製品観察表

図版番号	種　別	計測値				石　質	出土地点	備　考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
5	ナイフ形石器	5.2	2.2	1.2	9.1	安山岩	東部床面	Q106

(2)　竪穴状遺構

今回の調査で調査区中央部から３基の竪穴状遺構が確認された。当初，第22・25・26号竪穴住居跡として調査した遺構については，炉等の内部施設が伴わないことや踏み固められた床面が確認されないことから，住居を目的とした竪穴住居跡と区別できる。これらの遺構を第１～３号竪穴状遺構と改称した。以下，検出された遺構の特徴と出土遺物について記載する。

第１号竪穴状遺構（第60図）

位置　調査区の東部，Ｂ３ｆ2区。

重複関係　第３号竪穴状遺構に掘り込まれており，本跡が古い。

規模と平面形　長軸3.35m，短軸2.09mの隅丸長方形である。

主軸方向　Ｎ－45°－Ｅ

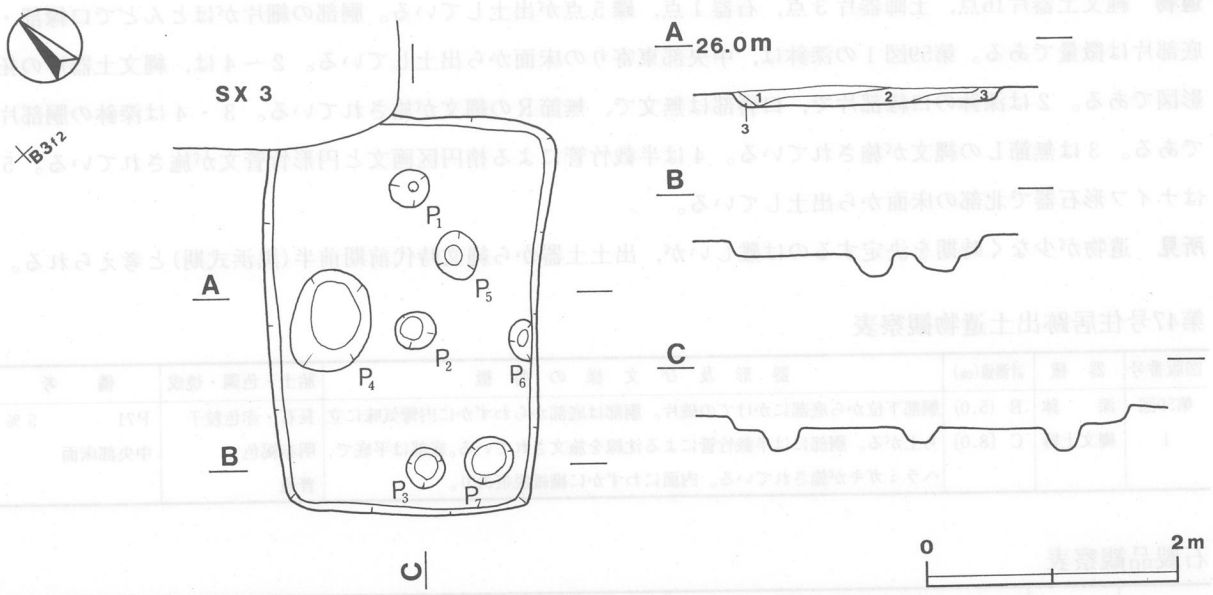
壁　壁高は12cmで，外傾して立ち上がる。

床　ほぼ平坦である。

ピット　７か所（Ｐ1～Ｐ7)。Ｐ1～Ｐ3は径30～35cmの円形で，深さ16～21cmである。配列から主柱穴と思われる。Ｐ4は長径85cm，短径65cmの楕円形で，深さ26cmである。Ｐ5～Ｐ7は長径35～45cm，短径20～40cmの円形や楕円形で，深さ20～24cmである。いずれも性格は不明である。

覆土　３層からなり，ローム混じりの暗褐色土がレンズ状に堆積していることから自然堆積と思われる。

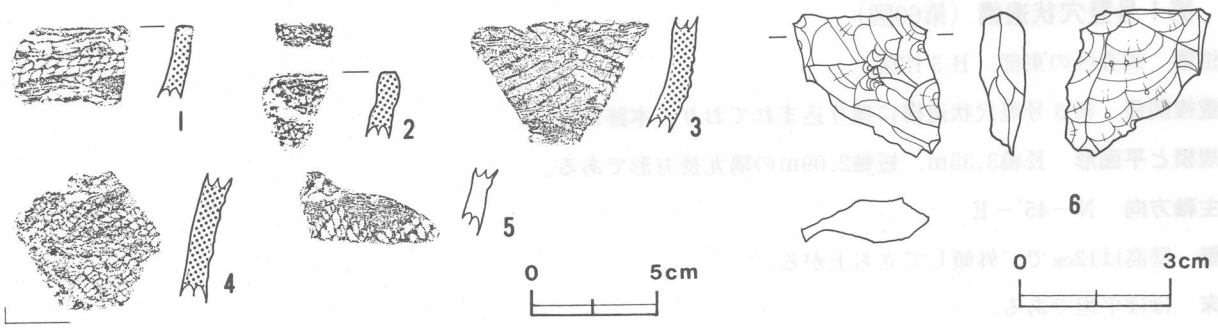
土層解説
1　極暗褐色　ローム粒子中量，炭化粒子微量
2　暗 褐 色　ローム小ブロック・ローム粒子少量
3　褐　　色　ローム小ブロック少量



第60図　第１号竪穴状遺構実測図

遺物　遺物が少なく，縄文土器片25点，剝片２点，礫３点が出土しているのみである。土器はほとんどが胴部の細片である。第61図１～５は，縄文土器片の拓影図である。１は深鉢の口縁部片で，口唇部に貝殻条痕文を施し，口縁部下位に無節Ｒの２段の圧痕文が施されている。２は片口付深鉢の片口部片で，口唇部と外面に縄文が施文されている。３～５は深鉢の胴部片である。３は太めの無節Ｌの縄文が縦横位に施されている。４は結節羽状縄文が施されている。いずれも縄文時代前期(黒浜式期)に比定されると思われる。５は単節ＬＲの縄文が施され，縄文時代前期(粟島台式期)に比定されると思われる。６の剝片は覆土中から出土している。

所見　本跡の時期は，重複関係と１～４の遺物から縄文時代前期前半(黒浜式期)と思われる。



第61図　第１号竪穴状遺構出土遺物実測・拓影図

第１号竪穴状遺構出土石製品観察表

図版番号	種別	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第61図６	剝片	2.9	2.9	0.9	5.2	黒曜石	覆土中	Q108

第２号竪穴状遺構（第62図）

位置　調査区の南部，Ｃ２e8区。

重複関係　第12号墳に掘り込まれており，本跡が古い。

規模と平面形　長軸3.26m，短軸2.30mの隅丸長方形である。

主軸方向　Ｎ－30°－Ｅ

壁　壁高は８㎝で，緩やかに立ち上がる。

床　ほぼ平坦である。

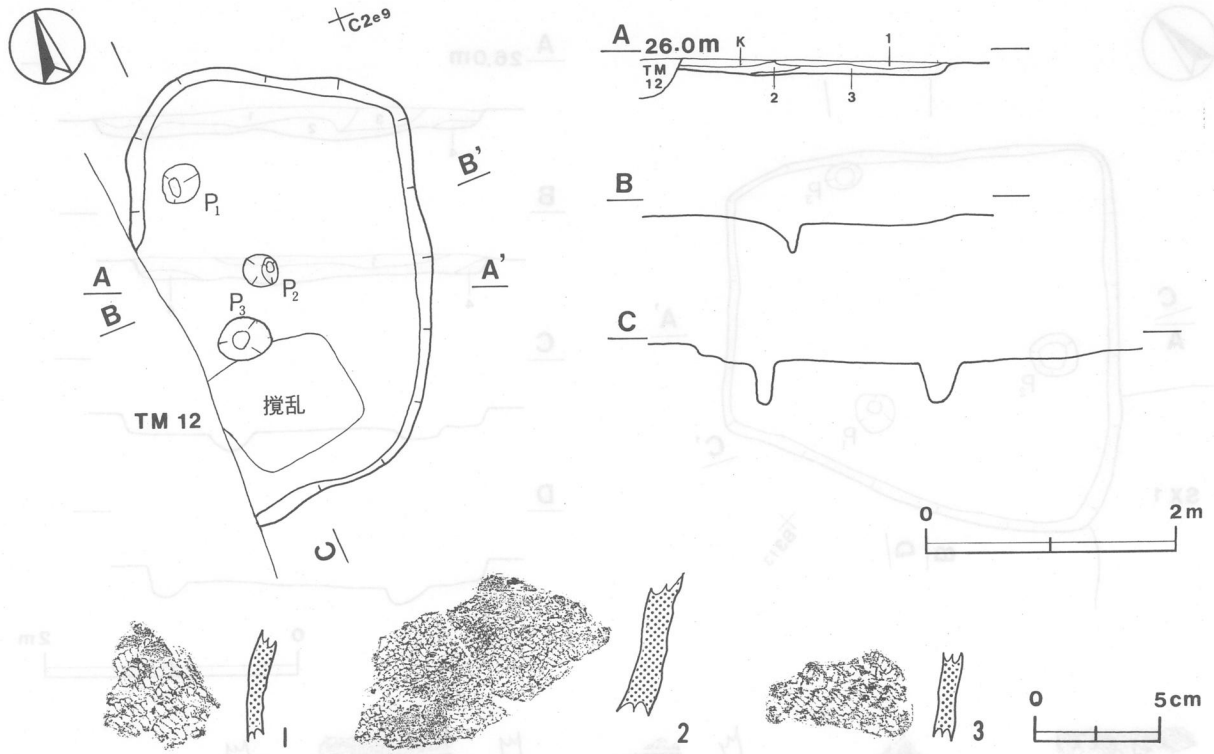
ピット　３か所（Ｐ1～Ｐ3）。Ｐ1は径30㎝の円形で，深さ36㎝である。Ｐ2は長径33㎝，短径25㎝の楕円形で，深さ24㎝である。Ｐ3は長径45㎝，短径35㎝の楕円形で，深さ33㎝である。いずれも性格は不明である。

覆土　３層からなり，暗褐色土が下層に堆積していることから人為堆積と思われる。

土層解説
1　極暗褐色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子極微量
2　黒 褐 色　ローム粒子微量，焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック極微量
3　暗 褐 色　ローム小ブロック少量

遺物　遺物が少なく，縄文土器片17点，貝片２点が出土しているのみである。土器はほとんどが胴部の細片である。第62図１～３は，縄文土器片の拓影図で，深鉢の胴部片である。１・２は単節ＬＲの縄文が施され，３は羽状縄文が施されている。１～３は胎土に繊維を含む土器である。いずれも縄文時代前期（黒浜式期）に比定されると思われる。

所見　本跡の時期は，重複関係と１～３の土器から縄文時代前期前半（黒浜式期）と思われる。



第62図　第２号竪穴状遺構・出土遺物実測・拓影図

第３号竪穴状遺構（第63図）

位置　調査区の東部，Ｂ３f2区。

重複関係　第１号竪穴状遺構を掘り込んでおり，本跡が新しい。

規模と平面形　一辺が3.20ｍの不整方形である。

壁　壁高は15㎝で，外傾して立ち上がる。

床　ほぼ平坦である。

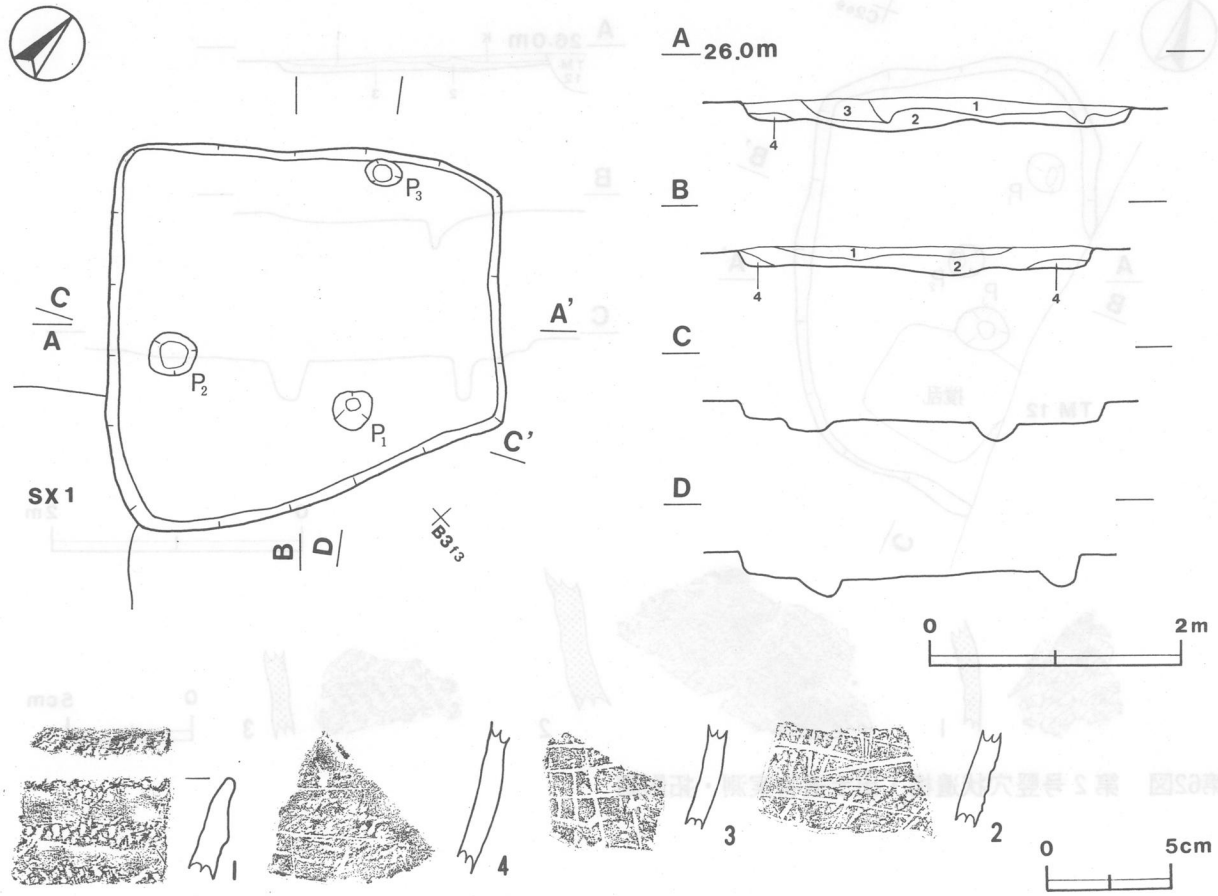
ピット　３か所（Ｐ1～Ｐ3）。Ｐ1～Ｐ3は長径30～45㎝，短径20～45㎝の円形や楕円形で，深さが11～16㎝である。いずれも性格は不明である。

覆土　４層からなり，ロームを含む暗褐色土がレンズ状に堆積していることから自然堆積である。

土層解説
1　黒 褐 色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
2　暗 褐 色　ローム粒子中量
3　暗 褐 色　ローム粒子中量，ローム大ブロック・焼土粒子・炭化粒子極微量
4　褐　　色　ローム粒子多量，ローム中ブロック中量

遺物　縄文土器片55点，土師器片７点，陶器片１点，礫13点が出土している。土器はほとんどが胴部片で，口縁部，底部片は極微量である。第63図１～４は縄文土器片の拓影図である。１は深鉢の口縁部片で，口唇部に縄文を施文し，外面に単節ＬＲの縄文が施されている。２～４は深鉢の胴部片である。２～４はヘラ状工具により格子目文が施されている。

所見　本跡から土師器片・陶器片が出土しているが，後世の撹乱による混入と思われる。１～４の遺物は本跡に伴うものと思われる。時期は，出土土器の文様の特徴から縄文時代前期後半（粟島台式期）と考えられる。



第63図　第３号竪穴状遺構・出土遺物実測・拓影図

(3) 陥 し 穴

第１号陥し穴（第64図）

位置　調査区の東部，Ｂ３e4区。

重複関係　第44号住居跡に掘り込まれており，本跡が古い。

規模と平面形　長径2.42m，短径1.24mの楕円形で，深さ116cmである。

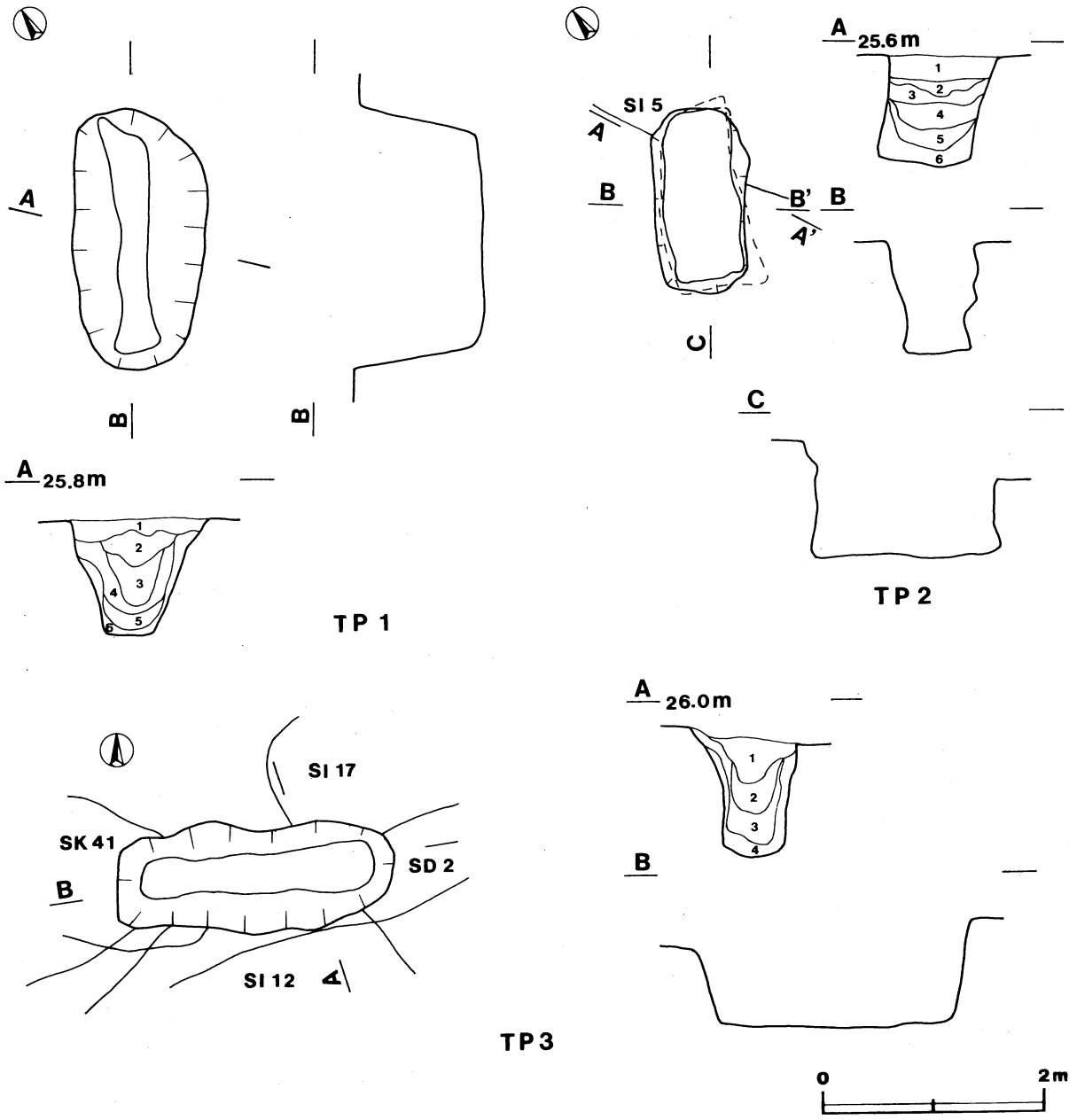
長径方向　Ｎ－42°－Ｅ

壁面　ほぼ垂直に立ち上がり，短径方向の断面形は「Ｖ」字形である。

底面　平坦である。

覆土　６層からなる自然堆積である。

土層解説
1　極暗褐色　ローム粒子微量，炭化粒子極微量
2　黒　　色　ローム粒子微量，焼土粒子極微量
3　黒 褐 色　ローム粒子極微量
4　黒 褐 色　ローム小ブロック微量
5　暗 褐 色　ローム小ブロック微量
6　褐　　色　ローム粒子中量



第64図　第１・２・３号陥し穴実測図

遺物　縄文土器片が覆土中から48点が出土している。第65図１～５は縄文土器片の拓影図である。１は深鉢の口縁部片で，口唇部にヘラ状工具によってキザミを施し，外面は多条ＬＲとＲＬの縄文を交互に横位で施文し，羽状構成をとる。２～５は深鉢の胴部片である。２は無節ＲとＬの縄文を交互に横位で施文し，羽状構成をとる。３は撚糸文が施されている。１～３は胎土に繊維を含み縄文時代前期(黒浜式期)に比定されると思われる。４はヘラ状工具による沈線を施文している。縄文時代前期の(浮島Ⅱ式期)に比定されると思われる。５は貝殻条痕文が施文されている。縄文時代早期の(田戸下層式期)に比定されると思われる。

所見　本跡は，遺構の形態から陥し穴と思われる。時期は，出土遺物から縄文時代前期後半(粟島台式期)以前と思われる。

第65図　第１号陥し穴出土遺物実測・拓影図

第２号陥し穴（第64図）

位置　調査区の東部，Ｂ３e5区。

重複関係　第５号住居跡に掘り込まれている。

規模と平面形　長径1.68m，短径0.84mの長方形で，深さ106cmである。

長軸方向　Ｎ－42°－Ｅ

壁面　ほぼ垂直に立ち上がるが，長軸方向の断面形は袋状を呈している。

底面　凹凸である。

覆土　６層からなる自然堆積である。

土層解説
1　褐　　色　ローム粒子多量，ローム中ブロック中量
2　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，炭化粒子微量
3　黒褐色　ローム粒子少量，炭化粒子微量
4　黒褐色　ローム小ブロック少量，ローム粒子微量
5　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子中量
6　褐　　色　ローム小ブロック・ローム粒子中量

遺物　本跡に伴う遺物は出土していない。

所見　本跡は，遺構の形態から陥し穴と思われる。時期は，重複関係から縄文時代前期前半の(花積下層式期)以前と思われる。

第３号陥し穴（第64図）

位置　調査区の中央部，Ｃ３a1区。

重複関係　第２号溝，第12・17号住居跡，第41号土坑に掘り込まれている。

規模と平面形　長径2.54m，短径0.95mの長楕円形で，深さ98cmである。

長径方向　Ｎ－86°－Ｅ

壁面　ほぼ垂直に立ち上がり，短径方向の断面形は「Ｕ」字形である。

底面　平坦である。

覆土　4層からなる自然堆積である。

土層解説
1　黒 褐 色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
2　極暗褐色　ローム粒子少量
3　黒 褐 色　ローム粒子中量，ローム大・小ブロック微量
4　暗 褐 色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，ローム大ブロック微量

遺物　縄文土器片10点が出土しているが，いずれも胎土に繊維を含む土器細片である。

所見　本跡は，遺構の形態から陥し穴と思われる。時期は，出土遺物から縄文時代前期(黒浜式期)と思われる。

(4) 土　　坑

第10号土坑（第66図）

位置　調査区の東部，Ｂ３h3区。

重複関係　西側を第７号住居跡に掘り込まれている。

規模と平面形　長径2.10m，短径1.60mの不整楕円形で，深さ50cmである。

長径方向　Ｎ－86°－Ｗ

壁面　外傾して立ち上がる。

底面　凹凸がある。

覆土　９層からなる人為堆積である。

土層解説
1　極暗赤褐色　焼土小ブロック・焼土粒子多量，炭化粒子少量
2　黒　褐　色　焼土粒子・炭化粒子中量，焼土小ブロック少量
3　黒　褐　色　焼土粒子・ローム粒子少量
4　黒　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子少量
5　極 暗 褐 色　ローム粒子少量，焼土粒子微量
6　黒　褐　色　ローム粒子少量，焼土粒子極微量
7　暗　褐　色　ローム粒子中量
8　褐　　色　ローム粒子多量
9　暗　褐　色　ローム粒子少量

遺物　縄文土器片41点，石器１点が出土している。第67図１～３は縄文土器片の拓影図である。１・２は深鉢の波状口縁部片で貝殻条痕文が施されている。１・２は同一個体と思われる。３は深鉢の平口縁部片で，口唇部を無文とし，その下位に縦位の単節ＲＬの縄文を施している。14の打製石斧は覆土中から出土している。

所見　本跡の性格は不明である。時期は，出土遺物から縄文時代前期前半(黒浜式期)と思われる。

第21号土坑（第66図）

位置　調査区の東部，Ｂ３e4区。

規模と平面形　径1.60mのほぼ円形で，深さ13cmである。

壁面　外傾して立ち上がる。

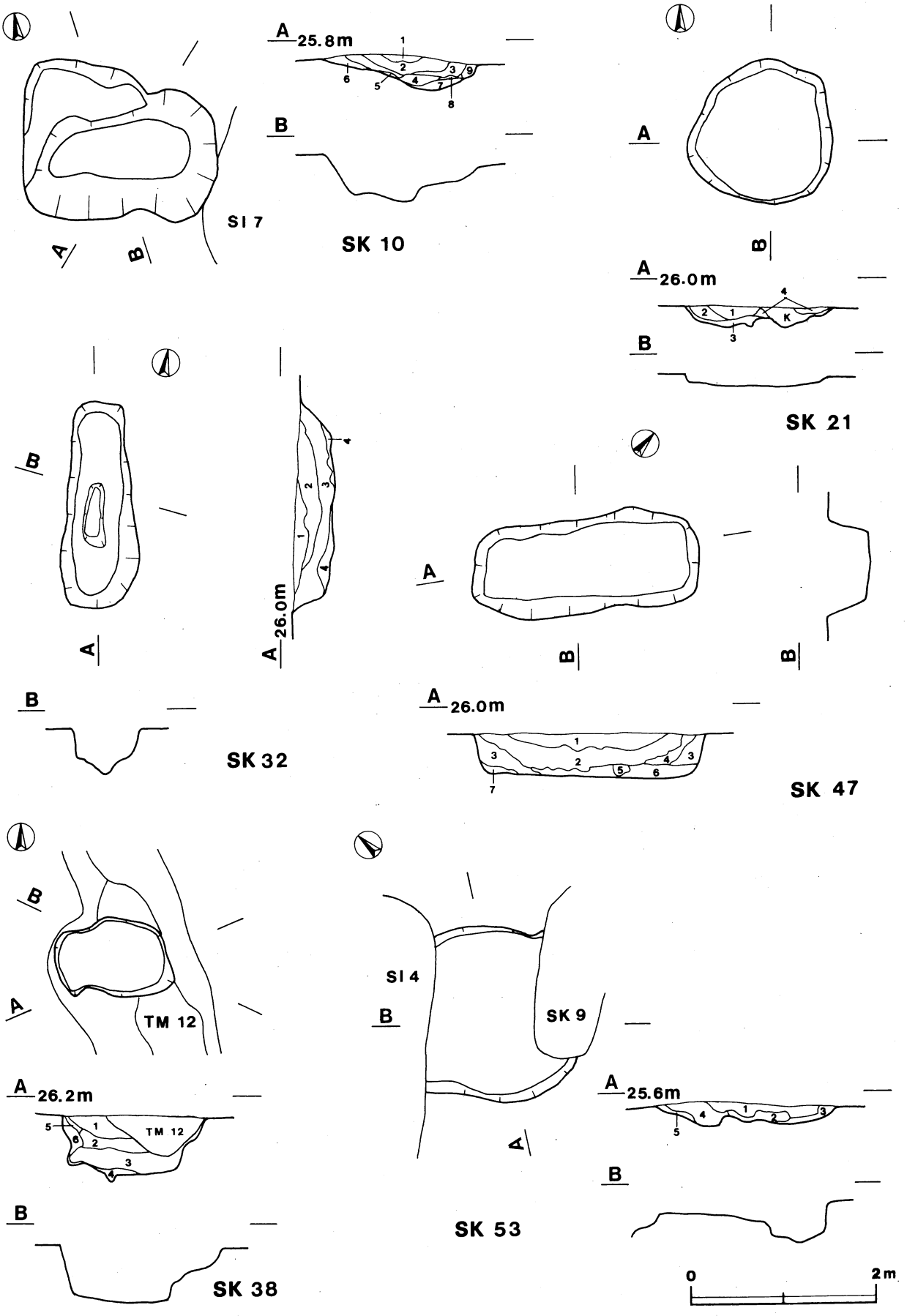
底面　平坦である。

覆土　４層からなる自然堆積である。中央部は木の根による撹乱を受けている。

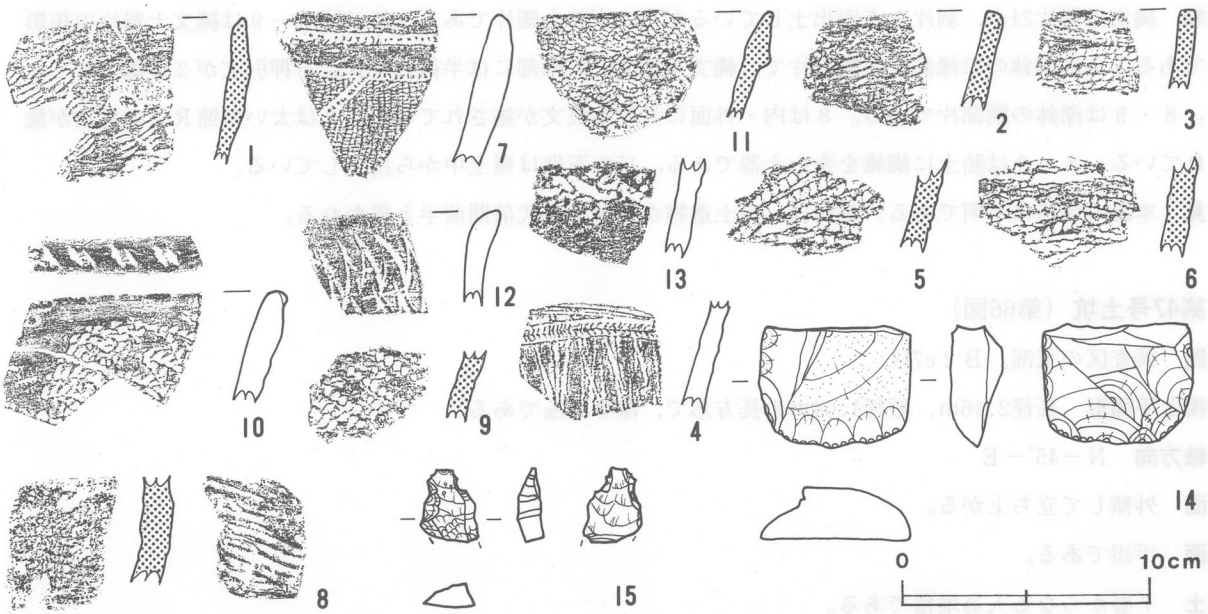
土層解説
1　黒 褐 色　ローム粒子少量
2　暗 褐 色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
3　褐　　色　ローム粒子多量
4　暗 褐 色　ローム粒子中量

遺物　縄文土器片10点が出土しているが，いずれも細片である。第67図４の深鉢の胴部片は，内面は縦位のミガキが施され，外面は縦位の撚糸文を地文に上位に半截竹管による押引き刺突文が施されている。

所見　本跡の性格は不明である。時期は，出土遺物から縄文時代前期後半(興津式期)と思われる。



第66図　第10・21・32・38・47・53号土坑実測図



第67図　第10・21・32・38・47・53号土坑出土遺物実測・拓影図

第32号土坑（第66図）

位置　調査区の東部，Ｂ２h0区。

規模と平面形　長径2.35m，短径0.74mの楕円形で，深さ45cmである。

長径方向　Ｎ－22°－Ｗ

壁面　ほぼ垂直に立ち上がり，短径方向の断面形は２段の逆台形である。

底面　２段になっており，低い方は平坦であるが，幅が狭い。

覆土　４層からなる自然堆積である。

土層解説

1	黒褐色	炭化粒子少量，焼土粒子微量，ローム小ブロック極微量	3	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量，ローム中ブロック微量
2	黒褐色	ローム粒子少量，ローム小ブロック微量	4	暗褐色	ローム粒子中量，ローム小ブロック少量

遺物　縄文土器片21点が出土しているが，いずれも細片である。第67図５・６は縄文土器の拓影図で，深鉢の胴部片である。それぞれ胎土に繊維を含み，太い撚糸文が施されている。

所見　本跡の性格は不明である。時期は，出土遺物から縄文時代前期前半(黒浜式期)と思われる。

第38号土坑（第66図）

位置　調査区の中央部，Ｃ２e8区。

重複関係　第12号墳の周溝に掘り込まれている。

規模と平面形　長径1.21m，短径0.84mの楕円形で，深さ65cmである。

長径方向　Ｎ－86°－Ｅ

壁面　外傾して立ち上がる。

底面　平坦である。

覆土　６層からなる自然堆積である。

土層解説

1	暗褐色	ローム粒子少量，ローム小ブロック微量	4	暗褐色	ローム粒子少量
2	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量	5	褐　色	ローム粒子多量
3	極暗褐色	炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量，ローム中ブロック極微量	6	褐　色	ローム粒子多量，ローム中ブロック少量

遺物　縄文土器片21点，剝片１点が出土しているが，いずれも細片である。第67図７～９は縄文土器片の拓影図である。７は深鉢の口縁部から胴部片で，縄文を地文に口縁部には半截竹管による押引文が２条施されている。８・９は深鉢の胴部片である。８は内・外面に貝殻条痕文が施されている。９は太い単節ＲＬの縄文が施されている。８・９は胎土に繊維を含む土器である。15の石匙は覆土中から出土している。

所見　本跡の性格は不明である。時期は，出土遺物から縄文時代前期前半と思われる。

第47号土坑（第66図）

位置　調査区の東部，Ｂ２e7区。

規模と平面形　長径2.46m，短径1.04mの長方形で，深さ45cmである。

長軸方向　Ｎ－45°－Ｅ

壁面　外傾して立ち上がる。

底面　平坦である。

覆土　７層からなる人為堆積である。

土層解説
1　黒褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量
2　黒褐色　ローム・大・中・小ブロック・ローム粒子中量
3　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子多量
4　黒　　色　ローム粒子少量
5　黒　　色　黒色土粒子中量
6　黒褐色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
7　黒褐色　ローム小ブロック中量

遺物　縄文土器片７点が出土しているが，いずれも細片である。第67図10は縄文土器片の拓影図で，深鉢の口縁部片である。口唇部にヘラ状工具でキザミが施され，外面に貝殻圧痕文を施文している。

所見　本跡の性格は不明である。時期は，出土遺物から縄文時代前期後半の（浮島Ⅱ式期）と思われる。

第53号土坑（第66図）

位置　調査区の東部，Ｂ３g5区。

重複関係　第４号住居跡，第９号土坑に掘り込まれている。

規模と平面形　長径1.90m，短径(1.45)mの楕円形と推定され，深さ16cmである。

長径方向　Ｎ－36°－Ｅ

壁面　外傾して立ち上がる。

底面　平坦である。

覆土　５層からなる人為堆積である。

土層解説
1　黒褐色　ローム粒子少量
2　暗褐色　ローム小ブロック少量
3　褐　　色　ローム小ブロック少量
4　黒褐色　ローム粒子中量
5　暗褐色　ローム小ブロック微量

遺物　縄文土器片34点が出土している。第67図11～13は縄文土器片の拓影図である。11は深鉢の口縁部片で，隆帯を貼付け単節ＬＲとＲＬの縄文を交互に横位で施文し，羽状構成をとる。11は縄文時代前期の（花積下層式期）に比定されると思われる。12は深鉢の口縁部片で，口唇部は外反し波状貝殻文が施されている。12は縄文時代前期の（浮島Ⅱ式期）に比定されると思われる。13は深鉢の胴部片で，縄文を地文に結節沈線文が施されている。13は縄文時代前期の（粟島台式期）に比定されると思われる。

所見　本跡の性格は不明である。時期は，出土遺物から縄文時代前期の（粟島台式期）以前と思われる。

縄文時代　土坑出土石製品観察表

図版番号	種別	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第67図14	打製石斧	(4.8)	6.2	2.1	(87.0)	雲母片岩	覆土中	Q110
15	石匙	(3.0)	2.4	1.1	(5.8)	黒曜石	覆土中	Q111

(5)　遺構外出土遺物

今回の調査で，遺構に伴わない縄文土器や石器が出土している。ここでは，それらの出土遺物のうち，縄文土器片については解説し，その他については実測図及び観察表で一括して報告する。

Ⅰ　縄文時代早期の土器群（第68図11～13）

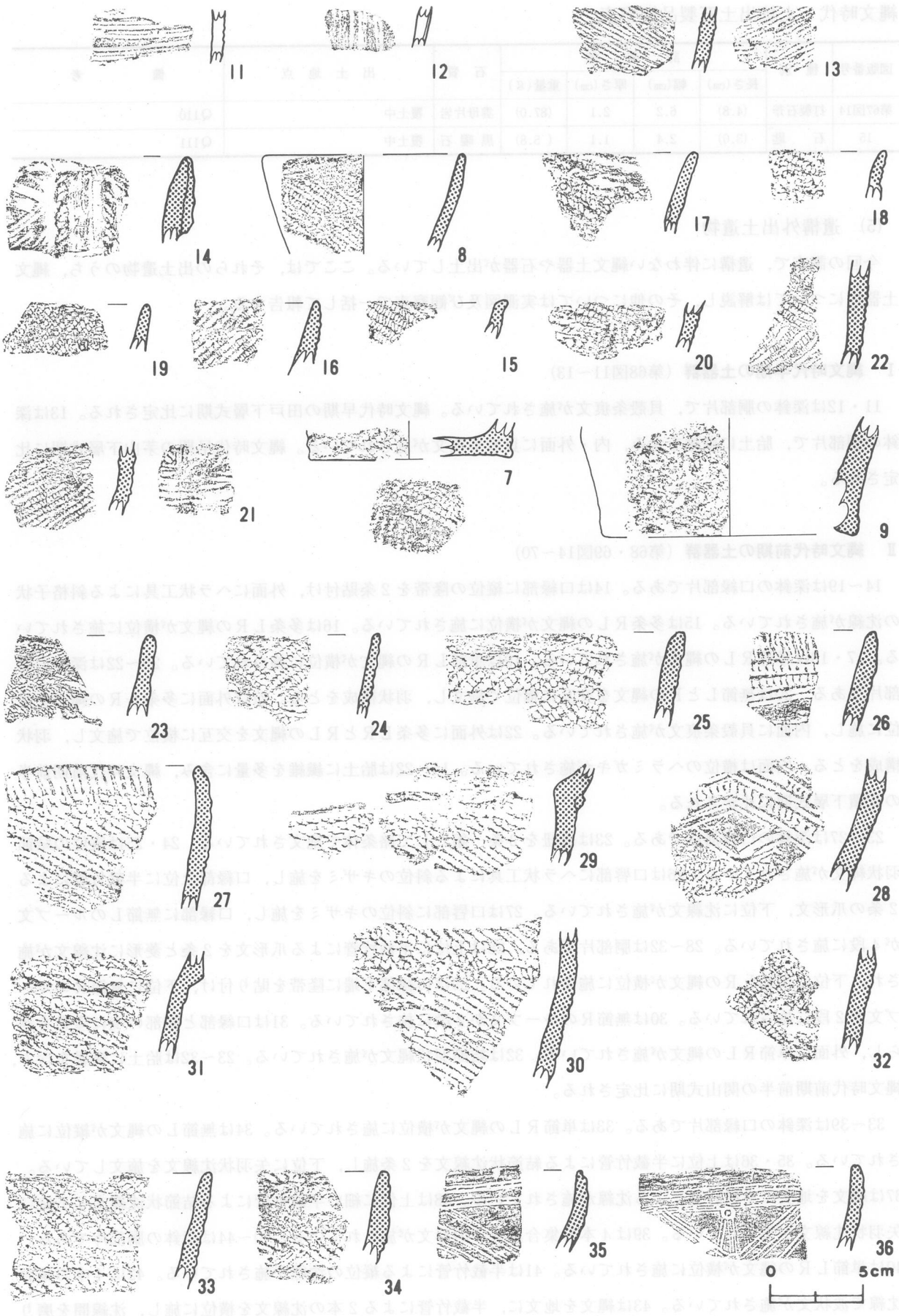
11・12は深鉢の胴部片で，貝殻条痕文が施されている。縄文時代早期の田戸下層式期に比定される。13は深鉢の胴部片で，胎土に繊維を含み，内・外面に貝殻条痕文が施されている。縄文時代早期の茅山下層式期に比定される。

Ⅱ　縄文時代前期の土器群（第68・69図14～70）

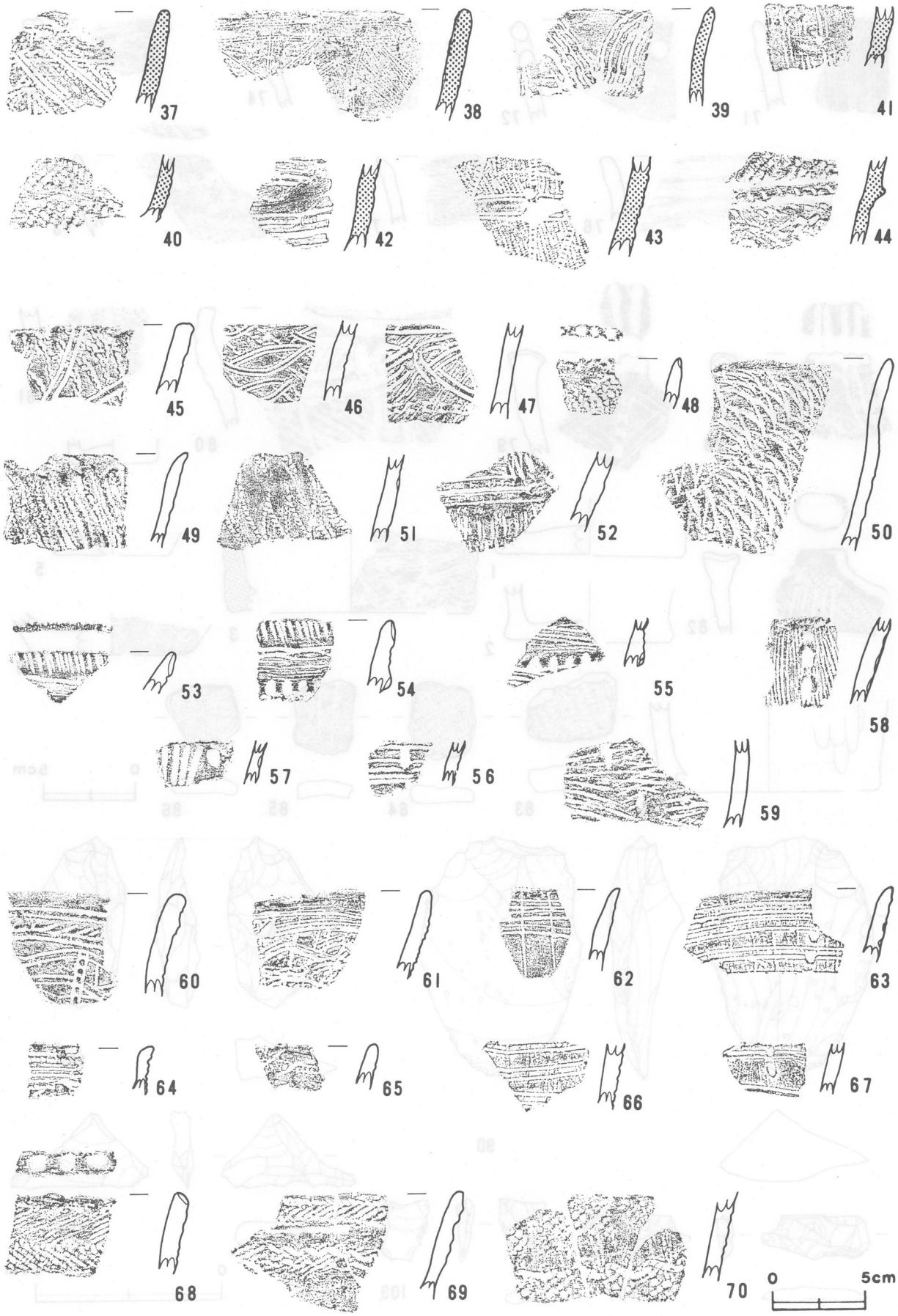
14～19は深鉢の口縁部片である。14は口縁部に縦位の隆帯を2条貼付け，外面にヘラ状工具による斜格子状の沈線が施されている。15は多条ＲＬの縄文が横位に施されている。16は多条ＬＲの縄文が横位に施されている。17・18は単節ＲＬの縄文が施されている。19は単節ＬＲの縄文が横位に施されている。20～22は深鉢の胴部片である。20は無節ＬとＲの縄文を交互に横位で施文し，羽状構成をとる。21は外面に多条ＬＲの縄文を横位に施し，内面に貝殻条痕文が施されている。22は外面に多条ＬＲとＲＬの縄文を交互に横位で施文し，羽状構成をとる。内面は横位のヘラミガキが施されている。14～22は胎土に繊維を多量に含み，縄文時代前期前半の花積下層式期に比定される。

23～27は深鉢の口縁部片である。23は組紐を2条一組として絡条体で施文されている。24・25は縦位の結節羽状縄文が施されている。26は口唇部にヘラ状工具による斜位のキザミを施し，口縁部上位に半截竹管による2条の爪形文，下位に沈線文が施されている。27は口唇部に斜位のキザミを施し，口縁部に無節Ｌのループ文が4段に施されている。28～32は胴部片である。28は上位に半截竹管による爪形文を2条と菱形に沈線文が施され，下位に単節ＬＲの縄文が横位に施されている。29は口縁部下端に隆帯を貼り付け，下位に無節Ｒのループ文が2段に施されている。30は無節Ｒのループ文が2段に施されている。31は口縁部と胴部の境に隆帯を巡らし，外面に単節ＲＬの縄文が施されている。32は結節羽状縄文が施されている。23～32は胎土に繊維を含み，縄文時代前期前半の関山式期に比定される。

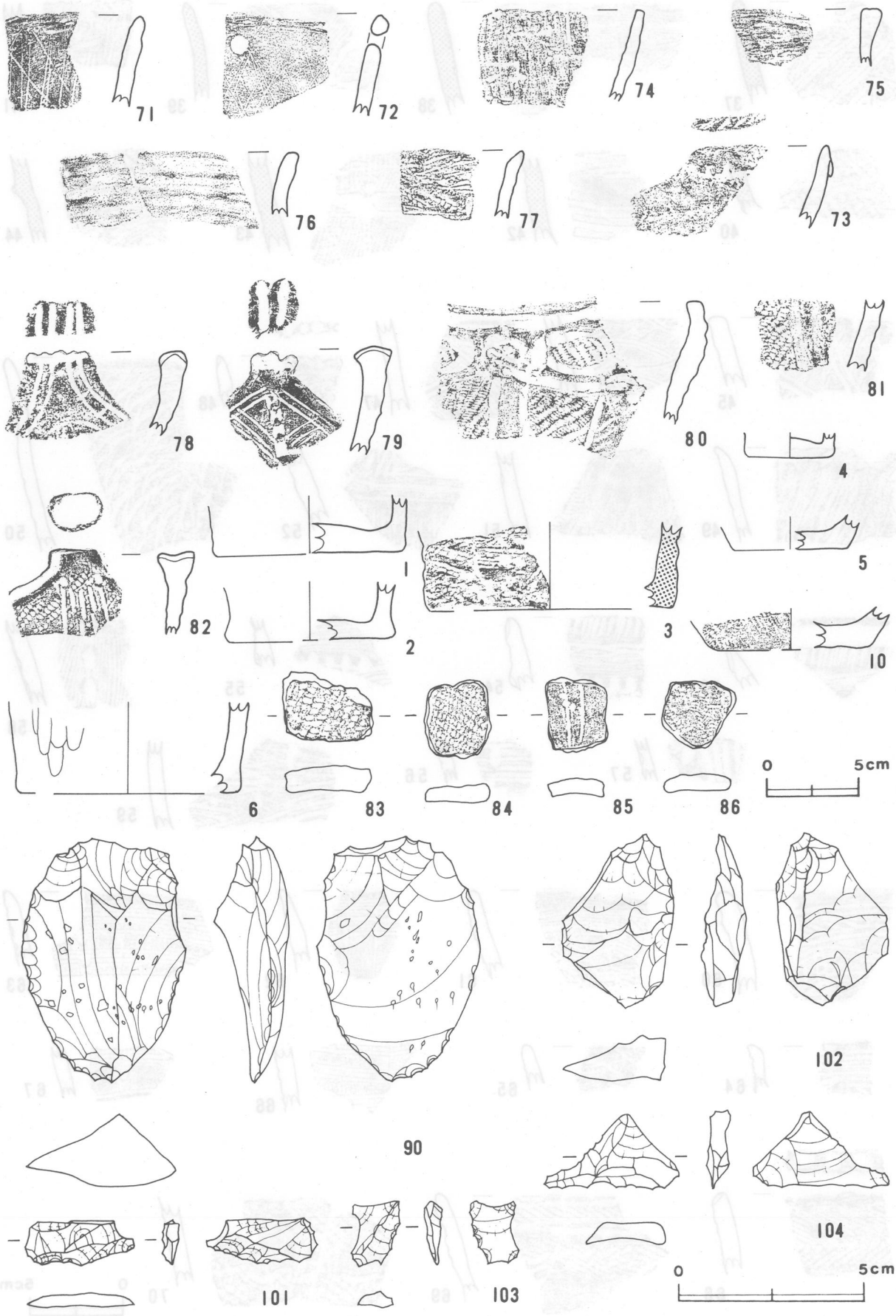
33～39は深鉢の口縁部片である。33は単節ＲＬの縄文が横位に施されている。34は無節Ｌの縄文が縦位に施されている。35・36は上位に半截竹管による結節状沈線文を2条施し，下位に矢羽状沈線文を施文している。37は縄文を地文に半截竹管による沈線が施されている。38は上位に細い半截竹管による結節状沈線文と下位に矢羽状沈線文が施されている。39は4本の集合沈線で山形文が施されている。40～44は深鉢の胴部片である。40は単節ＬＲの縄文が横位に施されている。41は半截竹管による縦位の沈線が施されている。42は4本の集合沈線で波状文が施されている。43は縄文を地文に，半截竹管による2本の沈線文を横位に施し，沈線間を磨り消している。縦位の爪形文が施されている。44は中位に隆帯を巡らし，上位に無節Ｌの縄文を横位に施し，下



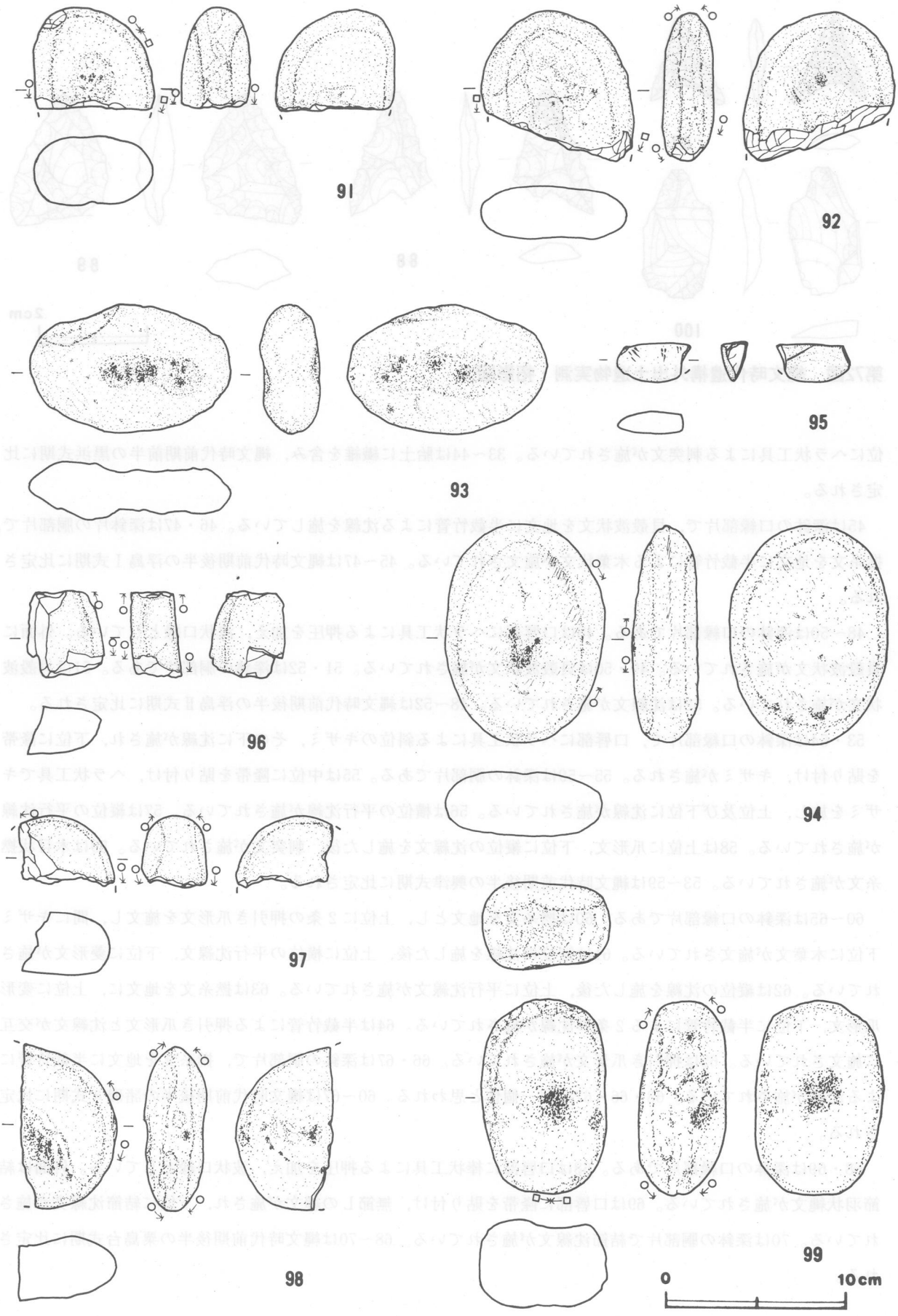
第68図　縄文時代遺構外出土遺物実測・拓影図(1)



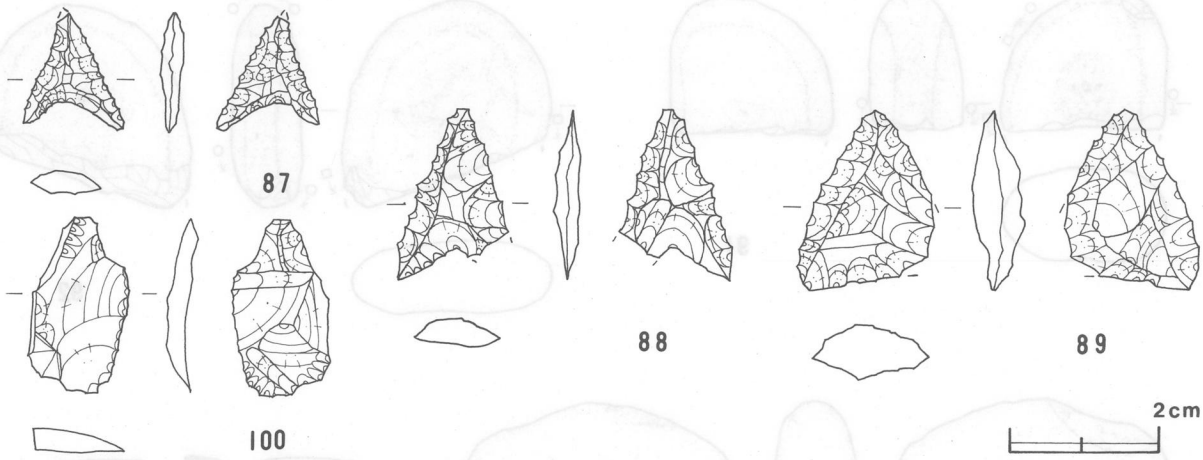
第69図　縄文時代遺構外出土遺物実測・拓影図(2)



第70図　縄文時代遺構外出土遺物実測・拓影図(3)



第71図　縄文時代遺構外出土遺物実測・拓影図(4)



第72図　縄文時代遺構外出土遺物実測・拓影図(5)

位にヘラ状工具による刺突文が施されている。33～44は胎土に繊維を含み，縄文時代前期前半の黒浜式期に比定される。

45は深鉢の口縁部片で，貝殻波状文を地文に半截竹管による沈線を施している。46・47は深鉢片の胴部片で，撚糸文を地文に半截竹管による木葉状文が施文されている。45～47は縄文時代前期後半の浮島Ⅰ式期に比定される。

48～50は深鉢の口縁部片である。48は口唇部にヘラ状工具による押圧を加え，波状口縁としている。外面に貝殻波状文が施されている。49・50は貝殻波状文が施されている。51・52は深鉢の胴部片である。51は貝殻波状文が施されている。52は沈線文が施されている。48～52は縄文時代前期後半の浮島Ⅱ式期に比定される。

53・54は深鉢の口縁部片で，口唇部にヘラ状工具による斜位のキザミ，その下に沈線が施され，下位に隆帯を貼り付け，キザミが施される。55～59は深鉢の胴部片である。55は中位に隆帯を貼り付け，ヘラ状工具でキザミを施し，上位及び下位に沈線が施されている。56は横位の平行沈線が施されている。57は縦位の平行沈線が施されている。58は上位に爪形文，下位に縦位の沈線文を施した後，刺突文が施されている。59は木目状撚糸文が施されている。53～59は縄文時代前期後半の興津式期に比定される。

60～65は深鉢の口縁部片である。60は撚糸文を地文とし，上位に2条の押引き爪形文を施文し，間にキザミ，下位に木葉文が施文されている。61は縦位の沈線を施した後，上位に横位の平行沈線文，下位に菱形文が施されている。62は縦位の沈線を施した後，上位に平行沈線文が施されている。63は撚糸文を地文に，上位に変形爪形文，下位に半截竹管による2条の沈線が施されている。64は半截竹管による押引き爪形文と沈線文が交互に施文されている。65は押引き爪形文が施されている。66・67は深鉢の胴部片で，撚糸文を地文に半截竹管による沈線が施されている。63・66・67は同一個体と思われる。60～67は縄文時代前期後半の諸磯ａ式期に比定される。

68・69は深鉢の口縁部片である。68は口唇部に棒状工具による押圧を加え，波状口縁としている。外面は結節羽状縄文が施されている。69は口唇部に隆帯を貼り付け，無節Ｌの縄文が施され，下位に結節沈線文が施されている。70は深鉢の胴部片で結節沈線文が施されている。68～70は縄文時代前期後半の粟島台式期に比定される。

Ⅲ　縄文時代中期の土器群（第70図71～81）

71～77は深鉢の口縁部片である。71は斜格子状に沈線が施されている。72は斜格子状に沈線が施され，上位に穿孔がある。73は複合口縁で，口唇部と口縁部下端にヘラ状工具による斜位のキザミが施されている。74は縦位のヘラ削りが施され，輪積痕が見られる。75・76は横位のヘラ削りが施されている。77は口唇部に縄文，外面に撚り戻しＲＲの縄文が施されている。71～77は縄文時代中期初頭に比定される。

78・79は深鉢の把手部片である。78は竹管による２条の沈線が左右に施されている。79は把手頂部にヘラ状工具による２本の沈線，外面に半截竹管による菱形文と押引き爪形文が施されている。79・80は縄文時代中期前葉に比定される。

80は深鉢の口縁部から胴部片で，口縁部には隆帯と太い沈線によって楕円形に区画し，区画内に多条ＲＬの縄文を横位に施している。胴部には２本１単位の太い沈線を垂下させ，その間を磨消している。磨消帯間には多条ＲＬの縄文を縦位に施している。81は深鉢の胴部片で，単節ＲＬの縄文を縦位に施し，２本の沈線間は磨消帯である。80・81は縄文時代中期後葉の加曽利ＥⅢ式期に比定される。

Ⅳ　縄文時代後期の土器（第70図82）

82は深鉢の口縁部片で，縄文を地文に，ヘラ状工具による沈線と刺突文が施されている。83は縄文時代後期前葉の堀之内式期に比定される。

縄文時代　遺構外出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第70図 1	深　鉢 縄文土器	B（3.1） C〔10.0〕	胴部から底部にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がる。底部は平底である。	雲母・赤色粒子 にぶい橙色 普通	P90　5％ 第１号墳封土中
2	深　鉢 縄文土器	B（3.2） C〔8.7〕	胴部から底部にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がる。底部は張り出し気味の平底である。	石英・雲母 にぶい褐色 普通	P91　5％ 第１号墳周溝覆土中
3	深　鉢 縄文土器	B（4.7） C〔13.4〕	胴部から底部にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がる。平底。内面繊維脱痕あり。	長石・雲母・赤色粒子 橙色　普通	P92　5％ 第１号墳周溝覆土中 （花積下層式期）
4	深　鉢 縄文土器	B（1.4） C　4.5	胴部から底部にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がる。平底。	雲母 明赤褐色 普通	P105　5％ 表採
5	深　鉢 縄文土器	B（1.9） C〔6.0〕	胴部から底部にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がる。平底。	赤色粒子 橙色 普通	P106　5％ 表採
6	深　鉢 縄文土器	B（5.0） C〔11.6〕	胴部下端から底部にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がる。胴部外面は縦位のヘラ削り後，ヘラミガキが施されている。体部は張り出し気味の平底である。	石英・長石・雲母・赤色粒子 橙色　普通	P96　5％ 第10号墳周溝覆土中
第68図 7	深　鉢 縄文土器	B（2.1） C〔11.0〕	胴部下端から底部にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がり，外面に単節の縄文が施されている。底部は上げ底で，縄文が施されている。内・外面繊維脱痕あり。	長石 明赤褐色 普通	P99　5％ 第11号墳周溝覆土中 （花積下層式期）
8	小形深鉢 縄文土器	A〔10.4〕 B（6.7）	口縁部から胴部にかけての破片。口縁部外面に貝殻背圧文が施されている。胴部は外傾して立ち上がり，外面に単節ＲＬの縄文が施されている。内・外面繊維脱痕あり。	長石・雲母 灰褐色 普通	P111　5％ 第11号墳周溝覆土中 （花積下層式期）
9	深　鉢 縄文土器	B（6.7） C〔13.6〕	胴部下端から底部にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がり，外面に縄文が施されている。底部は上げ底である。内・外面繊維脱痕あり。	長石・雲母 橙色 普通	P102　5％ 第12号墳周溝覆土中 （花積下層式期）
第70図 10	深　鉢 縄文土器	B（2.3） C〔8.2〕	胴部下端から底部にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がり，単節ＲＬの縄文が施されている。底部は平底である。	石英・長石・雲母・白色粒子 橙色　普通	P103　5％ 第12号墳周溝覆土中

土製品観察表

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第70図83	土器片錘	(4.8)	5.9	1.5	(30.8)	遺構外	DP 9
84	土器片錘	5.3	3.6	1.1	18.5	遺構外	DP10
85	土器片錘	4.1	3.4	1.0	13.6	遺構外	DP11
86	土器片錘	4.1	3.7	0.8	(12.1)	遺構外	DP12

石製品観察表

図版番号	種別	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第72図87	石鏃	(1.6)	1.3	0.3	(0.5)	チャート	遺構外	Q141
88	石鏃	2.3	(1.5)	0.4	(0.9)	チャート	遺構外	Q142
89	石鏃	2.5	(1.8)	0.7	(2.9)	瑪瑙	第2号住居跡中央部床下	Q 2
第70図90	ﾅｲﾌ形石器	6.6	4.4	2.0	39.3	瑪瑙	第12号住居跡南東部床面	Q 30
第71図91	磨石	(5.6)	6.5	3.8	(233.5)	閃緑岩	第1号墳南周溝覆土中	Q120 凹石・敲石兼用
92	磨石	(8.1)	8.4	2.9	(276.7)	砂岩	第1号墳封土中	Q121 凹石・敲石兼用
93	凹石	7.1	11.1	3.4	165.9	軽石	第1号墳封土中	Q122
94	磨石	11.9	8.7	3.6	579.9	安山岩	第1号墳西側墳丘上	Q123 凹石兼用
95	磨製石斧	(2.2)	4.1	1.5	(13.5)	砂岩	遺構外	Q155
96	磨石	(4.7)	(4.2)	2.6	(70.1)	砂岩	遺構外	Q157
97	磨石	(3.9)	(5.2)	3.6	(91.2)	砂岩	遺構外	Q158
98	磨石	(9.0)	(5.3)	3.4	(215.4)	砂岩	遺構外	Q159 凹石・敲石兼用
99	磨石	10.6	7.0	4.9	580.4	凝灰岩	遺構外	Q160 凹石・敲石兼用
第72図100	石匙	2.3	1.3	0.4	1.0	黒曜石	遺構外	Q156
第70図101	剝片	1.2	3.0	0.4	1.6	チャート	第3号住居跡覆土中	Q 6
102	剝片	4.7	3.0	1.3	14.6	チャート	第3号住居跡覆土中	Q 8
103	剝片	1.7	1.4	0.4	0.7	チャート	第4号住居跡覆土中	Q 9
104	剝片	2.1	3.7	0.7	3.0	チャート	第4号住居跡覆土中	Q 11

3　弥生時代

弥生時代の遺構としては，竪穴住居跡７軒を検出した。以下，検出した遺構の特徴や遺物について記載する。

(1)　竪穴住居跡

第１号住居跡（第73図）

位置　調査区の西部，Ｃ２g4区。

重複関係　中央部を第１号墳の周溝で南北に掘り込まれており，本跡が古い。

規模と平面形　長軸4.32m，短軸(2.20)ｍで不整長方形である。

主軸方向　Ｎ－82°－Ｗ

壁　壁高は28㎝で，なだらかに立ち上がる。

床　中央部は第１号墳に掘り込まれているが，東・西壁付近は平坦である。

ピット　確認することができなかった。

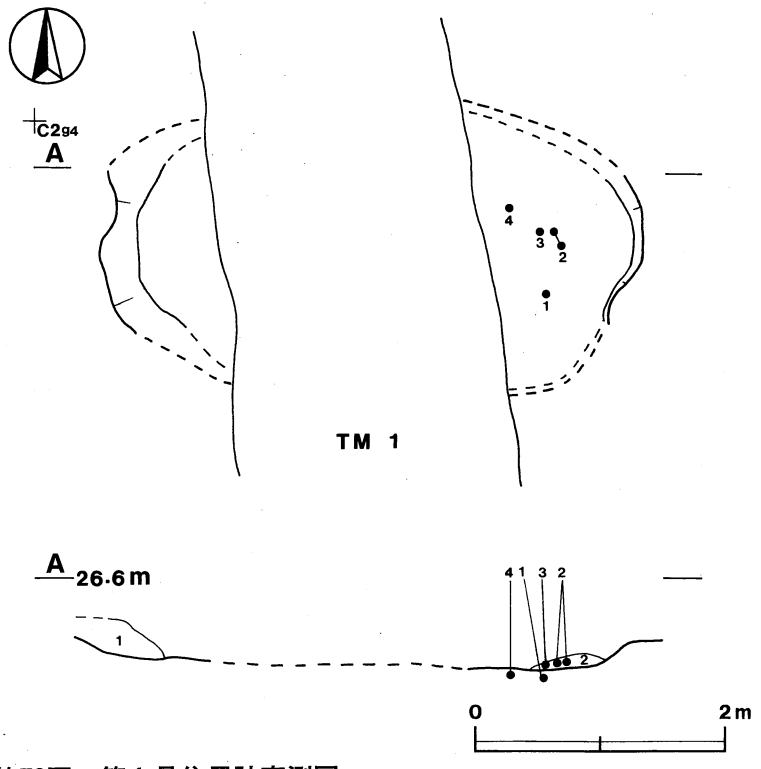
炉　第１号墳の周溝に掘り込まれているため確認することができなかった。

覆土　第１号墳の周溝に掘り込まれなかった部分で２層からなり，自然堆積と思われる。

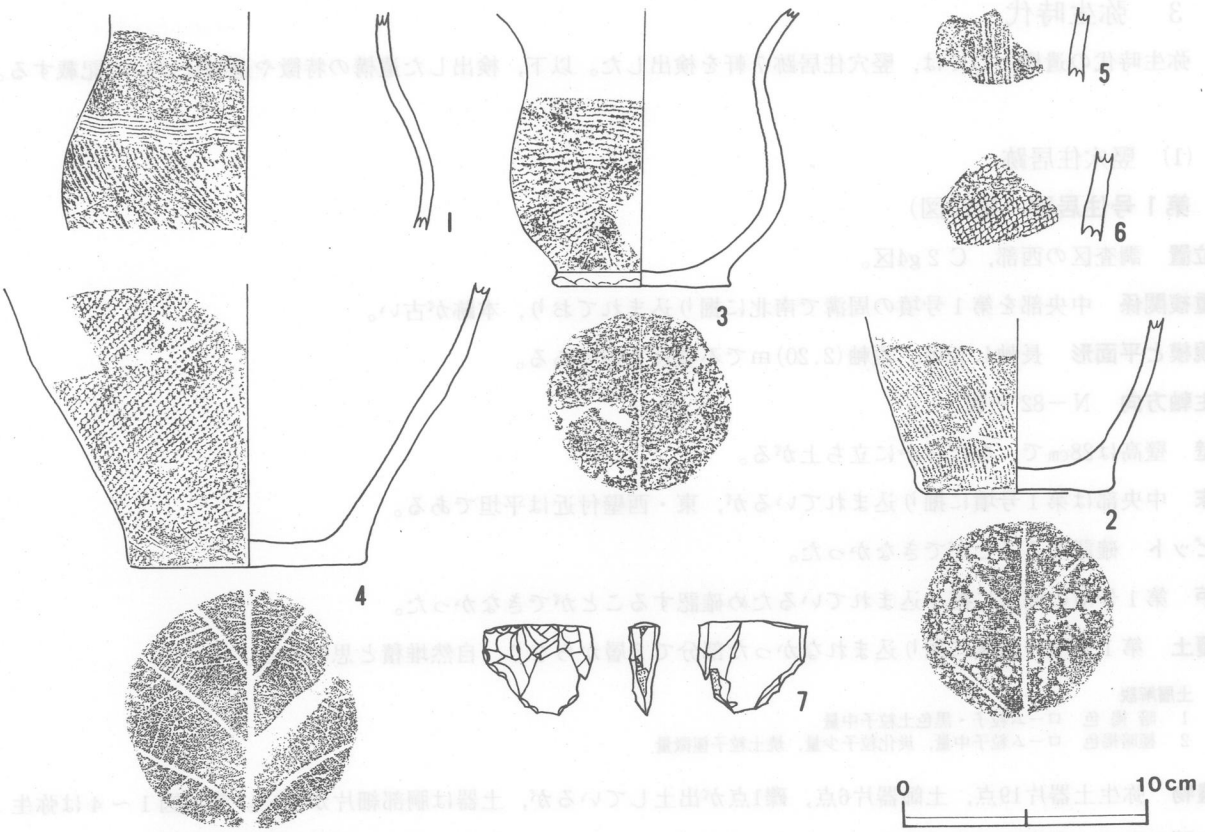
土層解説
1　暗 褐 色　ローム粒子・黒色土粒子中量
2　極暗褐色　ローム粒子中量，炭化粒子少量，焼土粒子極微量

遺物　弥生土器片19点，土師器片6点，礫1点が出土しているが，土器は胴部細片が多い。第74図１～４は弥生土器の壺で，東側中央の床面からまとまって出土している。５・６は，弥生土器片の拡影図である。５は広口壺の頸部片で，外面に櫛歯状工具による縦区画文が施されている。６は広口壺の胴部片で，附加条一種(附加２条)の縄文が施されている。７は礫で覆土中から出土している。

所見　本跡の時期は，床面から出土している２・３の器形の特徴・文様が龍ケ崎市屋代Ｂ遺跡の第30・40号住居跡出土のいわゆる屋代式と呼ばれる土器群に類似していることから弥生時代後期前半と考えられる。



第73図　第１号住居跡実測図



第74図　第１号住居跡出土遺物実測・拓影図

第１号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第74図 1	広口壺 弥生土器	B(8.9)	頸部下位から胴部にかけての破片。胴部は内彎しながら頸部に至る。頸部は無文とし，胴部との境に６本の櫛歯状工具による横走文を巡らし，胴部は絡条体で施文されている。	砂粒・石英・長石 橙色 普通	P１　10% 東側中央床面
2	広口壺 弥生土器	B(7.0) C　8.1	胴部下位から底部にかけての破片。胴部は底部から外傾しながら立ち上がる。胴部には絡条体で施文されている。底部は張り出し気味の平底で，木葉痕を残している。	石英・長石・雲母 にぶい褐色 普通	P２　20% 東側中央床面
3	広口壺 弥生土器	B(11.2) C　7.2	頸部から底部にかけての破片。胴部は外傾しながら立ち上がり，頸部は外傾する。最大径を胴部下位にもつ。頸部は無文とし，胴部には附加条一種(附加２条)の縄文が施されている。底部は張り出し気味の平底で，木葉痕を残している。	長石・雲母 にぶい橙色 普通	P３　40% 東側中央床面
4	広口壺 弥生土器	B(11.3) C　9.6	胴部から底部にかけての破片。胴部は底部から外傾しながら立ち上がる。胴部には附加条一種(附加２条)の縄文が施されている。底部は平底で，木葉痕を残している。	石英・長石・雲母 にぶい橙色 普通	P４　10% 東側中央床面

石製品観察表

図版番号	種別	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
7	礫	3.7	4.4	1.2	18.0	安山岩	覆土中	Q１

第13号住居跡（第75図）

位置　調査区の中央部，Ｂ２ｊ7区。

重複関係　中央部を第４号溝に，東･南部を第11号墳の周溝に掘り込まれている。

規模と平面形　長軸(5.50)ｍ，短軸(4.26)ｍで隅丸長方形と推定される。

主軸方向　Ｎ－33°－Ｗ

壁　壁高は28㎝で，外傾して立ち上がる。

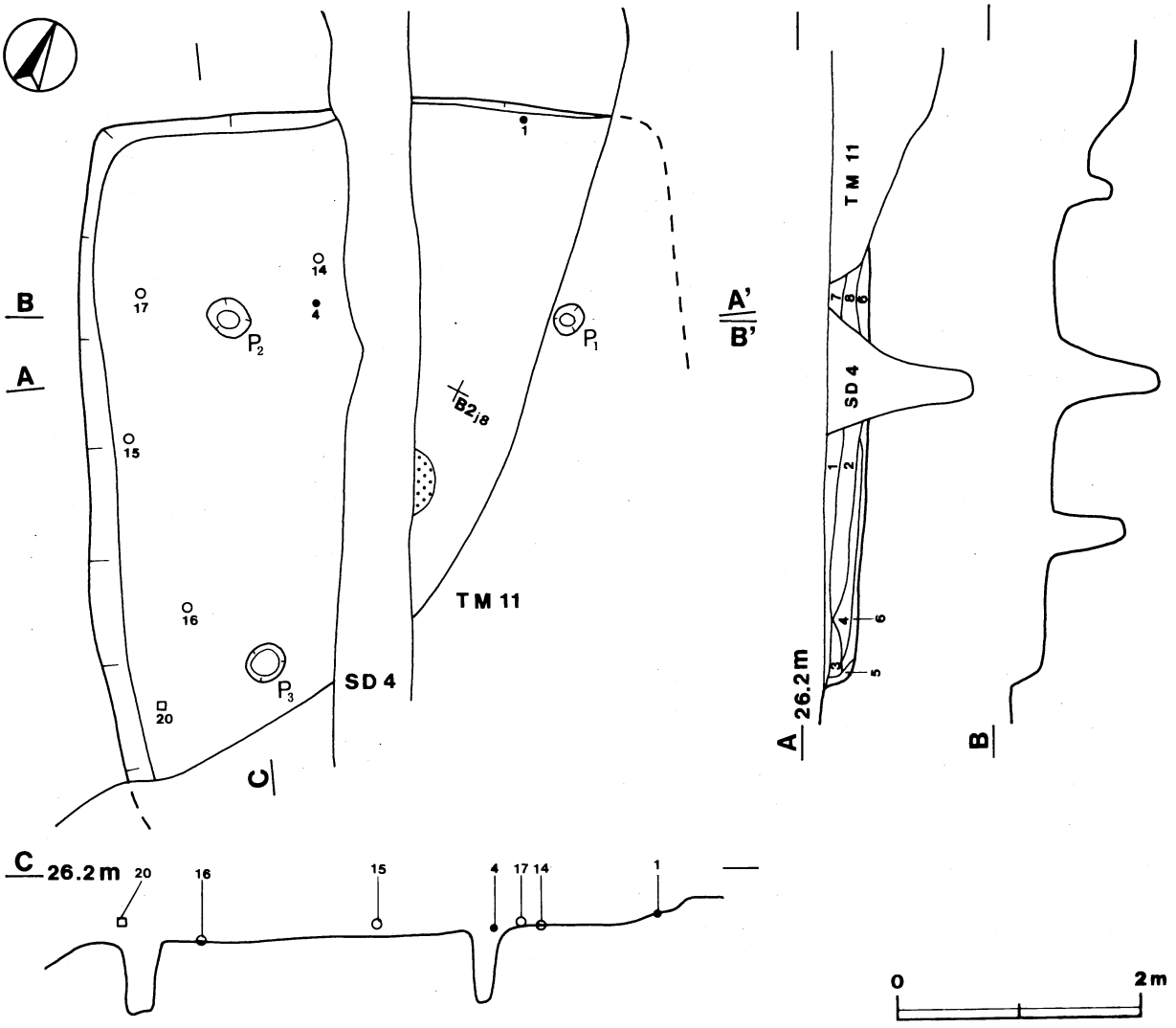
床　平坦であるが，わずかに東側及び南側に傾斜する。

ピット　３か所（Ｐ1～Ｐ3）。Ｐ1は長径30㎝，短径25㎝の楕円形で，深さが32㎝である。Ｐ2は長径36㎝，短径30㎝の楕円形で，深さが63㎝である。Ｐ3は径33㎝の円形で，深さが62㎝である。Ｐ1～Ｐ3は配列から主柱穴と思われる。

炉　中央部からやや南寄りにあり，第３号溝によって西半分が掘り込まれている。平面形は長径65㎝，短径(16)㎝の楕円形と推定され，床面を掘りくぼめた地床炉である。

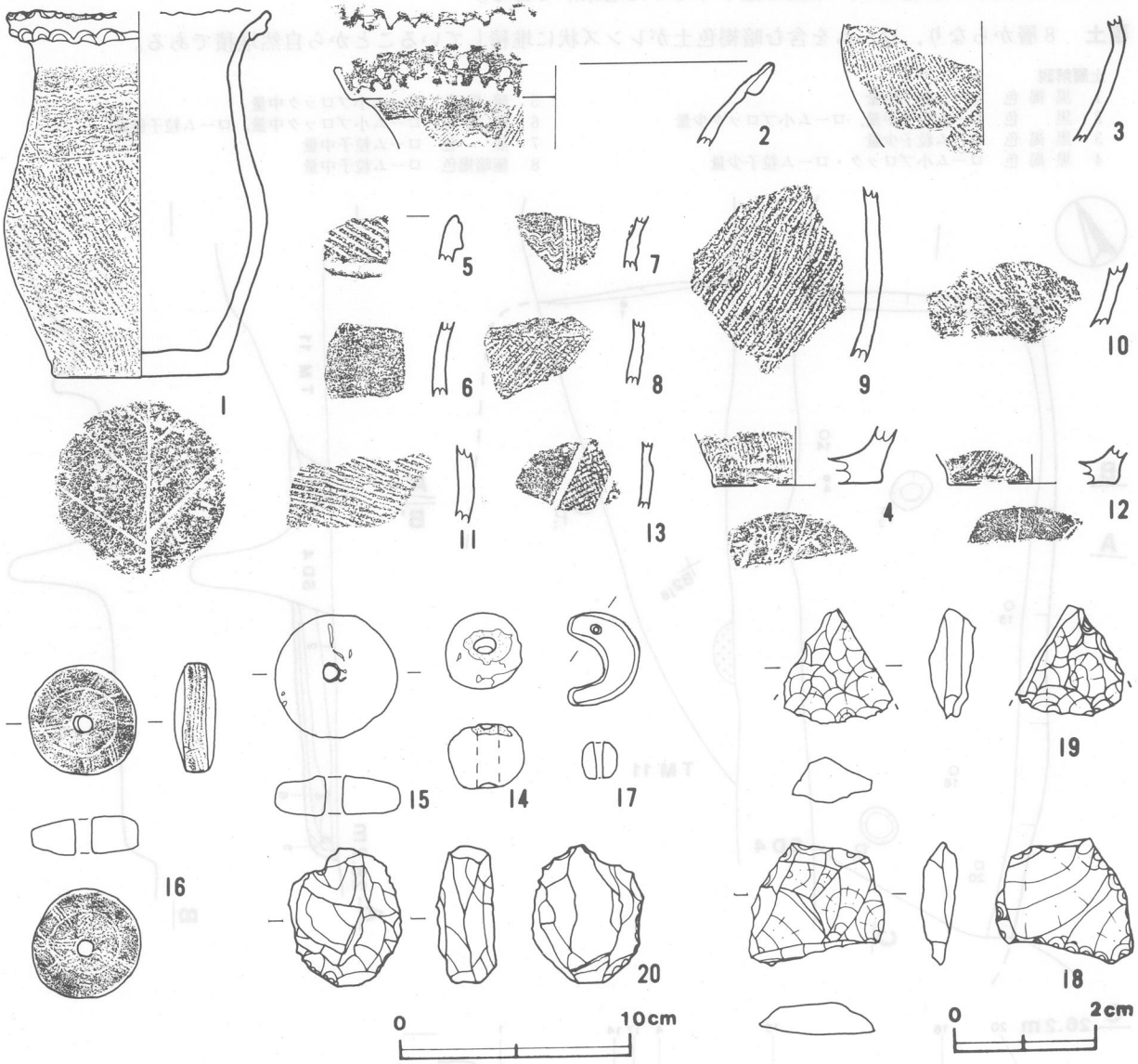
覆土　８層からなり，ロームを含む暗褐色土がレンズ状に堆積していることから自然堆積である。

土層解説
1　黒 褐 色　ローム粒子中量
2　黒　　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
3　黒 褐 色　ローム粒子少量
4　黒 褐 色　ローム小ブロック・ローム粒子少量
5　暗 褐 色　ローム小ブロック中量
6　暗 褐 色　ローム小ブロック中量，ローム粒子微量
7　黒　　色　ローム粒子中量
8　極暗褐色　ローム粒子中量



第75図　第13号住居跡実測図

遺物　弥生土器片339点，土師器片19点，縄文土器片160点，土製品４点，石器２点，礫14点が出土している。第76図１は弥生土器広口壺で，北東部の覆土下層から横位の状態で出土している。２・３は弥生土器広口壺で，中央部の覆土中から出土し，４の広口壺，14の球状土錘は中央部の覆土下層から出土している。５～13は弥生土器片の拓影図である。５は広口壺の複合口縁部片で附加条一種(附加２条)の縄文が施されている。６～８は広口壺の頸部片で，６は無文で，７は５本の櫛歯状工具による縦区画文と区画内に波状文が施されている。８は上位を無文とし下位に附加条一種(附加２条)の縄文が施されている。９～11は壺の胴部片で，９・10は附加条一種(附加２条)の縄文が施され，11は絡条体で施文されている。12は壺の底部片で，外面に附加条一種(附加２条)の縄文が施され，底部には木葉痕がある。13は壺の胴部片で沈線内の縄文を磨り消している。13は弥生時代中期後半のものと思われる。15の土製紡錘車，17の土製勾玉は西壁中央付近の覆土下層から，16の土製紡錘車は南西部の床面から出土している。18・19の石鏃は覆土中から出土している。20の礫は南西部の覆土下層から出土している。



第76図　第13号住居跡出土遺物実測・拓影図

所見　本跡から出土している縄文土器片・土師器片は，流れ込みと思われる。時期は，規模・平面形及び１の弥生土器広口壺が龍ケ崎市屋代Ｂ遺跡の第33号住居跡出土のいわゆる屋代式と呼ばれる土器群と類似していることから，弥生時代後期前半と考えられる。

第13号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第76図 1	広口壺 弥生土器	A〔11.2〕 B 15.7 C 7.3	口縁部から底部にかけての破片。複合口縁で，口唇部と口縁部下端に丸棒状工具による押圧が施されている。頸部には３本の櫛歯状工具による波状文が巡らされている。胴部は絡条体で施文されている。底部は張り出し気味の平底で，木葉痕を残している。	石英・長石・雲母 黒褐色 普通	P31 70% 北東部覆土下層
2	広口壺 弥生土器	A〔18.8〕 B(3.6)	口縁部から頸部にかけての破片。複合口縁で，口唇部にはヘラ状工具による押圧が施され，口縁部中位と下端に相互に丸棒状工具による刺突文が施されている。頸部は５本の櫛歯状工具により縦区画し，区画内に波状文を施している。	長石・雲母 橙色 普通	P32 10% 覆土中
3	広口壺 弥生土器	B(5.3)	胴部から頸部下端にかけての破片。頸部と胴部の境に櫛歯状工具による波状文が施されている。胴部は絡条体で施文されている。	石英・長石 褐色 普通	P33 5% 覆土中
4	広口壺 弥生土器	B(2.5) C〔 7.2〕	胴部下端から底部にかけての破片。胴部は絡条体で施文されている。底部は張り出し気味の平底で，木葉痕を残している。	石英・長石 灰褐色 普通	P34 5% 中央部覆土下層

土製品観察表

図版番号	種　別	計測値 径(cm)	計測値 長さ(cm)	計測値 孔径(cm)	計測値 重量(g)	出土地点	備　考
14	球状土錘	3.3	3.3	0.9	29.2	中央部覆土下層	ＤＰ３ 100%

図版番号	種　別	計測値 径(cm)	計測値 厚さ(cm)	計測値 孔径(cm)	計測値 重量(g)	出土地点	備　考
15	紡錘車	5.2	1.7	0.7	41.6	西壁中央付近覆土下層	ＤＰ４ 100%
16	紡錘車	4.6	1.8	0.6	60.5	南西部床面	ＤＰ５ 100%

図版番号	種　別	計測値 長さ(cm)	計測値 幅(cm)	計測値 孔径(cm)	計測値 重量(g)	出土地点	備　考
17	勾　玉	4.1	3.0	0.2～0.4	16.5	西壁中央付近覆土下層	ＤＰ６ 100%

石製品観察表

図版番号	種　別	計測値 長さ(cm)	計測値 幅(cm)	計測値 厚さ(cm)	計測値 重量(g)	石　質	出土地点	備　考
18	石　鏃	(1.7)	2.0	0.5	(1.7)	チャート	覆土中	Q33
19	石　鏃	(1.6)	(1.5)	0.6	(1.3)	石　英	覆土中	Q34
20	礫	5.9	4.8	2.5	89.7	石　英	南西部覆土下層	Q35

第14号住居跡（第77図）

位置　調査区の中央部，Ｃ２c9区。

重複関係　第２・４号溝に掘り込まれている。また，本跡が第15号住居跡を掘り込んでいる。

規模と平面形　長軸4.57m，短軸4.44mの隅丸方形である。

主軸方向　Ｎ－58°－Ｅ

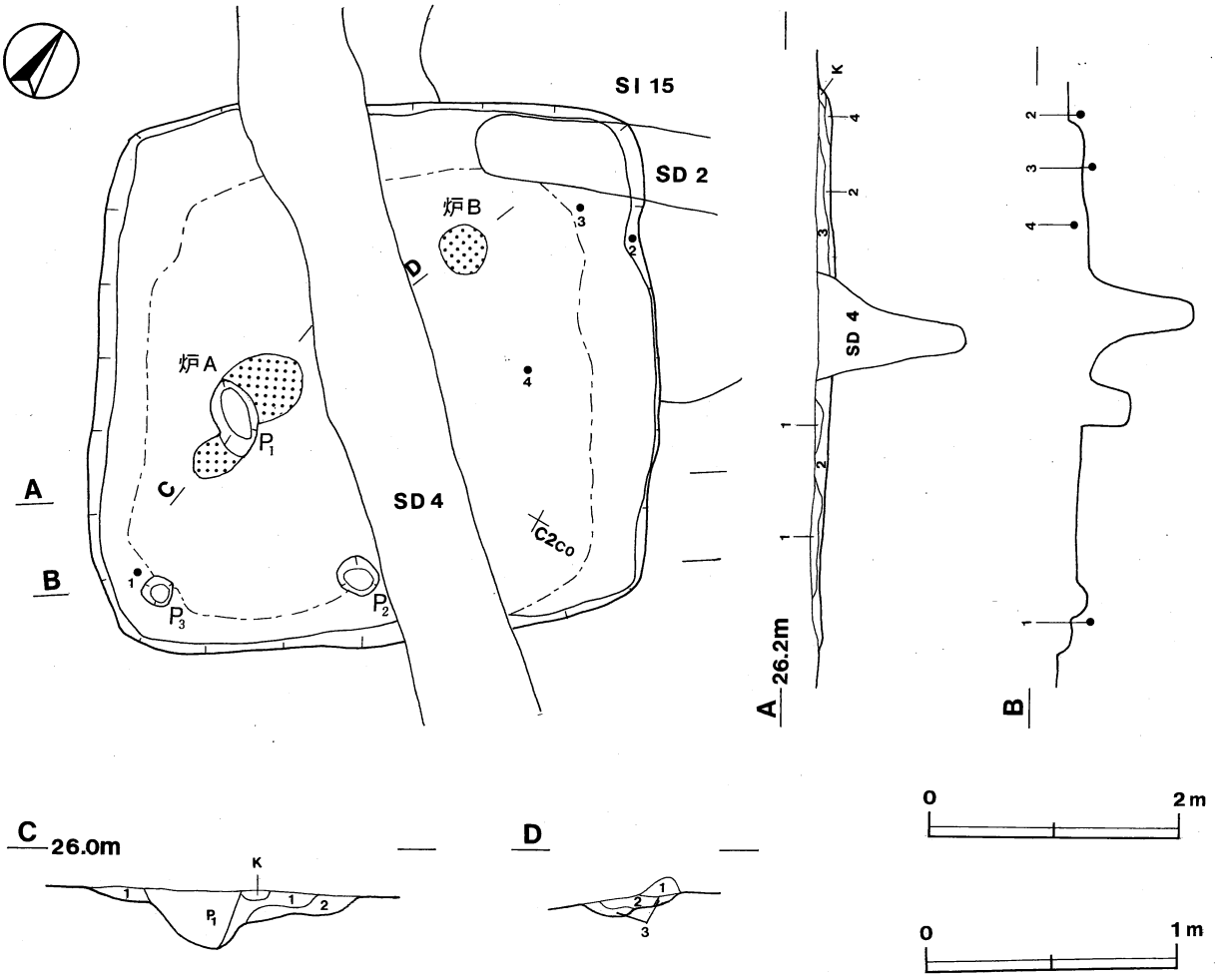
壁　壁高は15cmで，外傾して立ち上がる。

床　ほぼ平坦であり，全体的に硬化している。

ピット　３か所（Ｐ1～Ｐ3）。Ｐ1は長径68cm，短径34cmの楕円形で，深さが23cmである。Ｐ1は炉１の廃棄後に掘り込まれたピットである。Ｐ2は直径36cm，短径30cmの楕円形で，深さ37cmである。Ｐ3は，径25cmの円形で，深さ12cmである。Ｐ1～Ｐ3は性格は不明である。

炉　２か所。炉Ａは，中央部から西寄りにあり，平面形は長径118cm，短径53cmの楕円形で，床面を23cm掘りくぼめた地床炉である。炉床は，中央部が特に火熱を受け著しく赤変し，長期間使用したと思われる。

炉Ｂは，中央部からやや北寄りにあり，平面形は長径44cm，短径42cmのほぼ円形で，床面を６cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床は，火熱を受けて赤変している。



第77図　第14号住居跡実測図

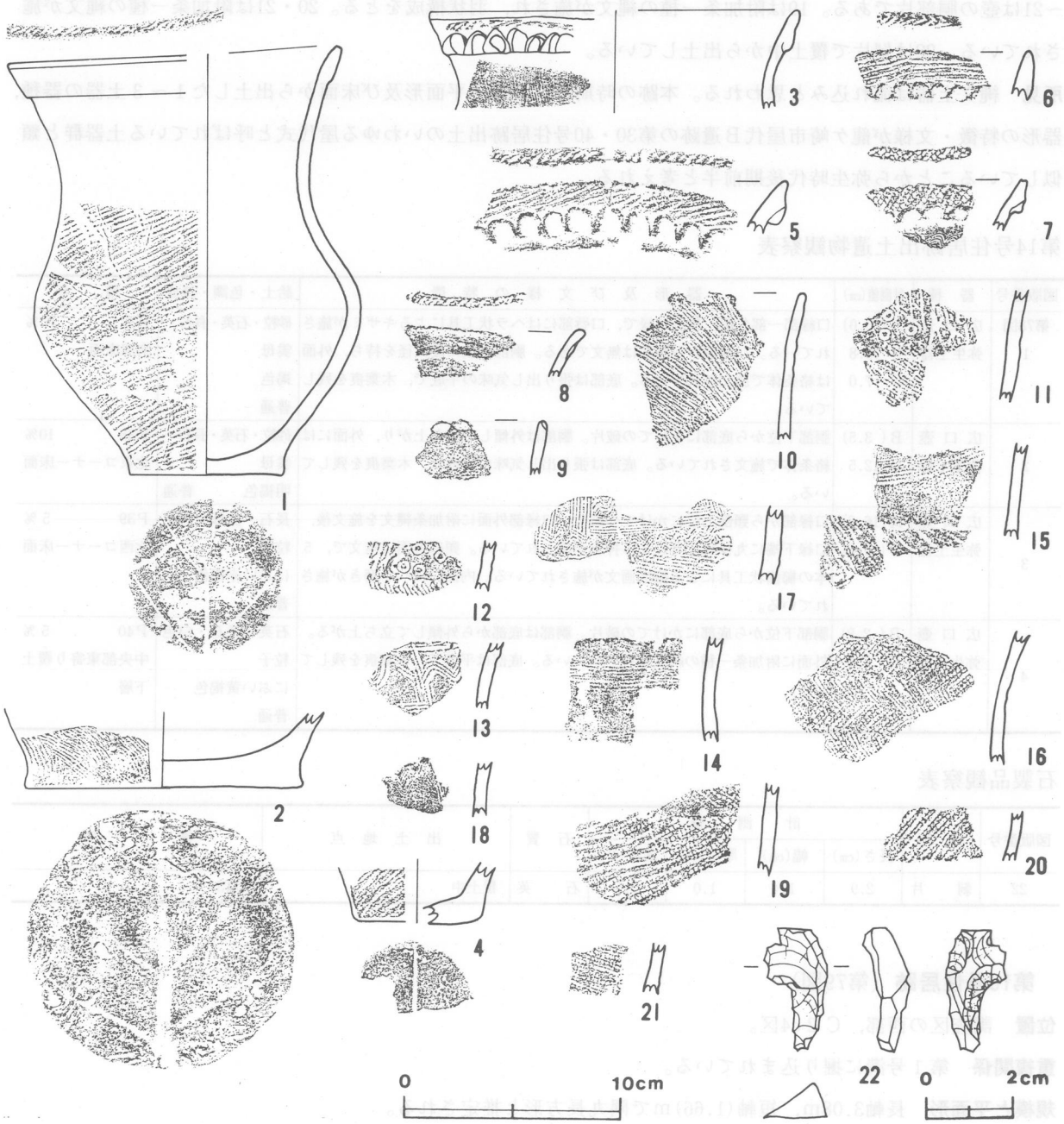
炉A土層解説
1　暗赤褐色　焼土粒子多量，焼土小ブロック中量，ローム粒子少量
2　暗赤褐色　ローム粒子中量，焼土粒子少量，炭化粒子微量

炉B土層解説
1　黒 褐 色　焼土粒子中量，ローム粒子少量
2　赤 褐 色　焼土粒子中量，ローム粒子少量，焼土小ブロック微量
3　にぶい赤褐色　ローム粒子多量，焼土粒子少量，焼土小ブロック微量

覆土　4層からなり，ロームを含む暗褐色土がレンズ状に堆積していることから自然堆積である。東壁付近が木の根の撹乱を受けている。

土層解説
1　黒　　色　ローム粒子少量，焼土粒子微量
2　黒 褐 色　ローム粒子少量
3　暗 褐 色　ローム粒子少量
4　暗 褐 色　ローム粒子微量

遺物　弥生土器片84点，縄文土器片18点，剥片5点が出土している。第78図1は弥生土器広口壺で，南西部の床面から横位で出土している。2・3は弥生土器広口壺で北東コーナーの床面から出土している。4は弥生土



第78図　第14号住居跡出土遺物実測・拓影図

器壺の底部片であり，中央部の東寄りの覆土下層から出土している。５～21は弥生土器片の拓影図である。５～10は広口壺の口縁部片である。５～７は複合口縁で口唇部から口縁部下まで附加条一種附加２条の縄文を施文し，口縁下端に丸棒状工具による押圧が施されている。８は複合口縁で口唇部に附加条一種附加２条の縄文を施文し，口縁は無文としている。９は口唇部を丸棒状工具で押圧し小波状口縁としている。口縁は無文としている。10は口唇部から口縁にかけ絡条体による撚糸文が施されている。11～18は広口壺の頸部片である。11・12は縦区画の格子目文が施され，区画内に円形竹管文が施されている。11・12は同一個体と思われる。13は４本の櫛歯状工具による縦区画文と波状文が施されている。14・15は７本の櫛歯状工具による横走文が施され，下端に附加条一種の縄文が施され，羽状構成をとる。14・15は同一個体と思われる。17は上位を無文とし，下位に附加条一種の縄文が施され，羽状構成をとる。17は６本の櫛歯状工具による縦区画と区画内に波状文と横走文を交互に施し，下位に絡条体で施文している。18は櫛歯状工具による縦区画と波状文が施されている。19～21は壺の胴部片である。19は附加条一種の縄文が施され，羽状構成をとる。20・21は附加条一種の縄文が施されている。22は剝片で覆土中から出土している。

所見　縄文土器は流れ込みと思われる。本跡の時期は，規模・平面形及び床面から出土した１～３土器の器種，器形の特徴・文様が龍ケ崎市屋代Ｂ遺跡の第30・40号住居跡出土のいわゆる屋代式と呼ばれている土器群と類似していることから弥生時代後期前半と考えれる。

第14号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第78図 1	広口壺 弥生土器	A〔15.0〕 B 19.8 C 7.0	口縁部一部欠損。複合口縁で，口唇部にはヘラ状工具によるキザミが施されている。口縁部から頸部は無文である。胴部上位に最大径を持ち，外面は絡条体で施文されている。底部は張り出し気味の平底で，木葉痕を残している。	砂粒・石英・長石・雲母 褐色 普通	P37　70% 南部床面
2	広口壺 弥生土器	B（3.5） C 12.5	胴部下位から底部にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がり，外面には絡条体で施文されている。底部は張り出し気味の平底で，木葉痕を残している。	砂粒・石英・長石・雲母 明褐色　普通	P38　10% 北東コーナー床面
3	広口壺 弥生土器	A〔16.8〕 B（4.6）	口縁部から頸部上位にかけての破片。口縁部外面に附加条縄文を施文後，口縁下端に丸棒状工具による押圧が施されている。頸部外面は無文で，５本の櫛歯状工具による縦区画文が施されている。内面にはヘラ磨きが施されている。	長石・雲母・白色粒子 にぶい赤褐色 普通	P39　５% 北西コーナー床面
4	広口壺 弥生土器	B（2.8） C 5.4	胴部下位から底部にかけての破片。胴部は底部から外傾して立ち上がる。外面に附加条一種の縄文が施されている。底部は平底で，木葉痕を残している。	石英・長石・白色粒子 にぶい黄褐色 普通	P40　５% 中央部東寄り覆土下層

石製品観察表

図版番号	種　別	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石　質	出土地点	備　考
22	剝　片	2.9	1.4	1.0	2.5	石　英	覆土中	Q43

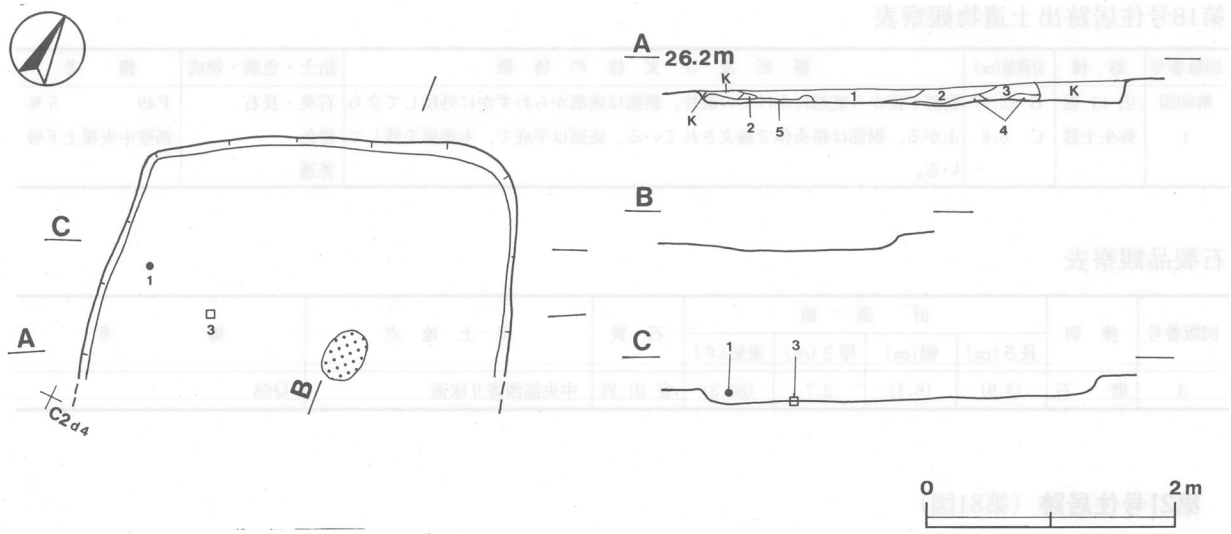
第18号住居跡（第79図）

位置　調査区の西部，Ｃ２c4区。

重複関係　第１号溝に掘り込まれている。

規模と平面形　長軸3.08m，短軸(1.66)mで隅丸長方形と推定される。

主軸方向　Ｎ－65°－Ｅ



第79図　第18号住居跡実測図

壁　壁高は12㎝で，外傾して立ち上がる。

床　ほぼ平坦であるが，竹の根による撹乱が激しく硬化した面は確認できなかった。

ピット　確認することができなかった。

炉　中央部にあり，長径44㎝，短径32㎝の楕円形の範囲のみを確認することができた。

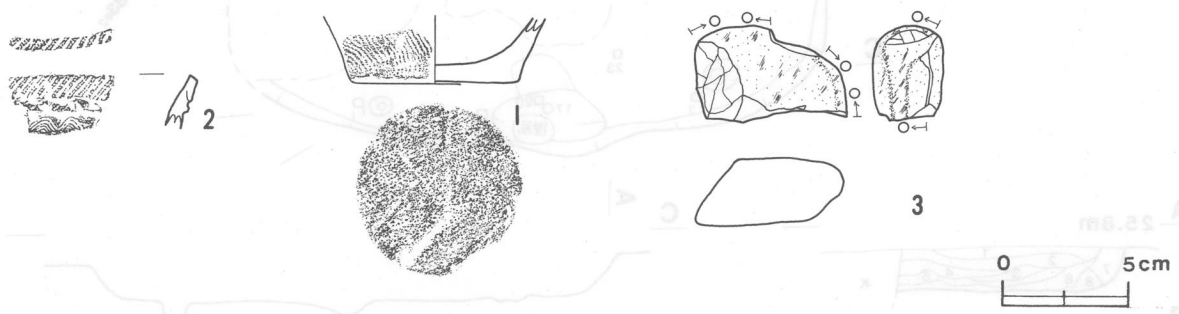
覆土　5層からなり，不均一に堆積することから人為堆積と思われる。東側は竹の根による撹乱が激しい。

土層解説

1　暗 褐 色　ローム粒子中量
2　黒 褐 色　ローム粒子・黒色土小ブロック中量，焼土粒子・ローム小ブロック微量，炭化物極微量
3　極黒褐色　ローム粒子少量，ローム中ブロック微量，焼土小ブロック・焼土粒子極微量
4　極赤褐色　焼土粒子中量，炭化粒子少量，ローム粒子極微量
5　褐　　色　ローム小ブロック・ローム粒子多量

遺物　弥生土器片3点，縄文土器片20点，石器1点が出土している。第80図1は弥生土器壺の底部で，西壁中央付近の覆土下層から出土している。2は弥生土器片の拓影図で，口縁部片である。2は折り返しの複合口縁で，口唇部から口縁部にかけ附加条一種の縄文が施され，頸部には櫛歯状工具による波状文が施されている。3は磨石で，中央部西寄りの床面から出土している。縄文土器片は細片で流れ込みと思われる。

所見　出土遺物が少なく時期を決定することが難しいが，出土土器が絡条体で施文されているから弥生時代後期前半と思われる。



第80図　第18号住居跡出土遺物実測・拓影図

第18号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第80図 1	広口壺 弥生土器	B (2.7) C　6.8	胴部下位から底部にかけての破片。胴部は底部からわずかに外反して立ち上がる。胴部は絡条体で施文されている。底部は平底で，木葉痕を残している。	石英・長石 橙色 普通	P49　　5％ 西壁中央覆土下層

石製品観察表

図版番号	種　別	計測値				石　質	出土地点	備　考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
3	磨　石	(3.9)	(6.1)	2.7	(80.3)	安山岩	中央部西寄り床面	Q68

第21号住居跡（第81図）

位置　調査区の東部　B３e1区。

規模と平面形　長軸〔4.82〕m，短軸(2.45)mで隅丸長方形と推定される。北半分は撹乱されている。

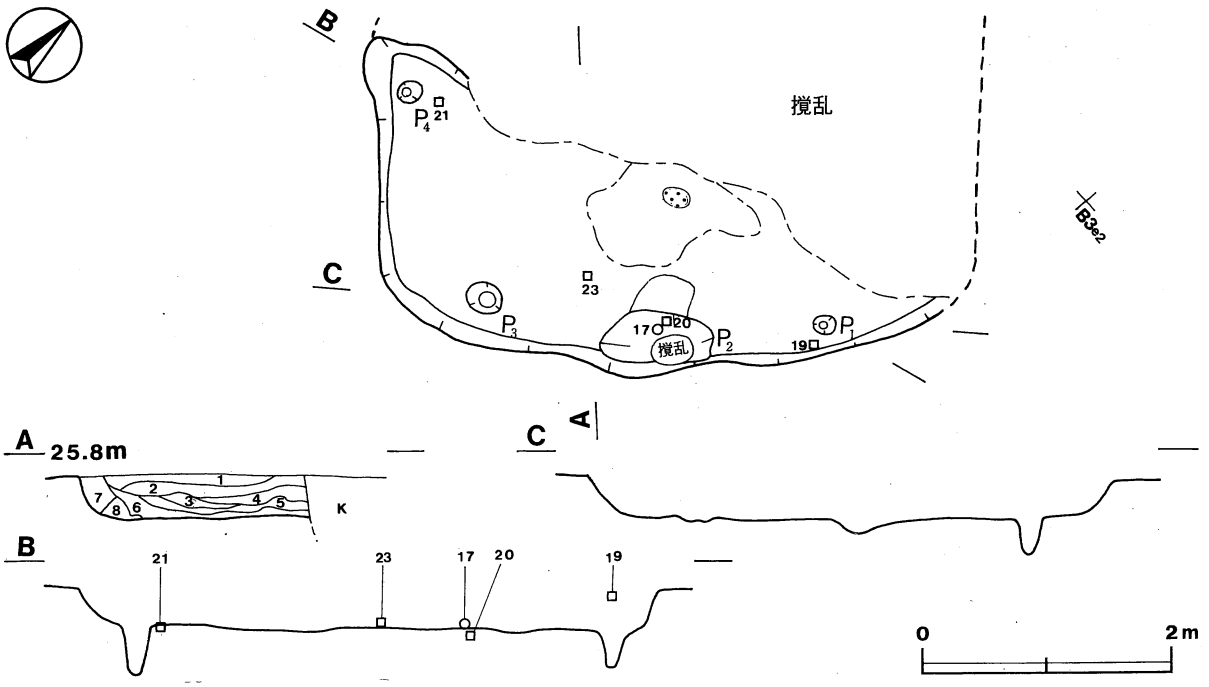
主軸方向　N－41°－E

壁　壁高は38cmで，外傾して立ち上がる。

床　ほぼ平坦であり，全体によく踏み固められており，特に炉の周辺は硬化が著しい。

ピット　４か所（P1～P4）。P1は径18cmの円形で，深さ30cmである。P3は長径30cm，短径24cmの楕円形で深さ６cmである。P4は径20cmの円形で，深さ41cmである。P1・P3・P4は位置から壁柱穴と思われる。P2は長径90cm，短径43cmの皿状の楕円形で，深さが24cmである。P2は貯蔵穴と思われる。

炉　中央部に位置し，平面形は長径25cm，短径18cmの楕円形で，床面を５cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床は，中央部が火熱を受け赤変している。硬化面が著しいわりに炉床部の火熱の受け方が少なく使用頻度が少ないように思われる。



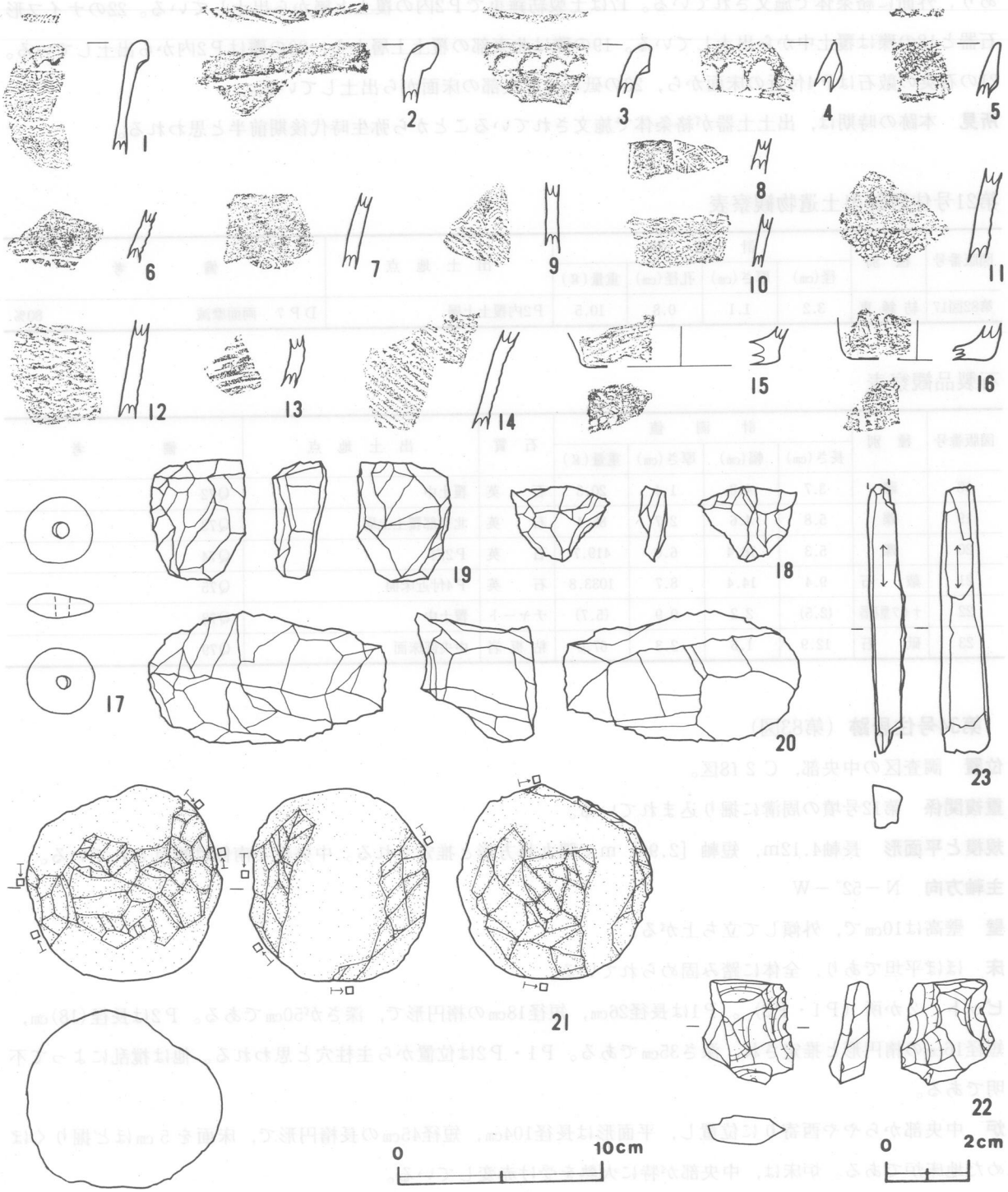
第81図　第21号住居跡実測図

覆土　8層からなり，上層に黒色土，下層に黒褐色土がレンズ状に堆積していることから自然堆積である。

土層解説

1　黒　　色　ローム粒子・焼土粒子極微量
2　黒　　色　ローム粒子少量
3　黒　　色　ローム粒子微量
4　黒　　色　ローム粒子極微量
5　黒　　色　ローム粒子微量，焼土粒子極微量
6　黒 褐 色　ローム粒子中量
7　黒 褐 色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
8　黒 褐 色　ローム粒子少量，ローム中ブロック微量，焼土粒子極微量

遺物　弥生土器片83点，縄文土器片40点，土製品1点，石器1点，礫19点，剝片3点が出土している。第82図1～16は弥生土器片の拓影図である。1～5は広口壺の複合口縁部片である。1は口唇部には縄文を施し，口縁下端に棒状工具による押圧がみられ，外面には櫛歯状工具による波状文が施されている。2は口唇部に附加



第82図　第21号住居跡出土遺物実測・拓影図

条一種の縄文が施されている。外面は無文である。3・4は口縁下端を丸棒状工具による押圧後，口唇部から口縁にかけて縄文が施されている。5は口唇部と口縁下端を丸棒状工具による押圧後，附加条一種の縄文を施している。6～11は広口壺の頸部片である。6～8はヘラ状工具による格子目文が施されている。9は3本櫛歯による横走波状文が施され，下位に絡条体で施文されている。10は3本の櫛歯状工具による横走波状文が2条施され，下位に附加条一種の縄文が施されている。11は頸部を無文とし，下位に附加条一種の縄文が施されている。12～14は壺の胴部片である。12は網目状の撚糸文が施され，13・14は絡条体で施文されている。15・16は壺の底部片である。15は底部に木葉痕があり，外面には附加条一種の縄文が施され，16は底部に木葉痕があり，外面に絡条体で施文されている。17は土製紡錘車でP2内の覆土上層から出土している。22のナイフ形石器と18の礫は覆土中から出土している。19の礫は北東部の覆土上層から，20の礫はP2内から出土している。21の石英の敲石はP4付近の床面から，23の砥石は中央部の床面から出土している。

所見　本跡の時期は，出土土器が絡条体で施文されていることから弥生時代後期前半と思われる。

第21号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
第82図17	紡錘車	3.2	1.1	0.8	10.5	P2内覆土上層	DP7　両面摩滅　80%

石製品観察表

図版番号	種別	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
18	礫	3.7	4.8	1.4	20.3	石英	覆土中	Q72
19	礫	5.8	4.6	2.7	85.4	石英	北東部覆土上層	Q73
20	礫	5.3	16.4	6.0	419.7	石英	P2内	Q74
21	敲石	9.4	14.4	8.7	1033.8	石英	P4付近床面	Q75
22	ナイフ型石器	(2.5)	2.2	0.9	(5.7)	チャート	覆土中	Q78
23	砥石	12.9	1.6	2.3	67.0	粘板岩	中央部床面	Q79

第34号住居跡（第83図）

位置　調査区の中央部，C2f8区。

重複関係　第12号墳の周溝に掘り込まれている。

規模と平面形　長軸4.12m，短軸［2.98］mで隅丸長方形と推定される。中央部と南側は撹乱されている。

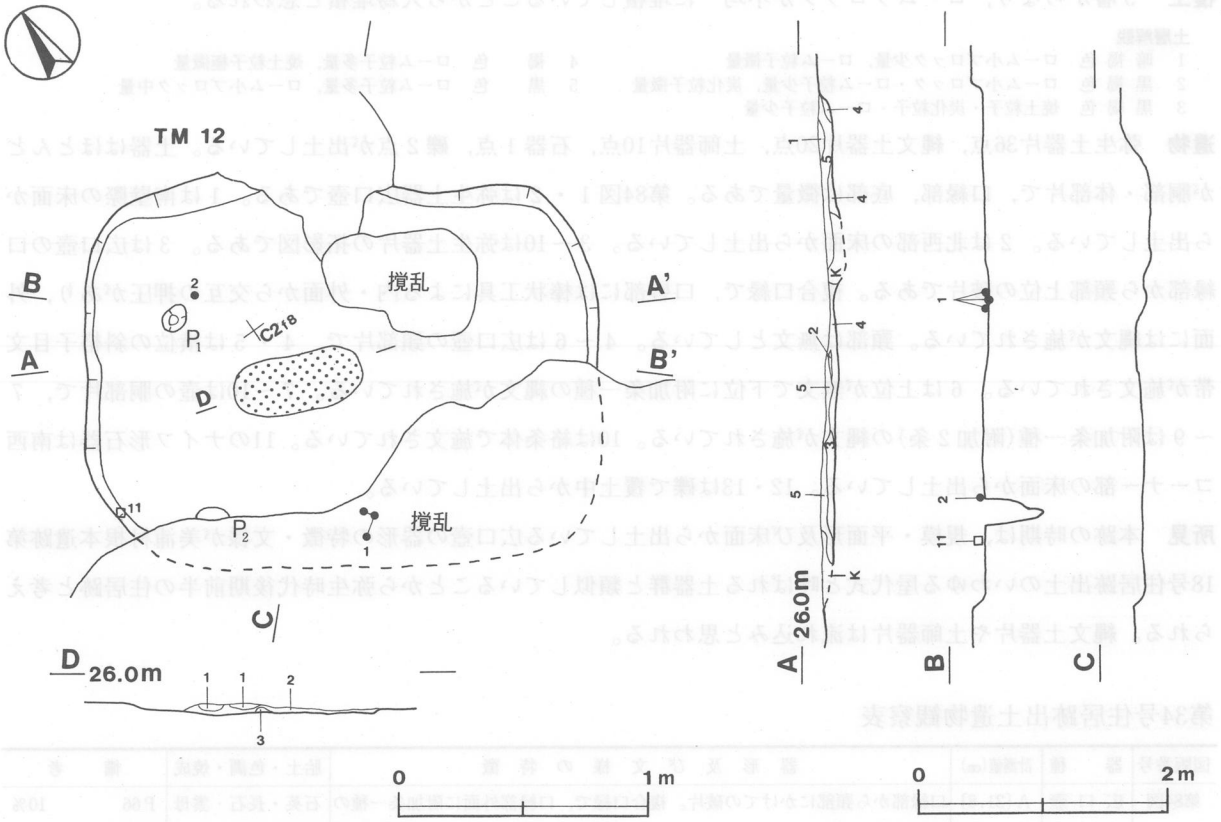
主軸方向　N－52°－W

壁　壁高は10cmで，外傾して立ち上がる。

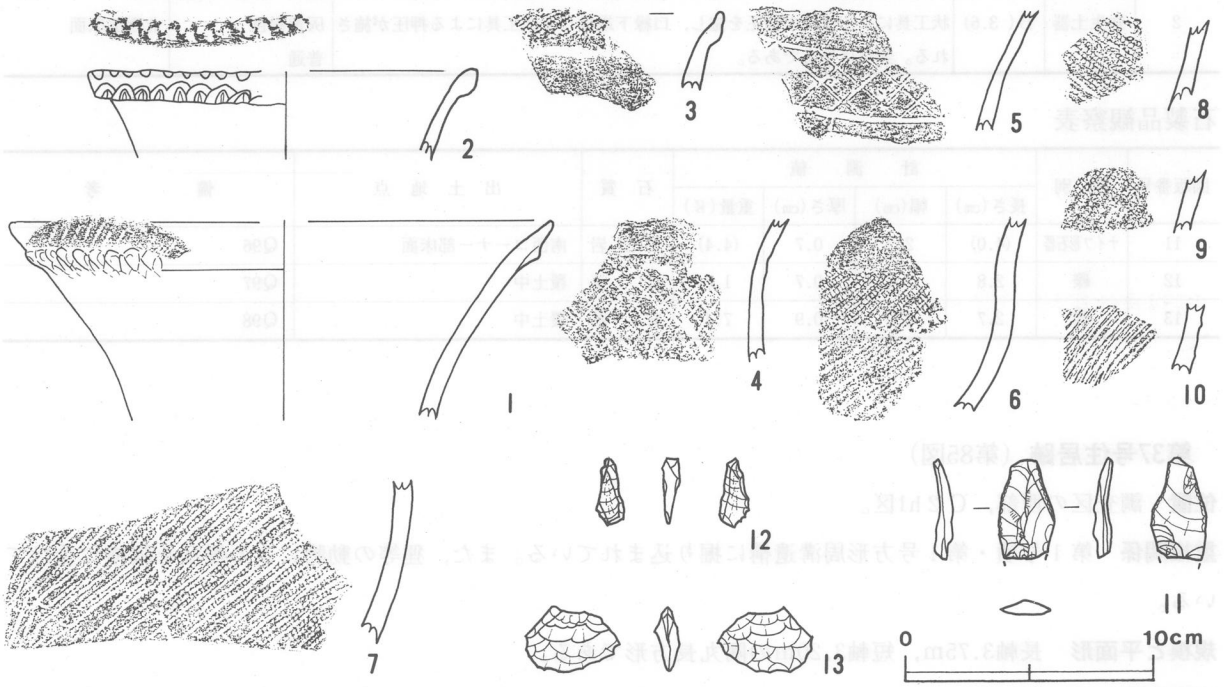
床　ほぼ平坦であり，全体に踏み固められている。

ピット　2か所（P1・P2）。P1は長径26cm，短径18cmの楕円形で，深さが50cmである。P2は長径(18)cm，短径16cmの楕円形と推定され，深さ35cmである。P1・P2は位置から主柱穴と思われる。他は撹乱によって不明である。

炉　中央部からやや西寄りに位置し，平面形は長径104cm，短径45cmの長楕円形で，床面を5cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床は，中央部が特に火熱を受け赤変している。



第83図　第34号住居跡実測図



第84図　第34号住居跡出土遺物実測・拓影図

炉土層解説

1　暗赤褐色　焼土小ブロック中量，焼土粒子・炭化粒子少量
2　暗赤褐色　焼土粒子多量，焼土中ブロック・炭化粒子少量
3　赤 褐 色　ローム小ブロック多量

覆土　5層からなり，ロームブロックが不均一に堆積していることから人為堆積と思われる。

土層解説
1　暗褐色　ローム小ブロック少量，ローム粒子微量
2　黒褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，炭化粒子微量
3　黒褐色　焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量
4　褐　色　ローム粒子多量，焼土粒子極微量
5　黒　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量

遺物　弥生土器片36点，縄文土器片20点，土師器片10点，石器1点，礫2点が出土している。土器はほとんどが胴部・体部片で，口縁部，底部は微量である。第84図1・2は弥生土器広口壺である。1は南壁際の床面から出土している。2は北西部の床面から出土している。3～10は弥生土器片の拓影図である。3は広口壺の口縁部から頸部上位の破片である。複合口縁で，口唇部には棒状工具による内・外面から交互の押圧があり，外面には縄文が施されている。頸部は無文としている。4～6は広口壺の頸部片で，4・5は横位の斜格子目文帯が施文されている。6は上位が無文で下位に附加条一種の縄文が施されている。7～10は壺の胴部片で，7～9は附加条一種(附加2条)の縄文が施されている。10は絡条体で施文されている。11のナイフ形石器は南西コーナー部の床面から出土している。12・13は礫で覆土中から出土している。

所見　本跡の時期は，規模・平面形及び床面から出土している広口壺の器形の特徴・文様が美浦村根本遺跡第18号住居跡出土のいわゆる屋代式と呼ばれる土器群と類似していることから弥生時代後期前半の住居跡と考えられる。縄文土器片や土師器片は流れ込みと思われる。

第34号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第84図 1	広口壺 弥生土器	A〔21.8〕 B(8.0)	口縁部から頸部にかけての破片。複合口縁で，口縁部外面に附加条一種の縄文が施文され，下端にヘラ状工具による押圧を施している。頸部は無文である。	石英・長石・雲母 にぶい黄褐色 普通	P66　10% 南壁際床面
2	広口壺 弥生土器	A〔15.5〕 B(3.6)	口縁部から頸部にかけての破片。複合口縁で，口唇部に内・外面からヘラ状工具による連続の押圧を施し，口縁下端はヘラ状工具による押圧が施される。頸部は無文である。	石英・長石・雲母 灰黄褐色 普通	P67　5% 北西部床面

石製品観察表

図版番号	種別	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	出土地点	備考
11	ナイフ形石器	(4.0)	2.2	0.7	(4.4)	安山岩	南西コーナー部床面	Q96
12	礫	2.8	1.2	0.7	1.8	石英	覆土中	Q97
13	礫	2.7	3.9	0.9	7.4	石英	覆土中	Q98

第37号住居跡（第85図）

位置　調査区の西部，C2h1区。

重複関係　第1号墳・第1号方形周溝遺構に掘り込まれている。また，狸等の動物による撹乱を縦横に受けている。

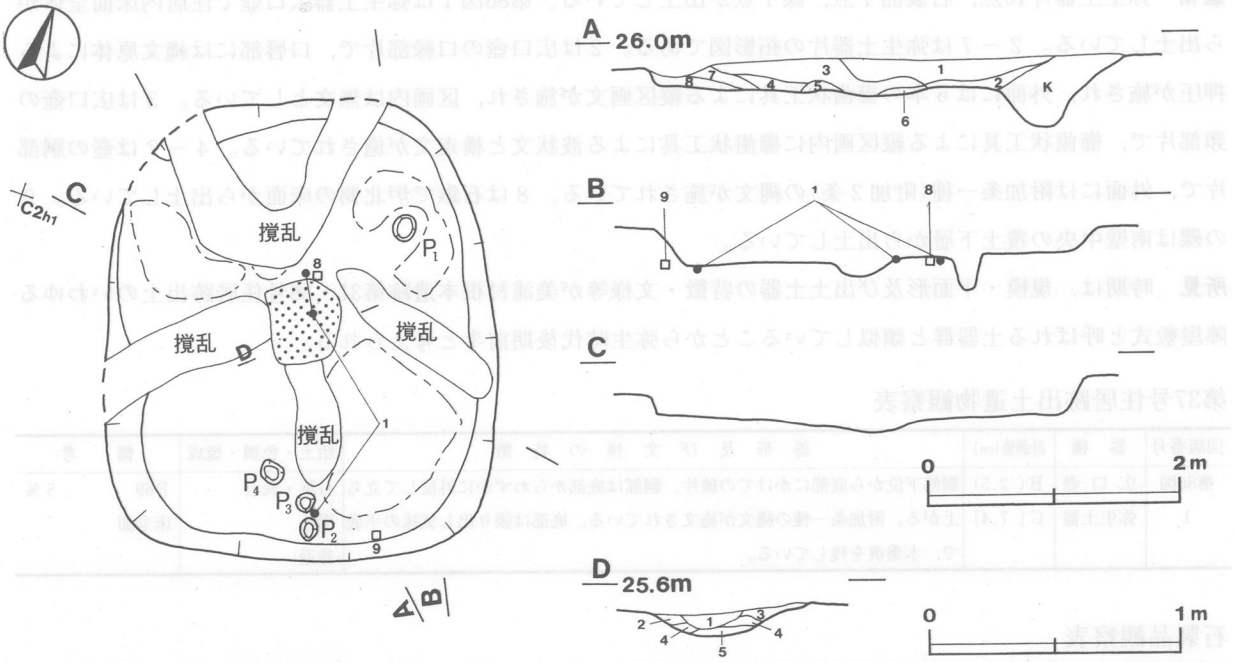
規模と平面形　長軸3.75m，短軸3.20mの隅丸長方形である。

主軸方向　N－25°－W

壁　壁高は25cmで，外傾して立ち上がる。

床　ほぼ平坦であり，炉を中心に踏み固められている。

ピット　4か所（P1～P4）。P1は径20cmの円形で，深さが30cmである。配置からP1は主柱穴と思われる。他の主柱穴は撹乱により不明である。P2は長径20cm，短径15cmの楕円形で，深さ16cmである。配置から出入



第85図　第37号住居跡実測図

り口施設に伴うピットと思われる。P3・P4は径15～20㎝の円形で，深さ10㎝である。いずれも性格は不明である。

炉　ほぼ中央部にあり，平面形は一辺が55㎝の隅丸方形で，床面を10㎝ほど掘り込んだ地床炉である。炉床は火熱を受けて赤変している。

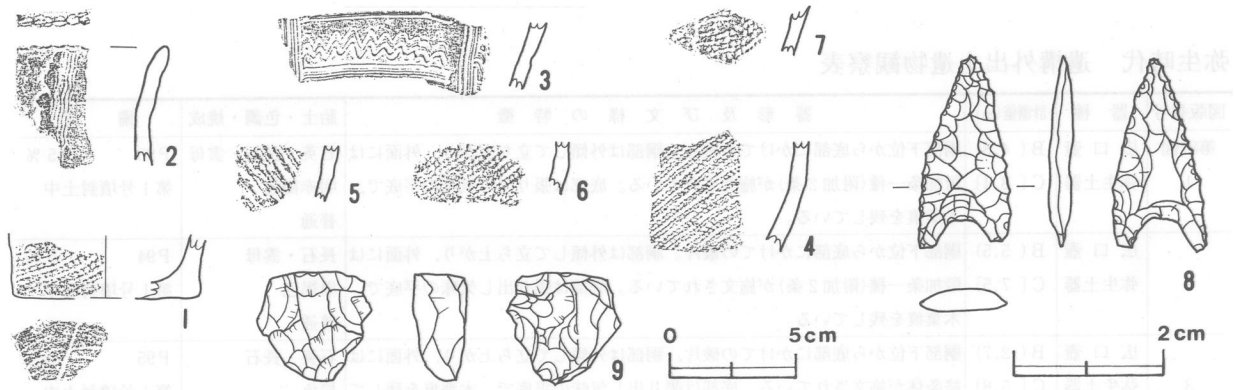
炉土層解説

1　褐　　色　ローム粒子多量，焼土粒子極微量
2　暗 褐 色　ローム粒子少量，焼土粒子極微量
3　暗 褐 色　焼土粒子少量，炭化粒子・ローム粒子極微量
4　暗 赤 褐 色　焼土粒子中量，ローム粒子少量，炭化粒子極微量
5　にぶい赤褐色　焼土粒子中量，ローム粒子少量，炭化粒子極微量

覆土　8層からなり，ロームブロックが不均一に堆積していることから人為堆積と思われる。

土層解説

1　褐　　色　ローム粒子中量，炭化粒子極微量
2　褐　　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック極微量
3　黒 褐 色　ローム粒子中量
4　黒 褐 色　ローム粒子少量
5　赤 褐 色　焼土粒子中量
6　褐　　色　焼土粒子・ローム小ブロック中量
7　暗 褐 色　ローム粒子中量
8　褐　　色　ローム粒子少量



第86図　第37号住居跡出土遺物実測・拓影図

遺物　弥生土器片10点，石製品１点，礫１点が出土している。第86図１は弥生土器広口壺で住居内床面全体から出土している。２～７は弥生土器片の拓影図である。２は広口壺の口縁部片で，口唇部には縄文原体による押圧が施され，外面には６本の櫛歯状工具による縦区画文が施され，区画内は無文としている。３は広口壺の頸部片で，櫛歯状工具による縦区画内に櫛歯状工具による波状文と横走文が施されている。４～７は壺の胴部片で，外面には附加条一種(附加２条)の縄文が施されている。８は石鏃で炉北側の床面から出土している。９の礫は南壁中央の覆土下層から出土している。

所見　時期は，規模・平面形及び出土土器の特徴・文様等が美浦村根本遺跡第31・36号住居跡出土のいわゆる陣屋敷式と呼ばれる土器群と類似していることから弥生時代後期前半と考えられる。

第37号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第86図 1	広口壺 弥生土器	B(2.5) C〔7.4〕	胴部下位から底部にかけての破片。胴部は底部からわずかに外反して立ち上がる。附加条一種の縄文が施文されている。底部は張り出し気味の平底で，木葉痕を残している。	石英・長石 褐色 普通	P69　5％ 床全面

石製品観察表

図版番号	種　別	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石　質	出土地点	備　考
8	石　鏃	2.6	1.2	0.3	0.8	安山岩	炉北側床面	Q 99
9	礫	4.5	4.6	2.1	48.7	石　英	南壁中央覆土下層	Q100

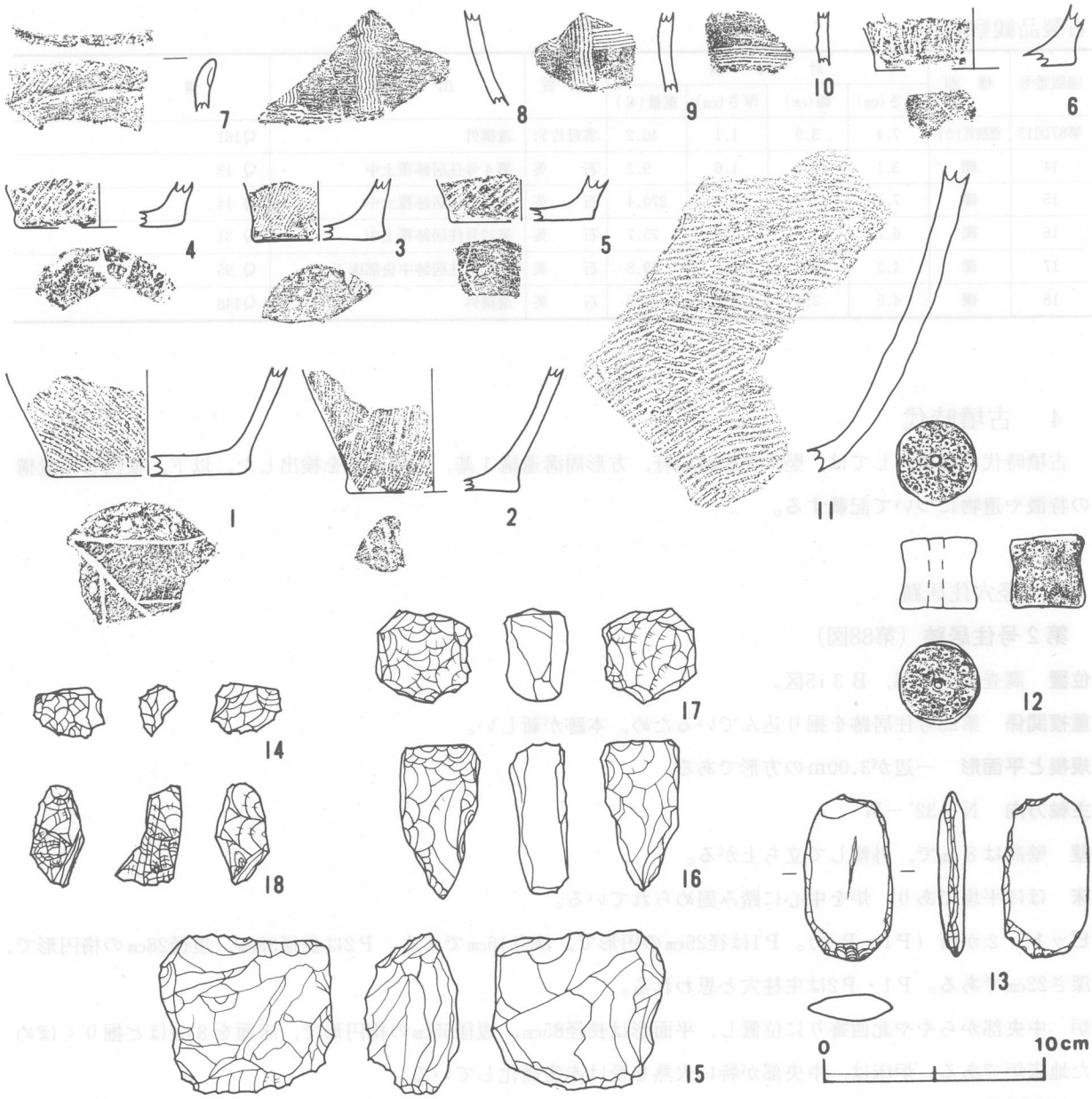
(2)　遺構外出土遺物

今回の調査で，遺構に伴わない弥生土器や礫が出土している。ここでは，弥生土器片については解説をし，その他については実測図及び観察表で一括して報告する。

第87図７～11は弥生時代後期の土器群である。７は広口壺の口縁部から頸部片で，複合口縁で口唇部と口縁部に附加条一種の縄文が施され，頸部は無文である。８～10は広口壺の頸部片である。８は６本の櫛歯状工具による縦区画文が施されている。９は６本の櫛歯状工具による縦区画文が施され，区画内に横走文が施されている。10は６本の櫛歯状工具による横走文が施されている。11は胴部片で，附加条二種（附加１条）の縄文が施され，羽状構成をとる。

弥生時代　遺構外出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第87図 1	広口壺 弥生土器	B(4.8) C〔8.4〕	胴部下位から底部にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がり，外面には附加条一種(附加２条)が施文されている。底部は張り出し気味の平底で，木葉痕を残している。	石英・長石・雲母 明赤褐色 普通	P93　5％ 第１号墳封土中
2	広口壺 弥生土器	B(5.5) C〔7.5〕	胴部下位から底部にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がり，外面には附加条一種(附加２条)が施文されている。底部は張り出し気味の平底で，木葉痕を残している。	長石・雲母 黒褐色 普通	P94　5％ 第１号墳封土中
3	広口壺 弥生土器	B(2.7) C〔5.8〕	胴部下位から底部にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がり，外面には絡条体が施文されている。底部は張り出し気味の平底で，木葉痕を残している。	石英・長石 橙色 普通	P95　5％ 第１号墳封土中



第87図　弥生時代遺構外出土遺物実測・拓影図

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第87図 4	広口壺 弥生土器	B(2.0) C〔7.4〕	胴部下端から底部にかけての破片。胴部は底部から外傾して立ち上がる。外面に附加条一種の縄文が施されている。底部は平底で，木葉痕を残している。	石英・長石・雲母 橙色 普通	P107　5％ 遺構外
5	広口壺 弥生土器	B(1.9) C〔6.4〕	胴部下端から底部にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がり，外面には附加条一種の縄文が施されている。底部は平底で，木葉痕を残している。	石英・長石・雲母 橙色 普通	P108　5％ 遺構外
6	広口壺 弥生土器	B(2.8) C〔8.7〕	胴部下端から底部にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がり，外面に絡条体が施文されている。底部は張り出し気味の平底で，木葉痕を残している。	石英・長石 橙色 普通	P100　5％ 第12号墳周溝覆土中

土製品観察表

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
12	紡錘車	3.7	3.2	0.6	48.7	遺構外	DP8　100％

石製品観察表

図版番号	種別	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第87図13	穂摘具(カ)	7.4	3.9	1.1	46.2	雲母片岩	遺構外	Q161
14	礫	3.1	2.2	1.6	9.2	石英	第4号住居跡覆土中	Q 13
15	礫	7.1	7.8	4.1	270.4	石英	第4号住居跡覆土中	Q 14
16	礫	6.7	3.5	2.5	75.7	石英	第12号住居跡覆土中	Q 31
17	礫	4.2	4.3	2.7	69.8	石英	第33号住居跡中央部床下	Q 95
18	礫	4.5	2.4	2.9	25.8	石英	遺構外	Q148

4　古墳時代

古墳時代の遺構としては，竪穴住居跡5軒，方形周溝遺構1基，古墳5基を検出した。以下，検出した遺構の特徴や遺物について記載する。

(1)　竪穴住居跡

第2号住居跡（第88図）

位置　調査区の東部，B3i5区。

重複関係　第28号住居跡を掘り込んでいるため，本跡が新しい。

規模と平面形　一辺が3.00mの方形である。

主軸方向　N－32°－W

壁　壁高は8cmで，外傾して立ち上がる。

床　ほぼ平坦であり，炉を中心に踏み固められている。

ピット　2か所（P1・P2）。P1は径25cmの円形で，深さ16cmである。P2は長径38cm，短径28cmの楕円形で，深さ22cmである。P1・P2は主柱穴と思われる。

炉　中央部からやや北西寄りに位置し，平面形は長径85cm，短径65cmの楕円形で，床面を8cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床は，中央部が特に火熱を受け赤変硬化している。

炉土層解説
1　にぶい赤褐色　焼土粒子多量,焼土小ブロック中量,炭化粒子少量
2　極暗赤褐色　炭化粒子多量,焼土粒子・灰少量
3　暗赤褐色　焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量

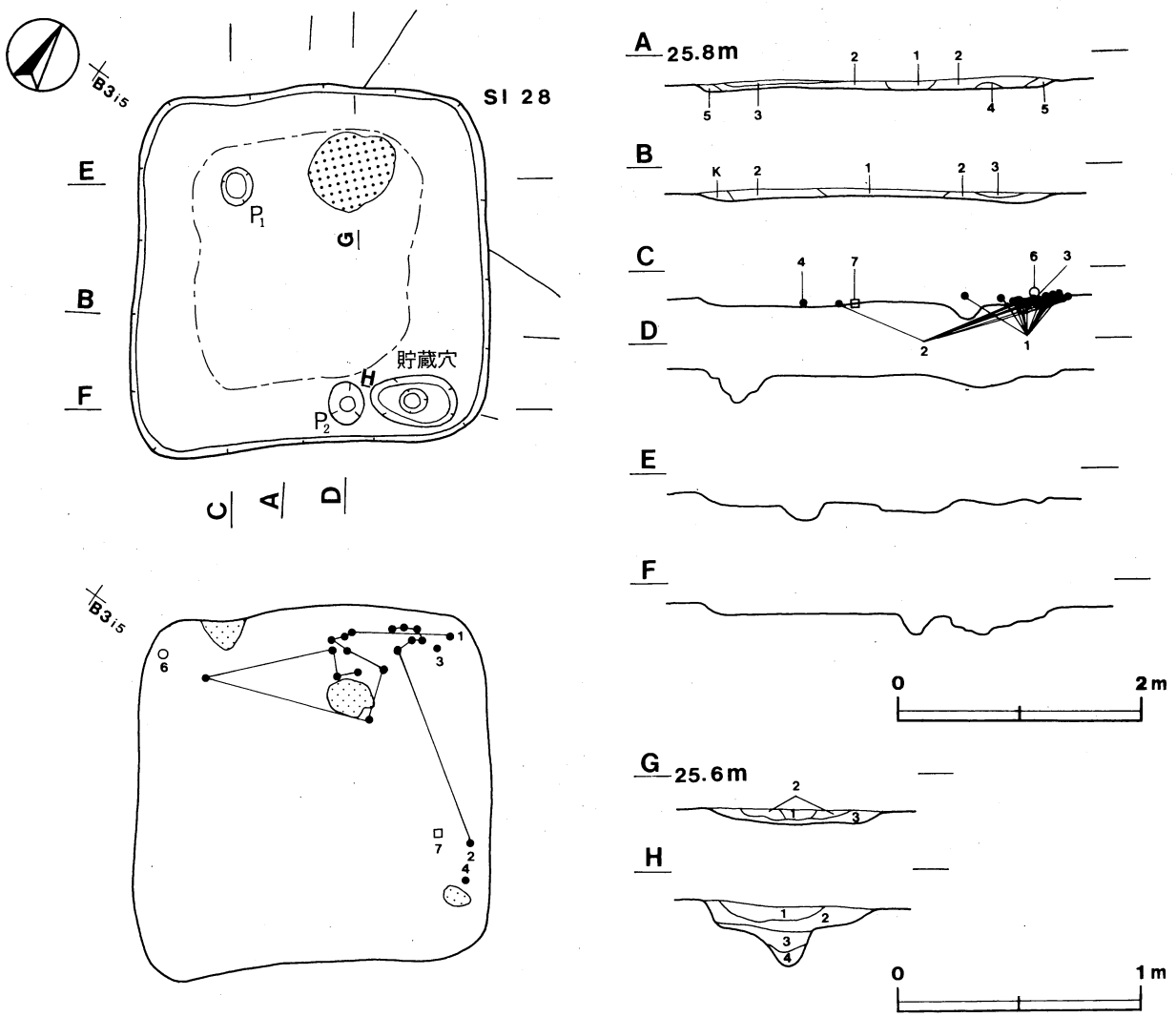
貯蔵穴　南東部に位置し，平面形は長径82cm，短径24cmの楕円形で，深さ27cmである。

貯蔵穴土層解説
1　黒褐色　炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量
2　黒褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
3　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
4　褐　色　ローム粒子多量

覆土　5層からなり，暗褐色土がレンズ状に堆積していることから自然堆積と思われる。

土層解説
1　黒褐色　炭化粒子少量，ローム粒子微量
2　黒褐色　ローム粒子少量
3　黒褐色　炭化粒子少量，ローム粒子微量，焼土粒子極微量
4　極暗褐色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
5　極暗褐色　ローム粒子中量，ローム中ブロック微量

遺物　北部を中心に土師器片60点，縄文土器片45点，弥生土器片26点，土製品1点，石器1点，剥片2点が出土している。第89図1は土師器甕で，炉を中心に床面から散在して出土している。2・3は土師器甕で，北東コーナー部の床面から出土している。4は土師器高坏で，南東部の床面から出土している。5は土師器台付甕の台部片で，北東部の覆土中から出土している。6は球状土錘で，北西コーナーの床面から出土している。7



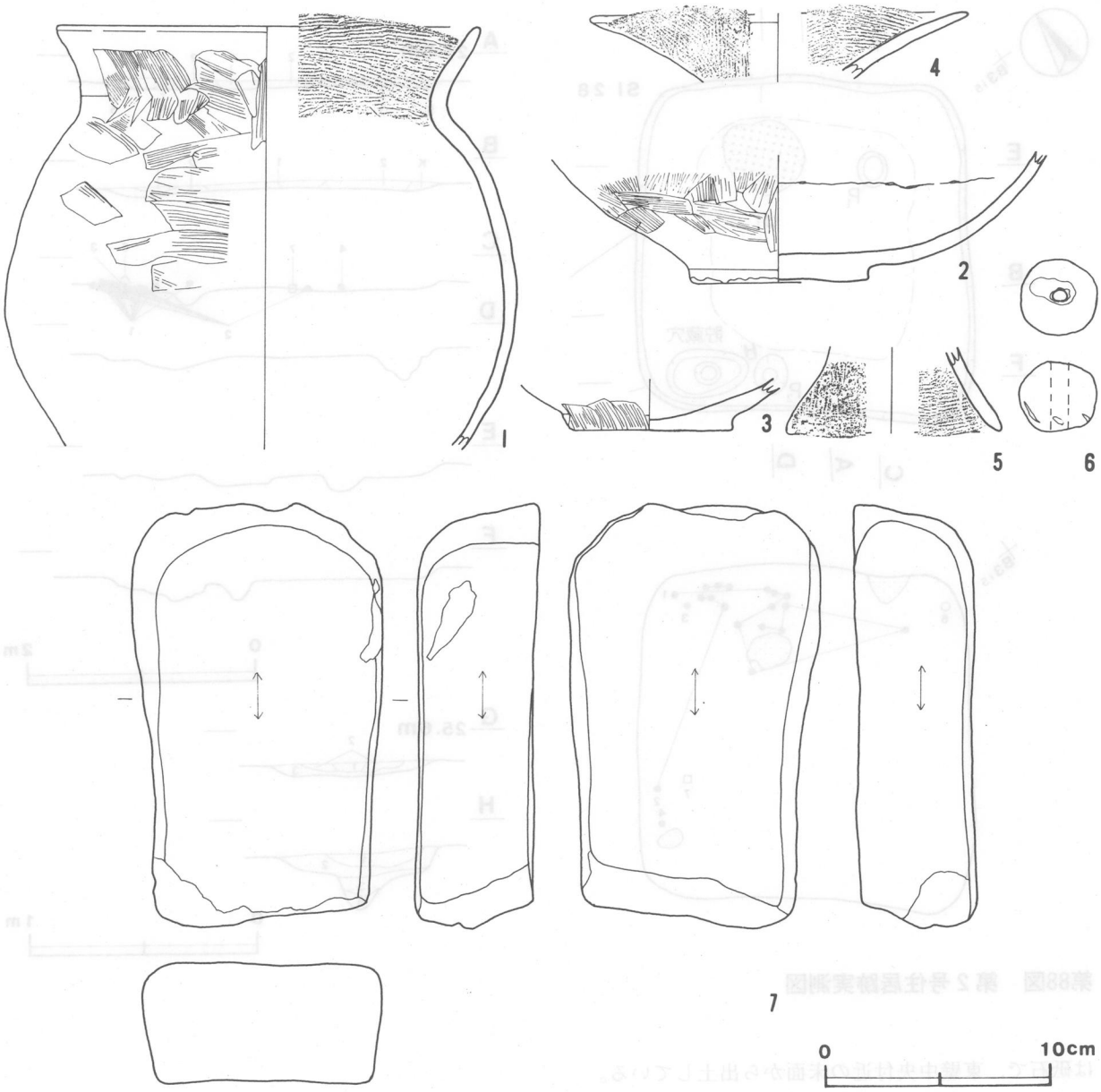
第88図　第２号住居跡実測図

は砥石で，東壁中央付近の床面から出土している。

所見　本跡から縄文土器片・弥生土器片が出土しているが，流れ込みと思われる。北西部や南東部で床面から焼土を確認していることから焼失家屋と思われる。時期は，炉付近の床面からの出土土器の器形の特徴及び文様等から古墳時代前期(五領式期)と考えられる。

第２号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　　考
第89図 1	甕 土師器	A 18.8 B(18.7)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部はくの字状に外傾する。	口縁部から体部外面ハケナデ。口縁部内面ハケナデ。	石英・雲母・赤色粒子 橙色　普通	P５　30% 炉周辺床面
 2	甕 土師器	B(5.7) C　7.8	底部から体部下端にかけての破片。平底。体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。	体部外面ハケナデ。底部ヘラ削り。内面輪積痕あり。	石英・長石・赤色粒子 灰褐色　普通	P６　10% 北東コーナー部床面
 3	甕 土師器	B(2.3) C　7.1	底部から体部にかけての破片。底部は張り出し気味の平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部外面ハケナデ。底部ヘラ削り。	白色粒子・赤色粒子 橙色 普通	P７　5％ 北東コーナー部床面



第89図　第２号住居跡出土遺物実測・拓影図

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第89図 4	高坏 土師器	A〔16.6〕 B(3.0)	坏部片。坏部は外反して口縁部に至る。	坏部内・外面ハケナデ。	石英・長石・雲母 にぶい橙色 普通	P８　5％ 南東部床面
 5	台付甕 土師器	D〔 9.6〕 E(3.9)	高台部片。台部はハの字状に開く。	台部内・外面ハケナデ。	石英・長石 にぶい褐色 普通	P９　5％ 覆土中

土製品観察表

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		径(cm)	長さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
6	球状土錘	3.3	3.4	0.7～0.8	32.7	北西コーナー部床面	DP１　100％

石製品観察表

図版番号	種別	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第89図7	砥石	(18.8)	11.1	5.3	(1960.0)	砂岩	東壁中央付近床面	Q5

第3号住居跡（第90図）

位置　調査区の東部，B3d5区。

重複関係　第5号住居跡を掘り込んでいるので，本跡が新しい。

規模と平面形　長軸4.30m，短軸4.18mのほぼ方形である。

主軸方向　N－53°－W

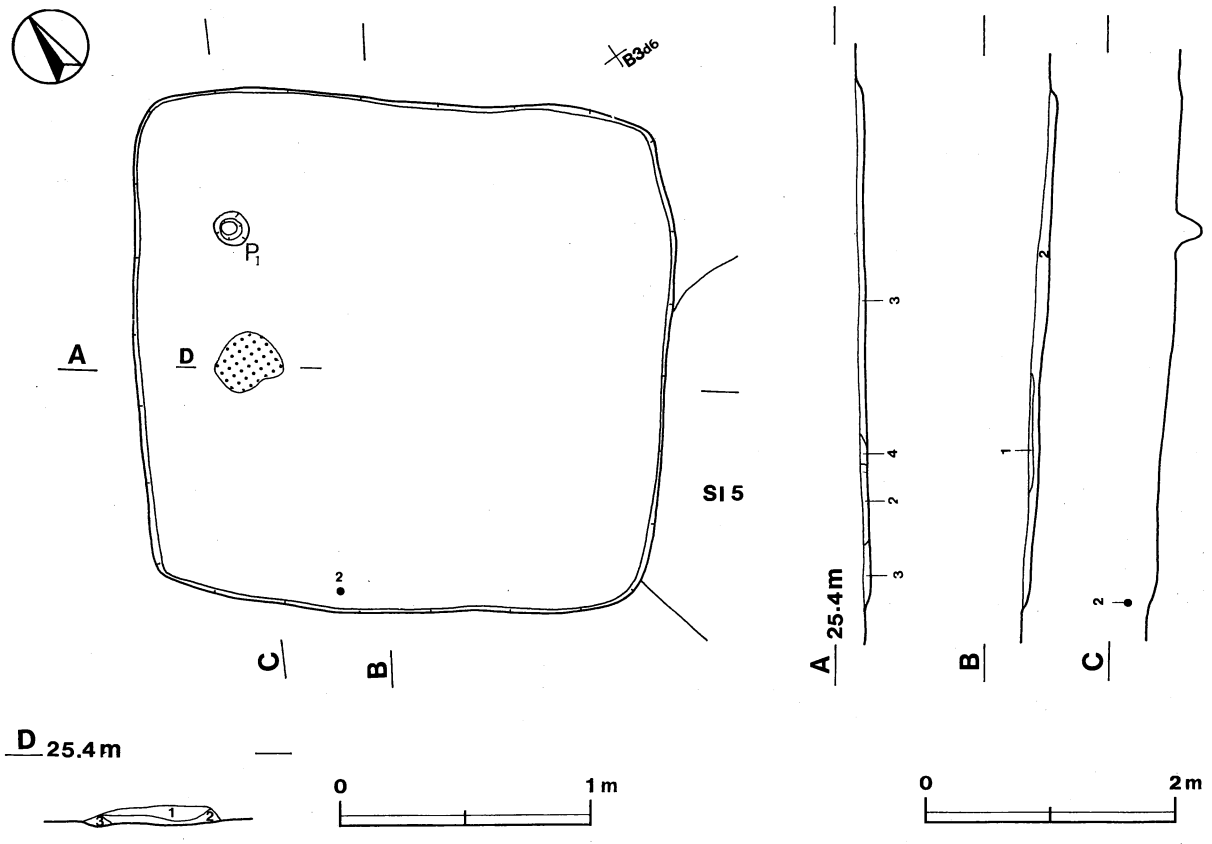
壁　上部は削平され不明であり，壁高は5cmで，垂直に立ち上がる。

床　ほぼ平坦であり，炉の周辺がやや踏み固められている。

ピット　P1は長径32cm，短径25cmの楕円形で，深さ26cmである。位置から主柱穴と思われるが，他は確認できなかった。

炉　中央部から北西寄りに位置し，長径55cm，短径45cmの楕円形で，床面を5cm掘りくぼめた地床炉である。炉床は火熱を受け赤変している。

炉土層解説
1　赤褐色　焼土粒子多量，焼土中ブロック少量，炭化粒子微量
2　暗赤褐色　焼土粒子中量，ローム粒子少量
3　黒褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子微量



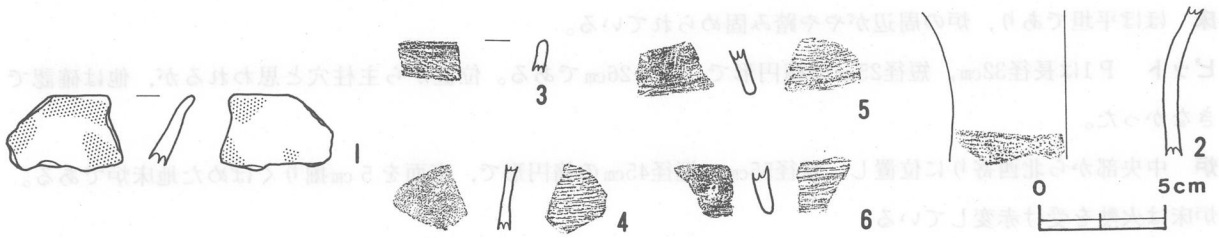
第90図　第3号住居跡実測図

覆土　4層からなり，ローム・焼土を含む黒褐色土がレンズ状に堆積していることから自然堆積である。

土層解説
1　黒褐色　ローム粒子少量，炭化粒子微量
2　赤褐色　焼土粒子多量
3　黒褐色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，焼土粒子微量
4　暗赤褐色　焼土粒子中量，ローム粒子少量，炭化粒子微量

遺物　土師器片15点，縄文土器片38点，弥生土器片6点，剥片3点が出土している。土器はいずれも細片である。第91図1は土師器高坏の口縁部片で，炉の中から出土している。2の弥生土器広口壺の頸部片は，南壁中央付近の床面から出土している。3～6は，土師器片の拓影図である。3は土師器甕の口縁部片，4は土師器甕の体部片で，いずれも外面にハケ目整形が施されている。5・6は土師器台付甕の台部片で，内面は横位のハケ目整形が施されている。

所見　本跡から縄文土器片や弥生土器片も出土しているが，いずれも流れ込みと思われる。時期は，出土土器1・3・5・6の器形から古墳時代前期(五領式期)と考えられる。



第91図　第3号住居跡出土遺物実測・拓影図

第3号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第91図 1	高坏 土師器	B(2.8)	坏部片。坏部は外反して口縁部に至る。	坏部内・外面ナデ。内・外面赤彩痕あり。	石英・長石 橙色 普通	P10 5% 炉内
2	広口壺 弥生土器	B(6.0)	頸部片。頸部は外傾しながら口縁部に至る。	頸部内・外面ナデ。頸部下端に櫛歯状工具による横走文が巡らされている。	石英・長石・雲母 橙色 普通	P11 5% 南壁中央付近床面

第4号住居跡（第92図）

位置　調査区の東部，B3f4区。

重複関係　第45・46号住居跡，第53号土坑を掘り込んでいるため，本跡が新しい。

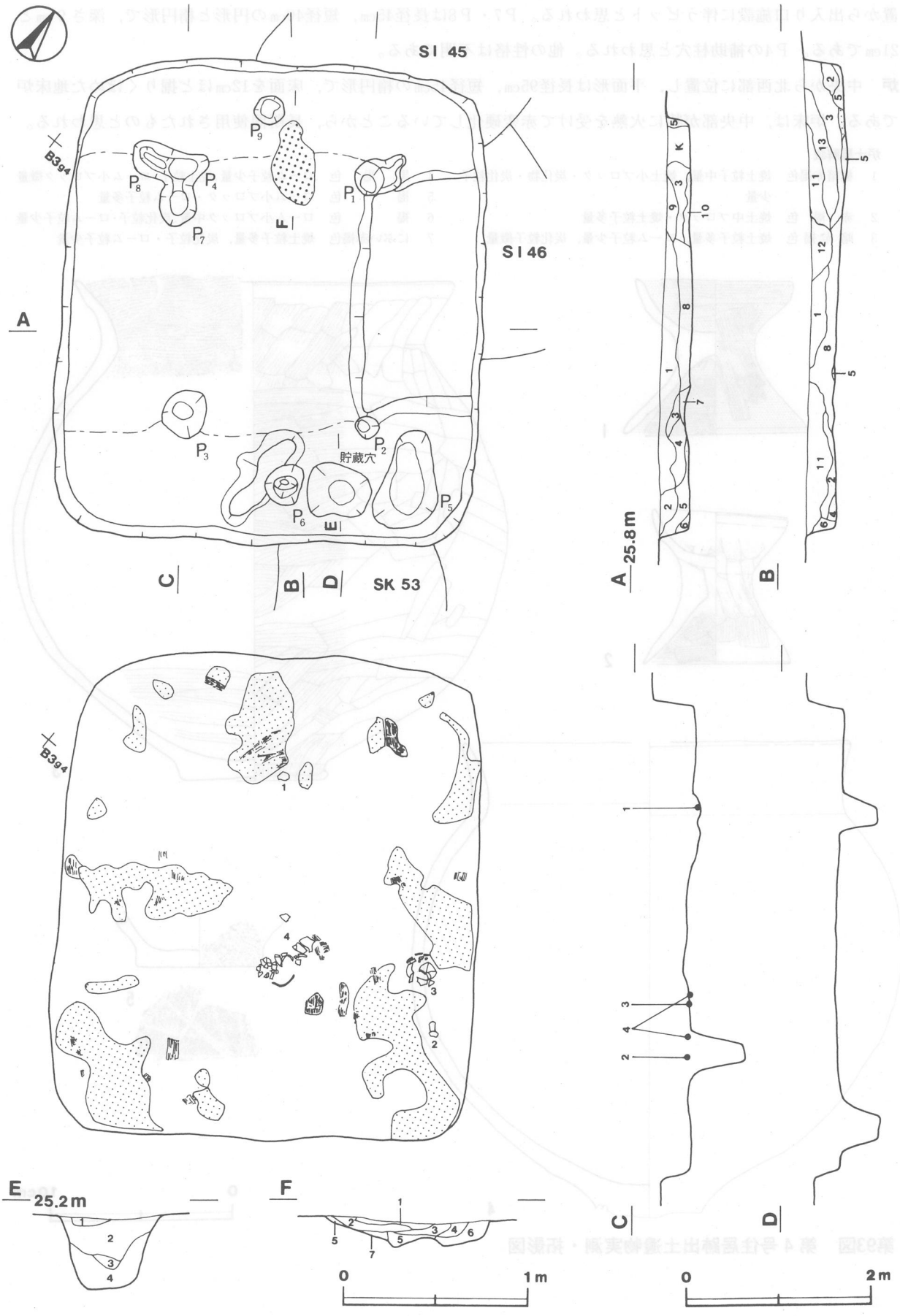
規模と平面形　長軸5.25m，短軸4.60mの隅丸長方形である。

主軸方向　N－45°－W

壁　壁高は25～46cmで，外傾して立ち上がる。

床　東壁際及びP6付近を除けばほぼ平坦で，中央部が特に踏み固められている。東壁に沿って長軸2.62m，短軸1.35mの長方形で，高さ約6cmのベット状に高まった部分が検出された。地山を掘り残している。上面は，ほぼ平坦で硬化している。

ピット　9か所（P1～P9）。P1は径35cmの円形で，深さ40cmである。P2は長径30cm，短径25cmの楕円形で，深さが49cmである。P3は径50cmの円形で，深さ61cmである。P4は長径55cm，短径35cmの楕円形で，深さ10cmである。P1～P4は配列から主柱穴と思われる。P6は径40cmの円形で，深さ35cmである。周辺の高まりと位



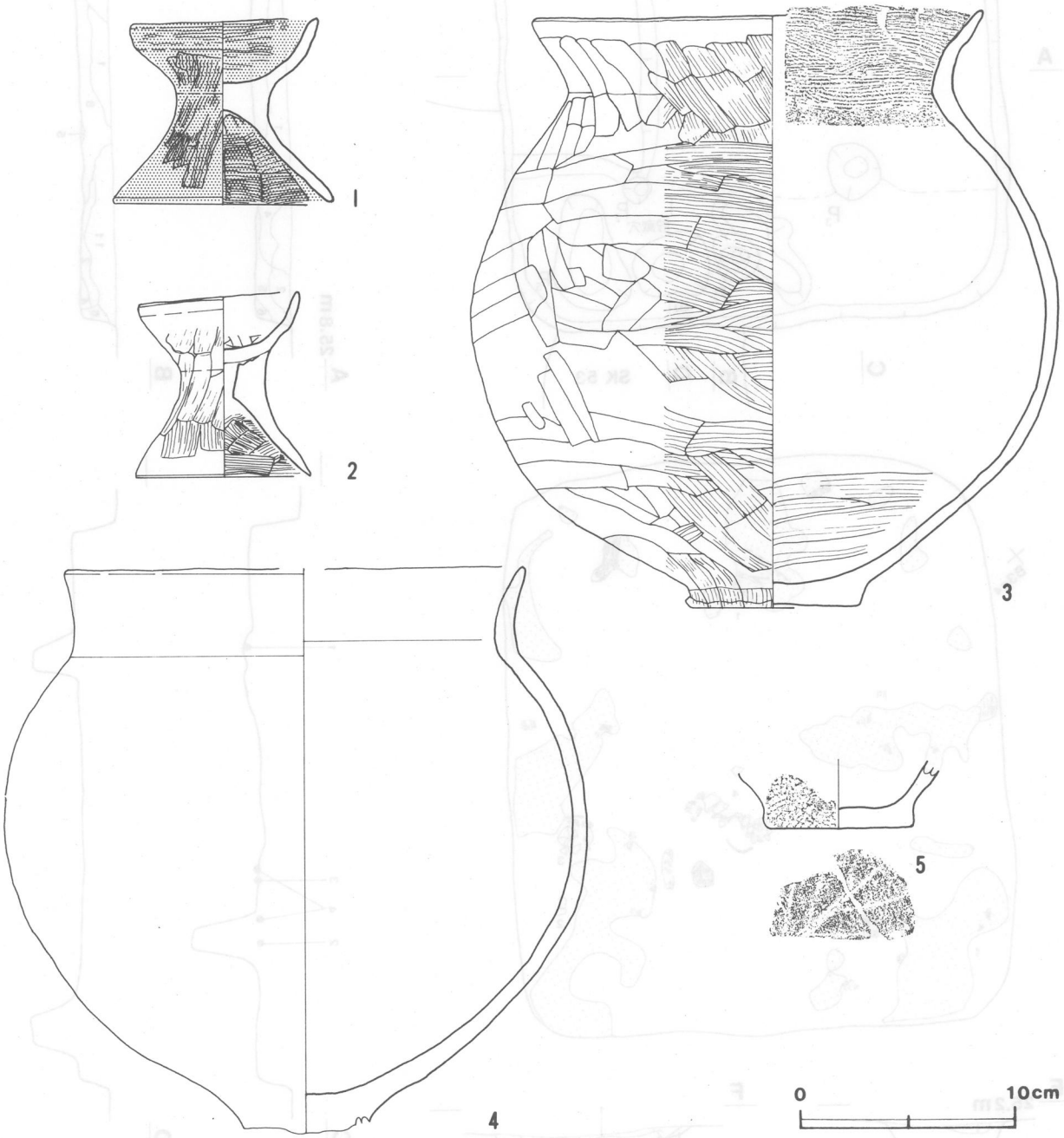
第92図　第４号住居跡実測図

置から出入り口施設に伴うピットと思われる。P7・P8は長径45cm，短径40cmの円形と楕円形で，深さ9cmと21cmである。P4の補助柱穴と思われる。他の性格は不明である。

炉　中央から北西部に位置し，平面形は長径95cm，短径45cmの楕円形で，床面を12cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床は，中央部が特に火熱を受けて赤変硬化していることから，長期間使用されたものと思われる。

炉土層解説

1　極暗赤褐色　焼土粒子中量，焼土小ブロック・炭化物・炭化粒子少量
2　赤　褐　色　焼土中ブロック・焼土粒子多量
3　暗赤褐色　焼土粒子多量，ローム粒子少量，炭化粒子微量
4　黒　褐　色　ローム粒子少量，焼土粒子・ローム小ブロック微量
5　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子多量
6　褐　色　ローム小ブロック中量，炭化粒子・ローム粒子少量
7　にぶい赤褐色　焼土粒子多量，炭化粒子・ローム粒子少量



第93図　第4号住居跡出土遺物実測・拓影図

貯蔵穴　P6の南東部に位置し，平面形は長径70cm，短径55cmの不整楕円形で，深さ45cmである。

貯蔵穴土層解説
1　黒　　色　炭化粒子多量，焼土粒子少量
2　暗 褐 色　ローム粒子中量，炭化粒子・ローム小ブロック少量，炭化物微量
3　極暗褐色　炭化粒子多量
4　暗 褐 色　ローム粒子中量，炭化粒子微量

覆土　13層からなり，中層から下層にローム・焼土を含む黒褐色土が不均一に堆積していることから焼失時に堆積したものと思われ，人為堆積と考えられる。

土層解説
1　黒 褐 色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量
2　黒　　色　ローム粒子中量，炭化粒子極微量
3　暗 褐 色　ローム粒子中量，ローム中ブロック少量
4　極暗褐色　ローム粒子中量，焼土中ブロック少量
5　黒 褐 色　ローム粒子多量，炭化粒子少量
6　褐　　色　ローム粒子多量
7　黒 褐 色　焼土粒子多量
8　黒 褐 色　ローム小ブロック中量，炭化物少量
9　黒 褐 色　ローム粒子少量
10　黒 褐 色　焼土粒子多量
11　黒 褐 色　ローム粒子多量，ローム大・小ブロック中量
12　黒 褐 色　ローム中ブロック中量，ローム小ブロック・ローム粒子少量
13　暗 褐 色　ローム粒子多量，炭化物・ローム中・小ブロック中量

遺物　土師器片105点，縄文土器片88点，弥生土器片24点，剥片10点，礫2点出土している。第93図1の土師器器台は，炉付近の床面から正位の状態で出土している。2の土師器器台は，南東部の床面から横位の状態で出土している。3の土師器甕は，東壁付近の床面から出土している。4の土師器甕は，中央部の床面から横位の状態で出土している。5の弥生土器広口壺は，北西部の覆土中から出土している。

所見　本跡は，焼土や炭化材・炭化物が覆土中層から床面にかけて遺構全体から検出されたことから焼失家屋と思われ，焼失後に埋め戻されたものと考えられる。時期は，規模・平面形及び床面からの出土土器の器形の特徴・文様等から古墳時代前期(五領式期)の4世紀前葉と考えられる。縄文土器片や弥生土器片は流れ込みである。

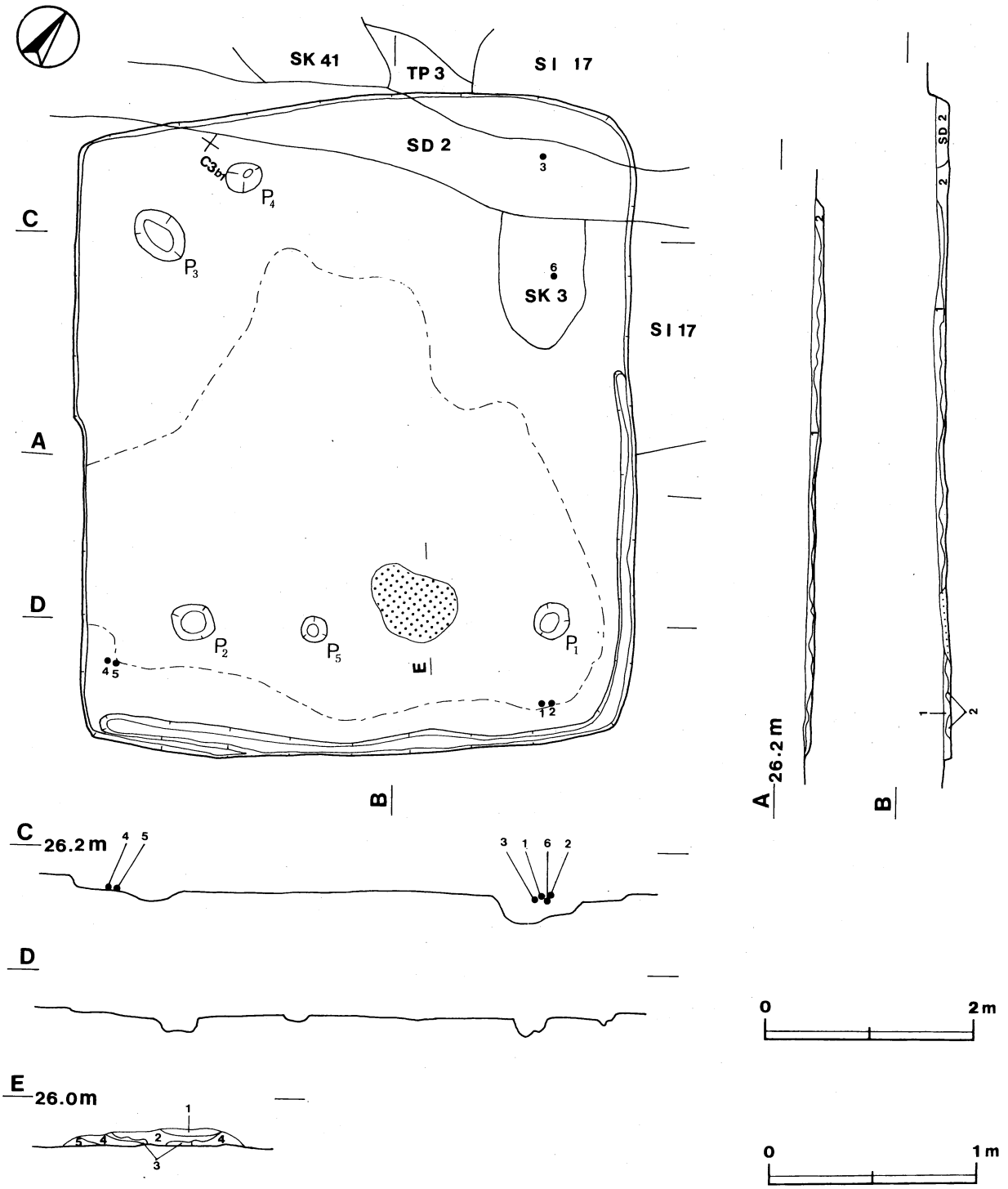
第4号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　　考
第93図 1	器　台 土師器	A 8.5 B 8.4 D 10.1 E 5.0	脚部一部欠損。脚部はハの字状に開く。器受部は内彎気味に外傾して立ち上がる。	脚部外面縦位のハケナデ，内面横位のハケナデ。器受部端部横ナデ，外面縦位のハケナデ，内面ナデ。内・外面赤彩。	石英・長石 橙色 普通	P12　95% 炉付近床面 脚部下端二次焼成
2	器　台 土師器	A 7.2 B 8.4 D 8.0 E 5.2	器受部・脚部一部欠損。脚部はハの字状に開く。器受部は内彎気味に外傾して立ち上がる。器受部整形後，脚部張り付け。	脚部外面縦位のハケナデ，内面横位のハケナデ。器受部端部摩滅，外面縦位のハケナデ，内面ヘラナデ。	石英・長石 にぶい褐色 普通	P13　85% 南東部床面
3	甕 土師器	A 20.5 B 27.2 C 8.1	口縁部一部欠損。底部は張り出し気味の平底。体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部はくの字状に外傾する。体部中央部に最大径を持つ。	口縁部外面縦位のハケナデ，内面横位のハケナデ。体部外面横位のハケナデ，内面ヘラ磨き。底部ヘラ削り。	石英・長石 にぶい褐色 普通	P14　90% 東壁付近床面
4	台付甕 土師器	A〔20.8〕 B(25.8)	台部欠損。底部から口縁部にかけての破片。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部はくの字状に外傾する。体部中央部に最大径を持つ。	口縁部から体部内・外面ナデ。台部剝離。	長石 にぶい橙色 普通	P15　70% 中央部床面
5	壺 弥生土器	B(3.1) C 6.8	底部から胴部下端にかけての破片。体部は内彎気味に立ち上がる。底部は張り出し気味の平底。	体部外面に縄文を施している。底部に木葉痕あり。	石英・雲母・白色粒子 橙色　普通	P16　5% 覆土中

第12号住居跡（第94図）

位置　調査区の東部，C3b1区。

重複関係　第17号住居跡，第41号土坑，第3号陥し穴を掘り込んでいる。また，第2号溝跡，第3号土坑に掘り込まれている。



第94図　第12号住居跡実測図

規模と平面形　長軸6.22m，短軸5.36mの長方形である。

主軸方向　N－35°－W

壁　壁高は14cmで，外傾して立ち上がる。

壁溝　南壁下と東壁下の一部で確認される。上幅15～25cm，下幅5～15cmで，深さ12cmである。断面形はU字形である。

床　ほぼ平坦であり，炉を中心に南側がよく踏み固められている。

ピット　5か所（P1～P5）。P1は径40cmの円形で，深さ15cmである。P2は長径45cm，短径38cmの楕円形で，深さ11cmである。P3は長径65cm，短径40cmの楕円形，深さ9cmである。位置から主柱穴と思われる。P4は長径35cm，短径28cmの楕円形で，深さ47cmである。出入り口施設に伴うピットと思われる。P5は径25cmの円形で，深さ7cmである。性格は不明である。

炉　中央部から南側に位置し，平面形は長径92cm，短径66cmの楕円形で，床面を5cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床は火熱を受け赤変している。

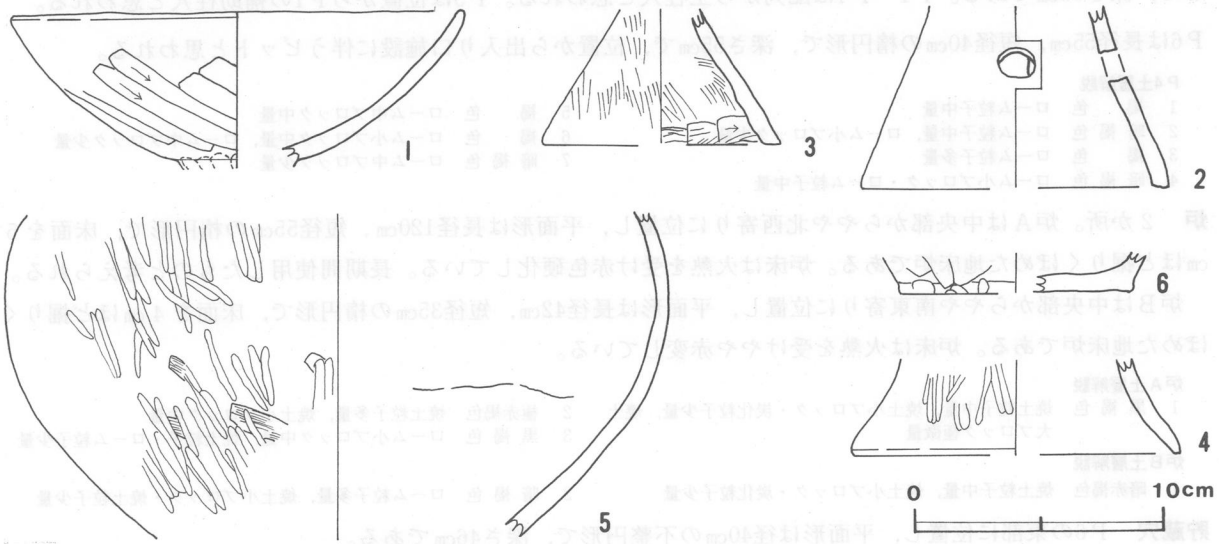
炉土層解説
1　暗赤褐色　焼土粒子・炭化粒子少量
2　明赤褐色　焼土粒子多量，焼土中ブロック中量
3　暗赤褐色　焼土粒子中量，焼土小ブロック炭化粒子少量
4　極暗赤褐色　焼土粒子・ローム粒子少量，炭化粒子微量
5　灰　褐　色　炭化粒子・ローム小ブロック少量

覆土　2層からなり，レンズ状の堆積をしていることから自然堆積である。

土層解説
1　黒　褐　色　焼土粒子・炭化粒子少量
2　黒　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子少量

遺物　土師器片45点，弥生土器片9点，石器1点，礫21点出土している。土器はほとんどが胴部片・体部片で，口縁部，底部片は微量である。第95図1の土師器高坏，2の土師器器台は，南東部の床面から出土している。3の土師器台付甕の台部，6の土師器甕の底部片は北東コーナー部の床面から出土している。4の土師器高坏と5の土師器甕は，南西コーナー部の床面から出土している。

所見　本跡の時期は，遺構の形態及びコーナー部周辺の床面からの出土土器の器形の特徴・文様等から判断して古墳時代前期（五領式期）と考えられる。弥生土器片は流れ込みである。



第95図　第12号住居跡出土遺物実測図

第12号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第95図 1	高坏 土師器	A 17.9 B（6.8）	坏部片。坏部は内彎気味に外傾して立ち上がる。	坏部外面斜位のヘラ削り，内面横ナデ。	石英・長石・白色粒子 明赤褐色　普通	P25　50% 北東部床面
2	器台 土師器	D〔12.2〕 E（7.2）	脚部片。脚部はハの字状に開く。脚部に穿孔あり。	脚部内・外面ナデ。	石英・長石 明赤褐色 普通	P26　35% 北東部床面

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第95図 3	台付甕 土師器	D〔9.6〕 E(5.4)	高台部片。台部はハの字状に開く。	台部外面縦位のハケナデ，内面斜位のハケナデ。	石英・長石 橙色 普通	P27　5％ 北東コーナー床面
4	台付甕 土師器	D〔13.0〕 E(3.8)	高台部片。台部はラッパ状に開く。	台部外面縦位のヘラ磨き。	石英・長石 にぶい橙色 普通	P28　5％ 南東コーナー床面
5	甕 土師器	B(12.9)	体部片。体部は内彎気味に立ち上がる。体部上位に最大径を持つ。	体部外面縦位のヘラ磨き，内面に輪積痕。	石英・長石 にぶい橙色 普通	P29　5％ 南東コーナー床面
6	甕 土師器	B(1.6) C〔9.2〕	体部下端から底部にかけての破片。底部は張り出し気味の平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部外面縦位のヘラ削り。	長石・雲母 にぶい赤褐色 普通	P30　5％ 北東コーナー床面

第33号住居跡（第96図）

位置　調査区の北東部，Ｂ２b8区。

重複関係　西側を第10号墳の周溝に掘り込まれている。

規模と平面形　長軸5.82m，短軸(5.10)ｍで長方形と推定される。

主軸方向　Ｎ－32°－Ｗ

壁　壁高は15cmで，外傾して立ち上がる。

床　ほぼ平坦で，全体的に踏み固められている。ピット周辺は貼床である。

ピット　6か所（Ｐ1～Ｐ6)。Ｐ1・Ｐ5は長径76cm，短径48cmで，深さ72cmと34cmである。Ｐ2は径48cmの円形で深さ42cmである。Ｐ3は長径60cm，短径45cmの楕円形で，深さ49cmである。Ｐ4は長径55cm，短径45cmの楕円形で，深さ53cmである。Ｐ1～Ｐ4は配列から主柱穴と思われる。Ｐ5は位置からＰ1の補助柱穴と思われる。Ｐ6は長径55cm，短径40cmの楕円形で，深さ55cmで，位置から出入り口施設に伴うピットと思われる。

Ｐ4土層解説
1　褐　色　ローム粒子中量
2　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
3　褐　色　ローム粒子多量
4　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子中量
5　褐　色　ローム中ブロック中量
6　褐　色　ローム小ブロック中量，ローム中ブロック少量
7　暗褐色　ローム中ブロック少量

炉　2か所。炉Ａは中央部からやや北西寄りに位置し，平面形は長径120cm，短径55cmの楕円形で，床面を５cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床は火熱を受け赤色硬化している。長期間使用したものと考えられる。

炉Ｂは中央部からやや南東寄りに位置し，平面形は長径42cm，短径35cmの楕円形で，床面を４cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床は火熱を受けやや赤変している。

炉Ａ土層解説
1　黒褐色　焼土粒子中量，焼土小ブロック・炭化粒子少量，焼土大ブロック極微量
2　極赤褐色　焼土粒子多量，焼土小ブロック中量
3　黒褐色　ローム小ブロック中量，焼土粒子・ローム粒子少量

炉Ｂ土層解説
1　暗赤褐色　焼土粒子中量，焼土小ブロック・炭化粒子少量
2　暗褐色　ローム粒子多量，焼土小ブロック・焼土粒子少量

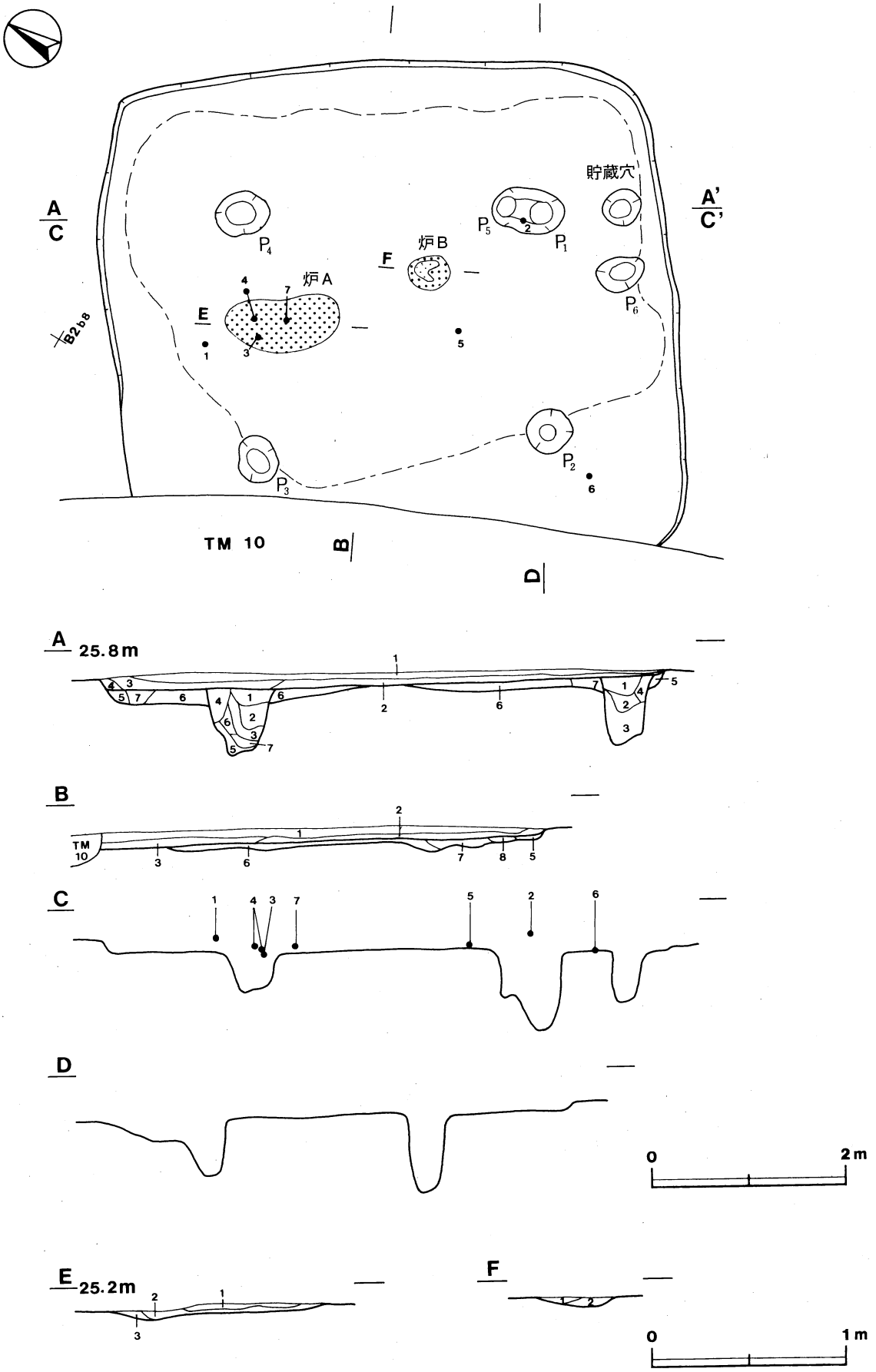
貯蔵穴　Ｐ6の東部に位置し，平面形は径40cmの不整円形で，深さ46cmである。

貯蔵穴土層解説
1　黒　色　ローム粒子中量
2　暗褐色　ローム小ブロック中量
3　褐　色　ローム小ブロック中量
4　褐　色　ローム小ブロック多量

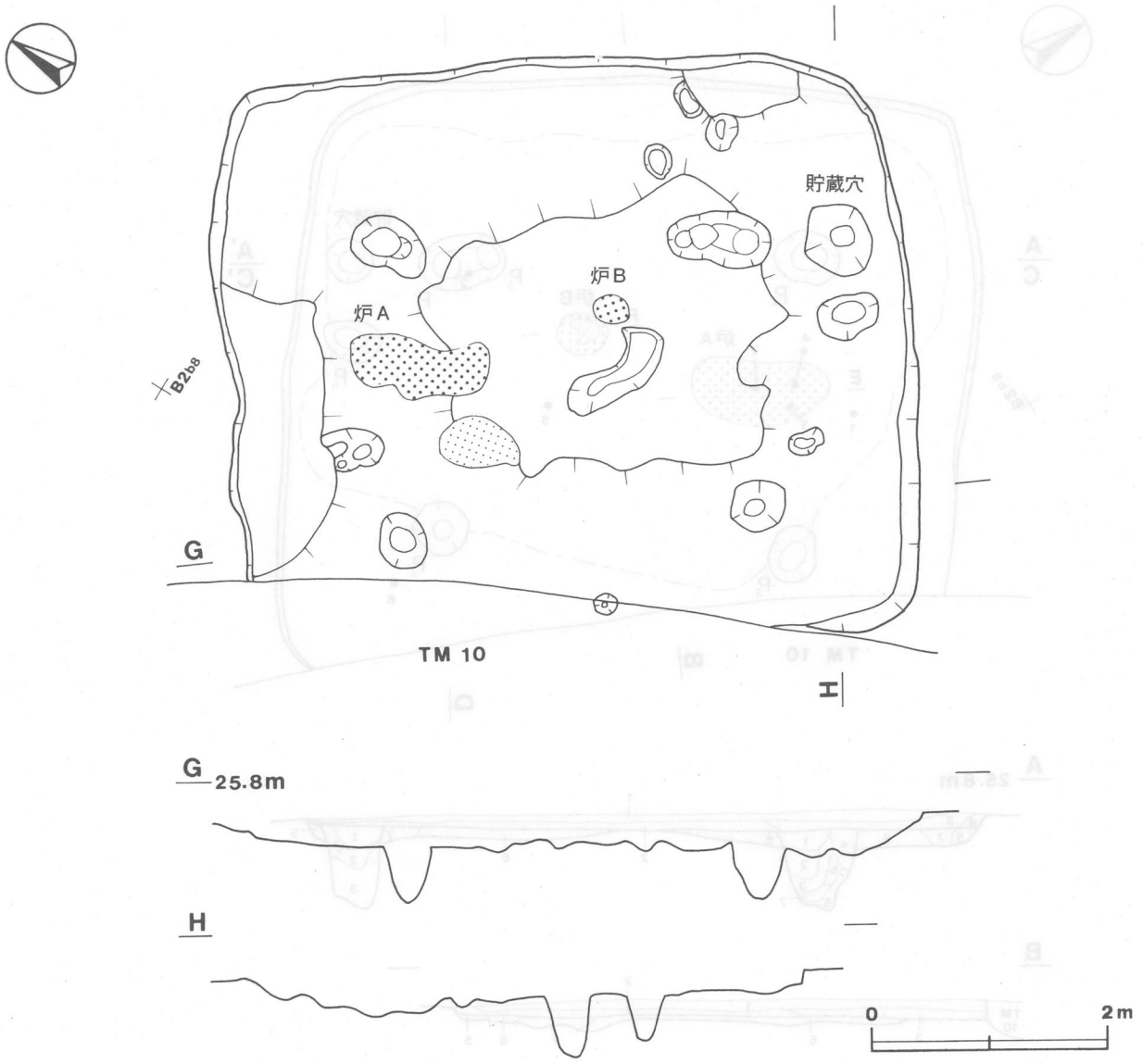
覆土　４層からなり，暗褐色土がレンズ状に堆積していることから，自然堆積である。床下の掘り方は中央部が平坦で，中央部から壁方向に徐々に掘り込まれ深くなっている。

土層解説
1　黒褐色　ローム粒子中量
2　暗褐色　ローム粒子中量
3　黒褐色　ローム粒子少量，焼土粒子微量
4　暗褐色　ローム粒子中量

掘り方土層解説
5　暗褐色　ローム粒子中量（床非常に硬化している部分）
6　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量（床硬化部）
7　暗褐色　ローム小ブロック中量（床硬化部）
8　暗褐色　ローム粒子中量（床硬化部）

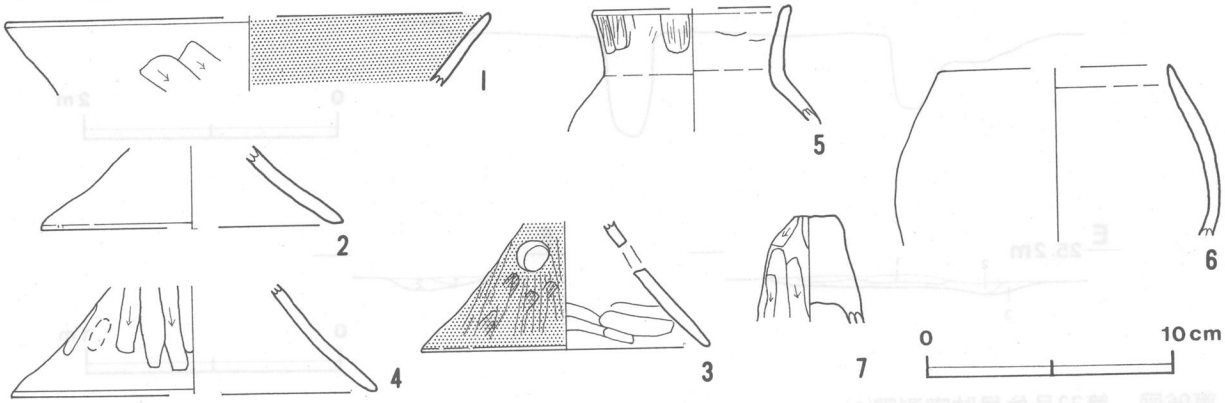


第96図　第33号住居跡実測図(1)



第97図　第33号住居跡実測図(2)

遺物　土師器片65点，縄文土器片44点，弥生土器片５点，石英片１点出土している。第98図１の土師器高坏，３・４の土師器器台，７の土師器粗製器台は炉Ａ付近の床面から，２の土師器高坏は南東部の覆土中層から出土している。５の土師器壺は中央部の覆土下層から出土している。６の土師器壺は東壁際の覆土下層から出土している。



第98図　第33号住居跡出土遺物実測図

所見　本跡の時期は，床面から出土している遺物の器形の特徴・文様等から古墳時代前期(五領式期)の４世紀中葉と考えられる。縄文土器片と弥生土器片は流れ込みである。

第33号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第98図 1	高坏 土師器	A〔19.2〕 B(2.9)	坏部片。坏部は外傾して立ち上がり，口縁部に至る。	坏部外面斜位のハケナデ後，横ナデ。内面横ナデ。内部赤彩。	石英・長石 橙色 普通	P59 5％ 炉１付近床面
2	高坏 土師器	D〔12.0〕 E(3.2)	脚部片。脚部はラッパ状に開く。	脚部内面横位のハケナデ。外面摩耗。	砂粒・赤色粒子 橙色 普通	P60 5％ 南東部覆土中層
3	器台 土師器	D 11.6 E(5.1)	脚部片。脚部はラッパ状に開く。脚部に３孔。	脚部外面縦位のハケナデ後，縦位のヘラ磨き。内面ハケナデ。外面赤彩。	石英 にぶい赤褐色 普通	P61 40％ 炉１付近床面
4	器台 土師器	D〔14.4〕 E(4.3)	脚部片。脚部はラッパ状に開く。脚部に穿孔あり。	脚部外面縦位のハケナデ。内面横位のハケナデ後，縦位のヘラ削り。	石英・長石・雲母 橙色 普通	P62 10％ 炉１付近床面
5	壺 土師器	A〔 7.8〕 B(4.8)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部はわずかに外傾する。	口縁部外面縦位のハケナデ。体部外面ナデ。口縁部内面輪積痕。	石英・雲母 浅黄橙色 普通	P63 10％ 中央部覆土下層
6	壺 土師器	A〔 9.2〕 B(6.9)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎気味に立ち上がり口縁部に至る。	口縁部内面横ナデ。	長石・小礫 明赤褐色 普通	P64 10％ 東壁際覆土下層
7	粗製器台 土師器	B(4.3)	器受部から脚部上位にかけての破片。脚部はハの字状に開くと思われる。	器受部・脚部外面ヘラ削り。	石英・長石・赤色粒子 にぶい橙色 普通	P65 10％ 炉１付近床面

(2)　方形周溝遺構

第１号方形周溝遺構（第99図）

確認状況　第１号墳の墳丘西方下で確認された。南西部は第１号墳の周溝で削平されている。

位置　調査区の西部，Ｃ１f0区。西に霞ケ浦を望む舌状台地の傾斜部に位置する。

重複関係　第37号住居跡を掘り込んでいる。また，第１号墳の盛土下にあり，本跡が古い。

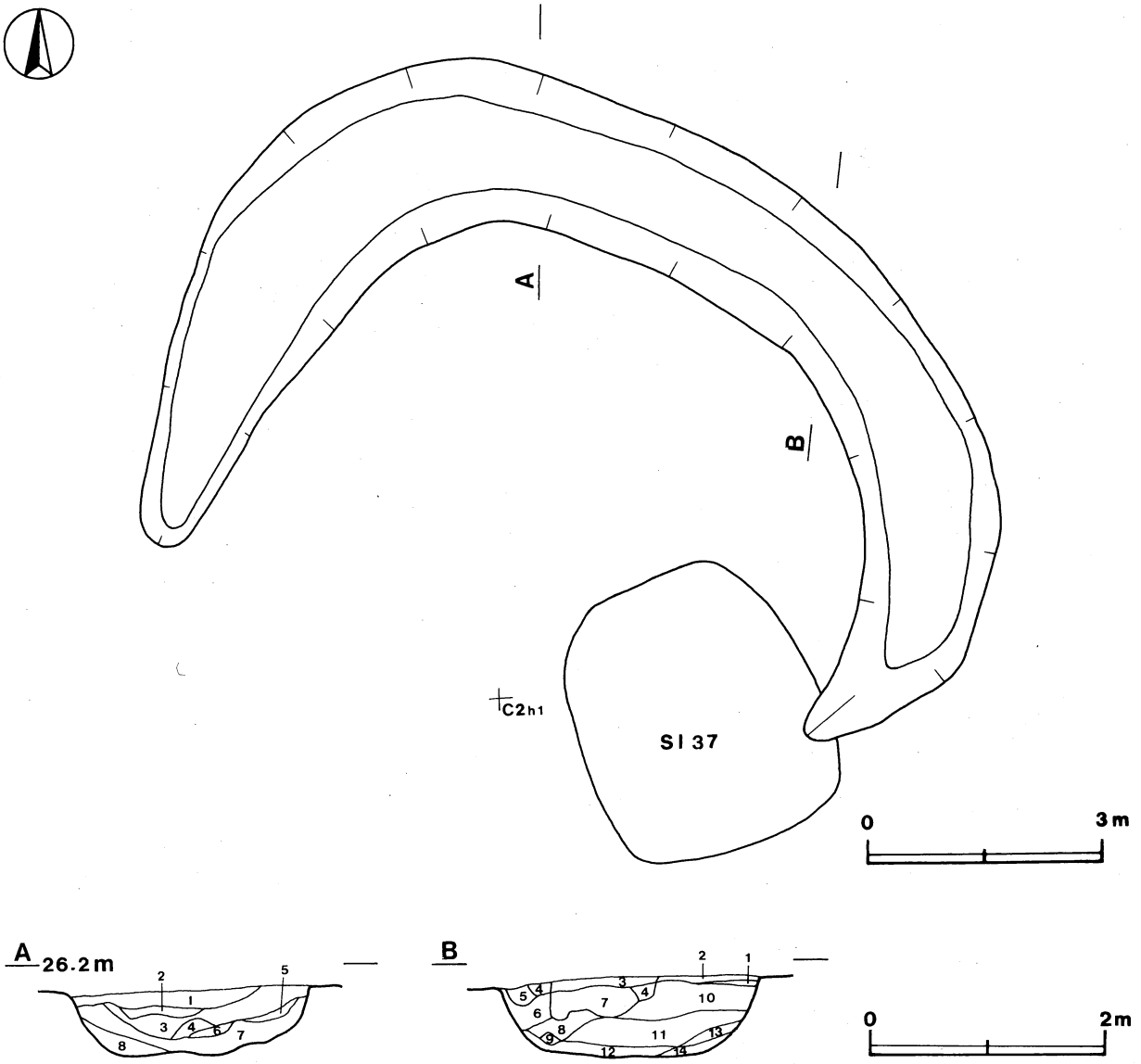
規模　方台部は，東西方向が8.00mで，南北方向は確認できたのが(5.00)mである。平面形は方形と推定される。

周溝　上幅1.85～2.40m，下幅0.80～1.35m，深さ0.7mで，断面形は逆台形状である。覆土の堆積状況は下層は自然堆積であり，上層は第１号墳の盛土である。

周溝土層解説

A－A′
1　褐　色　ローム粒子多量，ローム中・小ブロック中量，炭化粒子微量
2　暗褐色　ローム中・小ブロック・ローム粒子中量
3　黒褐色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，焼土中・小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量
4　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，炭化粒子微量
5　黒褐色　ローム粒子少量，炭化粒子・ローム小ブロック微量
6　極暗褐色　焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子微量
7　黒褐色　ローム小ブロック中量，ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
8　灰褐色　ローム小ブロック中量，ローム中ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量

B－B′
1　暗褐色　ローム小ブロック中量
2　褐　色　ローム粒子少量
3　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子少量
4　褐　色　ローム中・小ブロック・ローム粒子多量
5　暗褐色　ローム粒子少量
6　褐　色　ローム粒子少量，炭化粒子微量
7　褐　色　ローム粒子中量
8　暗褐色　ローム粒子少量，ローム小ブロック極微量
9　褐　色　ローム粒子少量
10　黒褐色　ローム小ブロック少量，炭化粒子極微量
11　黒褐色　ローム粒子少量，炭化粒子極微量
12　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子中量
13　暗褐色　ローム粒子中量
14　黒褐色　ローム粒子微量



第99図　第１号方形周溝遺構実測図

遺物　周溝の覆土中から縄文土器片35点が出土している。いずれも小破片であり，図示できるものはない。すべて流れ込みで，本跡に伴うものでない。

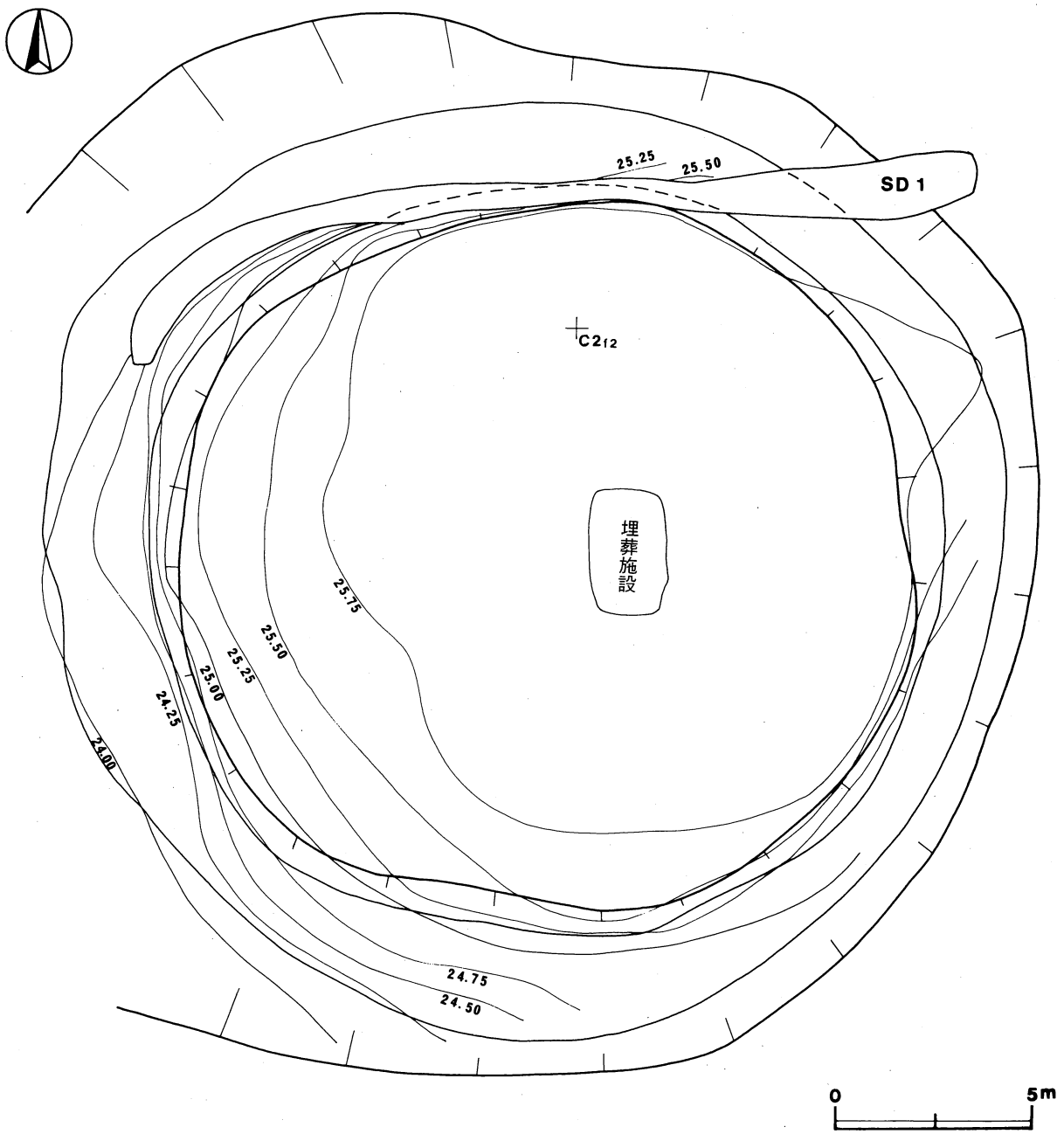
所見　本跡の時期は限定できないが，重複関係から弥生時代後期から古墳時代後期の間と考えられる。埋葬施設は検出されなかったが，性格的に方形周溝墓と思われる。

(3)　古墳

下郷古墳群は12基からなる古墳群とされていた[1]。その内の２基が調査区域内に存在する[2]ため調査を行った。また，調査区中央部で新たに３基の古墳が検出され，今回，合計５基の古墳を調査した。土浦市教育委員会と協議の結果，調査以前から確認されていた２基の古墳を第１号墳，第２号墳とし，新たに検出された古墳は検出順に第10号墳，第11号墳，第12号墳とし調査した。以下，検出された遺構及び遺物について記載する。

第１号墳（第100～103図）

現況と確認状況　調査前の現況は山林と竹林であった。墳丘の保存状況は比較的よく，調査以前からその存在



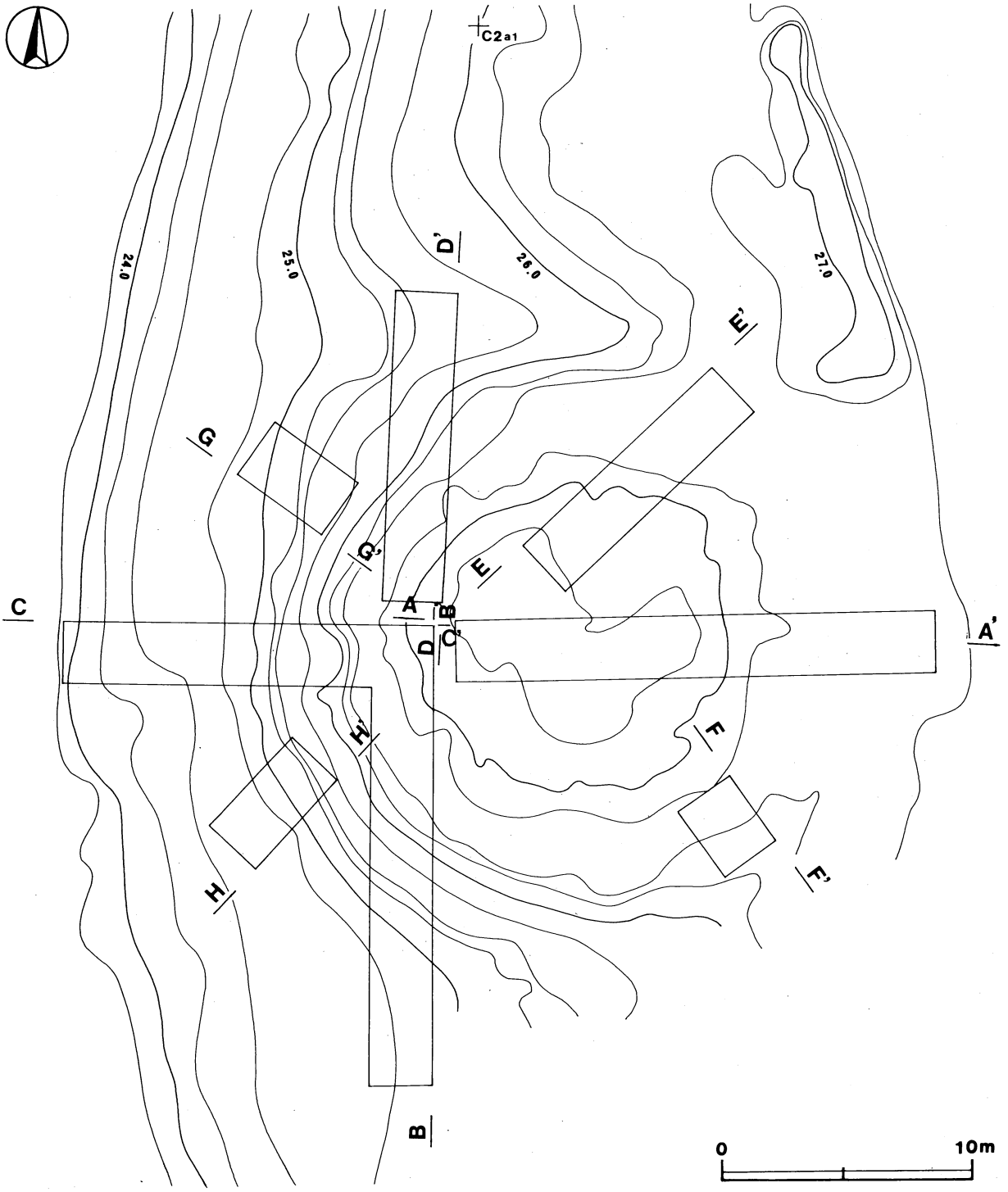
第100図　第１号墳実測図(1)

が確認されていた。しかし，調査の過程において周溝及び墳丘が後世の墓壙や抜根によって撹乱されていることが確認された。

位置　調査区西部，Ｃ２f2区を中心に検出されている。西に霞ケ浦を望む舌状台地の傾斜部に位置する。本跡の西に向かって傾斜がみられる。また，約70m北側に第２号墳がある。

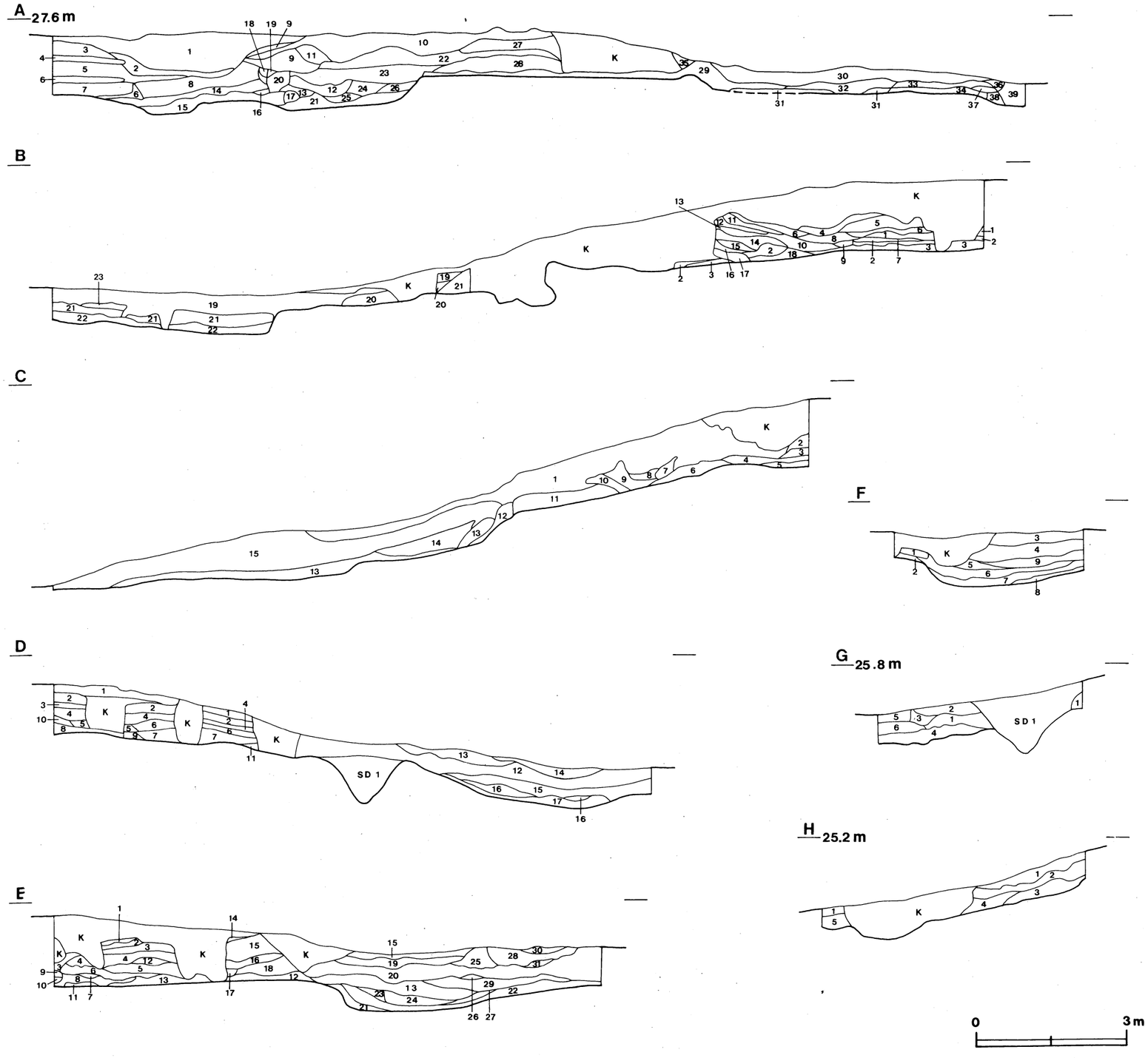
重複関係　第１号溝，第39・40号土坑に掘り込まれており，本跡が古い。また，第１・36・37号住居跡を掘り込んでいる。

墳形及び規模　円墳。西側の周溝は斜面部で４分の１ほどが削りだされている。墳丘の正確な規模は不明であるが，南北で約17.8mほどである。

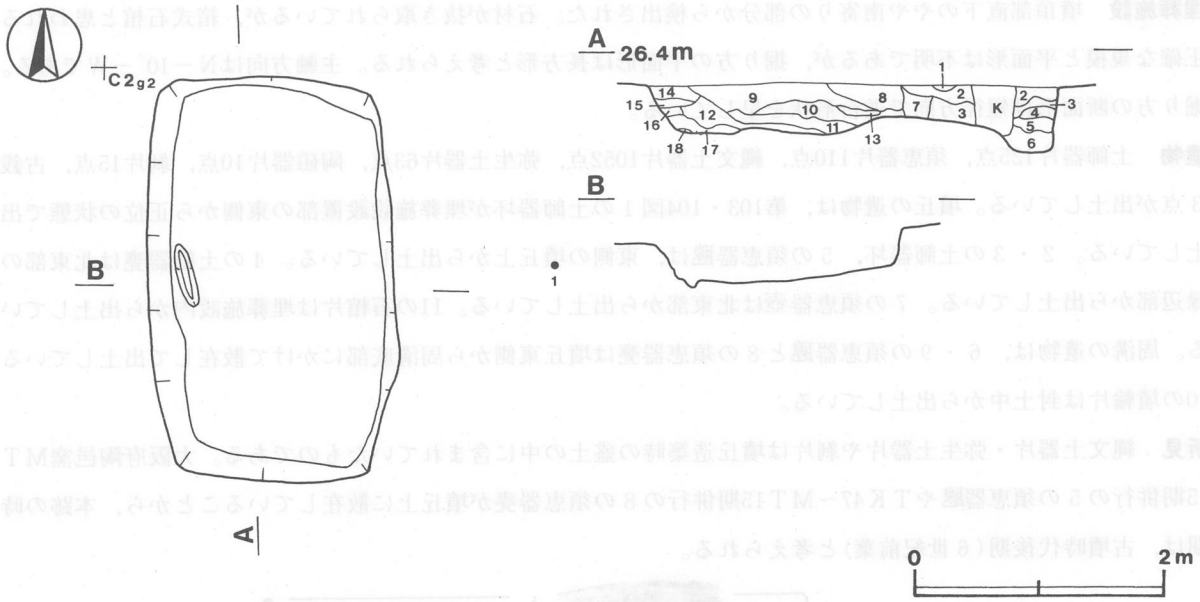


第101図　第１号墳実測図(2)

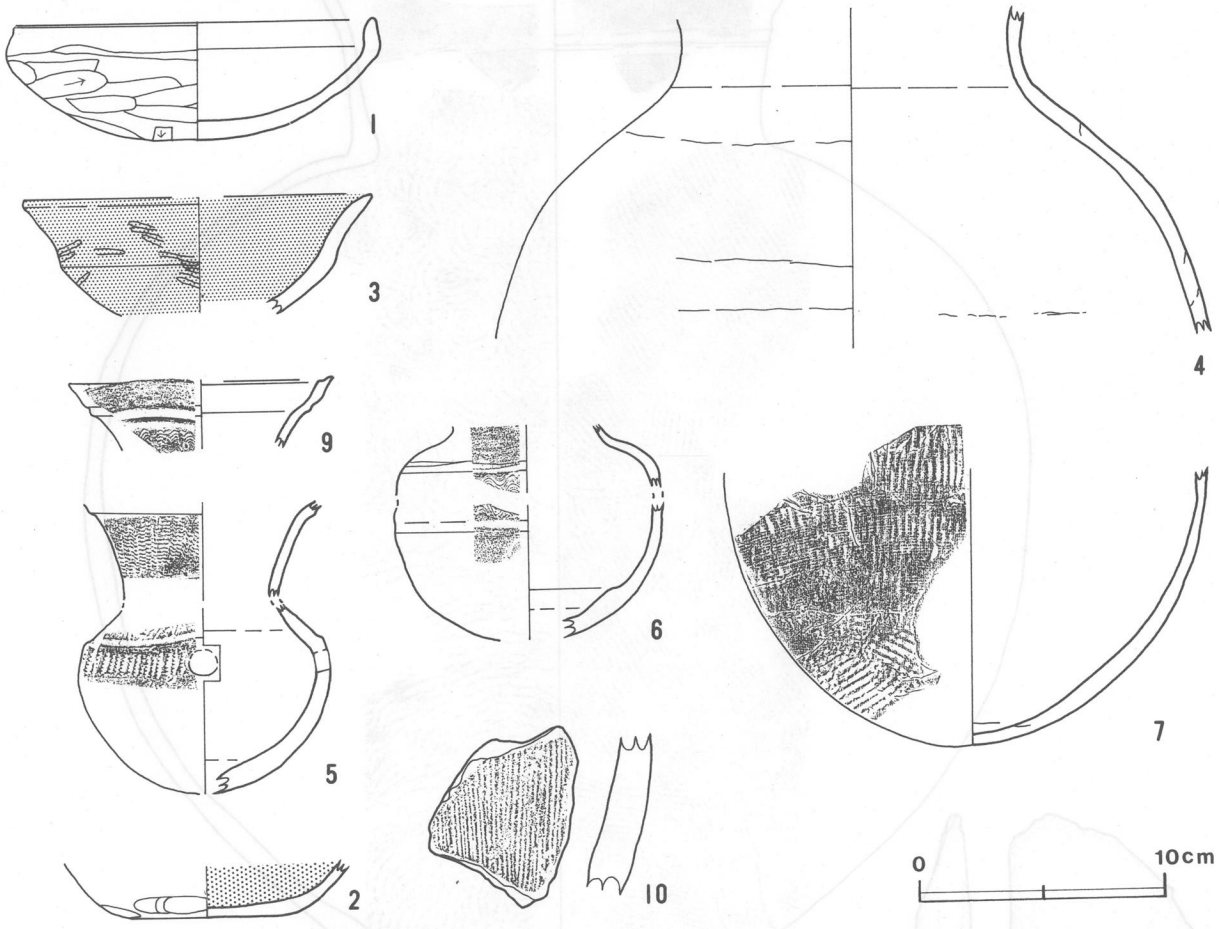
墳丘　高さは1.50mで，封土部分の高さは1.25mである。標高26.3～26.4mのところで旧表土と考えられる黒褐色土が検出された。盛り方は西側の傾斜部を盛りながら水平に盛り土している。下層は，ローム小ブロック及びローム粒子を含む暗褐色土で，おおむね締まりがある。中層は，黒褐色土・暗褐色土で厚さ10～40cmの層から構成されており，おおむね締まりがある。上層は，ローム小ブロック及びローム粒子を主体とする10～30cmの褐色土の層で構成され，締まりは弱い。



第102図　第１号墳実測図(3)



第103図　第１号墳埋葬施設実測図



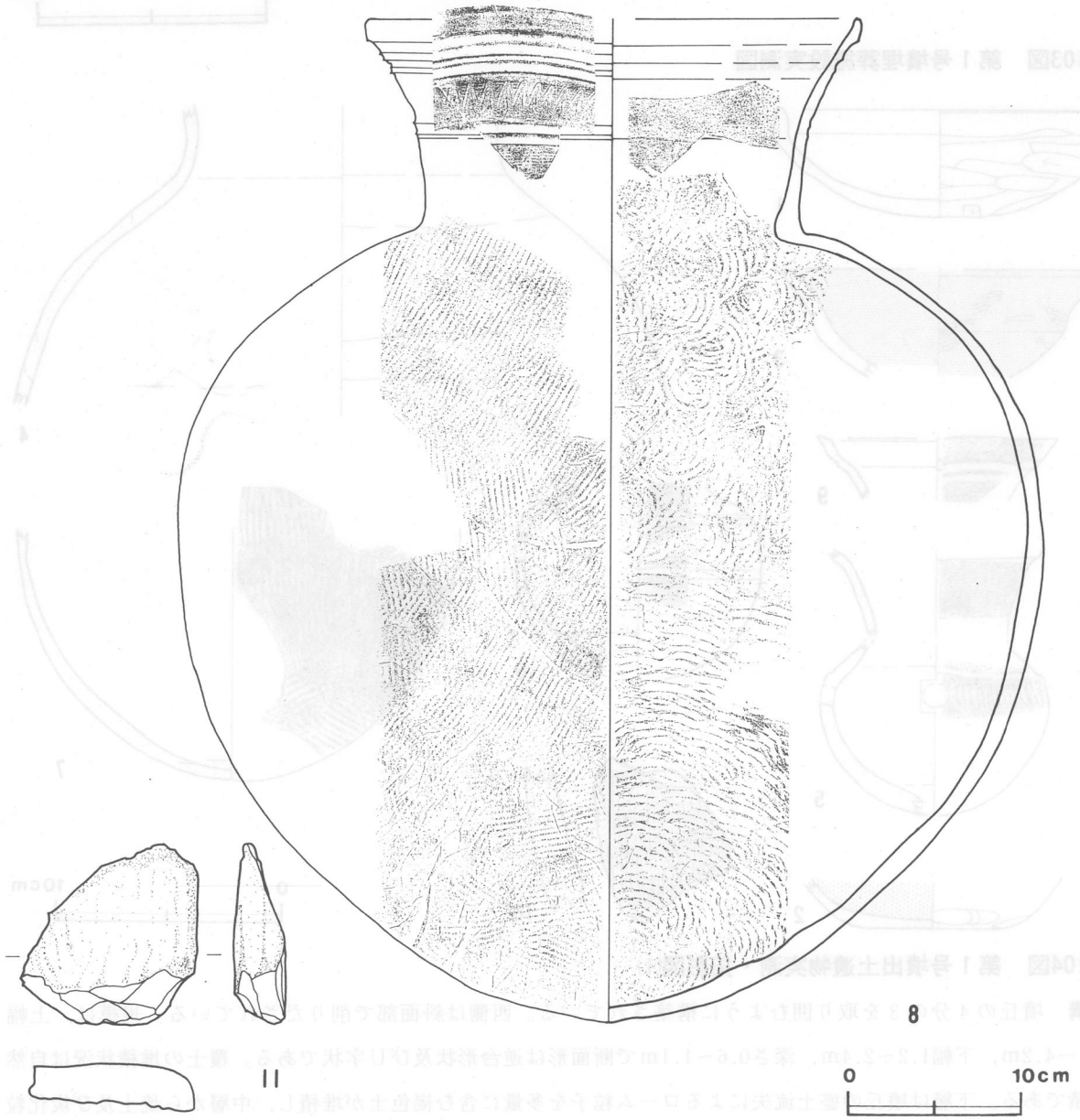
第104図　第１号墳出土遺物実測・拓影図(1)

周溝　墳丘の４分の３を取り囲むように構築されている。西側は斜面部で削りだされている。規模は，上幅3.1～4.2m，下幅1.2～2.4m，深さ0.6～1.1mで断面形は逆台形状及びU字状である。覆土の堆積状況は自然堆積である。下層は墳丘の盛土流失によるローム粒子を多量に含む褐色土が堆積し，中層から焼土及び炭化粒子を微量に含む黒褐色土が堆積している。

埋葬施設　墳頂部直下のやや南寄りの部分から検出された。石材が抜き取られているが，箱式石棺と思われる。正確な規模と平面形は不明であるが，掘り方の平面形は長方形と考えられる。主軸方向はＮ－10°－Ｗである。掘り方の断面形は短径方向で逆台形状を呈している。

遺物　土師器片125点，須恵器片110点，縄文土器片1052点，弥生土器片63点，陶磁器片10点，剝片15点，古銭３点が出土している。墳丘の遺物は，第103・104図１の土師器坏が埋葬施設設置部の東側から正位の状態で出土している。２・３の土師器坏，５の須恵器𤭯は，東側の墳丘上から出土している。４の土師器甕は北東部の縁辺部から出土している。７の須恵器壺は北東部から出土している。11の石棺片は埋葬施設内から出土している。周溝の遺物は，６・９の須恵器𤭯と８の須恵器甕は墳丘東側から周溝底部にかけて散在して出土している。10の埴輪片は封土中から出土している。

所見　縄文土器片・弥生土器片や剝片は墳丘造築時の盛土の中に含まれていたものである。大阪府陶邑窯ＭＴ15期併行の５の須恵器𤭯やＴＫ47～ＭＴ15期併行の８の須恵器甕が墳丘上に散在していることから，本跡の時期は，古墳時代後期（６世紀前葉）と考えられる。



第105図　第１号墳出土遺物実測・拓影図(2)

墳丘土層解説

A－A′

1 暗褐色 ローム粒子多量，ローム小ブロック少量
2 暗褐色 ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，炭化粒子微量
3 暗褐色 ローム粒子多量，ローム中ブロック微量
4 極暗褐色 炭化粒子・ローム粒子中量，ローム小ブロック微量
5 褐色 ローム粒子多量，ローム小ブロック・黒色土小ブロック少量
6 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・黒色土粒子少量
7 黒褐色 炭化粒子多量，ローム粒子少量
8 暗褐色 ローム粒子多量，ローム小ブロック少量
9 黒褐色 黒色土小ブロック中量，ローム小ブロック・ローム粒子少量
10 褐色 ローム粒子多量，ローム小ブロック微量
11 暗褐色 ローム粒子多量
12 黒褐色 炭化粒子多量，ローム粒子少量
13 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量
14 黒褐色 ローム粒子・黒色土粒子中量，ローム小ブロック少量
15 暗褐色 ローム粒子中量，ローム小ブロック・黒色土粒子少量
16 黒褐色 炭化粒子多量，ローム粒子少量
17 黒褐色 炭化粒子極多量，ローム粒子少量
18 褐色 ローム粒子多量
19 暗褐色 ローム粒子多量
20 暗褐色 ローム粒子中量，炭化粒子少量
21 暗褐色 炭化粒子・ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
22 暗褐色 ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
23 暗褐色 ローム粒子中量，炭化粒子少量
24 暗褐色 黒色土粒子中量，ローム粒子少量，炭化物微量
25 褐色 ローム粒子多量，ローム小ブロック少量
26 褐色 ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，ローム中ブロック微量
27 黒褐色 炭化粒子・ローム粒子中量，ローム小ブロック微量
28 黒褐色 炭化粒子・ローム粒子中量
29 黒褐色 炭化粒子多量，ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
30 褐色 ローム粒子多量，ローム小ブロック少量
31 極暗褐色 ローム粒子中量，炭化粒子少量，焼土粒子極微量
32 暗褐色 ローム粒子中量，ローム小ブロック・黒色土粒子少量
33 極暗褐色 黒色土小ブロック中量，ローム粒子・黒色土粒子少量
34 暗褐色 ローム粒子多量，ローム小ブロック中量
35 黒褐色 黒色土粒子多量，ローム粒子少量
36 暗褐色 ローム粒子中量，黒色土粒子少量
37 暗褐色 ローム粒子中量，黒色土粒子少量，黒色土小ブロック微量
38 暗褐色 ローム粒子中量，ローム小ブロック微量
39 暗褐色 ローム粒子中量，ローム小ブロック少量

D－D′

1 褐色 ローム粒子多量，焼土粒子・砂極微量
2 暗褐色 ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，砂極微量
3 褐色 ローム粒子中量，黒色土粒子少量，ローム小ブロック微量
4 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量，黒色土小ブロック・黒色土粒子少量
5 暗褐色 黒色土粒子多量，ローム小ブロック中量，ローム粒子少量
6 褐色 ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，黒色土粒子微量
7 暗褐色 ローム粒子多量
8 黒褐色 炭化粒子多量，ローム粒子少量
9 褐色 ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，ローム中ブロック微量
10 暗褐色 炭化粒子中量，ローム粒子少量
11 褐色 ローム粒子多量，砂微量
12 褐色 ローム粒子多量
13 黒褐色 ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
14 褐色 ローム粒子多量，ローム小ブロック微量
15 暗褐色 ローム粒子中量，ローム小ブロック微量
16 暗褐色 ローム粒子多量，砂少量
17 褐色 ローム粒子多量

B－B′

1 暗褐色 ローム小ブロック少量
2 黒褐色 ローム粒子中量
3 暗褐色 ローム中ブロック中量
4 黒褐色 ローム小ブロック少量
5 褐色 ローム中・小ブロック中量
6 黒褐色 ローム粒子中量，炭化粒子微量
7 暗褐色 ローム粒子中量
8 黒褐色 ローム小ブロック少量
9 暗褐色 ローム粒子少量
10 暗褐色 ローム小ブロック中量
11 暗褐色 ローム粒子少量
12 暗褐色 ローム小ブロック少量
13 暗褐色 ローム小ブロック少量，ローム粒子極微量
14 暗褐色 ローム小ブロック少量
15 黒褐色 ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
16 黒褐色 ローム粒子微量
17 黒褐色 ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
18 暗褐色 ローム粒子少量
19 暗褐色 ローム粒子少量 （18層より粘性が強い）
20 暗褐色 ローム粒子少量，黒色土粒子極微量
21 褐色 黒色土小ブロック中量，ローム粒子少量
22 褐色 ローム粒子少量
23 褐色 黒色土粒子中量

C－C′

1 褐色 ローム粒子少量
2 褐色 ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
3 褐色 ローム小ブロック中量，ローム粒子少量
4 暗褐色 ローム粒子少量
5 褐色 ローム中ブロック少量
6 暗褐色 黒色土大ブロック中量
7 褐色 ローム粒子少量
8 褐色 ローム粒子微量
9 褐色 ローム粒子微量，ローム小ブロック極微量
10 暗褐色 ローム小ブロック微量
11 褐色 ローム小ブロック少量，ローム中ブロック微量
12 明褐色 ローム粒子少量
13 褐色 ローム小ブロック少量
14 にぶい褐色 ローム大・中ブロック少量
15 明褐色 ローム小ブロック少量

E－E′

1 暗褐色 ローム粒子多量，ローム中ブロック少量
2 褐色 ローム粒子多量，ローム小ブロック中量
3 暗褐色 ローム粒子中量，黒色土粒子少量
4 褐色 ローム粒子中量，黒色土粒子少量
5 極暗褐色 黒色土粒子多量，ローム小ブロック・ローム粒子少量
6 黒褐色 黒色土粒子多量，ローム小ブロック中量，ローム粒子少量
7 褐色 ローム粒子多量，ローム小ブロック中量
8 黒褐色 黒色土粒子多量，黒色土小ブロック中量，ローム粒子少量
9 褐色 ローム粒子多量
10 暗褐色 ローム粒子中量，ローム小ブロック・黒色土粒子少量
11 極暗褐色 ローム粒子・黒色土粒子中量，ローム小ブロック微量
12 暗褐色 ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
13 褐色 ローム粒子中量
14 褐色 ローム粒子少量
15 暗褐色 ローム粒子少量
16 褐色 黒色土小ブロック少量
17 暗褐色 ローム粒子少量
18 暗褐色 ローム粒子少量，黒色土中ブロック微量
19 褐色 ローム粒子少量
20 暗褐色 ローム小ブロック少量
21 暗褐色 ローム粒子少量
22 褐色 ローム粒子少量
23 暗褐色 ローム粒子微量
24 黒褐色 黒色土小ブロック少量
25 褐色 ローム小ブロック少量
26 褐色 ローム中ブロック少量
27 暗褐色 ローム粒子少量
28 褐色 ローム粒子少量
29 暗褐色 ローム小ブロック中量
30 褐色 ローム粒子少量
31 褐色 ローム小ブロック少量

F－F′
1　黒褐色　炭化粒子極微少量
2　暗褐色　ローム粒子少量
3　褐　色　ローム中ブロック少量
4　暗褐色　ローム粒子・黒色土小ブロック中量
5　暗褐色　ローム粒子中量
6　暗褐色　ローム粒子中量（5層よりしまりが強い）
7　褐　色　ローム小ブロック少量
8　暗褐色　ローム中ブロック少量
9　褐　色　ローム小ブロック中量，黒色土小ブロック少量

埋葬施設土層解説
1　暗褐色　ローム粒子多量
2　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック微量
3　褐　色　ローム粒子多量
4　極暗褐色　ローム粒子中量
5　暗褐色　ローム粒子多量，焼土粒子極微量
6　黒褐色　ローム粒子中量
7　暗褐色　ローム粒子多量
8　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック極微量
9　褐　色　ローム粒子多量
10　暗褐色　ローム粒子中量，ローム中ブロック極微量
11　黒褐色　ローム粒子中量，炭化粒子少量
12　暗褐色　ローム粒子中量，粘土粒子少量
13　暗褐色　ローム粒子多量
14　暗褐色　ローム粒子中量，炭化粒子極微量
15　暗褐色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
16　極暗褐色　炭化粒子・ローム粒子少量
17　褐　色　ローム粒子多量
18　黒褐色　炭化粒子中量，ローム粒子微量

G－G′
1　褐　色　ローム粒子微量
2　褐　色　ローム小ブロック少量
3　褐　色　黒色土粒子中量
4　褐　色　黒色土小ブロック中量
5　褐　色　ローム粒子微量
6　暗褐色　黒色土粒子微量

H－H′
1　褐　色　ローム小ブロック少量
2　褐　色　ローム小ブロック中量
3　褐　色　ローム粒子中量
4　褐　色　ローム小ブロック中量，ローム粒子少量
5　褐　色　ローム小ブロック・黒色土小ブロック・黒色土粒子中量

第1号墳出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第104図 1	坏 土師器	A 14.3 B 4.8	口縁部一部欠損。丸底。帯部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は軽く内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。底・体部外面ヘラ削り，内面ナデ。	石英・長石 にぶい橙色 普通	P75 95% 埋葬施設東側
2	坏 土師器	B(2.2) C 7.0	底部から体部にかけての破片。平底。体部は外傾しながら立ち上がる。	体部外面斜位の手持ちヘラ削り。底部手持ちヘラ削り。内面黒色処理。	石英・長石 にぶい橙色 普通	P76 10% 墳丘上東側
3	坏 土師器	A〔14.0〕 B(4.7)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部との境に稜を持つ。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横ナデ後，ヘラミガキ。内・外面赤彩。	石英・長石・白色粒子 にぶい褐色 普通	P77 5% 墳丘上東側
4	甕 土師器	B(13.3)	体部から頸部にかけての破片。体部は内彎しながら頸部に至る。	体部内・横ナデ。内・外面に輪積痕。外面摩滅。	石英・長石・赤色粒子 にぶい橙色 普通	P79 10% 墳丘上東側
5	甕 須恵器	B(11.3)	底部から頸部にかけての破片。丸底。体部は内彎しながら頸部に至る。頸部はくの字状に外反する。体部上位に円孔を穿つ。	頸部に櫛歯状工具による波状文。体部にも同じものによる押し引き刺突文が施されている。底部外面ヘラ削り後，ナデ。	長石 外面 黒色 内面 褐灰色 良好	P86 20% 墳丘上北東部
6	甕 須恵器	B(8.1)	底部から体部にかけての破片。丸底。内部は内彎しながら立ち上がる。	体部に櫛歯状工具による波状文が施されている。底部外面ヘラ削り後，ナデ。	長石 褐灰色 普通	P87 20% 墳丘上東側
7	壺 須恵器	B(10.9)	底部から体部にかけての破片。丸底。体部は内彎して立ち上がる。	体部外面縦位の平行叩き後，下位横ナデ。内面横ナデ。	長石 灰色 普通	P88 5% 墳丘上北東側
第105図 8	甕 須恵器	A〔28.4〕 B 57.8	底部から口縁部にかけての破片。丸底。体部は内彎して立ち上がる。頸部はくの字状に外反し，口縁部に至る。口縁部と頸部に2条の稜を巡らしている。	口唇部断面三角形で内・外面横ナデ。口縁部下位に櫛歯状工具による波状文が施される。頸部内・外面ロクロナデ。体部から底部外面縦位の平行叩き，内面同心円の当て具痕。	長石 灰色 普通	P89 55% 墳丘上東側から周溝底部
第104図 9	甕 須恵器	A〔10.6〕 B(2.8)	口縁部から頸部にかけての破片。頸部は外傾して，口縁部に至る。口縁部と頸部に稜を持つ。	口縁部内・外面ロクロナデ。頸部に櫛歯状工具による波状文が施されている。	長石 オリーブ黒色 普通	P112 5% 墳丘上東側から周溝底部

土製品観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	形態・調整技法等の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第104図10	円筒埴輪	B(7.1)	外面縦ハケ。内面ヘラナデ。内面に輪積痕。ハケ目1.2cm内に7本。	長石・雲母・赤色粒子 橙色 普通	DP13　5％ 南東部封土中

石製品観察表

図版番号	種　別	計測値				石　質	出土地点	備　考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第105図11	石棺材	(10.2)	(10.1)	(3.3)	(293.3)	雲母片岩	埋葬施設内	Q124

第2号墳（第106図）

現況と確認状況　調査前の現況は山林であった。墳丘の遺存状況は比較的よく，調査以前からその存在が確認されていた。しかし，古墳の大部分が調査区域外にあり，調査の過程において周溝の一部が確認されたのみである。

位置　調査区北西部，B2e1区を中心に検出されている。西に霞ケ浦を望む舌状台地の傾斜部に位置する。また，約70m南側に第1号墳がある。

墳形及び規模　円墳。墳丘の高さは1.25mである。径は〔12.0〕mと推定される。

墳丘　墳丘は残存しているが調査区域外である。

周溝　墳丘を取り囲むように円形に構築されていると思われるが，南側の一部を調査したのみである。調査区内での規模は上幅(2.2)m，下幅(1.7)m，深さ0.4mで断面形はU字状である。覆土の堆積状況は自然堆積である。

周溝土層解説
1　暗褐色　黒色土中ブロック中量，ローム粒子少量
2　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック・黒色土小ブロック少量
3　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子中量
4　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，ローム中ブロック少量
5　褐　色　ローム粒子多量

遺物　本跡に伴う遺物は出土していない。

所見　出土遺物がなく，時期を決定することができないが，古墳群の構成から古墳時代後期と考えられる。

第10号墳（第107図）

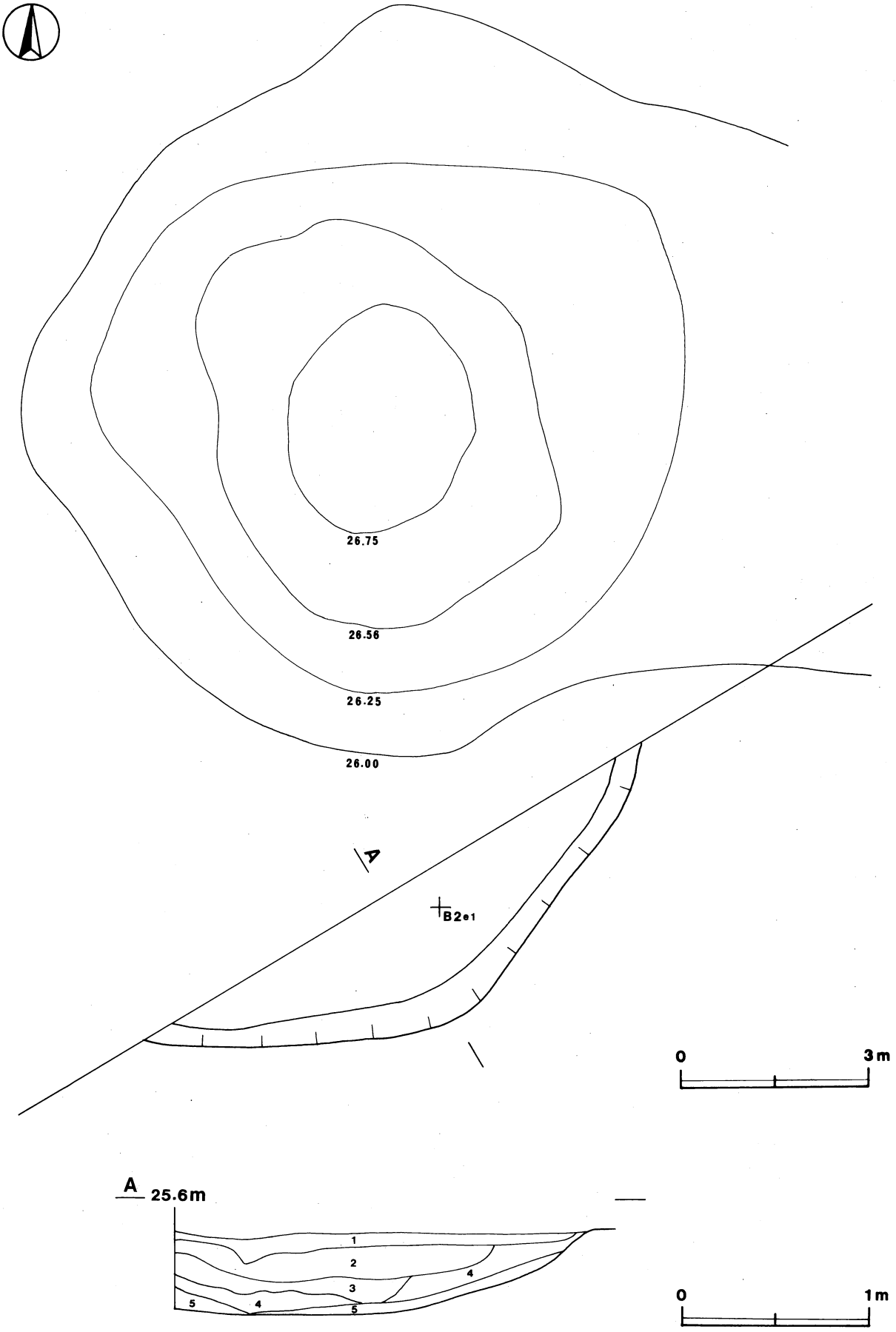
現況と確認状況　第2号墳の東側約20mのところに板石10枚以上が積み重ねられ，その上に「建徳院殿」「明治40年」と銘のある石祠が祀ってあった[(1)(2)]。昭和55年当時，林道を敷設する際に破壊されてしまった。調査前の現況は林道で分割された山林であった。墳丘は植林によって削平されていた。調査によって周溝及び主体部の一部が確認された。

位置　調査区北部，B2e6区を中心に検出されている。舌状台地の平坦部に位置する。

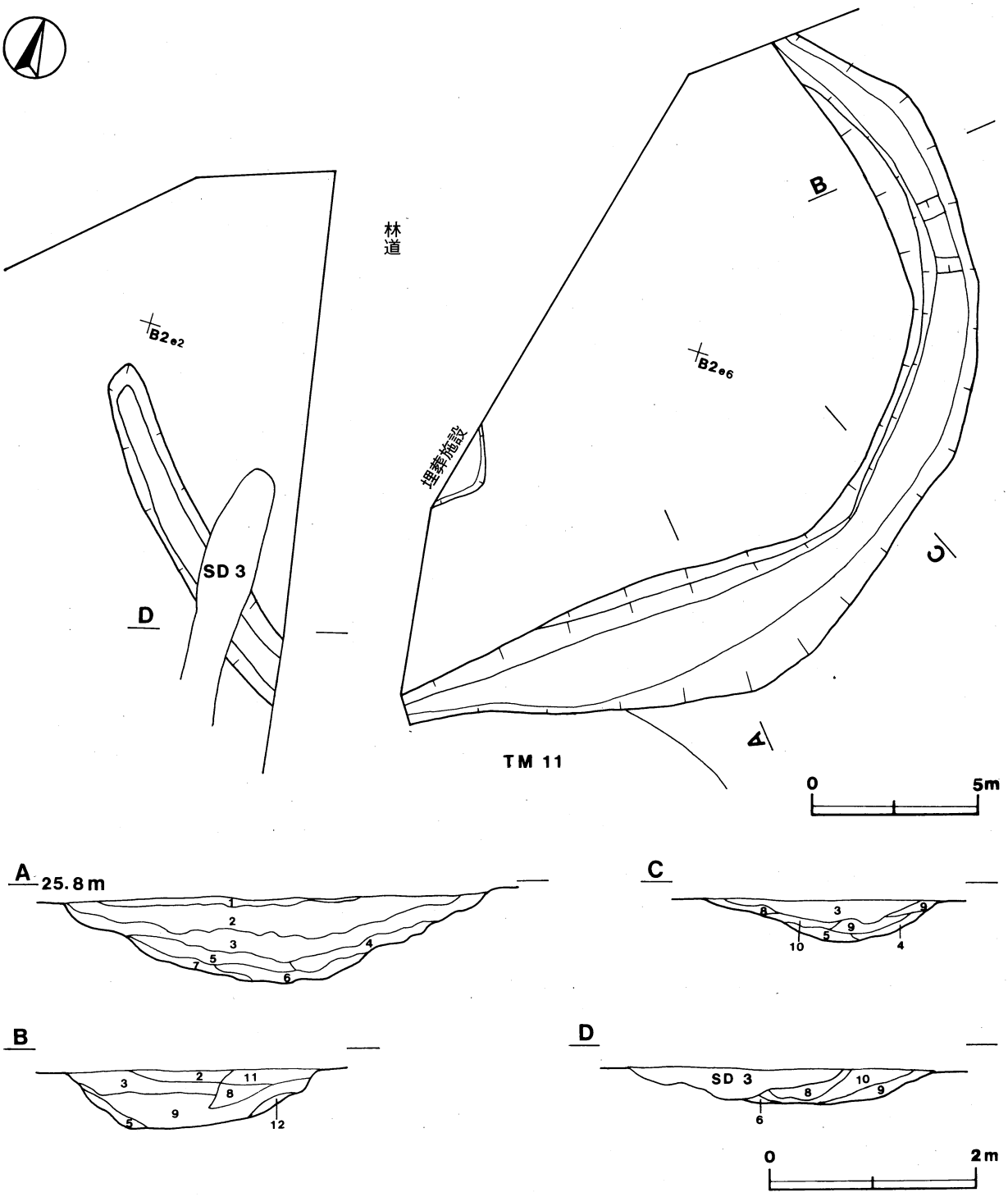
重複関係　北西部の一部が調査区域外に延びており，中央を南北に林道が通っている。第33・34号住居跡を掘り込んでおり，本跡が新しい。また，本跡が第3号溝，第11号墳の周溝に掘り込まれており，本跡が古い。

墳形及び規模　前方後円墳。全長26.4m，後円部径16.0m，前方部最大幅13.5mである。墳丘は削平されているため不明である。

墳丘主軸方向　N－48°－E



第106図　第２号墳実測図



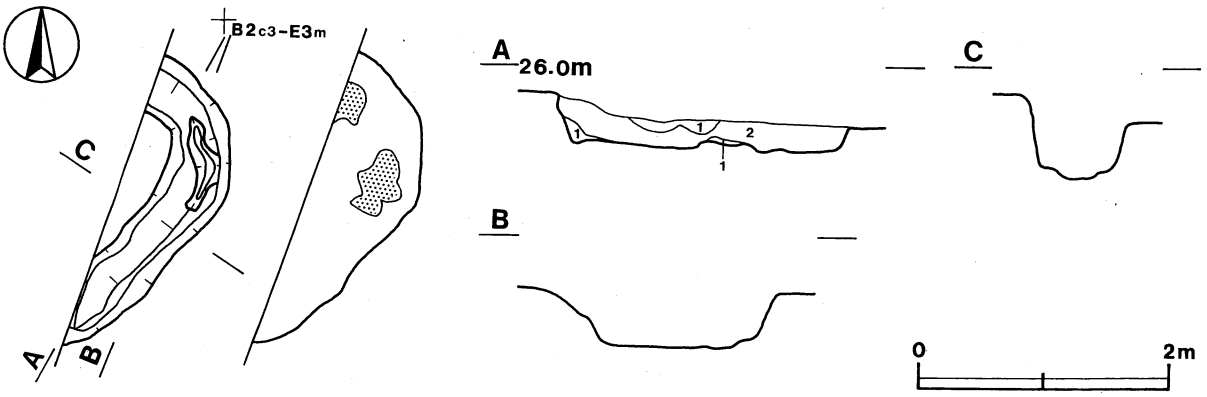
第107図　第10号墳実測図

周溝　墳丘を取り囲むように構築されていたと考えられるが，北西方向に削平されている。規模は前方部においては上幅1.4～1.6m，後円部においては上幅2.4～4.1mである。下幅0.8～1.8m，深さ0.3～0.8mで断面形は逆台形状及びU字状である。覆土の堆積状況は自然堆積である。下層は墳丘の盛土流失によるローム粒子を含む暗褐色土が堆積し，中層から焼土粒子を微量に含む黒褐色土が堆積している。

周溝土層解説
1　黒 褐 色　ローム粒子微量，焼土粒子極微量
2　黒　　色　黒色土小ブロック多量，ローム粒子少量
3　黒 褐 色　ローム粒子中量
4　黒　　色　ローム粒子中量，黒色小ブロック少量
5　黒 褐 色　ローム粒子少量
6　極暗褐色　ローム粒子中量
7　暗 褐 色　ローム粒子少量
8　黒 褐 色　ローム粒子少量，黒色土粒子微量
9　暗 褐 色　ローム粒子少量
10　黒 褐 色　ローム粒子微量，焼土粒子極微量
11　黒　　色　黒色土小ブロック中量，ローム粒子少量
12　暗 褐 色　ローム小ブロック・ローム粒子微量
13　暗 褐 色　ローム粒子・黒色土小ブロック少量，焼土粒子・ローム小ブロック微量

埋葬施設　前方部の中央北東寄りから検出された。石材は抜き取られているが底部に雲母片岩片が散在し，北東部に粘土塊が認められた。箱式石棺と思われる。北西部が林道にかかり調査区域外であるが，主軸方向はN－40°－Eである。上面は削平を受けているため，正確な規模と平面形は不明であるが，掘り方の平面形は隅丸長方形と考えられる。掘り方の断面形は短径方向で逆台形状を呈している。

埋葬施設土層解説
1　褐　　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量
2　褐　　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，黒色土粒子少量



第108図　第10号墳埋葬施設実測図

遺物　土師器片３点，縄文土器片115点，弥生土器片５点，土師質土器片１点が出土している。縄文土器片や弥生土器片は流れ込みである。遺構に伴う遺物は出土していない。

今回の調査では，埋葬施設からは石棺の破片と思われる雲母片岩が出土したのみである。過去に埋葬施設から直刀・刀子・鉄鏃等が出土したと言われる[(3)]が，詳細については不明である。

所見　本跡は，墳形及び規模，埋葬施設から出土したと言われる遺物から古墳時代後期（６世紀前葉）と考えられる。

第11号墳（第109図）

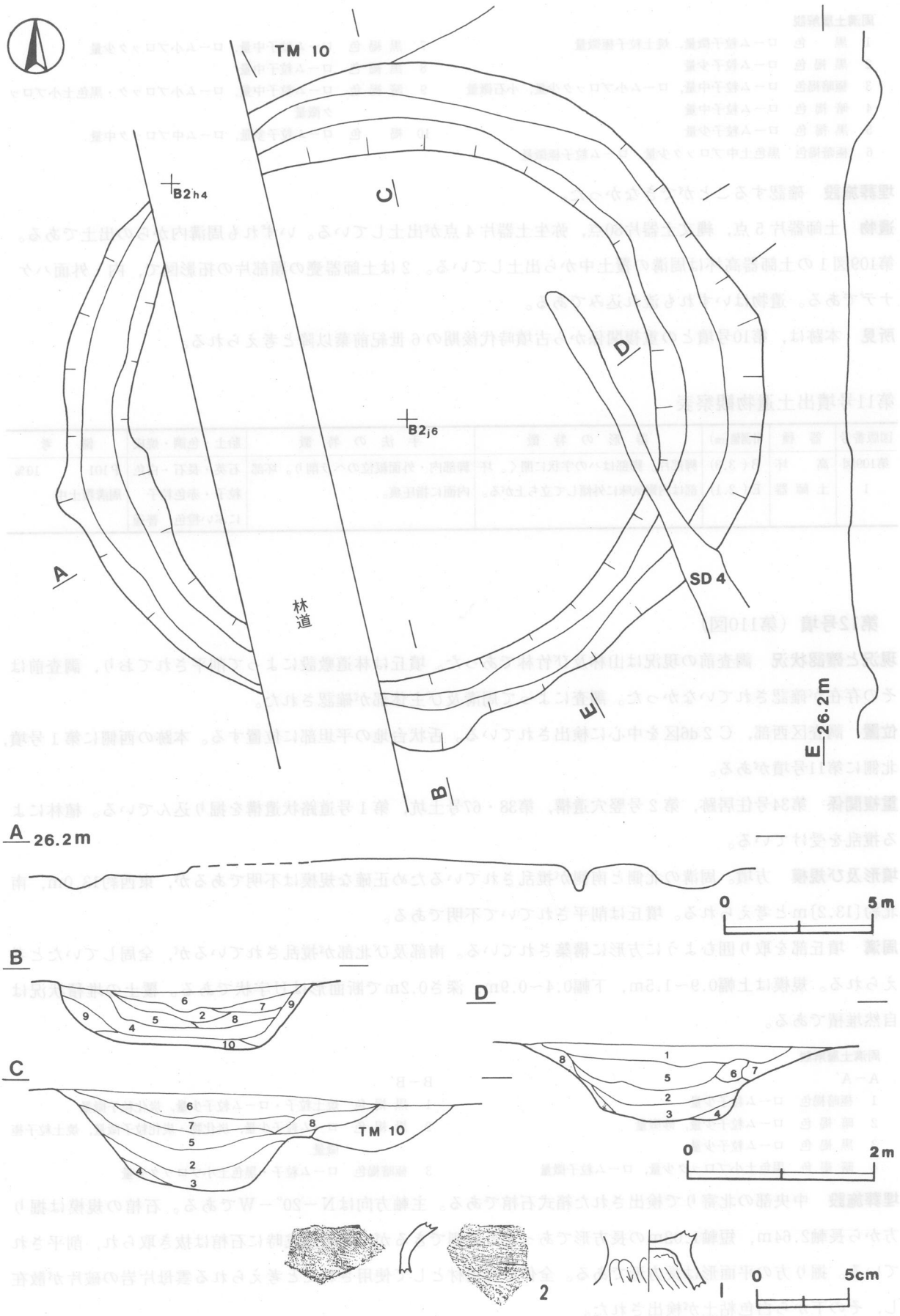
現況と確認状況　調査前の現況は山林であった。墳丘は林道敷設によって削平されており，調査以前には存在が確認されていなかった。調査によって周溝のみ確認された。

位置　調査区中央部，Ｂ２ｊ6区を中心に検出されている。舌状台地の平坦部に位置する。本跡の北側に第10号墳，南側に第12号墳がある。

重複関係　中央を南北に林道が通っている。第10号墳，第13・35・38・39号住居跡を掘り込んでいる。また，第３号溝に掘り込まれている。所々植林により撹乱を受けている。

墳形及び規模　円墳。墳丘は削平されていて不明であるが，規模は径約18.0ｍと考えられる。

周溝　墳丘を取り囲むように円形に構築されている。林道で分割されるが，全周している。規模は上幅2.1～3.9m，下幅0.5～1.7m，深さ0.5～1.1mで断面形は逆台形状である。覆土の堆積状況は自然堆積である。下層は墳丘の盛土流失によるローム粒子や小石含む暗褐色土，中層から腐植土を含む黒褐色土が堆積している。



第109図　第11号墳・出土遺物実測・拓影図

周溝土層解説

1　黒　　色　ローム粒子微量，焼土粒子極微量
2　黒 褐 色　ローム粒子少量
3　極暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，小石微量
4　暗 褐 色　ローム粒子中量
5　黒 褐 色　ローム粒子少量
6　極暗褐色　黒色土中ブロック少量，ローム粒子極微量
7　黒 褐 色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
8　黒 褐 色　ローム粒子中量
9　暗 褐 色　ローム粒子中量，ローム小ブロック・黒色土小ブロック微量
10　褐　　色　ローム粒子多量，ローム中ブロック中量

埋葬施設　確認することができなかった。

遺物　土師器片５点，縄文土器片80点，弥生土器片４点が出土している。いずれも周溝内からの出土である。第109図１の土師器高坏は周溝の覆土中から出土している。２は土師器甕の頸部片の拓影図で，内・外面ハケナデである。遺物はいずれも流れ込みである。

所見　本跡は，第10号墳との重複関係から古墳時代後期の６世紀前葉以降と考えられる。

第11号墳出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備　考
第109図 1	高　坏 土 師 器	B(3.3) E(2.1)	脚部片。脚部はハの字状に開く。坏部は内彎気味に外傾して立ち上がる。	脚部内・外面縦位のヘラ削り。坏部内面に指圧痕。	石英・長石・白色粒子・赤色粒子 にぶい橙色　普通	P101　10% 周溝覆土中

第12号墳（第110図）

現況と確認状況　調査前の現況は山林及び竹林であった。墳丘は林道敷設によって削平されており，調査前はその存在が確認されていなかった。調査によって周溝及び主体部が確認された。

位置　調査区西部，Ｃ２d6区を中心に検出されている。舌状台地の平坦部に位置する。本跡の西側に第１号墳，北側に第11号墳がある。

重複関係　第34号住居跡，第２号竪穴遺構，第38・67号土坑，第１号道路状遺構を掘り込んでいる。植林による撹乱を受けている。

墳形及び規模　方墳。周溝の北側と南側が撹乱されているため正確な規模は不明であるが，東西約13.0m，南北約〔13.2〕mと考えられる。墳丘は削平されていて不明である。

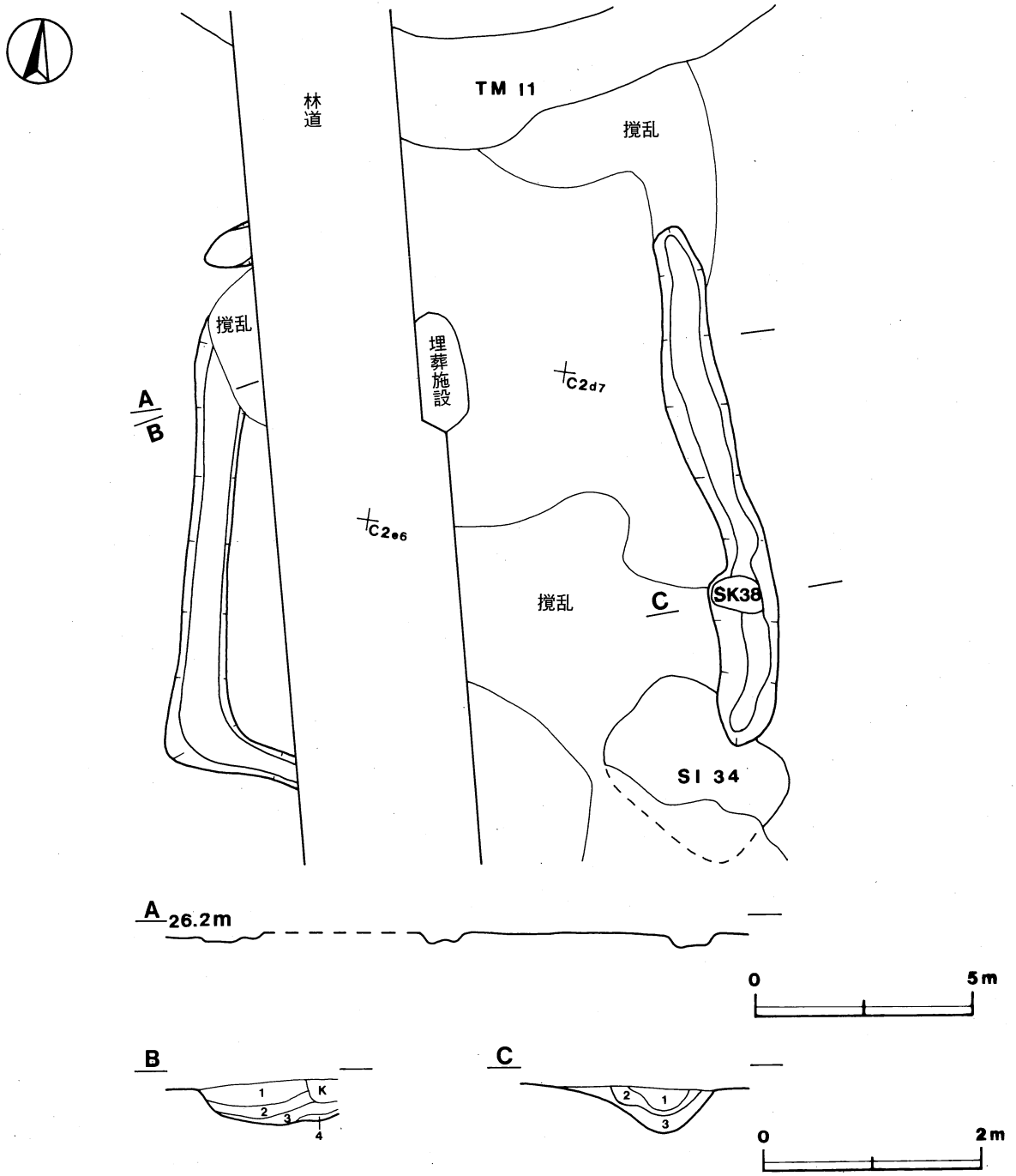
周溝　墳丘部を取り囲むように方形に構築されている。南部及び北部が撹乱されているが，全周していたと考えられる。規模は上幅0.9～1.5m，下幅0.4～0.9m，深さ0.2mで断面形はＵ字状である。覆土の堆積状況は自然堆積である。

周溝土層解説

A－A′
1　極暗褐色　ローム粒子少量
2　暗 褐 色　ローム粒子少量，砂微量
3　黒 褐 色　ローム粒子少量
4　暗 褐 色　黒色土小ブロック少量，ローム粒子微量

B－B′
1　黒 褐 色　焼土粒子・ローム粒子少量，炭化粒子微量
2　黒 褐 色　ローム粒子少量，炭化物・炭化粒子微量，焼土粒子極微量
3　極暗褐色　ローム粒子・黒色土小ブロック少量

埋葬施設　中央部の北寄りで検出された箱式石棺である。主軸方向はＮ－20°－Ｗである。石棺の規模は掘り方から長軸2.64m，短軸1.02mの長方形であったと推測できるが，林道造成時に石棺は抜き取られ，削平されている。掘り方の平面形は長方形である。全体に石棺材として使用されたと考えられる雲母片岩の破片が散在し，その下から白色粘土が検出された。



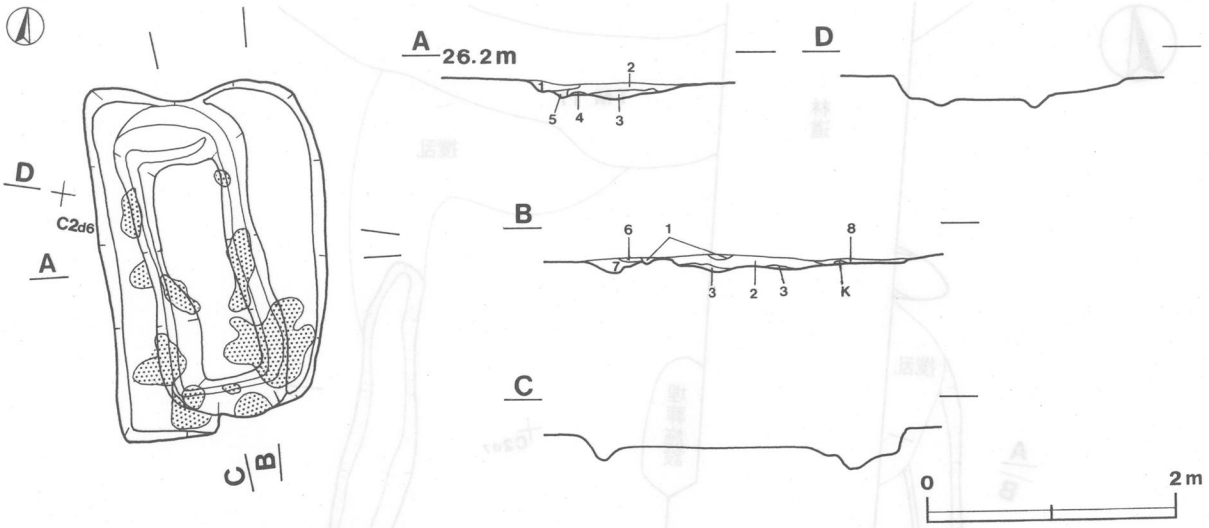
第110図　第12号墳実測図

埋葬施設土層解説

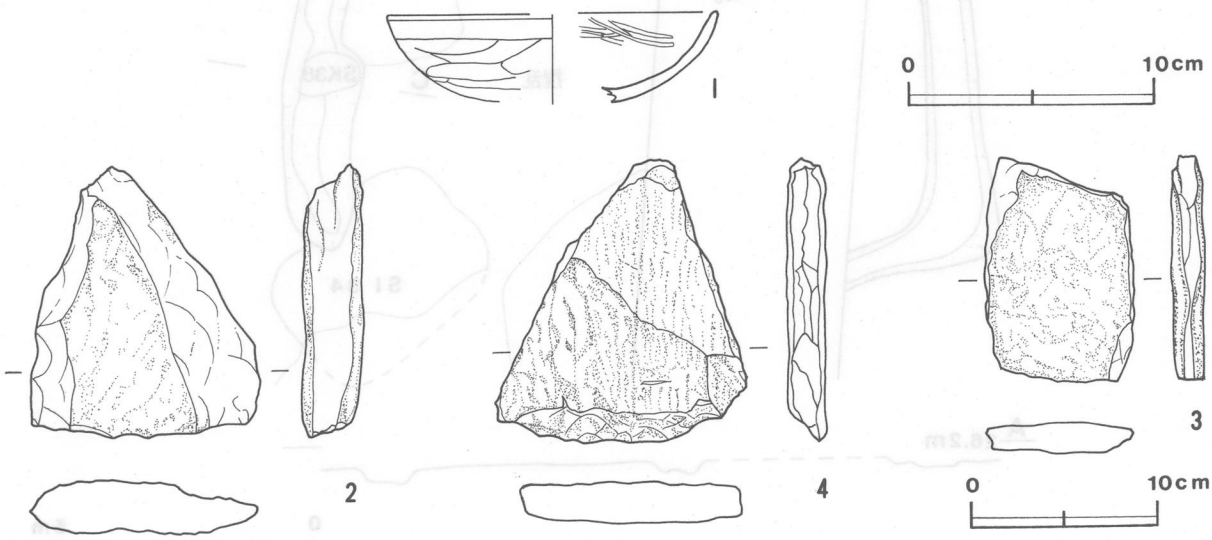
1	黒　褐	色	ローム粒子・白色粘土ブロック少量，炭化粒子微量	5	暗　褐	色	ローム粒子・雲母細片少量
2	暗　褐	色	炭化粒子・ローム粒子・白色粘土ブロック・砂粒少量	6	黒　褐	色	ローム粒子中量，炭化粒子少量
3	褐	色	ローム粒子中量，ローム小ブロック少量	7	にぶい褐	色	ローム粒子・白色粘土ブロック・山砂中量
4	暗　褐	色	ローム小ブロック・ローム粒子中量，砂粒少量	8	褐	色	ローム小ブロック・ローム粒子多量，雲母細片中量

遺物　土師器片２点，須恵器片１点，縄文土器片30点，弥生土器片１点が出土している。縄文土器片と弥生土器片は流れ込みと思われる。第112図１の土師器坏は周溝内から出土している。埋葬施設の遺物は，２～４の石棺材の破片だけである。

所見　１の出土土器は本跡に伴うものと考えられる。古墳時代後期の６世紀前半と考えられる。



第111図　第12号墳埋葬施設実測図



第112図　第12号墳出土遺物実測図

第12号墳出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第112図 1	坏 土師器	A〔13.2〕 B(3.6)	底部から口縁部の破片。丸底。体部は内彎して立ち上がり，口縁部に至る。	口縁部横ナデ。体部外面横位のヘラ削り。内面横位のヘラ磨き。	石英・雲母 橙色 普通	P104　10% 周溝覆土中

石製品観察表

図版番号	種　別	計測値				石　質	出土地点	備　考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第112図2	石棺材	(14.4)	(12.1)	3.3	(575.9)	雲母片岩	埋葬施設内	Q138
3	石棺材	(11.8)	(8.0)	1.7	(266.6)	雲母片岩	埋葬施設内	Q139
4	石棺材	(15.1)	(13.4)	2.2	(581.9)	雲母片岩	埋葬施設内	Q140

註

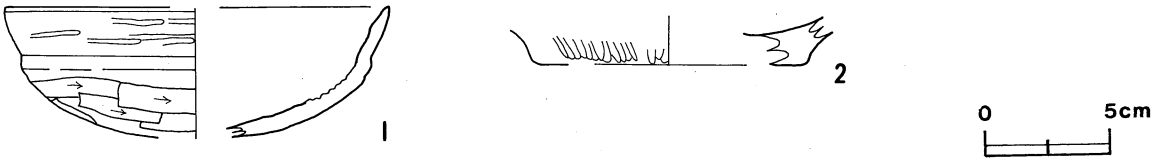
1　土浦市教育委員会　『土浦の遺跡』　1984.3

2　土浦市教育委員会　『下郷古墳発掘調査報告』　1981.3

3　土浦市上高津貝塚ふるさと歴史の広場　関口満氏より資料を賜る。

(4)　遺構外出土遺物

今回の調査で，遺構に伴わない土師器が出土している。これらの出土遺物については実測図及び観察表で一括して報告する。



第113図　古墳時代遺構外出土遺物実測図

古墳時代　遺構外出土遺物観察表

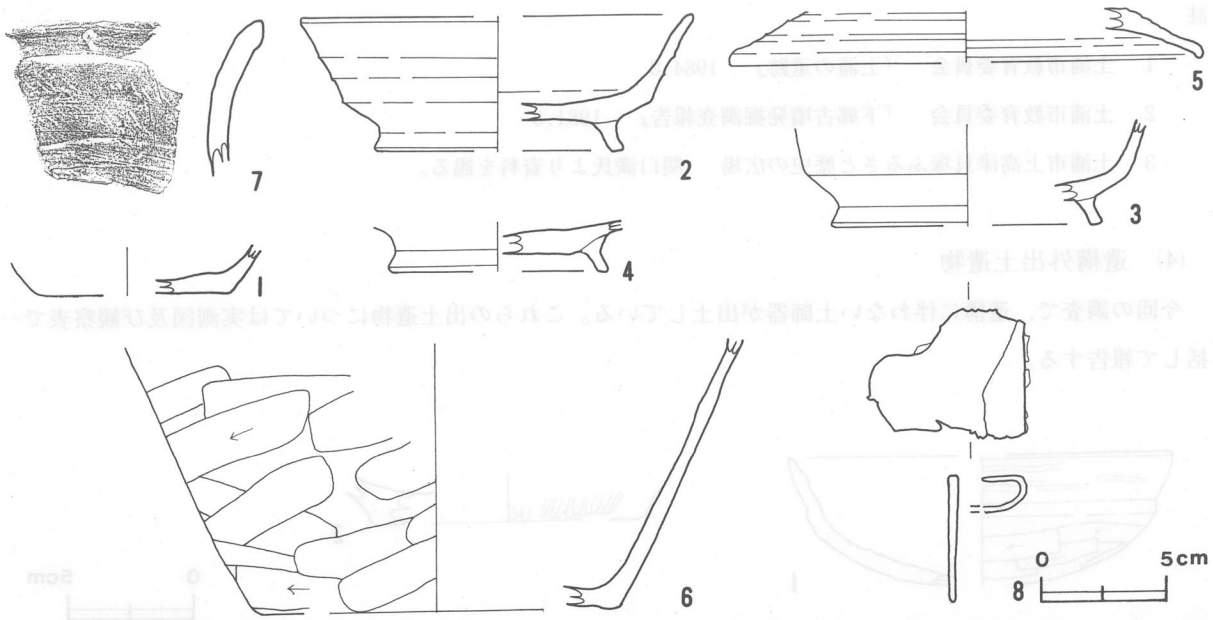
図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第113図 1	坏 土師器	A〔15.2〕 B(5.7)	底部から口縁部にかけての破片。丸底。体部は内彎して立ち上がり，口縁部との境に稜を持つ。口縁部は外反する。	口縁部外面横ナデ後，ヘラ磨き。体部外面横位のヘラ削り，内面剝離。	石英・雲母 橙色 普通	P109　40% 遺構外
 2	甕 土師器	B(2.0) C〔10.6〕	体部下端から底部にかけての破片。平底。体部は外反して立ち上がる。	体部外面縦位のヘラ磨き，内面ナデ。底部手持ちヘラ削り。	石英・長石・小礫 橙色 普通	P97　5% 第10号墳周溝覆土中

5　奈良・平安時代

(1)　遺構外出土遺物

今回の調査で，奈良・平安時代に伴う遺構は検出されていないが，当該期の遺物が若干出土しているので，実測図及び観察表で一括して記載する。

第114図7は須恵器甕の口縁部片，第12号墳の周溝の覆土中から出土したものである。外面は斜位のヘラ削り後，横ナデが施されている。



第114図　奈良・平安時代遺構外出土遺物実測・拓影図

奈良・平安時代　遺構外出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第114図 1	坏 須恵器	B(1.9) C〔6.8〕	底部から体部にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部内・外面ロクロナデ。底部手持ちヘラ削り。	石英・長石・雲母 黄灰色 普通	P80 10% 第1号墳撹乱内
2	高台付坏 須恵器	A〔15.6〕 B 5.5 D〔10.0〕 E 1.2	高台部から口縁部にかけての破片。体部は下位に稜を有し，外傾して立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。高台はハの字状に開く。	口縁部から体部内・外面ロクロナデ。体部下端回転ヘラ削り。底部回転ヘラ削り後，高台貼り付け。	長石・白色粒子・小礫 黄灰色 普通	P81 30% 第1号墳撹乱内 (8世紀前葉)
3	高台付坏 須恵器	B(4.2) D〔10.9〕 E 1.1	高台部から体部にかけての破片。体部は下位に稜を有し，外傾して立ち上がる。高台はハの字状に開く。	体部内・外面ロクロナデ。底部外周回転ヘラ削り。高台貼り付け。	石英・長石 灰色 良好	P82 20% 第1号墳撹乱内 (8世紀前葉)
4	高台付坏 須恵器	B(2.1) D〔8.8〕 E 0.6	高台部から底部にかけての破片。高台はハの字状に開く。	底部内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ削り後，高台貼り付け。	長石・雲母 黄灰色 普通	P83 5% 第1号墳撹乱内
5	蓋 須恵器	A〔19.0〕 B(2.1)	口縁部片。頂部は平坦で，口縁部内側に短いかえりが付く。	口縁部内・外面ロクロナデ。	石英・長石 灰色 普通	P84 5% 第1号墳撹乱内
6	鉢 須恵器	B(10.9) C〔14.4〕	底部から体部にかけての破片。体部は外傾して立ち上がる。	体部外面横位のヘラ削り。内面ナデ。	石英・長石・雲母 にぶい黄色 普通	P85 10% 第1号墳撹乱内

金属製品観察表

図版番号	器種	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
8	鎌	(5.3)	(5.2)	(0.3)	(48.3)	第1号墳墳丘上撹乱内	M1 10%

6　中世以降

中世以降の遺構としては，腐植土を含む黒色土や黒褐色土の覆土状況や形状，主軸方向のまとまりから墓壙と思われる[(1)]土坑15基，五輪塔集石跡4か所を検出した。以下，検出した遺構の特徴や遺物について記載する。

(1) 土坑

第9号土坑（第115図）

位置 調査区の東部，B 3 g5区。

重複関係 第53号土坑を掘り込んでおり，本跡が新しい。

規模と平面形 長軸1.94m，短軸0.75mの隅丸長方形で，深さ34cmである。

長軸方向 N－60°－E

壁面 短軸方向はほぼ垂直に立ち上がり，長軸方向は外傾して立ち上がる。

底面 南西方向にわずかに傾斜している。

ピット P1は南西部に位置し，長径35cm，短径24cmの楕円形で，深さ16cmである。性格は不明である。

覆土 4層からなる人為堆積である。

土層解説

1 黒　色　炭化粒子多量，焼土粒子少量
2 黒 褐 色　炭化粒子・ローム粒子少量，ローム中ブロック微量
3 暗 褐 色　ローム粒子多量
4 暗 褐 色　ローム粒子少量

遺物 本跡に伴う遺物は出土していない。

所見 形状及び覆土上層に炭化粒子や焼土粒子を含む黒色土が堆積していることから墓壙と思われる。本跡の明確な時期は不明であるが，中世以降と思われる。

第17号土坑（第115図）

位置 調査区の南部，C 3 a3区。

規模と平面形 長軸2.62m，短軸1.40mの隅丸長方形で，深さ65cmである。

長軸方向 N－38°－W

壁面 短軸方向は底面から中段にかけてはほぼ垂直に立ち上がり，中段からなだらかに立ち上がる。長軸方向は外傾して立ち上がる。

底面 2段になっており，低いほうの底面は平坦である。

覆土 4層からなる人為堆積である。

土層解説

1 黒　色　炭化粒子中量，焼土粒子微量
2 黒　色　ローム粒子少量
3 黒 褐 色　炭化粒子・ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
4 極暗褐色　ローム粒子中量

遺物 縄文土器片17点が出土しているが，いずれも細片で流れ込みと思われる。

所見 形状及び覆土上層から中層に腐植土を含む黒色土の堆積していることから墓壙と思われる。本跡の明確な時期は不明であるが，中世以降と思われる。

第19号土坑（第115図）

位置 調査区の南部，B 3 j3区。

重複関係 第78号土坑を掘り込んでおり，本跡が新しい。

規模と平面形 長軸2.04m，短軸1.15mの隅丸長方形で，深さ85cmである。

長軸方向 N－56°－W

壁面 短軸方向は下段で内彎しながらに立ち上がり，中段から外傾して立ち上がる。長軸方向は外傾して立ち上がる。

底面 2段になっており，低いほうの底面は南東方向にわずかに傾斜している。

覆土　6層からなる人為堆積である。

土層解説

1　黒 褐 色　炭化粒子中量，ローム粒子微量
2　黒 褐 色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
3　黒 褐 色　ローム小ブロック・ローム粒子少量
4　黒 褐 色　ローム粒子中量，炭化粒子少量
5　極暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，黒色土小ブロック少量
6　暗 褐 色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，ローム大ブロック微量

遺物　縄文土器片5点，弥生土器片2点が出土しているが，いずれも細片で流れ込みと思われる。

所見　形状及び覆土上層から中層に腐植土を含む黒褐色土が堆積していることから墓壙と思われる。本跡の明確な時期は不明であるが，中世以降と思われる。

第24号土坑（第115図）

位置　調査区の南部，C 3 b3区。

規模と平面形　長軸1.80m，短軸1.00mの隅丸長方形で，深さ60cmである。

長軸方向　N－86°－W

壁面　短軸方向は中段までほぼ垂直に立ち上がり，中段から内彎気味に立ち上がる。長軸方向は外傾して立ち上がる。

底面　2段になっており，低いほうの底面は平坦で幅が狭い。

覆土　10層からなる人為堆積である。

土層解説

1　黒　　色　ローム粒子中量
2　黒 褐 色　ローム粒子多量，黒色土粒子少量
3　暗 褐 色　ローム粒子中量，ローム大ブロック少量
4　黒 褐 色　ローム粒子微量
5　黒 褐 色　ローム粒子・黒色土粒子少量
6　黒 褐 色　ローム粒子中量，黒色土粒子少量
7　暗 褐 色　ローム粒子中量，黒色土粒子少量
8　黒 褐 色　ローム粒子・黒色土粒子微量
9　極暗褐色　ローム粒子中量
10　褐　　色　ローム中ブロック少量

遺物　土師器片1点，縄文土器片4点が出土しているが，いずれも細片で流れ込みと思われる。

所見　形状及び覆土上層から中層に腐植土を含む黒色土及び黒褐色土が堆積していることから墓壙と思われる。本跡の明確な時期は不明であるが，中世以降と思われる。

第27号土坑（第115図）

位置　調査区の東部，B 3 i2区。

重複関係　第10号住居跡を掘り込んでおり，本跡が新しい。

規模と平面形　長軸2.10m，短軸0.62mの隅丸長方形で，深さ35cmである。

長軸方向　N－36°－W

壁面　短軸方向は中段までなだらかに立ち上がり，中段からほぼ垂直に立ち上がる。長軸方向は外傾して立ち上がる。

底面　2段になっており，下のほうは平坦で幅が狭い。

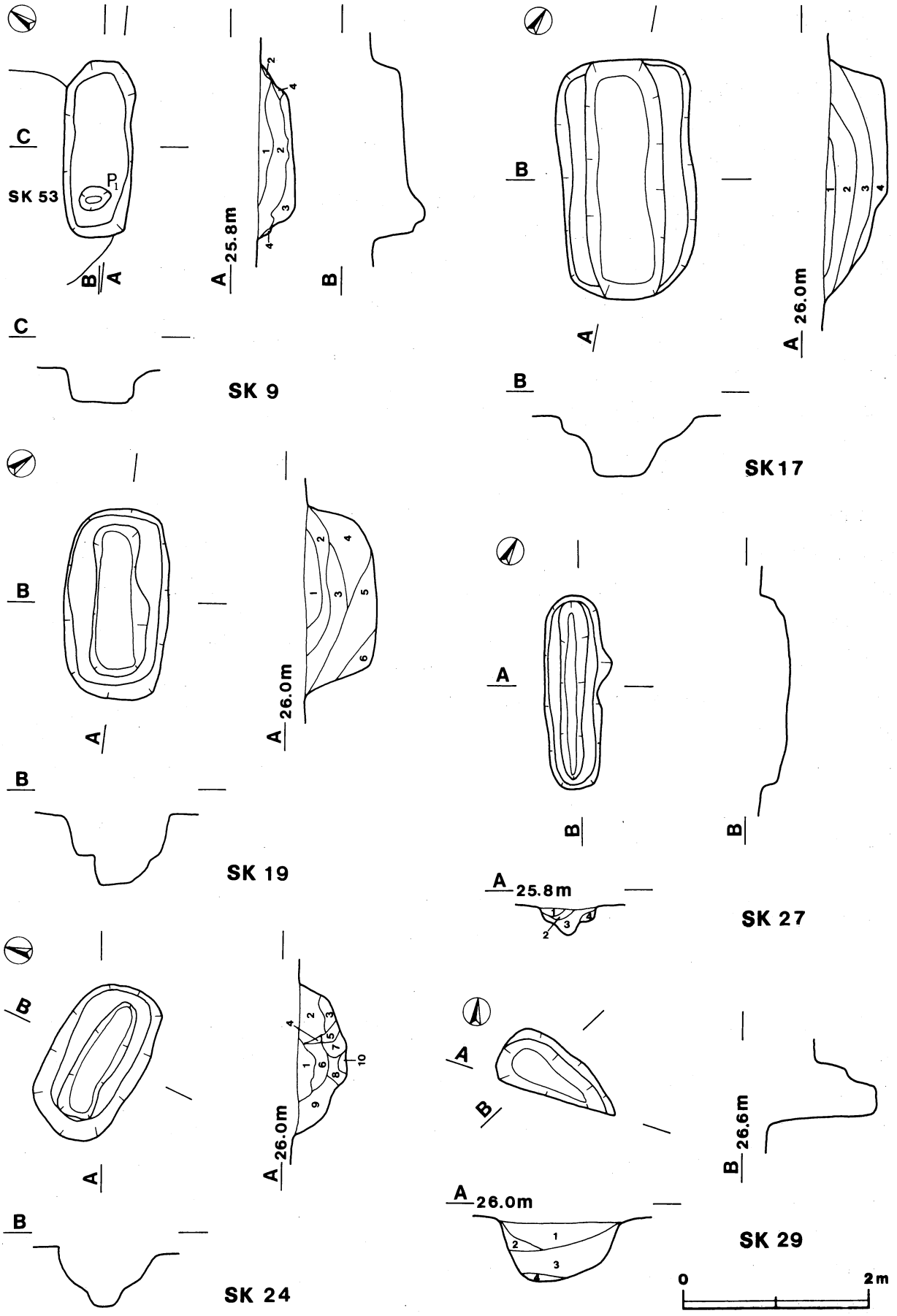
覆土　4層からなる人為堆積である。

土層解説

1　黒 褐 色　炭化粒子・ローム粒子少量
2　黒 褐 色　ローム粒子少量
3　黒 褐 色　ローム粒子少量，ローム大ブロック極微量
4　褐　　色　ローム粒子多量

遺物　縄文土器片2点が出土しているが，いずれも細片で流れ込みと思われる。

所見　形状及び覆土上層から中層に腐植土を含む黒褐色土が堆積していることから墓壙と思われる。本跡の明確な時期は不明であるが，中世以降と思われる。



第115図　第9・17・19・24・27・29号土坑実測図

第29号土坑（第115図）

位置　調査区の東部，Ｂ３ｊ1区。

規模と平面形　南半分が調査区域外に延びており，確認できたのは長軸(1.40)ｍ，短軸(0.70)ｍで，隅丸長方形と推定される。深さは70㎝である。

長軸方向　Ｎ－50°－Ｗ

壁面　長軸方向は外傾して立ち上がり，短軸方向の断面形は２段の逆台形である。

底面　２段になっており，低いほうの底面は平坦である。

覆土　４層からなる人為堆積である。

土層解説

1　黒 褐 色　炭化粒子中量，ローム粒子微量
2　灰 褐 色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
3　暗 褐 色　ローム粒子中量，焼土粒子微量
4　褐　　色　ローム粒子多量

遺物　本跡に伴う遺物は出土していない。

所見　形状及び覆土上層に腐植土を含む黒褐色土が堆積していることから墓壙と思われる。本跡の明確な時期は不明であるが，中世以降と思われる。

第30号土坑（第117図）

位置　調査区の中央部，Ｂ２ｊ0区。

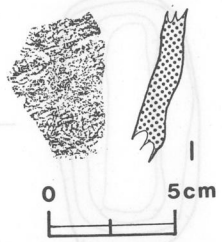
重複関係　第１号掘立柱建物跡のＰ3を掘り込んでおり，本跡が新しい。

規模と平面形　長軸2.28m，短軸0.85mの隅丸長方形で，深さ45㎝である。

長軸方向　Ｎ－49°－Ｗ

壁面　短軸方向はほぼ垂直に立ち上がり，長軸方向は外傾して立ち上がる。

底面　平坦である。



第116図　第30号土坑出土遺物実測拓影図

ピット　Ｐ1は中央部北西寄りに位置し，長径30㎝，短径25㎝の楕円形で，深さ14㎝である。性格は不明である。

覆土　５層からなる人為堆積である。

土層解説

1　黒 褐 色　黒色土小ブロック中量，ローム粒子少量，炭化粒子微量
2　極暗褐色　ローム粒子・黒色土小ブロック少量，ローム小ブロック微量
3　黒 褐 色　黒色土小ブロック中量，ローム粒子少量，ローム小ブロック極微量
4　暗 褐 色　ローム小ブロック・ローム粒子・黒色土小ブロック中量
5　褐　　色　ローム粒子多量

遺物　縄文土器片24点が出土しているが，いずれも細片で流れ込みと思われる。第116図１は縄文土器片の拓影図である。深鉢の胴部片で外面に貝殻腹縁文が施されている。胎土に繊維を含み縄文時代前期前半(花積下層式期)に比定されるものと思われる。

所見　覆土上層から中層に黒色土小ブロックを含む黒褐色土の堆積が見られる。本跡の時期は不明である。

第31号土坑（第117図）

位置　調査区の東部，Ｂ３ｇ1区。

重複関係　第16Ｂ号住居跡を掘り込んでおり，本跡が新しい。

規模と平面形　長軸2.64m，短軸1.08mの隅丸長方形で，深さ38㎝である。

長軸方向　Ｎ－９°－Ｗ

壁面　なだらかに立ち上がる。

底面　凹凸している。

覆土　4層からなる人為堆積である。

土層解説

1　黒　　色　炭化粒子少量，ローム粒子微量
2　極暗褐色　ローム粒子少量
3　黒 褐 色　ローム粒子中量，ローム大ブロック微量
4　褐　　色　ローム粒子中量

遺物　縄文土器片13点が出土しているが，いずれも細片で流れ込みと思われる。

所見　覆土上層から中層に腐植土を含む黒色土の堆積が見られる。本跡の時期は不明である。

第39号土坑（第117図）

位置　調査区の西部，C 2 h4区。

重複関係　第1号墳を掘り込んでおり，本跡が新しい。

規模と平面形　長軸(1.48)m，短軸1.30mで隅丸長方形と推定される。深さは20cmである。

長軸方向　N－80°－E

壁面　外傾して立ち上がる。

底面　平坦である。

覆土　7層からなる人為堆積である。

土層解説

1　黒 褐 色　ローム粒子中量，炭化粒子微量
2　黒　　色　ローム粒子中量，焼土粒子微量，炭化物極微量
3　黒 褐 色　炭化物・炭化粒子少量，ローム粒子微量
4　黒　　色　炭化粒子多量，ローム粒子微量
5　黒 褐 色　焼土粒子・炭化粒子少量，ローム粒子微量
6　暗 褐 色　焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量，焼土小ブロック微量
7　褐　　色　ローム中ブロック多量

遺物　縄文土器片6点が出土しているが，いずれも細片で流れ込みと思われる。

所見　覆土上層から中層に腐植土を含む黒色土の堆積と覆土中に焼土や炭化物が含まれていることから火葬施設と思われる。本跡の時期は，重複関係から古墳時代以降と思われる。

第40号土坑（第117図）

位置　調査区の西部，C 2 h5区。

重複関係　第1号墳を掘り込んでおり，本跡が新しい。

規模と平面形　長軸1.84m，短軸1.14mの不整長方形で，深さ70cmである。

長軸方向　N－45°－E

壁面　外傾して立ち上がる。

底面　平坦である。

覆土　9層からなる人為堆積である。

土層解説

1　暗 褐 色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量
2　暗 褐 色　ローム粒子中量，ローム小ブロック黒色土小ブロック少量
3　黒 褐 色　ローム粒子・黒色土小ブロック中量，ローム小ブロック少量,ローム中ブロック極微量
4　極暗褐色　ローム粒子中量，ローム中・小ブロック少量，焼土粒子・炭化物極微量
5　褐　　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量
6　褐　　色　ローム粒子多量
7　黒 褐 色　ローム粒子中量，ローム中ブロック・山砂少量
8　暗 褐 色　ローム中ブロック・ローム粒子中量
9　黒 褐 色　ローム粒子中量，ローム中ブロック・黒色土小ブロック少量

遺物　本跡に伴う遺物は出土していない。

所見　本跡は覆土の堆積状況から墓壙と思われる。時期は，第1号墳との重複関係から古墳時代以降と思われる。

第41号土坑（第117図）

位置　調査区の中央部，C３a1区。

重複関係　第12号住居跡，第２号溝，第３号陥し穴を掘り込んでおり，本跡が新しい。

規模と平面形　長軸2.42m，短軸1.20mの隅丸長方形で，深さ56cmである。

長軸方向　N－78°－W

壁面　中段まで内彎気味に立ち上がり，中段から外傾して立ち上がる。

底面　２段になっており，低いほうは平坦である。

覆土　５層からなる人為堆積である。

土層解説
1　黒　　色　黒色土粒子多量，ローム粒子微量
2　黒　　色　黒色土粒子多量，黒色土小ブロック中量，ローム粒子少量
3　黒 褐 色　ローム粒子少量
4　暗 褐 色　ローム粒子中量，ローム大ブロック極微量
5　暗 褐 色　ローム粒子中量

遺物　縄文土器片１点が出土しているが，細片で流れ込みと思われる。

所見　形状及び覆土上層から中層に腐植土を含む黒色土が堆積していることから墓壙と思われる。本跡の時期は第1号墳との重複関係から古墳時代以降と思われる。

第52号土坑（第117図）

位置　調査区の中央部，B３g2区。

規模と平面形　長軸1.55m，短軸0.65mの隅丸長方形で，深さ20～45cmである。

長軸方向　N－28°－W

壁面　外傾して立ち上がる。

底面　南東方向に傾斜して凹凸がある。

覆土　３層からなる人為堆積である。

土層解説
1　黒　　色　ローム粒子中量
2　黒 褐 色　ローム小ブロック少量
3　暗 褐 色　ローム中ブロック中量

遺物　本跡に伴う遺物は出土していない。

所見　形状及び覆土上層から中層に腐植土を含む黒色土が堆積していることから墓壙と思われる。本跡の明確な時期は不明であるが，中世以降と思われる。

第54号土坑（第117図）

位置　調査区の中央部，C３c1区。

規模と平面形　長軸1.42m，短軸0.55mの隅丸長方形で，深さ24～35cmである。

長軸方向　N－40°－W

壁面　短軸方向はほぼ垂直に立ち上がり，長軸方向は外傾して立ち上がる。

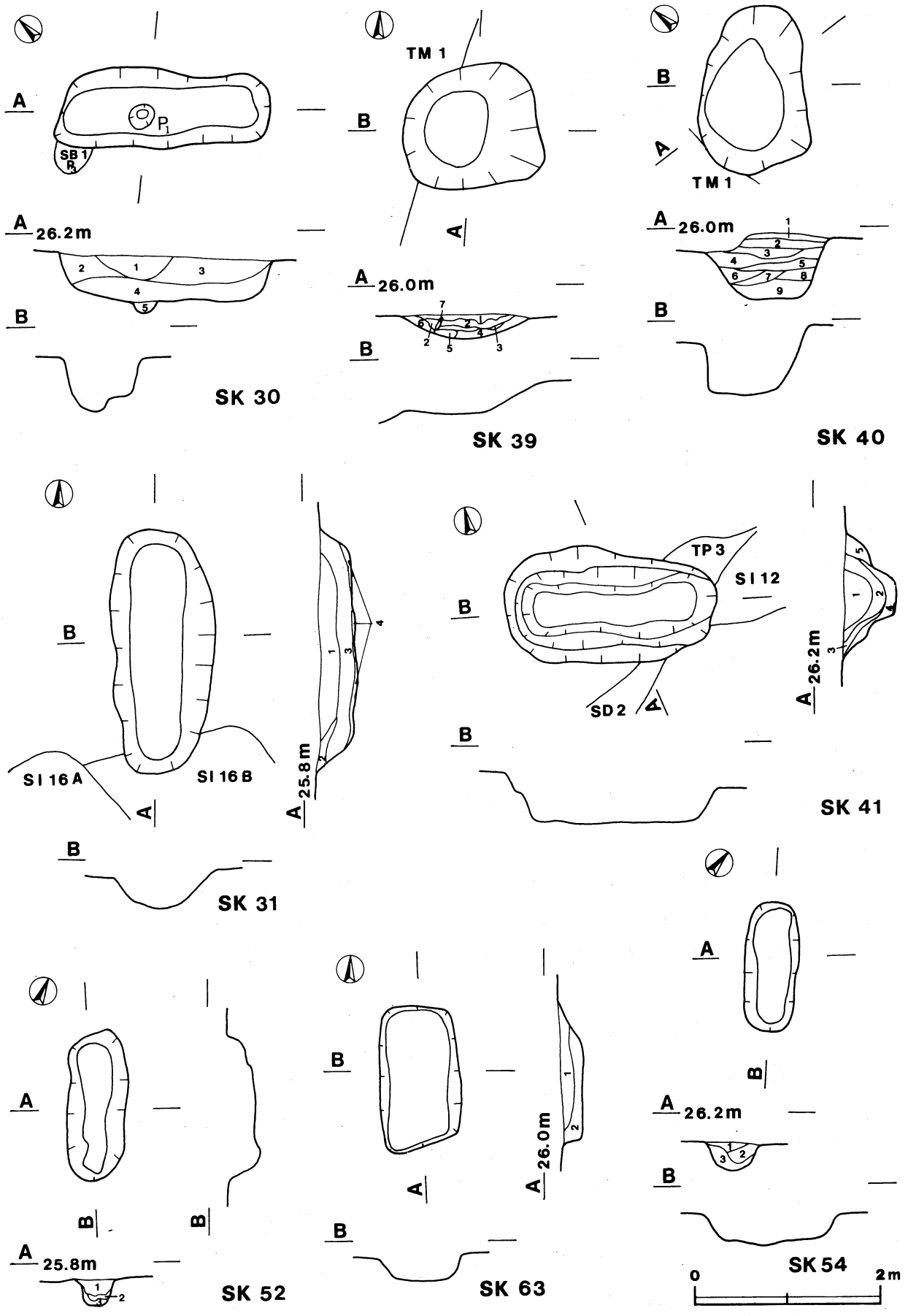
底面　北西方向にわずかに傾斜している。

覆土　３層からなる人為堆積である。

土層解説
1　黒 褐 色　ローム粒子少量，黒色土小ブロック微量
2　黒 褐 色　ローム粒子中量
3　極暗褐色　ローム粒子中量，炭化粒子微量

遺物　本跡に伴う遺物は出土していない。

所見　形状及び覆土上層から中層に腐植土を含む黒褐色土が堆積していることから墓壙と思われる。本跡の明確な時期は不明であるが，中世以降と思われる。



第117図　第30・31・39・40・41・52・54・63号土坑実測図

第63号土坑（第117図）

位置　調査区の中央部，Ｃ２f9区。

規模と平面形　南端が調査区域外に延びており，確認できたのは長軸(1.60)m，短軸0.80mで長方形と推定される。深さ25cmである。

長軸方向　Ｎ－1°－Ｗ

壁面　外傾して立ち上がる。

底面　平坦である。

覆土　２層からなる人為堆積である。

土層解説
1　黒　　色　炭化粒子・ローム粒子少量，炭化物・ローム大ブロック極微量
2　黒褐色　ローム中ブロック・ローム粒子少量

遺物　縄文土器片10点が出土しているが，いずれも細片で流れ込みと思われる。

所見　形状と覆土上層から中層に腐植土を含む黒色土及び黒褐色土が堆積していることから墓壙と思われる。本跡の明確な時期は不明であるが，中世以降と思われる。

第66号土坑（第118図）

位置　調査区の西部，Ｂ２i2区。

規模と平面形　長軸2.98m，短軸1.55mの長方形で，深さ40cmである。

長軸方向　Ｎ－84°－Ｅ

壁面　外傾して立ち上がる。

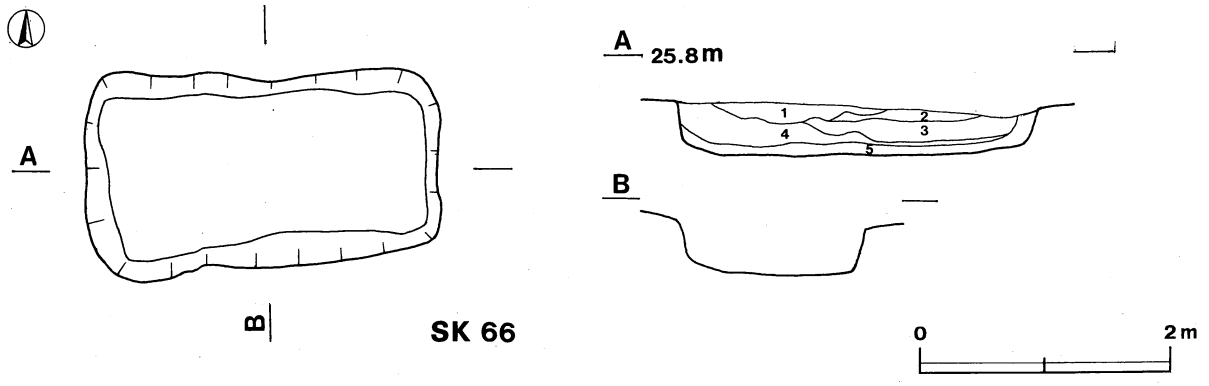
底面　平坦である。

覆土　５層からなる人為堆積である。

土層解説
1　黒　　色　炭化粒子･ローム粒子少量
2　黒褐色　ローム粒子少量
3　極暗褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック微量
4　褐　　色　ローム粒子多量，粘土粒子少量
5　褐　　色　ローム粒子多量

遺物　縄文土器片２点が出土しているが，いずれも細片で流れ込みと思われる。

所見　形状と覆土上層から中層に腐植土を含む黒色土及び黒褐色土が堆積していることから墓壙と思われる。本跡の明確な時期は不明であるが，中世以降と思われる。



第118図　第66号土坑実測図

註

1　茨城県教育財団　「一般国道50号下館バイパス改築工事地内埋蔵文化財発掘調査報告書　八丁台遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第138集　1998.6

参考文献

(1)　茨城県教育財団　「永国地区住宅団地建設予定地内埋蔵文化財調査報告書　寺家ノ後Ａ遺跡　寺家ノ後Ｂ遺跡十三塚Ａ遺跡　十三塚Ｂ遺跡　永国十三塚遺跡　旧鎌倉街道」『茨城県教育財団文化財調査報告』第60集　1990.3

(2)　茨城県教育財団　「一般国道125号道路改良工事地内埋蔵文化財発掘調査報告書　田宮古墳群」『茨城県教育財団文化財調査報告』第57集　1990.3

(2)　集石

調査区西部（Ｃ２i5～Ｄ２a2区）から集石４か所が検出された。以下，集石について記載する。

第１号集石（第119図）

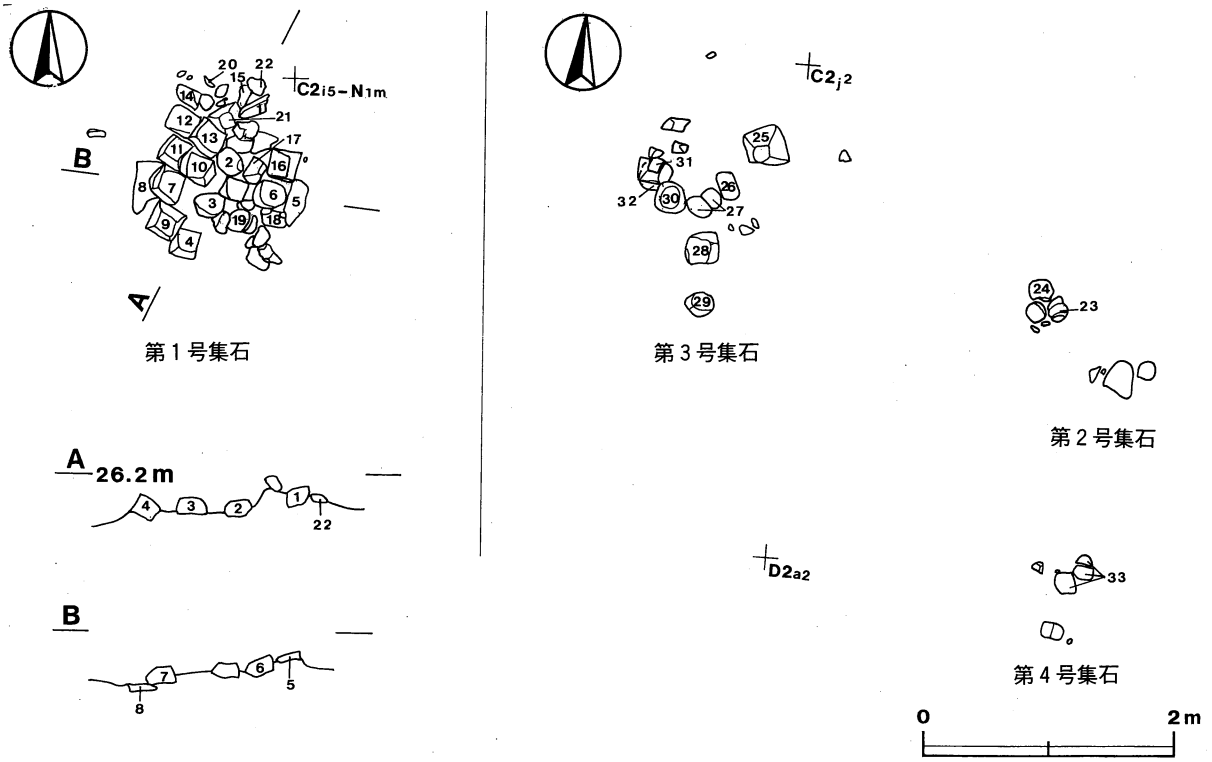
位置　調査区の西部，Ｃ２i5区。

規模　東西1.9m，南北1.6m内に集中している。

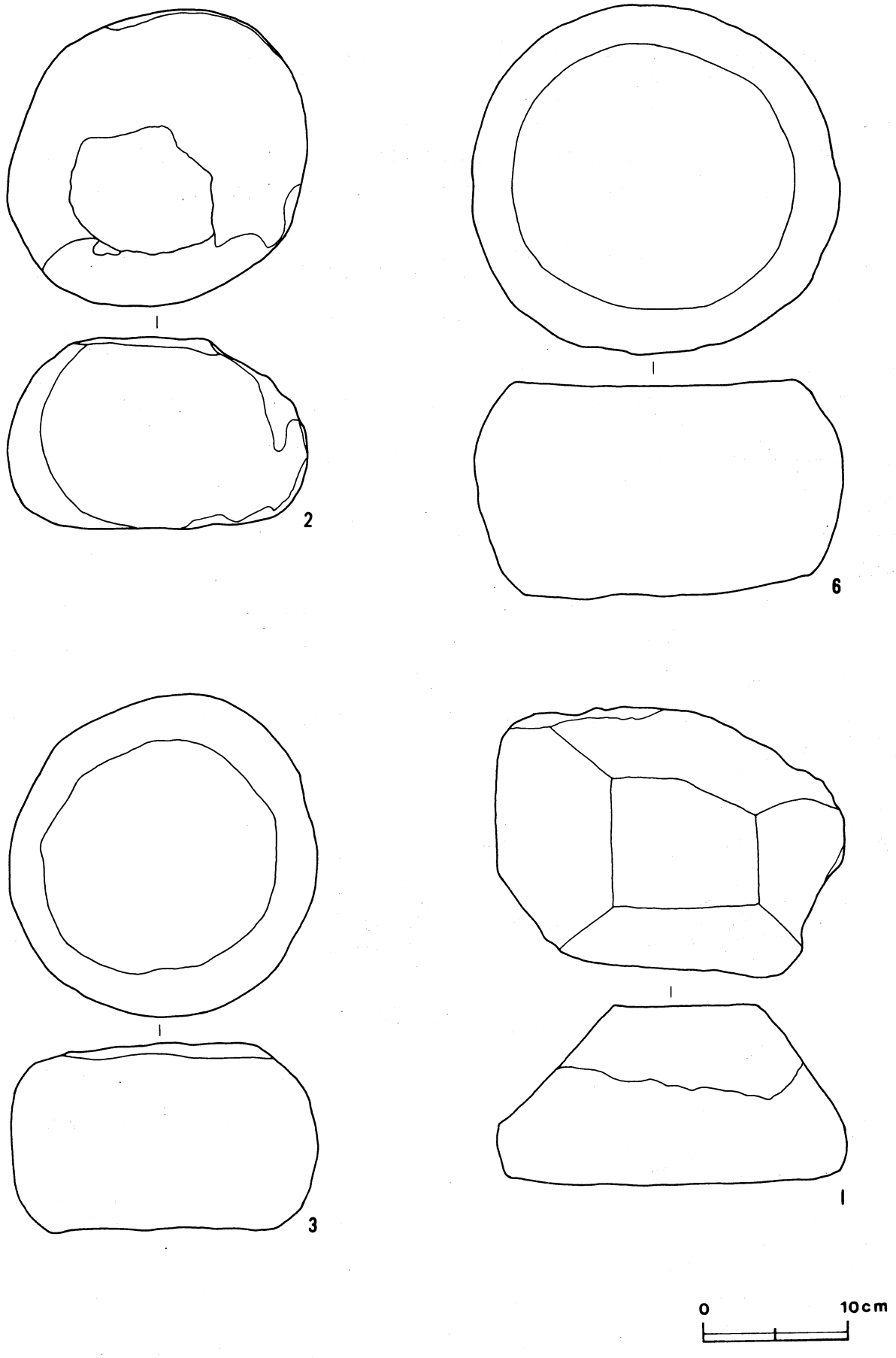
確認面　ローム層の上面で確認された。

遺物　五輪塔片32点，宝篋印塔片３点，石室材片２点が出土している。第120～125図14・19は五輪塔空風輪，１・７・９・11・17・21は五輪塔火輪，２・３・６・18・20は五輪塔水輪，４・10・12・13・16は五輪塔地輪，15・22は宝篋印塔相輪片，５・８は石室材片である。

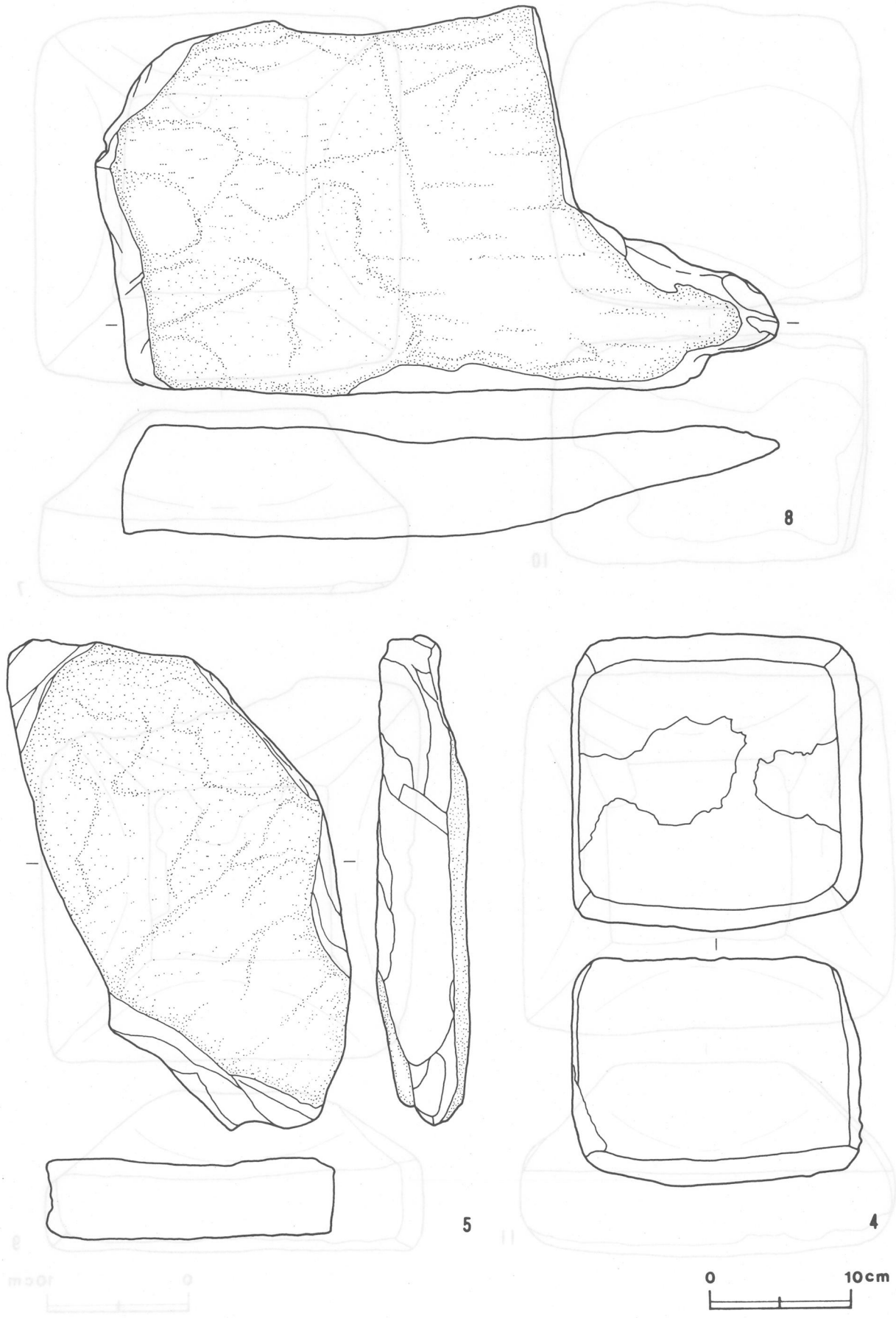
所見　第１号墳の墳丘上及びその周辺にあった石を，植林等の土地利用時に集められたものと考えられる。時期は中世以降と思われる。



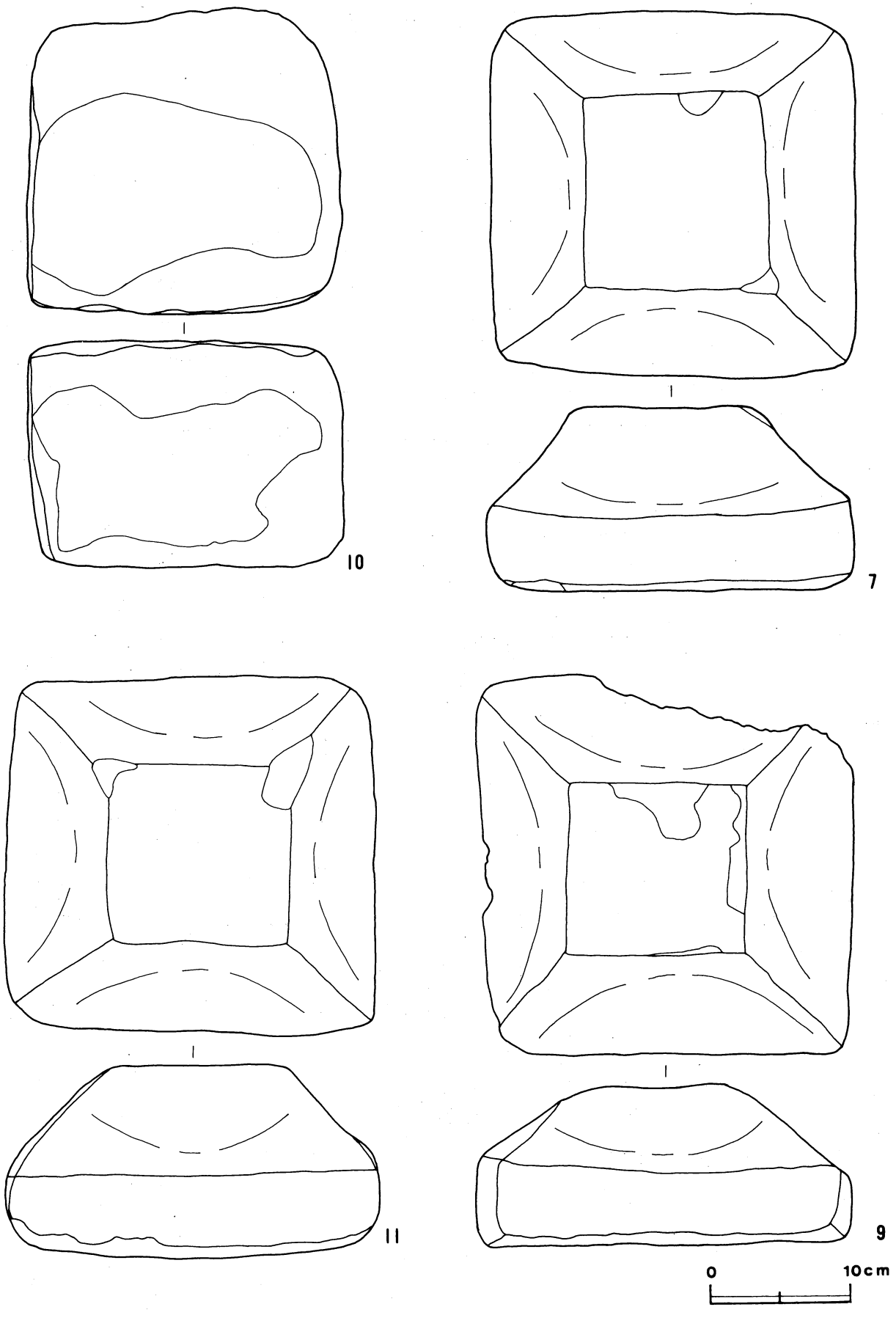
第119図　第１～４号集石遺物出土状況



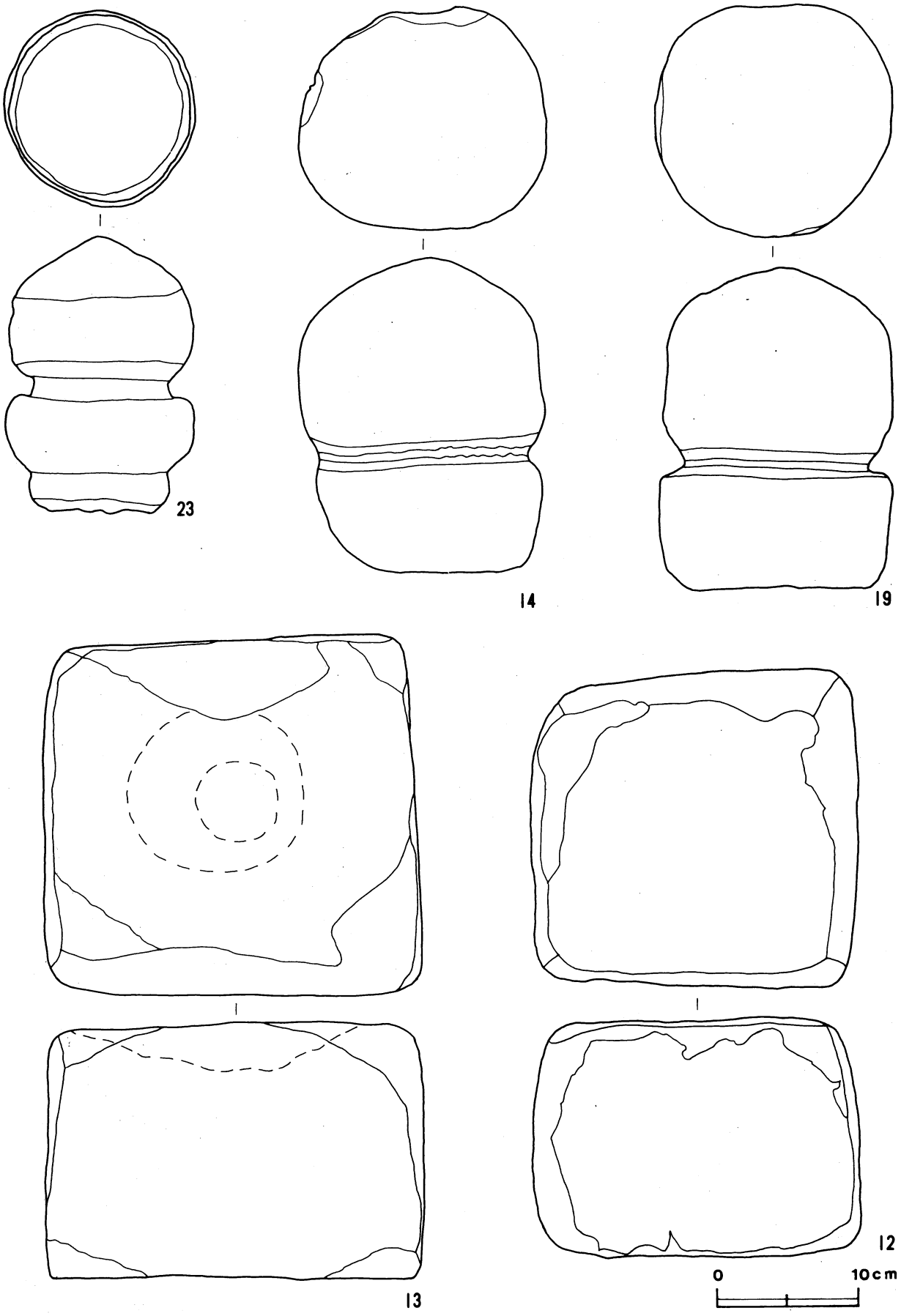
第120図　集石出土遺物実測図(1)



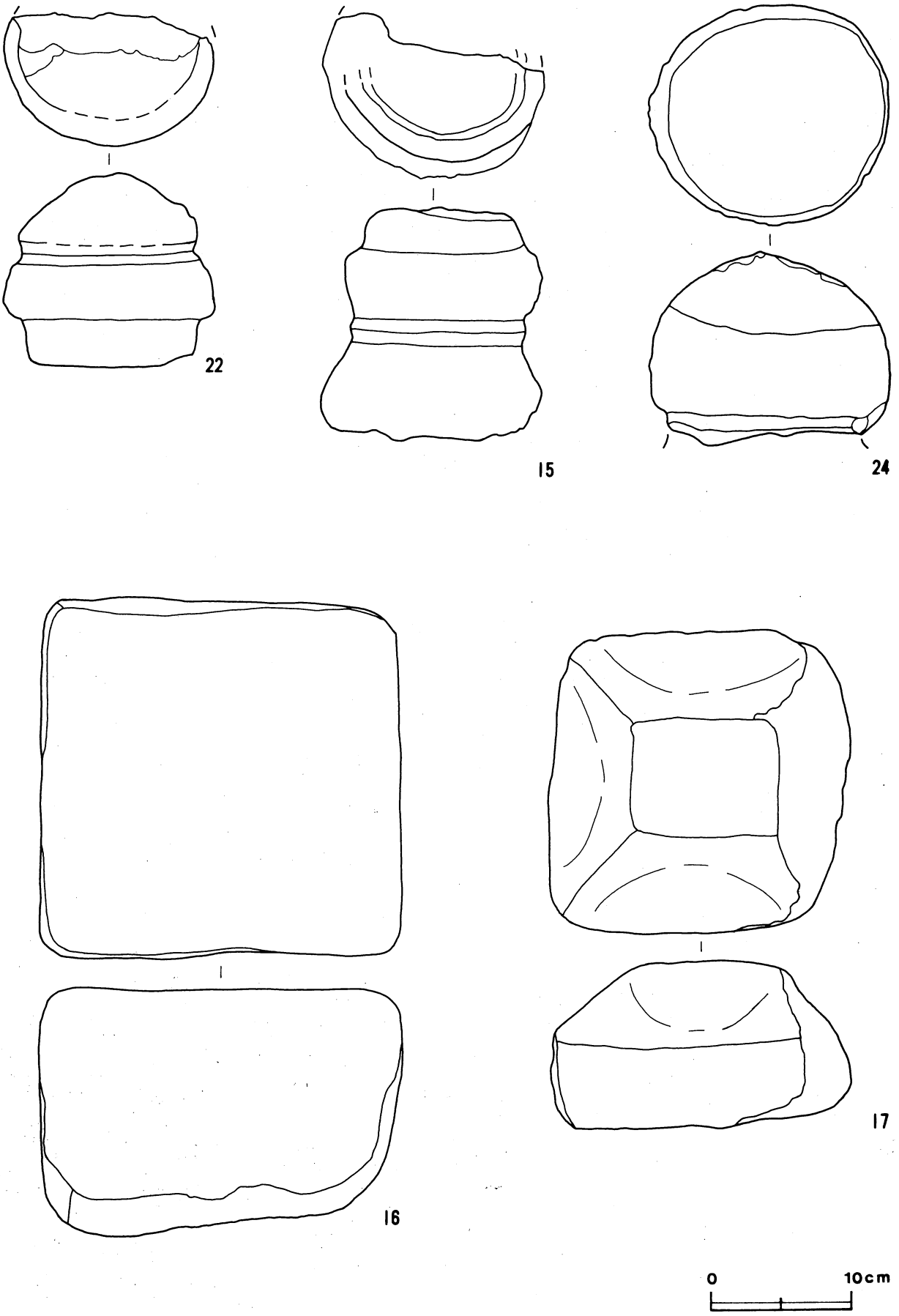
第121図　集石出土遺物実測図(2)



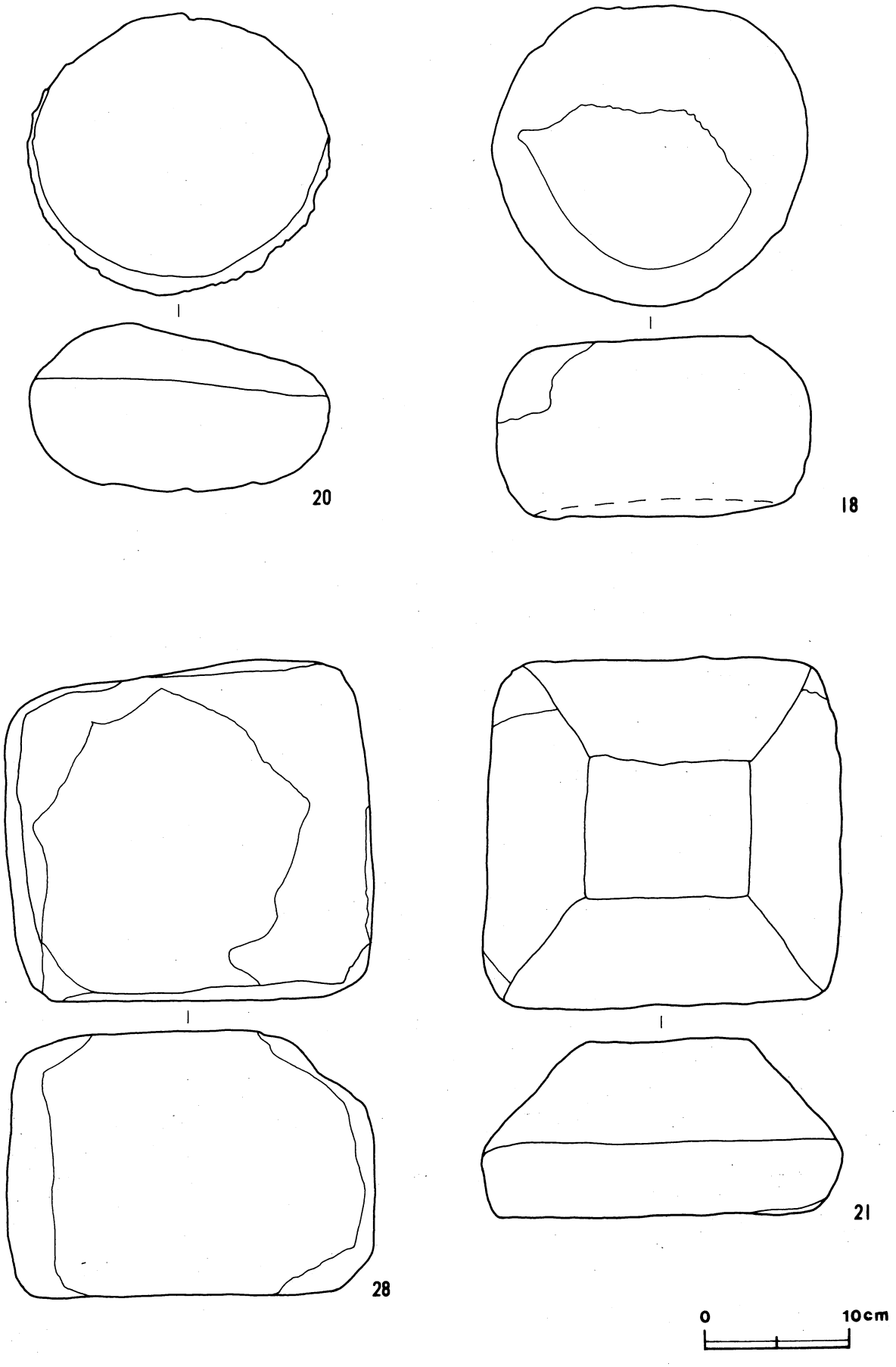
第122図　集石出土遺物実測図(3)



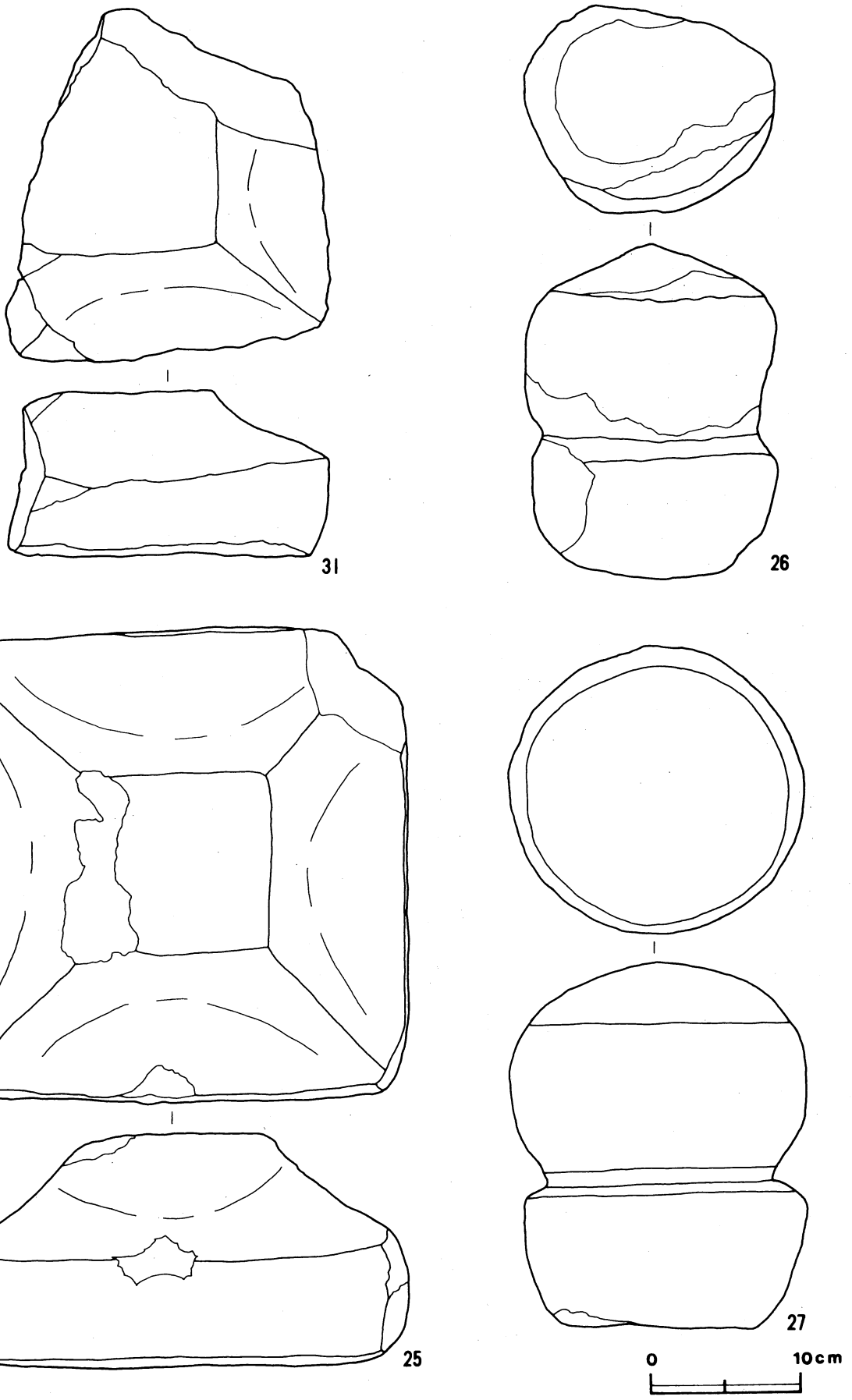
第123図　集石出土遺物実測図(4)



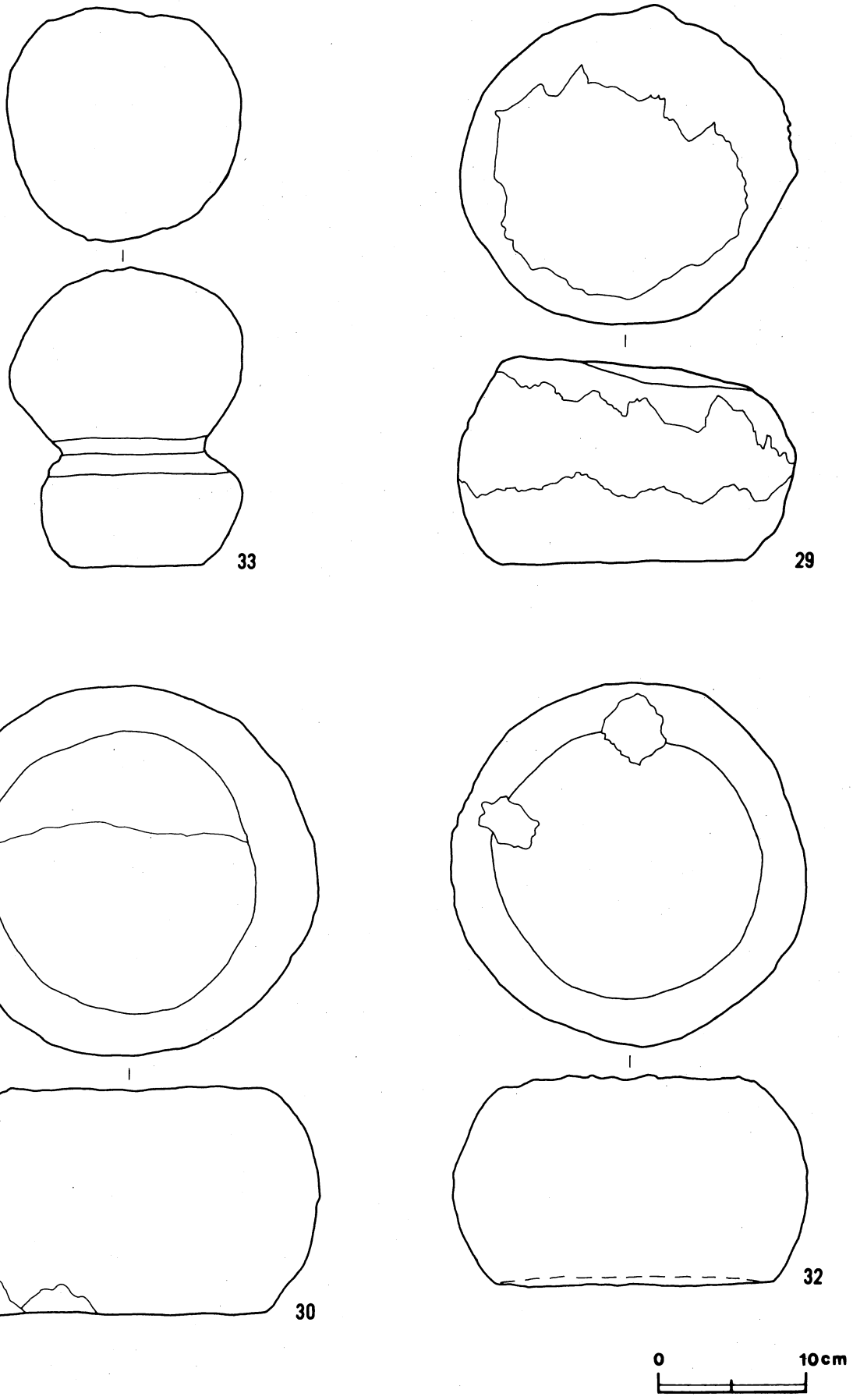
第124図　集石出土遺物実測図(5)



第125図　集石出土遺物実測図(6)



第126図　集石出土遺物実測図(7)



第127図　集石出土遺物実測図(8)

第２号集石（第119図）

位置　調査区の西部，Ｃ２ｊ2区。

規模　東西1.0m，南北1.1m内に散在している。

確認面　ローム層の上面で確認された。

遺物　五輪塔片８点が出土している。第123・124図23は五輪塔空風輪，24は五輪塔空輪片である。

所見　第１号集石と同じように，第１号墳の墳丘上及びその周辺にあった石を，植林等の土地利用時に集められたものと考えられる。時期は中世以降と思われる。

第３号集石（第119図）

位置　調査区の西部，Ｃ２ｊ1区。

規模　東西1.7m，南北2.1m内に散在している。

確認面　ローム層の上面で確認された。

遺物　五輪塔片17点が出土している。第125～127図26・27は五輪塔空風輪，25・31は五輪塔火輪，29・30・32は五輪塔水輪，28は五輪塔地輪である。

所見　第１号集石と同じように，第１号墳の墳丘上及びその周辺にあった石を，植林等の土地利用時に集められたものと考えられる。時期は中世以降と思われる。

第４号集石（第119図）

位置　調査区の西部，Ｄ２ａ2区。

規模　東西0.6m，南北0.7m内に散在している。

確認面　ローム層の上面で確認された。

遺物　五輪塔片５点が出土している。第127図33は五輪塔空風輪である。

所見　第１号集石と同じように，第１号墳の墳丘上及びその周辺にあった石を，植林等の土地利用時に集められたものと考えられる。時期は中世以降と思われる。

集石出土石製品観察表

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考	
		幅(cm)	奥行(cm)	厚さ(cm)	重量(kg)				
第120図1	五輪塔(火輪)	(24.2)	(18.9)	12.4	(6.88)	花崗岩	第１号集石	Q193	15世紀代
2	五輪塔(水輪)	20.9	20.6	13.3	6.80	花崗岩	第１号集石	Q194	15世紀代
3	五輪塔(水輪)	21.5	22.4	13.2	8.30	花崗岩	第１号集石	Q195	15世紀代
第121図4	五輪塔(地輪)	20.3	21.0	16.1	12.46	花崗岩	第１号集石	Q196	15世紀代
5	石棺材	(34.9)	(24.4)	6.6	(6.76)	雲母片岩	第１号集石	Q197	
第120図6	五輪塔(水輪)	25.6	24.3	15.0	13.72	花崗岩	第１号集石	Q198	15世紀代
第122図7	五輪塔(火輪)	26.2	26.5	13.2	14.96	花崗岩	第１号集石	Q199	15世紀代
第121図8	石棺材	(27.9)	(48.5)	8.0	(12.82)	雲母片岩	第１号集石	Q200	
第122図9	五輪塔(火輪)	26.8	27.1	11.6	11.04	花崗岩	第１号集石	Q201	15世紀代
10	五輪塔(地輪)	22.6	(21.8)	16.3	(12.74)	花崗岩	第１号集石	Q202	15世紀代
11	五輪塔(火輪)	26.6	25.5	(14.0)	(13.62)	花崗岩	第１号集石	Q203	15世紀代
第123図12	五輪塔(地輪)	23.3	(22.7)	16.9	(15.80)	花崗岩	第１号集石	Q204	15世紀代
13	五輪塔(地輪)	27.0	25.7	18.4	25.00	花崗岩	第１号集石	Q205	15世紀代

図版番号	器　種	計測値				石　質	出土地点	備　考	
		幅(cm)	奥行(cm)	厚さ(cm)	重量(kg)				
第123図14	五輪塔(空風輪)	17.6	(15.9)	(22.5)	(7.98)	花崗岩	第1号集石	Q206	15世紀代
第124図15	宝篋印塔(相輪)	(16.0)	(11.8)	(15.8)	(2.34)	花崗岩	第1号集石	Q207	15世紀代
16	五輪塔(地　輪)	25.7	25.6	17.7	20.00	花崗岩	第1号集石	Q208	15世紀代
17	五輪塔(火　輪)	21.6	(21.6)	12.1	(7.32)	花崗岩	第1号集石	Q209	15世紀代
第125図18	五輪塔(水　輪)	21.7	20.7	12.6	7.56	花崗岩	第1号集石	Q210	15世紀代
第123図19	五輪塔(空風輪)	16.8	16.8	23.0	9.64	花崗岩	第1号集石	Q211	15世紀代
第125図20	五輪塔(水　輪)	(20.8)	(19.3)	(11.5)	(4.74)	花崗岩	第1号集石	Q212	15世紀代
21	五輪塔(火　輪)	24.7	24.3	12.3	10.82	花崗岩	第1号集石	Q213	15世紀代
第124図22	宝篋印塔(相輪)	15.0	(9.6)	(13.8)	(2.10)	花崗岩	第1号集石	Q214	15世紀代
第123図23	五輪塔(空風輪)	13.4	13.9	19.8	4.54	花崗岩	第2号集石	Q215	15世紀代
第124図24	五輪塔(空　輪)	17.1	(15.6)	(13.8)	(4.22)	花崗岩	第2号集石	Q216	15世紀代
第126図25	五輪塔(火　輪)	31.5	31.7	15.7	22.40	花崗岩	第3号集石	Q217	15世紀代
26	五輪塔(空風輪)	(16.8)	(13.9)	22.3	(5.54)	花崗岩	第3号集石	Q218	15世紀代
27	五輪塔(空風輪)	19.9	19.2	24.6	11.68	花崗岩	第3号集石	Q219	15世紀代
第125図28	五輪塔(地　輪)	25.5	23.5	18.2	18.35	花崗岩	第3号集石	Q220	15世紀代
第127図29	五輪塔(水　輪)	22.6	21.5	13.8	18.10	花崗岩	第3号集石	Q221	15世紀代
30	五輪塔(水　輪)	25.4	24.7	15.2	14.18	花崗岩	第3号集石	Q222	15世紀代
第126図31	五輪塔(火　輪)	(21.6)	(23.6)	11.1	(16.30)	花崗岩	第3号集石	Q223	15世紀代
第127図32	五輪塔(水　輪)	23.7	24.3	14.1	12.04	花崗岩	第3号集石	Q224	15世紀代
33	五輪塔(空風輪)	15.7	15.8	19.8	5.82	花崗岩	第4号集石	Q225	15世紀代

(3)　遺構外出土遺物

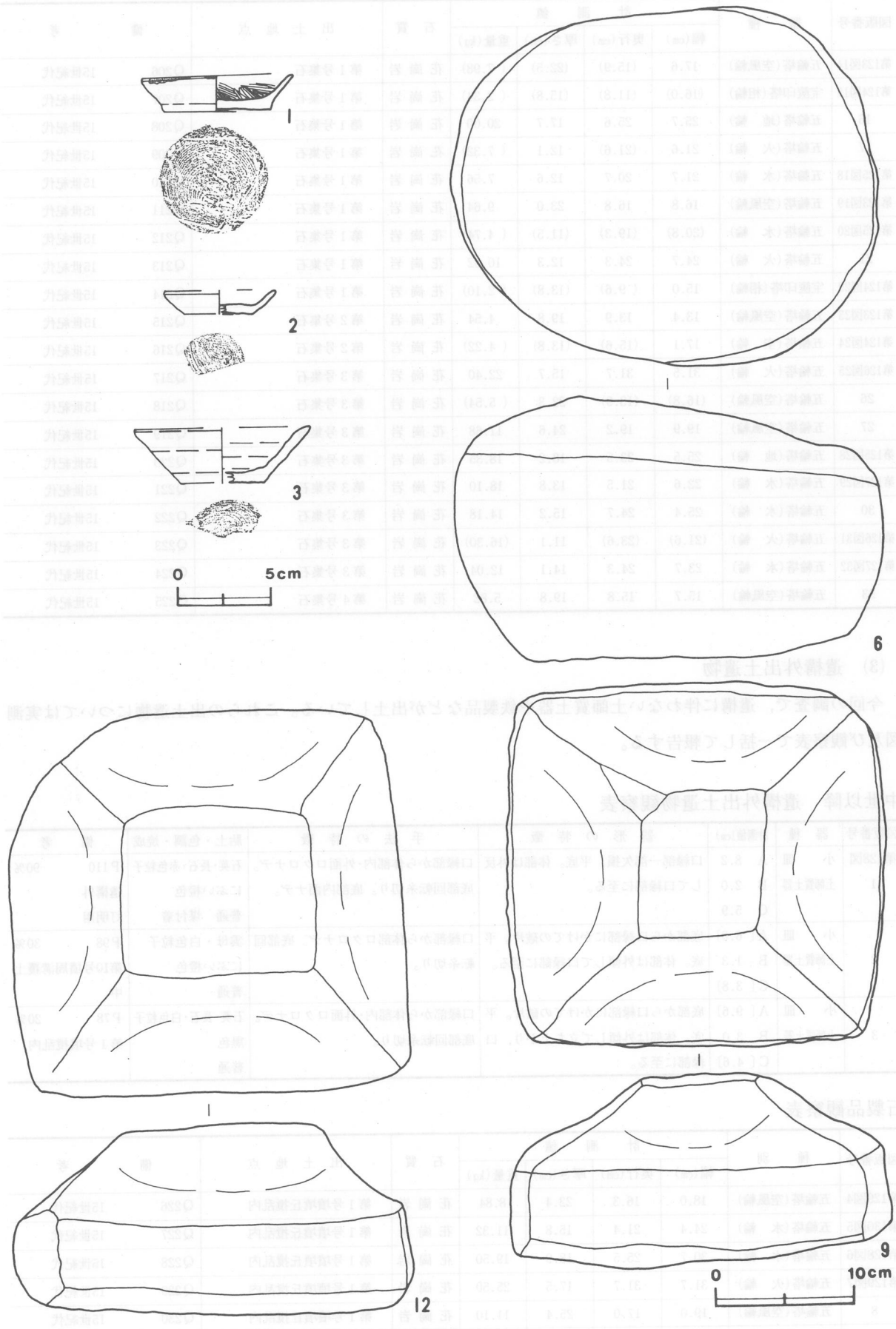
今回の調査で，遺構に伴わない土師質土器や鉄製品などが出土している。これらの出土遺物については実測図及び観察表で一括して報告する。

中世以降　遺構外出土遺物観察表

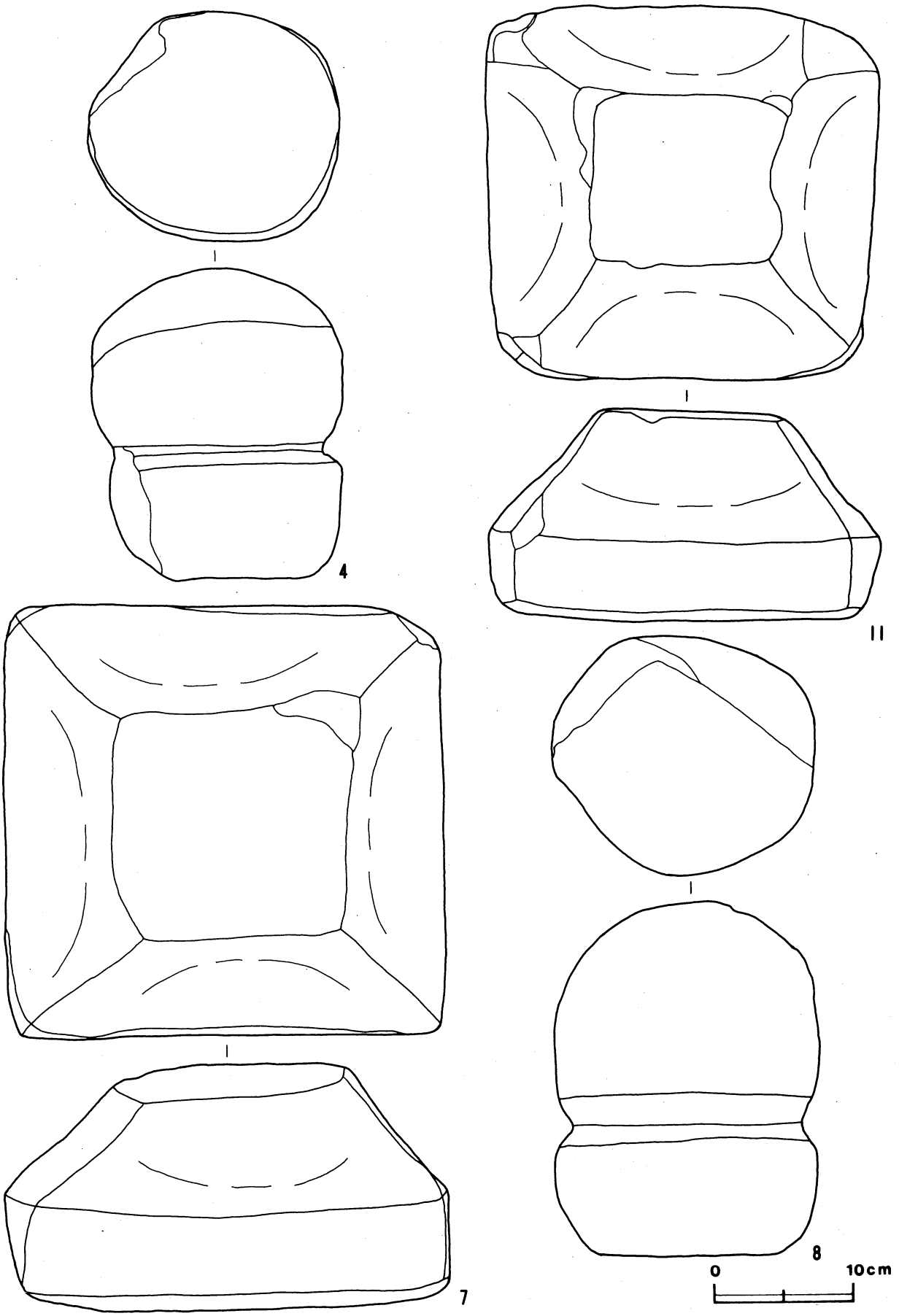
図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第128図1	小　皿 土師質土器	A 8.2 B 2.0 C 5.9	口縁部一部欠損。平底。体部は外反して口縁部に至る。	口縁部から体部内・外面ロクロナデ。底部回転糸切り。底部内面ナデ。	石英・長石・赤色粒子 にぶい橙色 普通　煤付着	P110　90% 遺構外 灯明用
2	小　皿 土師質土器	A〔 6.0〕 B 1.3 C〔 3.8〕	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は外傾して口縁部に至る。	口縁部から体部ロクロナデ。底部回転糸切り。	雲母・白色粒子 にぶい橙色 普通	P98　30% 第10号墳周溝覆土中
3	小　皿 土師質土器	A〔 9.6〕 B 3.0 C〔 4.6〕	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がり，口縁部に至る。	口縁部から体部内・外面ロクロナデ。底部回転糸切り。	石英・長石・白色粒子 黒色 普通	P78　20% 第1号墳撹乱内

石製品観察表

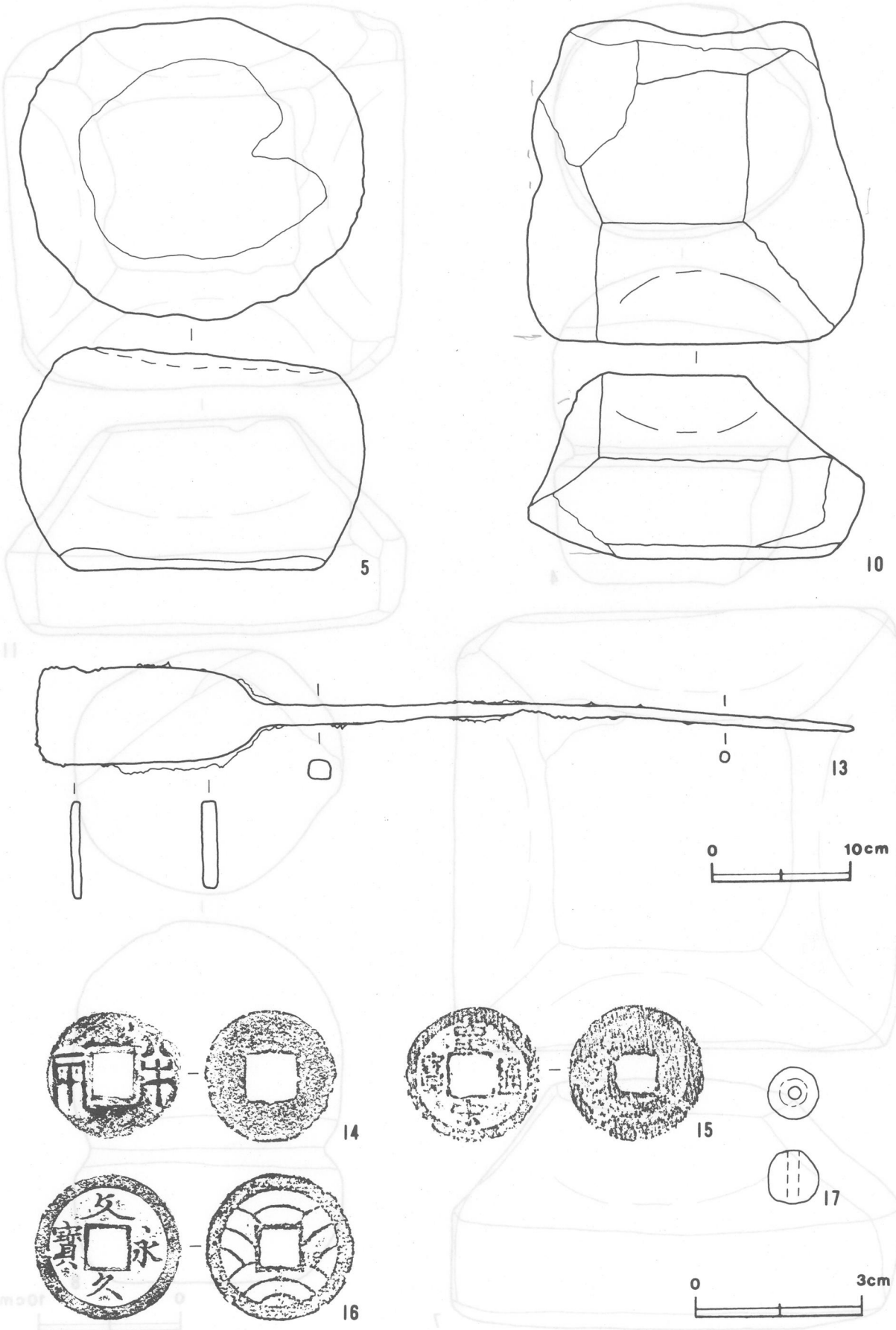
図版番号	種　別	計測値				石　質	出土地点	備　考	
		幅(cm)	奥行(cm)	厚さ(cm)	重量(kg)				
第129図4	五輪塔(空風輪)	18.0	16.3	22.4	8.84	花崗岩	第1号墳墳丘撹乱内	Q226	15世紀代
第130図5	五輪塔(水　輪)	24.4	21.4	15.8	11.32	花崗岩	第1号墳墳丘撹乱内	Q227	15世紀代
第128図6	五輪塔(水　輪)	30.7	25.5	18.9	19.50	花崗岩	第1号墳墳丘撹乱内	Q228	15世紀代
第129図7	五輪塔(火　輪)	31.7	31.7	17.5	25.50	花崗岩	第1号墳墳丘撹乱内	Q229	15世紀代
8	五輪塔(空風輪)	19.0	17.0	25.4	11.10	花崗岩	第1号墳墳丘撹乱内	Q230	15世紀代
第128図9	五輪塔(火　輪)	27.3	26.0	13.8	12.88	花崗岩	第1号墳墳丘撹乱内	Q231	15世紀代



第128図　中世以降　遺構外出土遺物実測・拓影図(1)



第129図　中世以降　遺構外出土遺物実測・拓影図(2)



第130図　中世以降　遺構外出土遺物実測・拓影図(3)

図版番号	種　別	計　測　値				石　質	出　土　地　点	備　　考
		幅(cm)	奥行(cm)	厚さ(cm)	重量(kg)			
第130図10	五輪塔(火　輪)	(24.0)	(23.4)	13.5	(10.72)	花 崗 岩	第1号墳墳丘撹乱内	Q232　15世紀代
第129図11	五輪塔(火　輪)	28.3	26.9	15.2	16.30	花 崗 岩	第1号墳墳丘撹乱内	Q233　15世紀代
第128図12	五輪塔(火　輪)	28.2	27.6	13.8	14.42	花 崗 岩	第1号墳墳丘撹乱内	Q234　15世紀代

金属製品観察表

図版番号	種　別	計　測　値				出　土　地　点	備　　考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第130図13	鋤	58.0	6.7	1.7	(840.0)	第1号墳墳丘上撹乱内	M2　95%

図版番号	銭　名	銭径(cm)	穿径(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	初鋳年代(西暦)	鋳 造 地	備　　考
14	半 両 銭	2.4	0.8	0.1	2.3	文帝5年 (175B.C.)	前漢 (中国)	M3　100%
15	皇宋通寶	2.4	0.7	0.2	2.5	寶元2年 (1039)	北宋 (中国)	M4　100%
16	文久永寶	2.7	0.7	0.1	2.7	文久3年 (1863)	日本	M5　100%

ガラス製品観察表

図版番号	種　別	計　測　値				材　質	出　土　地　点	備　　考
		径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)			
17	簪の飾玉	0.9	0.9	0.2	(1.4)	ガラス	第1号墳墳丘上撹乱内	Y1　95%

7　時期不明遺構

当遺跡から，掘立柱建物跡1棟，土坑46基，溝3条，道路状遺構1条が検出された。出土遺物は少なく，明確な時期を限定することはできなかった。以下，それぞれの遺構の特徴や出土遺物について記載する。

(1)　掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡（第131図）

位置　調査区中央部，B2i0区。

重複関係　第30・34号土坑に掘り込まれている。

規模　1間×1間の建物跡である。柱間寸法は，桁行3.18m，梁行3.42mである。柱穴の掘り方は，径32～40cmの円形で，深さ38～42cmである。柱抜き取り痕が確認できたのはP1で，推定される柱の径は18cmである。

桁行方向　N－30°－Wの東西棟である。

覆土　抜き取り痕内の覆土はローム粒子・炭化粒子を含んだ黒色土及び黒褐色土である。

土層解説
1　極暗褐色　ローム粒子中量
2　黒　　色　炭化粒子・ローム粒子少量
3　黒 褐 色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量

遺物　本跡に伴う遺物は出土していない。

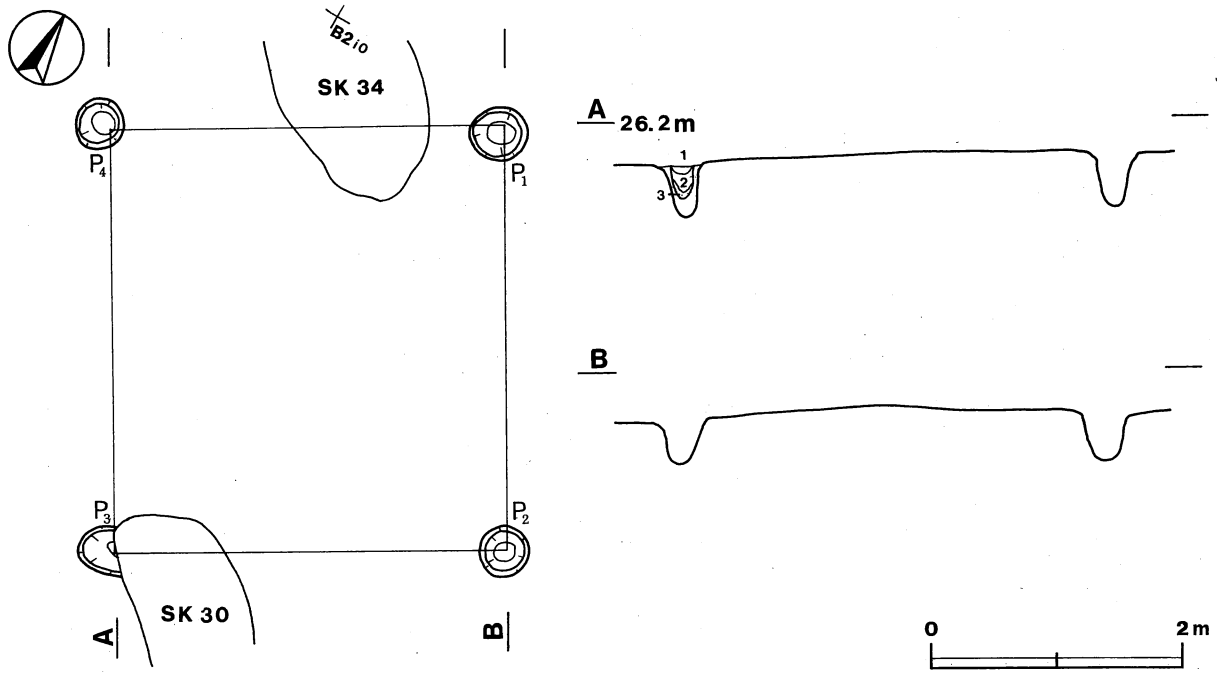
時期　出土遺物がなく，明確な時期を決定することはできないが，第30号土坑との重複関係から，中世以降と思われる。

(2)　土坑

土坑70基を検出したが，46基は時期不明であり一覧表で掲示した。

(3)　溝

調査区から溝4条を検出した。検出した溝の特徴や出土遺物について記載する。



第131図　第１号掘立柱建物跡実測図

第１号溝（第132図・付図）

位置　調査区の西部，Ｃ２e5区。

重複関係　第１号墳，第18号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状　上幅1.2～1.65m，下幅0.1～0.2m，深さ50㎝，断面形はＶ字形で，確認された長さは(25.0)ｍである。

方向　Ｃ２e5区から西方向（Ｎ－80°－Ｅ）に，ほぼ直線的に延びている。

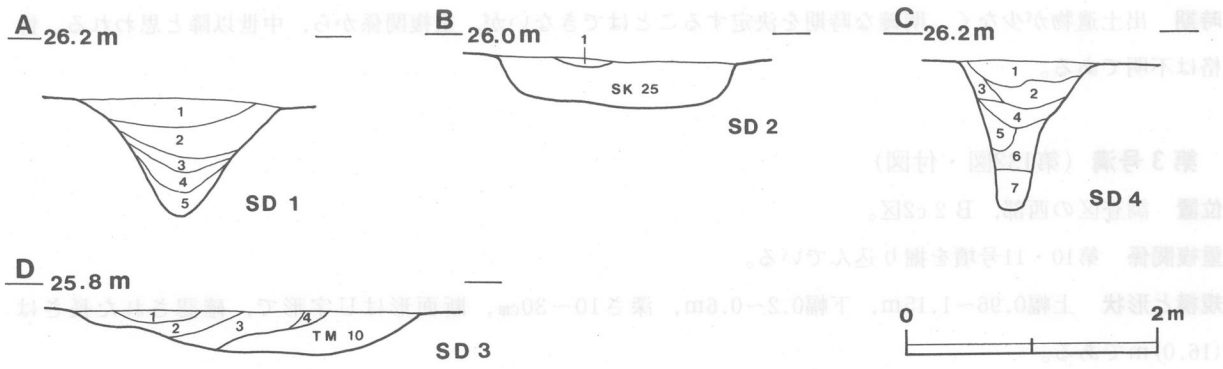
覆土　５層からなり，自然堆積である。

土層解説

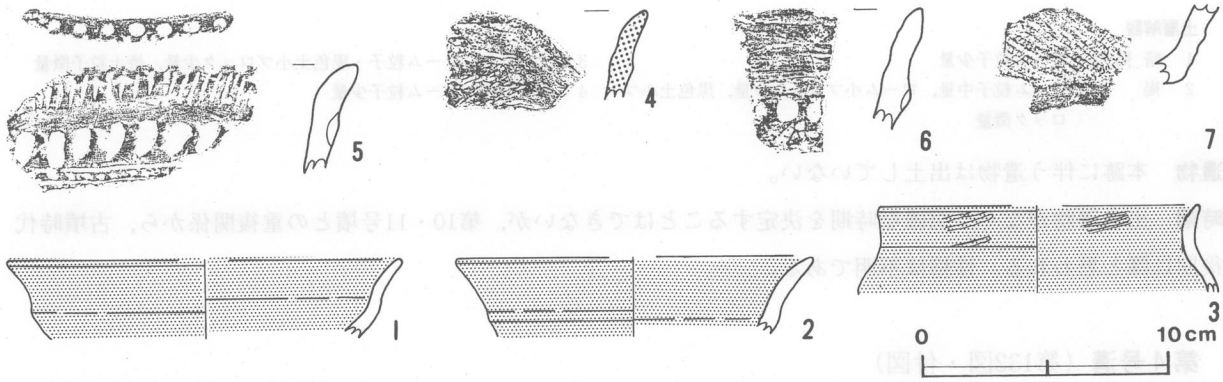
1　暗褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック・粘土粒子少量，小石極微量
2　暗褐色　ローム粒子多量，粘土粒子少量
3　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，粘土粒子少量
4　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量
5　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，粘土粒子少量

遺物　土師器片15点，須恵器片１点，縄文土器片25点，陶磁器片１点が出土している。第132図１・２の土師器坏，３の土師器壺は覆土中から出土している。４～６は縄文土器片の拓影図である。４は深鉢の口縁部片で外面に撚り糸文が施されている。胎土に繊維を含み，縄文時代前期前半(関山式期)に比定できるものと思われる。５は深鉢の口縁部片で口唇部に棒状工具による押圧と外面にヘラ状工具によるキザミが施され，下位にヘラ状工具による爪形文が施文されている。６は深鉢の口縁部片で，隆帯上にヘラ状工具による刺突文が施されている。５・６は縄文土器前期後半の興津式期に比定されるものと思われる。７は弥生土器片の拓影図である。壺の底部から胴部片で胴部外面に附加条一種(附加２条)の縄文が施されている。弥生時代後期後半のものと思われる。

時期　出土遺物はいずれも流れ込みと思われる。明確な時期を決定することはできないが，第１号墳との重複関係や覆土の堆積状況から，中世以降と思われる。性格的に区画溝か根切り溝と考えられる。



第132図　第１～４号溝実測図



第133図　第１号溝出土遺物実測・拓影図

第１号溝出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　　考
第133図	坏	A〔15.8〕	体部から口縁部にかけての破片。体	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘ	石英・雲母	P72　5％
1	土師器	B(3.2)	部は内彎して立ち上がり，口縁部は	ラ削り後,ヘラ磨き,内面ヘラ磨き。	赤褐色	覆土中
			外反する。	内・外面赤彩。	普通	(６世紀前葉)
	坏	A〔14.2〕	口縁部片。口縁部は外反する。口縁	口縁部内・外面横ナデ後,ヘラ磨き。	石英・長石	P73　5％
2	土師器	B(3.1)	部と体部の境に稜を持つ。	内・外面赤彩。	赤褐色	覆土中
					普通	(６世紀前葉)
	壷	A〔12.8〕	体部から口縁部にかけての破片。体	口縁部から体部内・外面横ナデ後,	雲母	P74　5％
3	土師器	B(3.5)	部は内彎して立ち上がり，口縁部は	ヘラ磨き。内・外面赤彩。	明赤褐色	覆土中
			外反する。		普通	(６世紀前葉)

第２号溝（第132図・付図）

位置　調査区の西部，Ｃ２b9区。

重複関係　第12・14・15・30・47号住居跡，第３・25号土坑，第３号陥し穴を掘り込んでいる。

規模と形状　上幅05～0.6m，下幅0.1～0.2m，深さ10～15cmと浅く，断面形は皿状で，確認された長さは(22.0)mである。

方向　Ｃ２b9区から東方向（Ｎ－70°－Ｅ）に，ほぼ直線的に延び，Ｃ３a2区からＬ字状に屈折し北方向へ延びている。

覆土　単一層であり，自然堆積である。

土層解説
1　黒　　色　黒色土小ブロック中量

遺物　土師器片２点，縄文土器片19点が出土しているが，いずれも流れ込みである。

時期　出土遺物が少なく，明確な時期を決定することはできないが，重複関係から，中世以降と思われる。性格は不明である。

第3号溝（第132図・付図）

位置　調査区の西部，Ｂ２c2区。

重複関係　第10・11号墳を掘り込んでいる。

規模と形状　上幅0.96～1.15m，下幅0.2～0.6m，深さ10～30cm，断面形はＵ字形で，確認された長さは(16.0)mである。

方向　Ｃ２a3区から北方向（Ｎ－5°－Ｗ）に，ほぼ直線的に延びている。

覆土　4層からなり，自然堆積である。

土層解説
1　暗褐色　ローム粒子少量
2　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，黒色土小ブロック微量
3　黒褐色　ローム粒子・黒色土小ブロック少量，焼土粒子微量
4　極暗褐色　ローム粒子少量

遺物　本跡に伴う遺物は出土していない。

時期　出土遺物がなく，明確な時期を決定することはできないが，第10・11号墳との重複関係から，古墳時代後期以降と思われる。性格は不明である。

第4号溝（第132図・付図）

位置　調査区の西部，Ｂ２i7区。

重複関係　第11号墳，第13・14号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状　上幅0.5～0.7m，下幅0.1m，深さ80～100cm，断面形はＶ字形で，確認された長さは(23.5)mである。

方向　Ｂ２i7区から南東方向（Ｎ－45°－Ｗ）に，ほぼ直線的に延びている。

覆土　7層からなり，自然堆積である。

土層解説
1　暗褐色　ローム粒子少量
2　黒褐色　ローム小ブロック・ローム粒子中量
3　黒褐色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
4　暗褐色　ローム中ブロック中量，ローム小ブロック少量
5　黒褐色　ローム小ブロック少量
6　暗褐色　ローム中・小ブロック中量
7　黒褐色　ローム粒子中量

遺物　本跡に伴う遺物は出土していない。

時期　出土遺物がなく，明確な時期を決定することはできないが，重複関係から，中世以降と思われる。性格的に区画溝か根切り溝と考えられる。

(4)　道路状遺構

第1号道路状遺構（第134図）

位置　調査区の西部，Ｃ２e5区。

重複関係　第12号墳に掘り込まれている。

規模　幅0.7～0.95mで，断面形は逆台形をしている。確認された長さは(16.5)mである。幅0.3～0.5mで踏み固められた面が確認された。

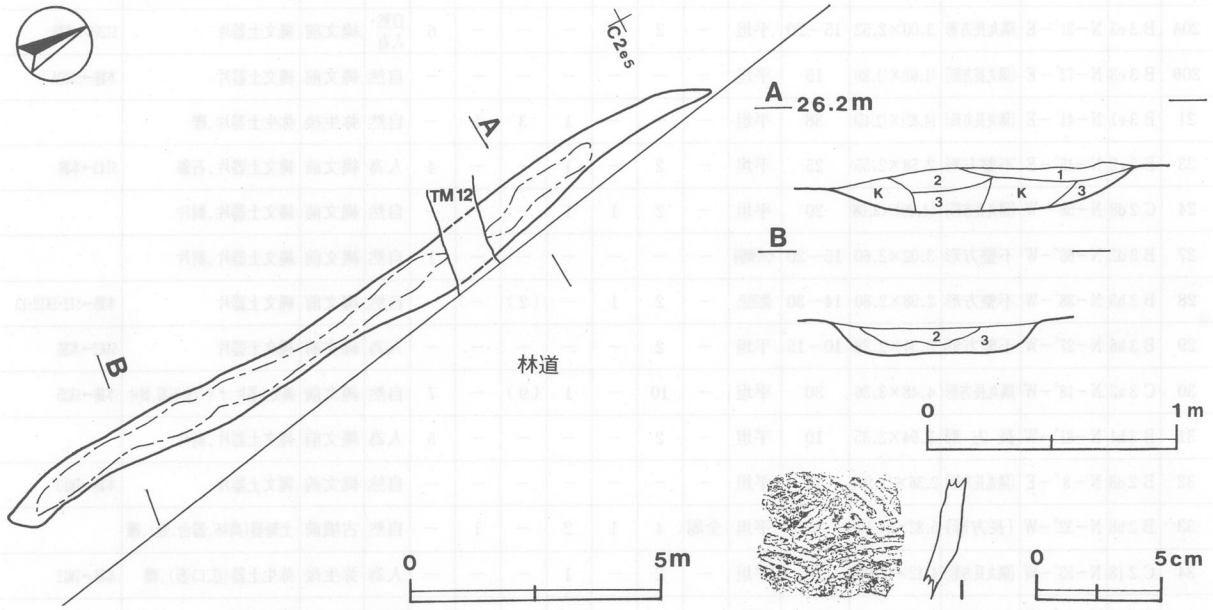
方向　Ｃ２e5区から南方向（Ｎ－5°－Ｗ）に，ほぼ直線的に延びている。

覆土　3層からなり，自然堆積である。

土層解説
1　黒 褐 色　黒色土中ブロック中量，ローム粒子少量
2　暗 褐 色　ローム粒子少量
3　暗 褐 色　ローム粒子中量，ローム小ブロック微量

遺物　縄文土器片1点が出土している。第134図1は縄文土器胴部片の拓影図で，網目状撚糸文が施されている。

時期　出土遺物が少なく，明確な時期を決定することはできないが，第12号墳との重複関係から，古墳時代後期以前と思われる。



第134図　道路状遺構跡・出土遺物実測・拓影図

表3　竪穴住居跡一覧表

住居番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) 長軸×短軸 (長径×短径)	壁高 (cm)	床面	内部施設 壁溝	主柱穴	出入口ピット	炉	壁柱穴(補助柱穴)	貯蔵穴	不明ピット	覆土	時期	出土遺物	備考 新旧関係 (旧→新)
1	C2g4	N−82°−W	不整長方形	4.32×(2.20)	28	平坦	−	−	−	−	−	−	−	自然	弥生後	弥生土器(広口壺)	本跡→TM1
2	B3i5	N−32°−W	方　形	3.00×3.00	8	平坦	−	2	−	1	−	1	−	自然	古墳前	土師器(甕,高坏),球状土錘,砥石	SI28→本跡
3	B3d5	N−53°−W	方　形	4.30×4.18	5	平坦	−	1	−	1	−	−	1	自然	古墳前	土師器(高坏,甕)	SI5→本跡
4	B3f4	N−45°−W	隅丸長方形	5.25×4.60	25～46	平坦	−	4	1	1	(2)	1	2	人為	古墳前	土師器(器台,甕),礫,剝片	SI45·46,SK53→本跡
5	B3e6	N−34°−W	隅丸長方形	3.94×2.75	20～25	平坦	−	2	−	−	−	−	−	自然	縄文前	縄文土器(深鉢,小形深鉢)	TP2→本跡→SI3
6	B3g7	−	円　形	3.68×3.54	8	やや傾斜	−	−	−	−	−	−	1	人為	縄文前	縄文土器片	
7	B3h3	N−38°−E	隅丸長方形	2.94×2.37	15	平坦	−	−	−	−	−	−	2	人為	縄文前	縄文土器片	
8	B3e9	N−4°−E	隅丸長方形	3.08×2.40	8	平坦	−	4	−	1	−	−	1	−	縄文前	縄文土器片,石鏃	
9	B3f8	N−60°−W	不整方形	1.95×1.90	8	平坦	−	−	−	1	−	−	−	人為	縄文前	縄文土器片	
10	B3i3	N−60°−E	不整方形	3.42×3.32	12	平坦	−	−	−	1	−	−	−	自然	縄文前	縄文土器片,剝片	本跡→SK27
11A	C3a5	N−15°−W	〔小判形〕	(3.00)×(1.40)	12～20	平坦	−	−	−	−	−	−	1	人為	縄文前	縄文土器片	本跡→SI11B
11B	C3a5	N−87°−W	〔小判形〕	(3.60)×(3.00)	30	平坦	−	3	1	1	−	−	1	自然	縄文前	縄文土器片,石鏃	SI11A→本跡
12	C3b1	N−35°−W	長 方 形	6.22×5.36	14	平坦	一部	3	1	1	−	−	1	自然	古墳前	土師器(高坏,器台,甕),石器	SI17,SK41,TP3→本跡→SD2,SK3
13	B2j7	N−33°−W	〔隅丸長方形〕	(5.50)×(4.26)	28	平坦	−	3	−	1	−	−	−	自然	弥生後	弥生土器(広口壺),紡錘車,勾玉	本跡→TM11·SD4
14	C2c9	N−58°−E	隅丸方形	4.57×4.44	15	平坦	−	−	−	2	−	−	3	自然	弥生後	弥生土器片	SI15→本跡→SD2·4
15	C2b0	N−62°−W	隅丸長方形	4.08×3.32	25～38	平坦	−	−	−	2	26	−	1	自然	縄文前	縄文土器(深鉢),磨石	SK35→本跡→SI14·SD2

住居番号	位置	主軸方向	平面形	規模（m）長軸×短軸（長径×短径）	壁高（cm）	床面	内部施設							覆土	時期	出土遺物	備考 新旧関係（旧→新）
							壁溝	主柱穴	出入口ピット	炉	壁柱穴（補助柱穴）	貯蔵穴	不明ピット				
16A	B 3 g1	N－43°－W	隅丸長方形	3.76×2.63	25～30	平坦	－	－	－	1	－	－	－	人為	縄文前	縄文土器（深鉢），石鏃	SI16B→本跡
16B	B 3 g1	N－33°－W	隅丸長方形	3.78×2.60	15～21	平坦	－	－	－	－	－	－	－	自然	縄文前	縄文土器片，石鏃	本跡→SI16A，SK31
17	C 3 a2	N－38°－W	隅丸長方形	4.28×2.88	20～25	平坦	－	4	－	2	－	－	3	人為	縄文前	縄文土器片，剝片	本跡→SI12，SK3，SD2
18	C 2 c4	N－65°－E	（隅丸長方形）	3.08×（1.66）	12	平坦	－	－	－	1	－	－	－	人為	弥生後	弥生土器片	本跡→SD1
19	B 3 f3	N－21°－E	隅丸長方形	3.52×2.72	15～20	平坦	－	5	－	1	（3）	－	3	人為	縄文前	縄文土器（深鉢），石鏃，剝片	
20A	B 3 e3	N－21°－E	隅丸長方形	3.00×2.52	15～20	平坦	－	2	－	－	－	－	6	自然・人為	縄文前	縄文土器片	SI20B→本跡
20B	B 3 e3	N－72°－E	（隅丸長方形）	（1.60）×（1.30）	15	平坦	－	－	－	－	－	－	－	自然	縄文前	縄文土器片	本跡→SI20A
21	B 3 e1	N－41°－E	（隅丸長方形）	（4.82）×（2.45）	38	平坦	－	－	－	1	3	1	－	自然	弥生後	弥生土器片，礫	
23	B 3 e2	N－45°－E	不整方形	2.58×2.55	25	平坦	－	2	－	1	－	－	4	人為	縄文前	縄文土器片，石鏃	SI43→本跡
24	C 2 d8	N－58°－W	（隅丸長方形）	（4.80）×3.08	20	平坦	－	2	1	1	－	－	－	自然	縄文前	縄文土器片，剝片	
27	B 3 d2	N－68°－W	不整方形	3.02×2.60	15～20	ややﾊﾏﾘ斜	－	－	－	－	－	－	1	自然	縄文前	縄文土器片，剝片	
28	B 3 h5	N－38°－W	不整方形	2.98×2.80	14～30	微凹凸	－	2	1	－	（2）	－	－	自然	縄文前	縄文土器片	本跡→SI2・SK12・13
29	B 3 h6	N－27°－W	不整方形	2.34×2.28	10～15	平坦	－	2	－	－	－	－	－	人為	縄文前	縄文土器片	SK62→本跡
30	C 3 a3	N－18°－W	隅丸長方形	4.48×3.36	30	平坦	－	10	－	1	（9）	－	7	自然	縄文前	縄文土器片，ナイフ形石器，剝片	本跡→SK25
31	B 3 h4	N－81°－W	長方形	3.94×2.35	10	平坦	－	2	－	－	－	－	5	人為	縄文前	縄文土器片，剝片	
32	B 2 d8	N－8°－E	（隅丸長方形）	2.36×（1.90）	16	平坦	－	－	－	－	－	－	－	自然	縄文前	縄文土器片	本跡→TM10
33	B 2 b8	N－32°－W	（長方形）	5.82×（5.10）	15	平坦	全周	4	1	2	－	1	－	自然	古墳前	土師器（高坏，器台，壺），礫	
34	C 2 f8	N－52°－W	（隅丸長方形）	4.12×（2.98）	10	平坦	－	2	－	1	－	－	－	人為	弥生後	弥生土器（広口壺），礫	本跡→TM12
35	C 2 a6	N－80°－E	隅丸長方形	3.20×1.98	18	平坦	－	3	－	－	－	－	1	自然	縄文前	縄文土器片	
36	C 2 h3	N－48°－W	隅丸長方形	3.65×2.92	不明	平坦	－	－	－	1	－	－	－	不明	縄文前	縄文土器片	本跡→TM1
37	C 2 h1	N－25°－W	隅丸長方形	3.75×3.20	25	平坦	－	1	1	1	－	－	2	人為	弥生後	弥生土器片	
38	B 2 g6	N－70°－E	不整方形	（4.40）×（3.80）	10	平坦	－	1	－	－	－	－	4	不明	縄文		本跡→TM11
39	B 2 j6	N－7°－E	（隅丸長方形）	（3.35）×2.43	15～18	平坦	－	2	－	1	－	－	－	自然	縄文前	縄文土器（深鉢）	本跡→TM11
43	B 3 e3	N－88°－E	隅丸長方形	（3.30）×2.50	10	平坦	－	1	－	－	－	－	4	人為	縄文前	縄文土器片	本跡→SI23
44	B 3 e4	N－16°－E	隅丸長方形	3.56×2.68	10	ややﾊﾏﾘ斜	－	1	－	－	－	－	－	不明	縄文前	縄文土器片	本跡→TP1
45	B 3 f4	N－89°－W	（隅丸長方形）	2.55×（2.10）	15～20	ややﾊﾏﾘ斜	－	－	－	－	－	－	－	人為	縄文前	縄文土器片，剝片	SI46→本跡→SI4
46	B 3 f5	－	不明	（2.40）×（1.35）	5	平坦	－	－	－	－	－	－	－	不明	縄文前	縄文土器片	本跡→SI4・45
47	C 3 b3	N－62°－W	隅丸長方形	3.25×2.76	18～25	平坦	－	3	－	1	－	－	1	自然	縄文前	縄文土器片	本跡→SD2

表4　竪穴状遺構一覧表

竪穴状遺構番号	位置	主軸方向	平面形	規模（m）長軸×短軸	壁高（cm）	床面	内部施設		覆土	時期	出土遺物	備考 新旧関係（旧→新）
							主柱穴	不明ピット				
1	B 3 f2	N-45°－E	隅丸長方形	3.35×2.09	12	平坦	3	4	自然	縄文前	縄文土器片	本跡→SX3
2	C 2 e8	N-30°－E	隅丸長方形	3.26×2.30	8	平坦	－	3	自然	縄文前	縄文土器片	本跡→TM12
3	B 3 f2	－	不整方形	一辺3.20	15	平坦	－	4	自然	縄文前	縄文土器片	SX1→本跡

表5　陥し穴一覧表

陥し穴番号	位置	長軸方向(長径方向)	平面形	規模 長軸×短軸(m)(長径×短径)	規模 深さ(cm)	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 重複関係（新→旧）
1	B3e4	N−42°−E	楕円形	2.42×1.24	116	垂直	平坦	自然	縄文土器片	SI44→本跡
2	B3e5	N−42°−E	長方形	1.68×0.84	106	垂直	凹凸	自然		SI5→本跡
3	C3a1	N−86°−E	長楕円形	2.54×0.95	98	垂直	平坦	自然	縄文土器片	SK41,SI12→本跡

表6　縄文時代　土坑一覧表

土坑番号	位置	長軸径方向(長径方向)	平面形	規模 長軸×短軸(m)(長径×短径)	規模 深さ(cm)	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 重複関係（新→旧）
10	B3h3	N−86°−W	不整楕円形	2.10×1.60	50	外傾	凹凸	人為	縄文土器片，打製石斧	SI7→本跡
21	B3e4	−	円形	1.60× 1.60	13	外傾	平坦	自然	縄文土器片	
32	B2h0	N−22°−W	楕円形	2.35× 0.74	45	垂直	2段	自然	縄文土器片	
38	C2e8	N−86°−E	楕円形	1.21× 0.84	65	外傾	平坦	自然	縄文土器片，石器	TM12→本跡
47	B2e7	N−45°−E	長方形	2.46× 1.04	45	外傾	平坦	人為	縄文土器片	
53	B3g5	N−36°−E	〔楕円形〕	1.90×(1.45)	16	外傾	平坦	人為	縄文土器片	SI4・SK9→本跡

表7　古墳一覧表

古墳名	位置(区)	墳形	墳丘主軸方向	墳丘規模(m) 全長(径)	高さ	後円部径	くびれ部幅	前方部幅	埋葬施設 主体部	主軸方向	遺物	周溝(m) 幅	深さ	遺物	備考 新旧関係(旧→新)
1	C1・C2	円墳	−	17.8	1.5	−	−	−	箱式石棺	N−10°−W		上幅3.1～4.2 下幅1.2～2.4	0.6～1.1	土師器，須恵器	SI1・36・37→本跡→SD1,SK39・40
2	B1・B2	円墳	−	〔12.0〕	1.25	−	−	−				上幅(2.2) 下幅(1.7)	0.4		
10	B2	前方後円墳	N−48°−E	26.4	−	16.0	(12.0)	13.5	箱式石棺	N−40°−E	石棺材片	上幅1.4～4.1 下幅0.8～1.8	0.3～0.8	縄文土器片	SI33・34→本跡→TM11,SD3,SK71
11	B2・C2	円墳	−	18.0	−	−	−	−				上幅2.1～3.9 下幅0.5～1.7	0.5～1.1	土師器	SI13・35・38・39,TM10→本跡
12	C2	方墳	−	東西 13.0 南北〔13.2〕	−	−	−	−	箱式石棺	N−20°−W	石棺材片	上幅0.9～1.5 下幅0.4～0.9	0.2	土師器	SI34,SX2,SK38・67,SF1→本跡

表8　中世以降　土坑一覧表

土坑番号	位置	長軸方向(長径方向)	平面形	規模 長軸×短軸(m)(長径×短径)	規模 深さ(cm)	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 重複関係（新→旧）
9	B3g5	N−60°−E	隅丸長方形	1.94 × 0.75	34	外傾	傾斜	人為		本跡→SK53
17	C3a3	N−38°−W	隅丸長方形	2.62 × 1.40	65	垂直	2段	人為	縄文土器片	
19	B3j3	N−56°−W	隅丸長方形	2.04 × 1.15	85	外傾	2段	人為	縄文土器片，弥生土器片	本跡→SK78
24	C3b3	N−86°−W	隅丸長方形	1.80 × 1.00	60	垂直	2段	人為	土師器片，縄文土器片	
27	B3i2	N−36°−W	隅丸長方形	2.10 × 0.62	35	外傾垂直	2段	人為	縄文土器片	本跡→SI10
29	B3j1	N−50°−W	〔隅丸長方形〕	(1.40)×(0.70)	70	外傾	2段	人為		
30	B2j0	N−49°−W	隅丸長方形	2.28 × 0.85	45	垂直	平坦	人為	縄文土器片	本跡→SB1
31	B3g1	N− 9°−W	隅丸長方形	2.64 × 1.08	38	なだらか	凹凸	人為	縄文土器片	本跡→SI16B
39	C2h4	N−80°−E	〔隅丸長方形〕	(1.48)× 1.30	20	外傾	平坦	人為	縄文土器片	本跡→TM1

土坑番号	位置	長軸方向（長径方向）	平面形	規模 長軸×短軸(m)（長径×短径）	規模 深さ(cm)	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 重複関係（新→旧）
40	C 2 h5	N－45°－E	不整長方形	1.84 × 1.14	70	外傾	平坦	人為		本跡→TM1
41	C 3 a1	N－78°－E	隅丸長方形	2.42 × 1.20	56	内彎外傾	2段	人為	縄文土器片	本跡→SI12,SD2,TP3
52	B 3 g2	N－28°－W	隅丸長方形	1.55 × 0.65	20～45	外傾	凹凸	人為		
54	C 3 c1	N－40°－W	隅丸長方形	1.42 × 0.55	24～35	垂直	傾斜	人為		
63	C 2 f9	N－1°－W	〔長方形〕	(1.60)× 0.80	25	外傾	平坦	人為	縄文土器片	
66	B 2 i2	N－84°－E	長方形	2.98 × 1.55	40	外傾	平坦	人為	縄文土器片	

表9　時期不明　土坑一覧表

土坑番号	位置	長軸方向（長径方向）	平面形	規模 長軸×短軸(m)（長径×短径）	規模 深さ(cm)	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 重複関係（新→旧）
1	B 3 c6	N－81°－W	長楕円形	2.85 × 1.24	88	外傾	凹凸	自然		
2	B 3 e8	N－32°－W	楕円形	2.68 × 1.54	24	外傾	凹凸	人為		
3	C 3 a1	N－37°－W	長楕円形	1.70 × 0.86	20	外傾	凹凸	人為		SD2→本跡→SI4
5	B 3 g9	N－45°－W	楕円形	0.85 × 0.45	25	外傾	凹凸	自然		
6	B 3 g9	N－45°－W	楕円形	0.66 × 0.35	28	外傾	平坦	人為		
7	B 3 e7	N－20°－E	楕円形	1.10 × 0.74	22	外傾	凹凸	人為		
8	B 3 e7	－	円形	0.95× 0.90	50	外傾	2段	人為		
11	B 3 g6	N－20°－W	長楕円形	2.20 × 0.62	27	外傾	平坦	自然	縄文土器片	
12	B 3 h5	－	円形	1.24 × 1.14	20	外傾	凹凸	自然	縄文土器片	本跡→SI28
13	B 3 h6	N－0°	楕円形	1.02 × 0.65	15	外傾	凹凸	自然		本跡→SI28
14	B 3 h6	N－80°－E	楕円形	1.04 × 0.82	15	外傾	平坦	自然		
15	B 3 i6	N－41°－E	楕円形	1.56 × 1.12	23	外傾	平坦	自然		
16	B 3 h7	N－23°－E	不整長方形	2.30 × 0.86	15	外傾	平坦	自然	土師器片（甕），縄文土器片	SD2→本跡
18	B 3 i7	N－4°－E	長楕円形	2.40 × 1.05	15～37	外傾	凹凸	人為	縄文土器片	
20	B 3 j4	N－47°－W	楕円形	1.42 × 0.85	8～22	外傾	凹凸	自然	縄文土器片	
22	B 3 i4	N－78°－E	不整楕円形	1.92 × 0.74	15	なだらか	凹凸	自然	縄文土器片	
23	B 3 j5	N－33°－E	不整楕円形	2.30 × 0.50	15～30	外傾	凹凸	人為		
25	C 3 a3	N－87°－E	不整方形	1.70 × 1.57	35	外傾	凹凸	人為		SD2→本跡→SI30
26	C 3 a5	N－32°－W	楕円形	1.02 × 0.76	20	なだらか	凹凸	人為		
28	B 3 j1	N－46°－E	不整長方形	2.45 × 1.40	22	外傾	凹凸	人為		
33	B 2 h8	N－35°－E	隅丸長方形	1.15 × 0.78	42	外傾	平坦	自然		本跡→SB1
34	B 2 i0	N－55°－W	楕円形	1.75 × 1.16	15～25	外傾	凹凸	人為		本跡→SB1
35	C 2 a0	N－24°－E	楕円形	1.68 × 1.00	30	外傾	平坦	自然		
36	B 3 h2	N－6°－E	〔長楕円形〕	3.76 ×(1.60)	15	外傾	凹凸	人為	縄文土器片	SK10→本跡
37	B 2 j0	N－30°－E	隅丸長方形	1.06 × 0.60	20	外傾	平坦	自然		
43	B 2 f7	N－44°－E	不整楕円形	1.75 × 1.16	20～40	外傾	凹凸	自然		
44	B 2 a6	N－75°－W	楕円形	1.34 × 1.14	60	外傾	平坦	自然		
46	B 2 d9	N－3°－E	不整長方形	3.80 × 1.40	15	外傾	平坦	人為		
48	B 3 g6	N－0°	不整長方形	2.20 × 0.73	8～25	外傾	凹凸	人為		
49	B 3 f6	N－52°－E	不整長方形	1.92 × 1.17	15	外傾	平坦	自然		
55	C 3 a3	N－43°－W	隅丸長方形	1.62 × 1.46	45	外傾	凹凸	自然		SK56→本跡→SK76
56	C 3 a3	N－42°－E	〔長方形〕	(0.90)× 0.75	30	外傾	凹凸	人為		SK21→本跡→SK55
58	B 3 e4	N－8°－W	楕円形	0.65 × 0.55	25	外傾	平坦	人為		本跡→SI45

土坑番号	位置	長軸方向(長径方向)	平面形	規模 長軸×短軸(m)(長径×短径)	規模 深さ(cm)	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 重複関係(新→旧)
59	C3b2	N−80°−E	楕円形	1.70×1.05	15	外傾	平坦	自然	縄文土器片	
60	C3b4	−	円形	1.55×1.50	15	外傾	平坦	人為		
61	B3d3	N−68°−W	小判形	2.60×1.66	15	外傾	平坦	人為		
62	B3g6	N−20°−W	〔長楕円形〕	(1.65)×0.70	10	外傾	平坦	人為		SI29→本跡
64	B2f1	N−65°−E	長方形	2.50×1.30	40	外傾	平坦	人為		
65	B2h2	N−35°−E	長方形	2.05×1.15	25	なだらか	平坦	自然		
71	B2c2	N−80°−E	〔長方形〕	(2.40)×(1.25)	80	外傾	平坦	人為		本跡→TM10
73	C3b2	N−6°−E	不整方形	2.15×2.00	15	外傾	平坦	自然	縄文土器片	
74	C3c3	N−76°−W	楕円形	1.05×0.60	20	外傾	平坦	人為		
75	C3c3	N−62°−W	不整楕円形	1.40×0.95	20	外傾	平坦	自然		
76	C3a4	−	円形	0.90×(0.75)	20	外傾	平坦	自然	五輪塔台石	SK55→本跡
77	C1b9	N−20°−E	楕円形	1.65×0.88	60	なだらか	凹凸	自然		
78	B3j3	N−62°−W	〔楕円形〕	2.30×(1.20)	40	外傾	平坦	人為		SK19→本跡

表10　溝一覧表

溝番号	位置	方向	形状	規模 長さ(m)	規模 上幅(m)	規模 下幅(m)	規模 深さ(cm)	断面	底面	覆土	出土遺物	備考 新旧関係(旧→新)
1	C1g8～C2e5	N−80°−E	直線	(25.0)	1.2～1.65	0.1～0.2	50	V	−	自然	土師器片，縄文土器片	SI18,TM1→本跡 時期不明
2	C2b9～C3b3	N−70°−E N−30°−W	L字状	(22.0)	0.5～0.6	0.1～0.2	10～20	U	平坦	自然	土師器片，縄文土器片	SI12・14・15・30・47,SK3・25,TP3→本跡　時期不明
3	B2c2～C2a3	N−5°−W	直線	(16.0)	0.96～1.15	0.2～0.6	10～30	U	平坦	自然		TM10・11→本跡 時期不明
4	B2i7～C2c0	N−45°−W	直線	(23.5)	0.5～0.7	0.1	80～100	V	−	自然		SI13・14,TM11→本跡 時期不明

第4節　まとめ

当遺跡からは，今回の調査で旧石器時代の石器集中地点1か所，縄文時代から古墳時代の竪穴住居跡44軒，古墳5基，陥し穴3基，土坑67基，溝3条などを確認した。そこで，調査した遺構と出土遺物について，時代ごとに調査の結果を記述し，まとめとする。

1　旧石器時代

台地上の平坦部から石器集中地点は検出された。石器が出土した層位は，3層のソフトロームとハードロームの漸移層である。4層のハードローム層内から石器は検出されていない。この層は立川ローム層最上部のガラス質火山灰層に比定される(1)。石器の内訳は表2の通りである。集中地点から確認された石材は安山岩が多数で，わずかに頁岩とチャートが含まれている。素材として縦長剝片を折り取り，側縁部に沿って細石刃を製作する細石核が出土しているのが特筆できる。製品としての石器が少なく，剝片や砕片を中心に出土していることから石器製作跡と考えられる。

遺構外の石材として栃木県高原山産の黒曜石，安山岩(トロトロ石)，瑪瑙などがある。石器製作のため遠離地から石材を入手して使用していることから，他地域との密な関係があったと思われる。

2　縄文時代

遺構としては，竪穴住居跡32軒，陥し穴3基，土坑9基を検出した。竪穴住居跡から集落の構成から見ると，前期に集中している。この集落を下記のように分類してみると，

第Ⅰ期　前期前半(花積下層式期)　7軒(SI 5,15,16A,16B,17,19,24)
第Ⅱ期　前期前半(黒浜式期)　13軒(SI 7,8,11A,20B,27,30,32,35,36,39,43,46,47)
第Ⅲ期　前期後半(浮島式期)　4軒(SI 6,9,11B,28)
第Ⅳ期　前期後半(粟島台式期)　7軒(SI 10,20A,23,29,31,44,45)

に区分することができる。

第Ⅰ期では，台地の東側傾斜部と平坦部から竪穴住居跡7軒が検出された。第5・16A・16B・19号住居跡は東側傾斜部に，第15・17・24号住居跡は平坦部に存在する。このまとまりが集落を構成したと考えられる。第19号住居跡を除いて，主軸方向はN－33～58°－Wの範囲である。住居跡の平面形は隅丸長方形で，規模は小形である(2)。花積下層式期の深鉢や小形深鉢が一括して出土していることは貴重な資料となると思う。

第Ⅱ期では，台地上のほぼ全域から住居跡13軒が検出された。住居跡の形態に規格性が見られず，規模は小形である。集落として繁栄した時期と考えられる。

第Ⅲ期では，台地の南東側傾斜部から住居跡4軒が検出された。第6・9・11B号住居跡の3軒で集落を構成していたと考えられる。第28号住居跡は南東部にあり，調査区域外にある住居跡と集落を構成するものと思われる。住居跡の平面形は，方形や円形，小判形と様々である。

第Ⅳ期では，住居跡7軒が台地の東側傾斜部に集中している。住居が密集していることから，集落が何代かに渡り形成されたと考えられる。住居跡の形態に規格性は見られない。

その他，第2号陥し穴は第5号住居跡との重複関係から，花積下層式期以前と考えられ，早期末までは台地上が狩猟の場として利用されていたものと思われる。中期以降の遺構は検出されなかった。

遺構外から，早期では田土下層式土器，茅山下層式土器に，前期では，花積下層式土器，関山式土器，黒浜

式土器，諸磯式土器，興津式土器，浮島Ⅰ・Ⅱ式土器，粟島台式土器に，中期では無文系土器，加曽利ＥⅢ式土器に，後期では，堀之内式土器に比定される土器片が出土している。また，石器では打製石斧や石鏃なども多数出土している。これら遺構に伴わない遺物を含めて，当遺跡では継続的ではなかったものの，早期後葉から後期前葉までの長い間，断続的に人間の生活の痕跡をうかがうことができる。

3　弥生時代

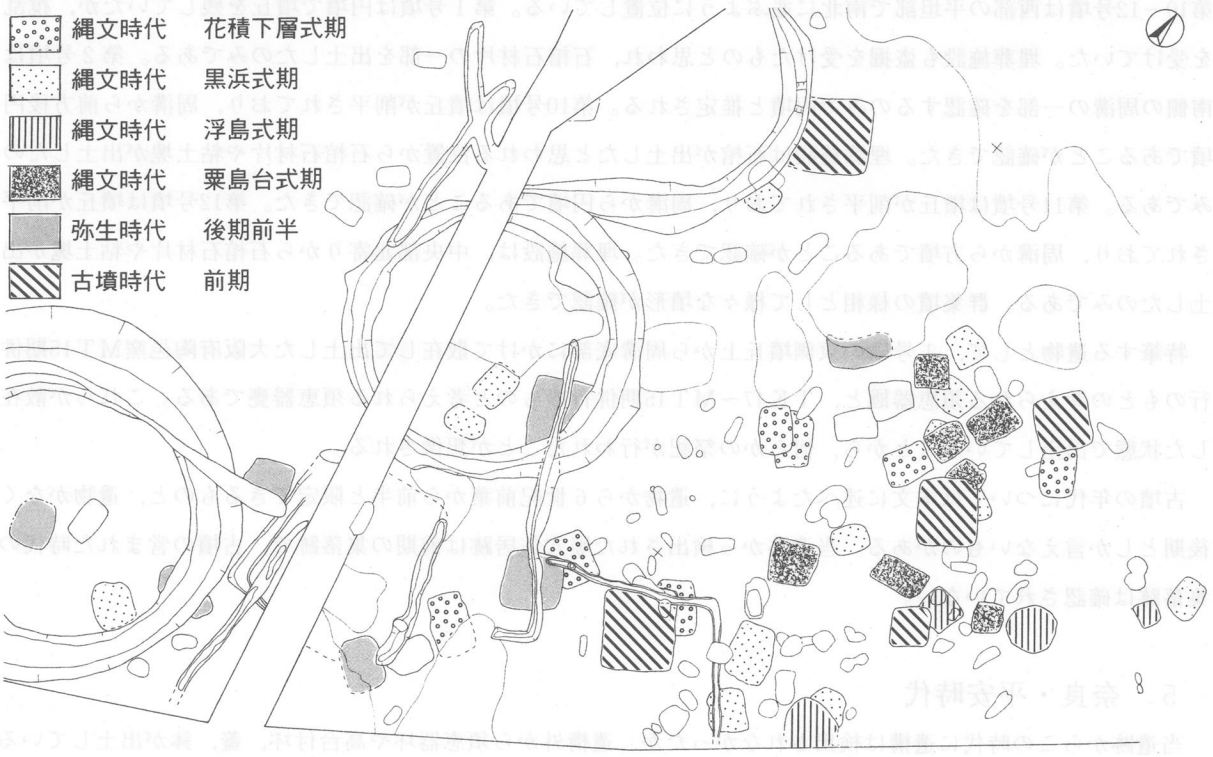
台地上の西部から平坦部にかけて，竪穴住居跡が８～12m間隔に７軒検出された。第１号住居跡を除いて，主軸方向はＮ－25～52°－ＷとＮ－41～65°－Ｅに２分できる。住居跡の平面形は，隅丸長方形や隅丸方形と様々である。規模は，中形が２軒(SI 13,14)と小形が５軒(SI 1,18,21,34,37)である。

遺物としては，弥生土器(広口壺)と石英片が多数出土している。弥生土器の特徴として，以下の５点があげられる。

・口唇部には縄文原体や棒状工具による押圧がなされているものがある。
・口縁部は複合口縁で，口縁部下端に棒状工具による刺突文が施されているものがある。
・頸部は無文のもの，櫛歯状工具による縦区画を有するもの，櫛歯状工具による横走文・連弧文・波状文が施されているもの，斜格子目文が施されているものがある。
・胴部は附加条一種(附加２条)の縄文が施されているものと絡条体で施文されているものがある。
・底部には木葉痕が残る。

以上のことから，後期前半(屋代式)のものと考えられる[(3)]。

遺構外の遺物としては，沈線内の縄文を磨り消した中期後半の胴部片や，附加条二種(附加１条)の縄文が施されているもの，附加条一種の縄文を施し羽状構成をとる後期後半の土器も出土していることから，近接地に当時の人々の生活跡があると思われる。



第135図　集落変遷図

4　古墳時代

遺構としては，竪穴住居跡５軒，方形周溝遺構１基，古墳５基が検出された。

竪穴住居跡は，台地上東部の傾斜部から平坦部にかけて検出された。規模は中形が２軒(SI 12,33)と小形が３軒(SI 2,3,4)である。中形は東部の平坦部に位置し，小形は東部の傾斜部に位置している。住居跡の主軸方向はＮ－32～53°－Ｗとほぼ同じで，平面形はほぼ方形である。

住居内出土の遺物としては，土師器甕や台付甕，器台，高坏である。土師器の特徴として，以下の３点があげられる。

・甕や台付甕は，全面にハケ目整形が施され，胴部は球形を呈している。また，ハケ目整形後，ヘラ磨きが施されているものもある。

・器台は，全面にハケ目整形が施され，器受部は内彎している。脚部に穿孔するものもある。

・高坏は，坏部にヘラ削りが施されている。

以上のことから，前期(４世紀前葉～中葉)のものと考えられる。この時期に集落が形成されたことがうかがえる。

また，西部の傾斜部から方形周溝遺構が検出された。明確な時期を決定する遺物は出土していないので断言はできないが，この時期に西部が墓域となっていたと想定される。

下郷古墳群は，1980年に土浦市教育委員会の分布調査で少なくとも円墳10基の存在が確認されている[(4)]。当時第１号墳の墳頂に小祠が祀られていた。第２号墳は１号墳の北側70ｍに存在する。第３号墳は第２号墳の北側に隣接し，1980年の老人福祉センター建設のため湮滅した。第10号墳は，板石10枚以上積み重ねられた上に「建徳院殿」「明治40年」とムラ名のある石祠が載っている集積を仮称していた。林道造成時に石棺が出土し，直刀，鉄鏃，刀子，人骨等が出土したと言われる。

今回の調査で，周知の３基の古墳以外に２基の古墳が検出された。第１・２号墳は西部の傾斜部に位置し，第10～12号墳は西部の平坦部で南北に並ぶように位置している。第１号墳は円墳で墳丘を残していたが，撹乱を受けていた。埋葬施設も盗掘を受けたものと思われ，石棺石材片の一部を出土したのみである。第２号墳は，南側の周溝の一部を確認するのみで円墳と推定される。第10号墳は墳丘が削平されており，周溝から前方後円墳であることが確認できた。埋葬施設は石棺が出土したと思われる位置から石棺石材片や粘土塊が出土したのみである。第11号墳は墳丘が削平されており，周溝から円墳であることが確認できた。第12号墳は墳丘が削平されており，周溝から方墳であることが確認できた。埋葬施設は，中央部北寄りから石棺石材片や粘土塊が出土したのみである。群集墳の様相として様々な墳形が確認できた。

特筆する遺物として，１号墳の東側墳丘上から周溝底部にかけて散在して出土した大阪府陶邑窯ＭＴ15期併行のもとの考えられる須恵器蓋と，ＴＫ47～ＭＴ15期併行のものと考えられる須恵器甕である。これらが散在した状態で出土していることから，何らかの祭祀が行われたことが想像される。

古墳の年代については本文に述べたように，遺物から６世紀前葉から前半と限定できるものと，遺物がなく後期としか言えないものがある。当遺跡から検出された竪穴住居跡は前期の集落跡で，古墳の営まれた時代の集落跡は確認されていない。

5　奈良・平安時代

当遺跡からこの時代に遺構は検出されなかったが，遺構外から須恵器坏や高台付坏，蓋，鉢が出土している。近接地に当時の人々の生活跡があったと考えられる。

6　中世以降

第１号墳の南側から，五輪塔等の集石が４か所検出された。また，第１号墳の撹乱内にも五輪塔片が散在し，撹乱内から「半両銭」「皇宋通寶」も出土している。集石は，第１号墳上及び周辺にあったと思われる五輪塔を植林時等に集められたものと思われる。五輪塔は15世紀代のものである[5]。古銭は中世以降に渡来銭として輸入されたものである。

今回の調査で，下郷古墳群においては，旧石器時代から中世以降までの人々の生活の痕跡を確認することができた。特に縄文時代前期から多数の住居が繰り返し構築され，弥生時代後期前半にまた集落が形成されている。さらに古墳時代前期にも集落が形成されている。人々は，台地の西側に霞ヶ浦を望み，水資源に恵まれた地を求めてこの台地上で生活していたものと考えられる。しかし，霞ヶ浦方向からふく強風から住居を守るために東側傾斜部に建てたり，長期的な定住ができなかったと思われる。

古墳時代後期は墓域として，中世も五輪塔出土から墓域として利用されていたと考えられる。今回の調査は，集落の一部分の調査のため全容は不明で，今後の類例の増加や周辺遺跡の調査を待ちたい。

註

1　橋本勝雄　「茨城の旧石器時代」『茨城県考古学協会誌』　第７号　1995.8

2　竪穴住居跡の規模は，30㎡以上を大形，30㎡未満20㎡以上を中形，20㎡未満を小形とした。

3　海老澤稔，黒沢春彦　「原田遺跡群－新治台地の大集落－」『十王台式土器制定60周年記念シンポジウム茨城県における弥生時代研究の到達点』茨城県考古学協会　1999.11

4　土浦市教育委員会　『土浦の遺跡』1984.3

5　石岡文化財関係資料編さん会編　『石岡の石仏』1996

参考文献

(1)　岡村道雄　『日本旧石器時代史』雄山閣出版　1990.11

(2)　茨城県教育財団　「取手都市計画事業下高井特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ　東原遺跡　前畑遺跡　柏原遺跡」『茨城県埋蔵文化財調査報告』第143集　1999.3

(3)　茨城県教育財団　「茨城県自然博物館(仮称)建設用地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ　高崎貝塚」『茨城県教育財団文化財調査報告』第88集　1994.3

(4)　茨城県教育財団　「竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書17　屋代Ｂ遺跡Ⅲ」『茨城県教育財団調査報告』第45集　1986.3

(5)　美浦村・陸平調査会　「根本遺跡」『陸平研究所報告』２　1996.3

(6)　茨城県教育財団　「茨城県自然博物館(仮称)建設用地内埋蔵文化財調査報告Ⅰ　原口遺跡　北前遺跡」『茨城県教育財団調査報告』第83集　1993.3

(7)　茨城県教育財団　「土浦北工業団地造成地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ　原田北遺跡Ⅰ　原田西遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第80集　1993.3

(8)　茨城県教育財団　「土浦北工業団地造成地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ　原出口遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第94集　1995.3

(9)　茨城県教育財団　「一般国道125号道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書　田宮古墳群」『茨城県教育財団文化財調査報告』第57集　1990.3

(10)　阿久津久・片平雅俊　「常陸の後期古墳の様相」『国立歴史民俗博物館研究報告』第44集　1992.3

写　真　図　版

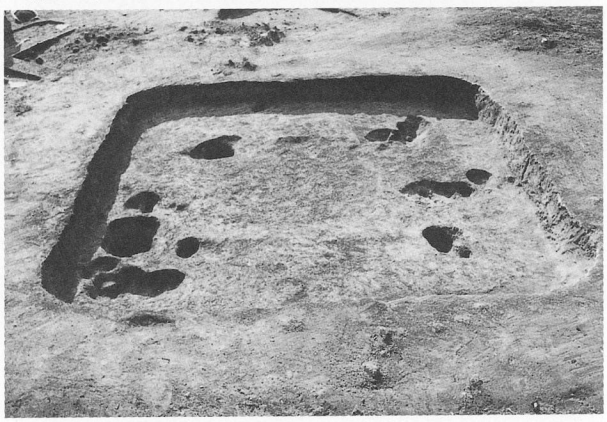
旧石器集中地点

旧石器集中地点

第 5 号住居跡完掘状況

第 5 号住居跡遺物出土状況

第 6 号住居跡完掘・遺物出土状況



第 7 号住居跡完掘状況

第 7 号住居跡遺物出土状況

第10号住居跡(第27号土抗)完掘状況

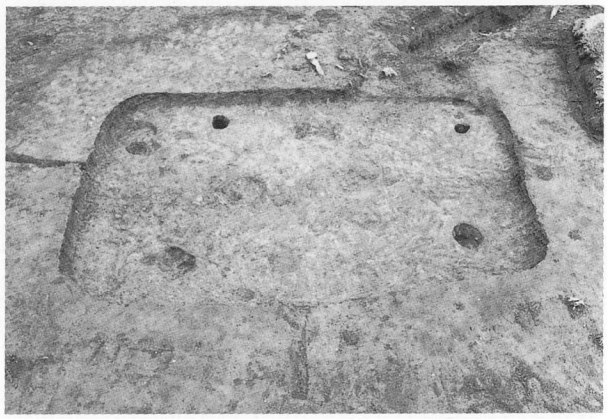
第11A・11B号住居跡完掘状況

第15号住居跡完掘状況

第16A・16B号住居跡完掘状況

第16A・16B号住居跡遺物出土状況

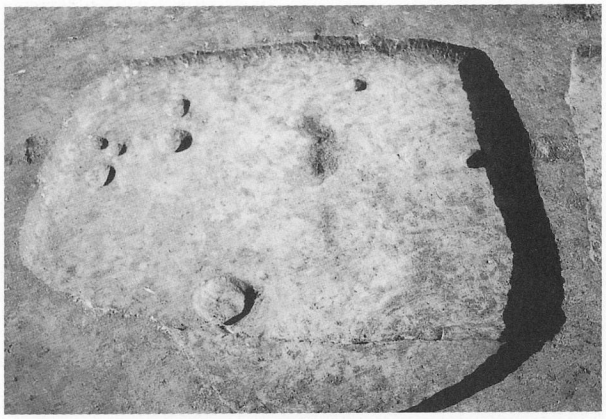
第16A号住居跡遺物出土状況



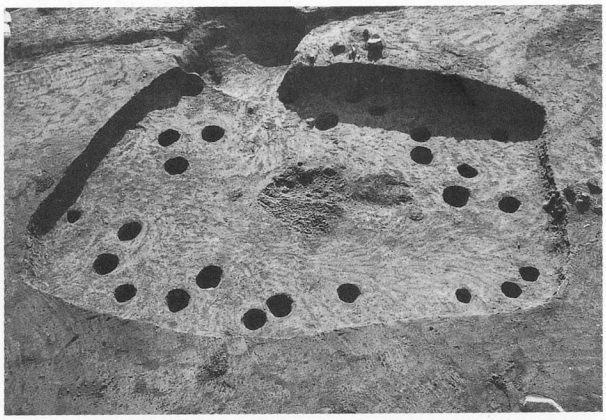
第17号住居跡完掘状況

第19号住居跡完掘状況

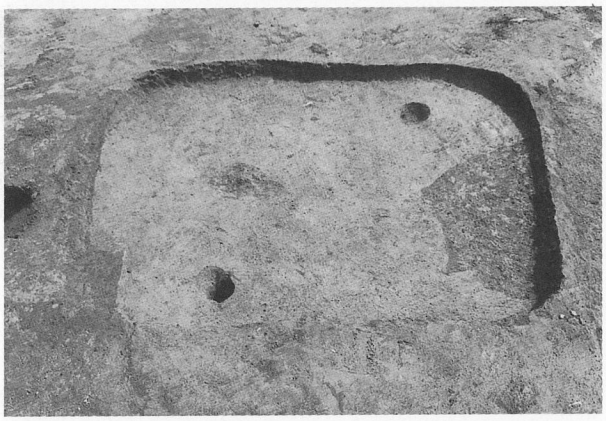
第19号住居跡遺物出土状況



第20A・20B号住居跡完掘状況



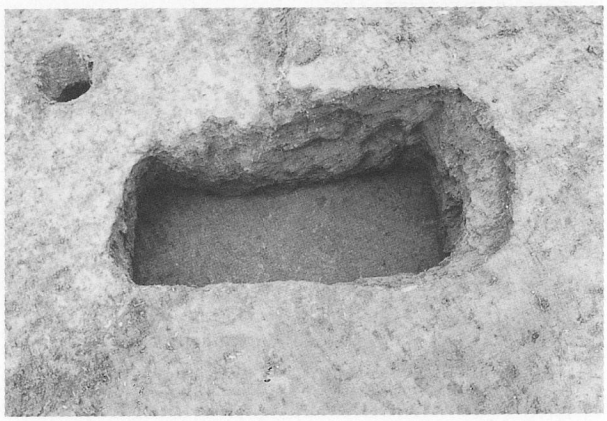
第30号住居跡完掘状況



第39号住居跡完掘状況

第47号住居跡完掘状況

第1号陥し穴完掘状況

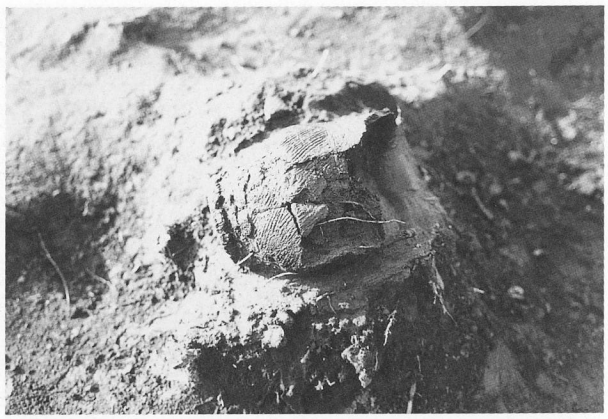


第2号陥し穴完掘状況

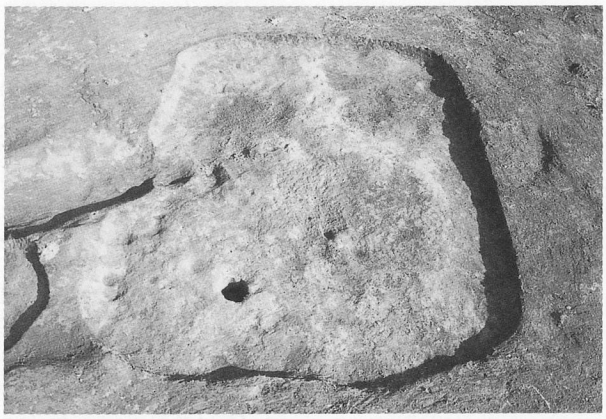
第1号住居跡遺物出土状況

第1号住居跡遺物出土状況

第13号住居跡完掘状況



第13号住居跡遺物出土状況

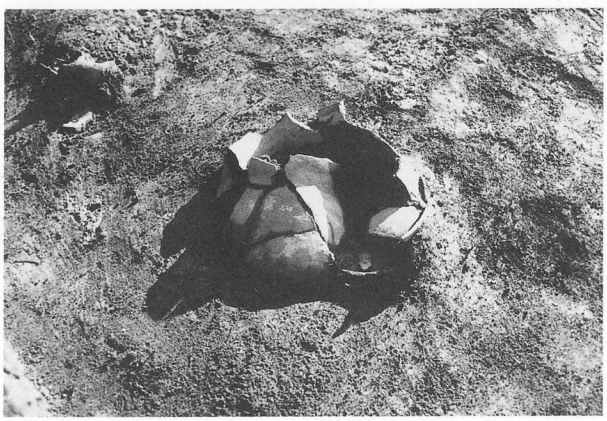


第34号住居跡完掘状況

第 2 号住居跡遺物出土状況

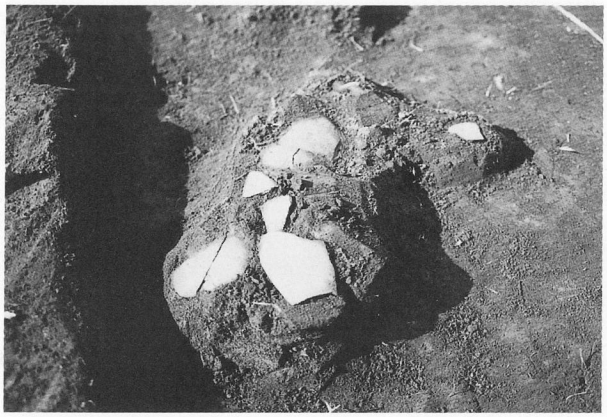
第 2 号住居跡遺物出土状況

第 4 号住居跡遺物出土状況

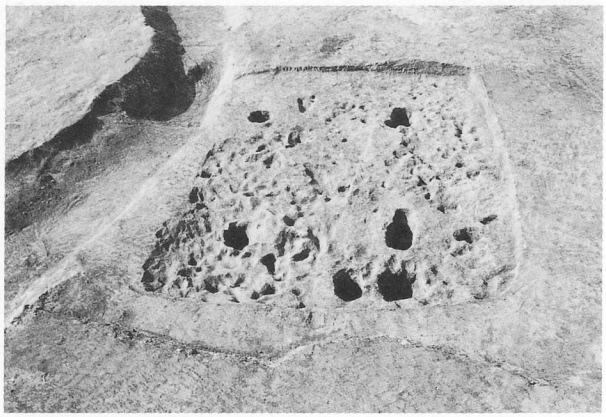


第 4 号住居跡遺物出土状況

第12号住居跡完掘状況



第12号住居跡遺物出土状況

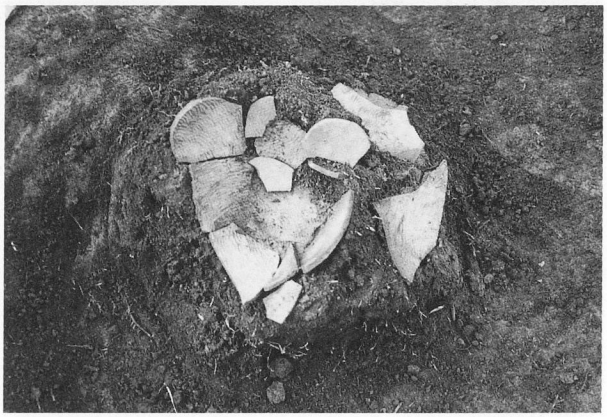


第33号住居跡完掘状況

第１号方形周溝遺構完掘状況

第１号墳完掘状況

第１号墳埋葬施設完掘状況



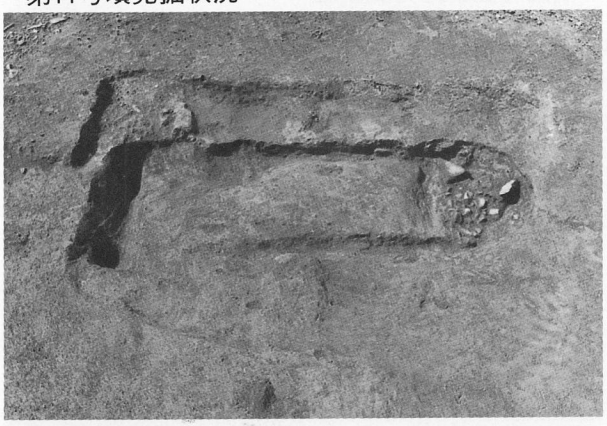
第１号墳周溝内遺物出土状況

第２号墳全景

第10号墳完掘状況

第11号墳完掘状況

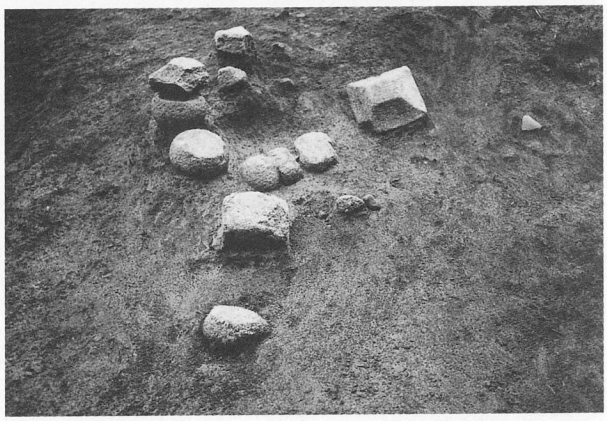
第12号墳完掘状況



第12号墳埋葬施設完掘状況

第17号土坑完掘状況

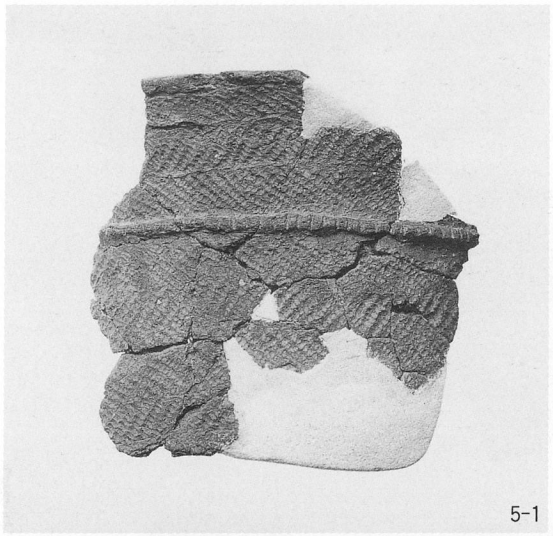
第１号集石全景

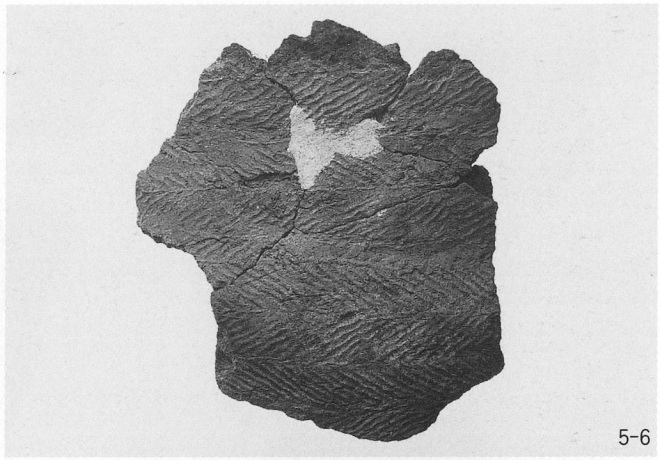


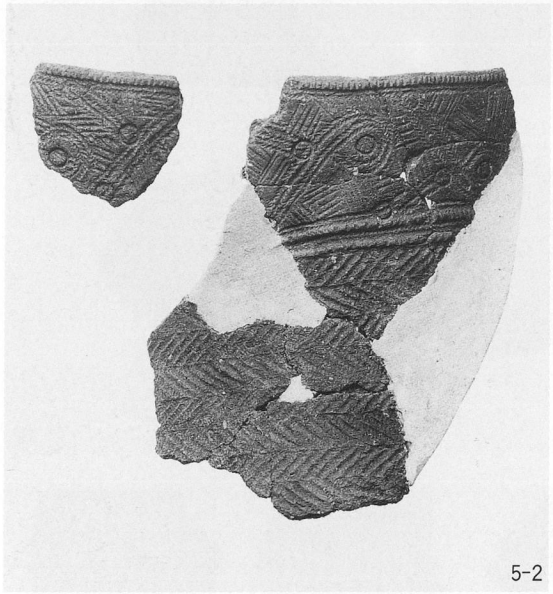
第３号集石全景

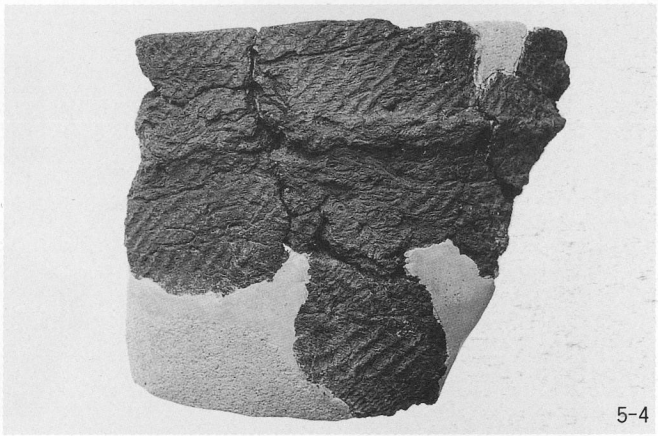
第１号掘立柱建物跡完掘状況

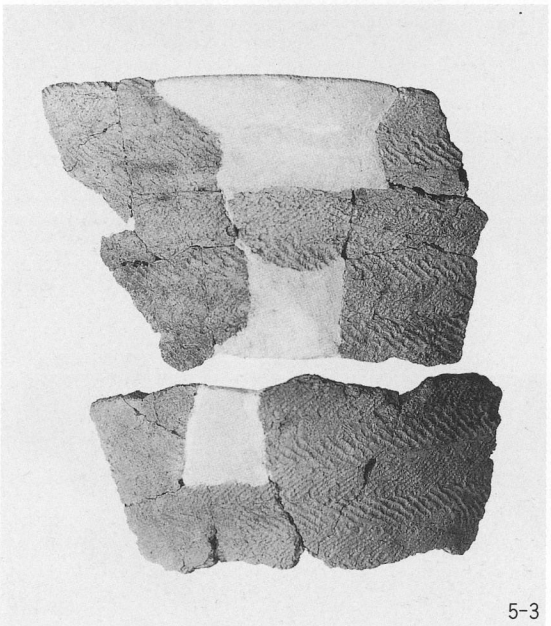
第２号溝完掘状況

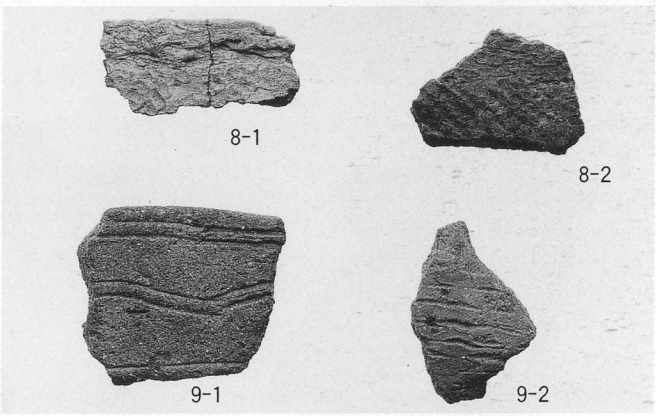

5-1

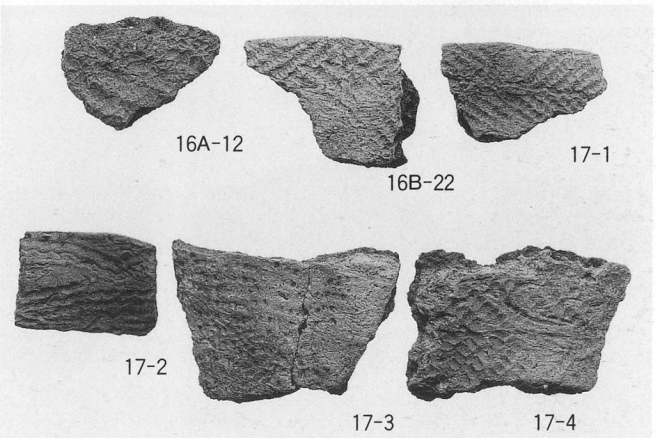

5-6


5-2


5-4

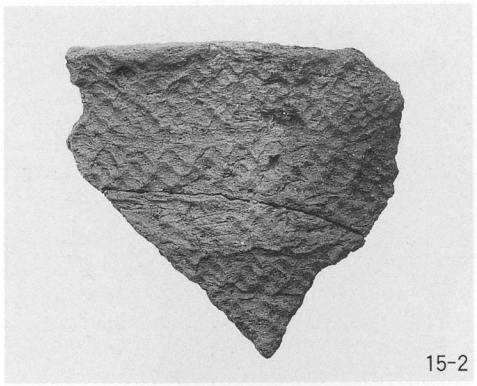

5-3

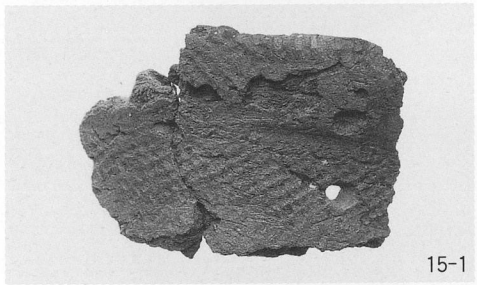

8-1
8-2
9-1
9-2


16A-12
16B-22
17-1
17-2
17-3
17-4

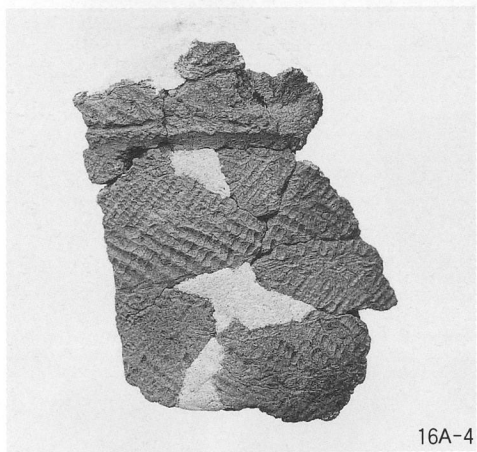
第5・8・9・16A・16B・17号住居跡出土遺物

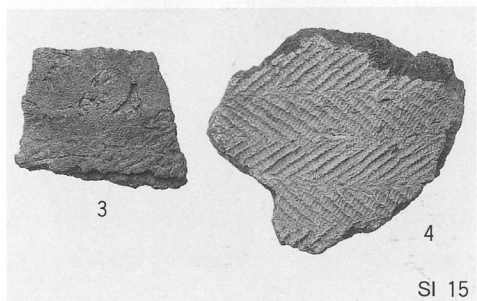
PL 8


15-2

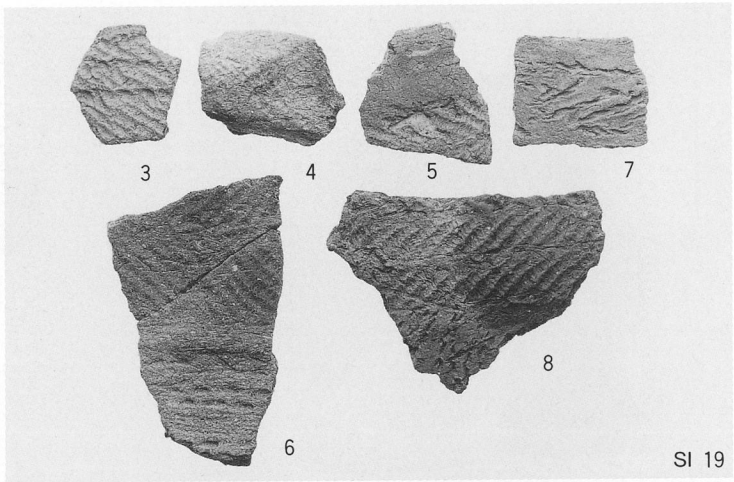

15-1

16A-1

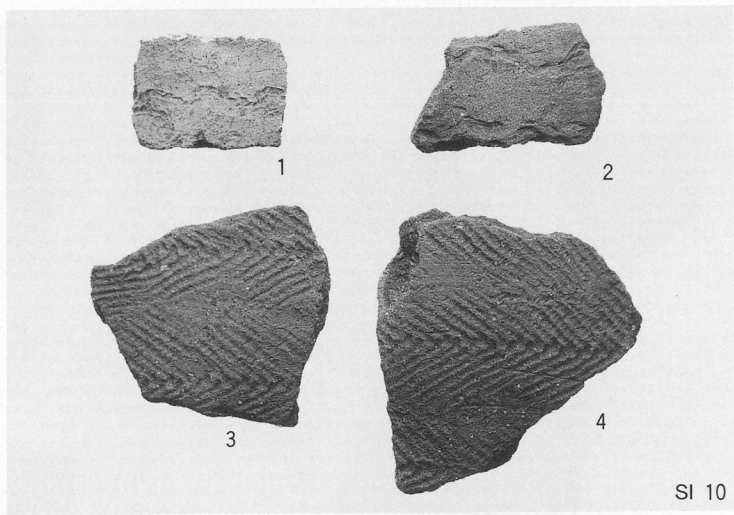

16A-4



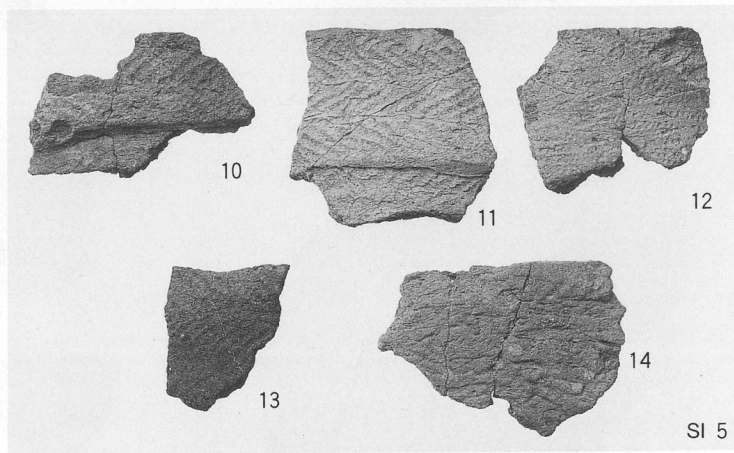
SI 15



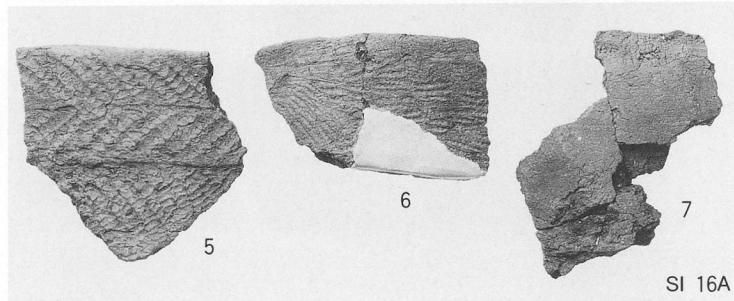
SI 19



SI 10

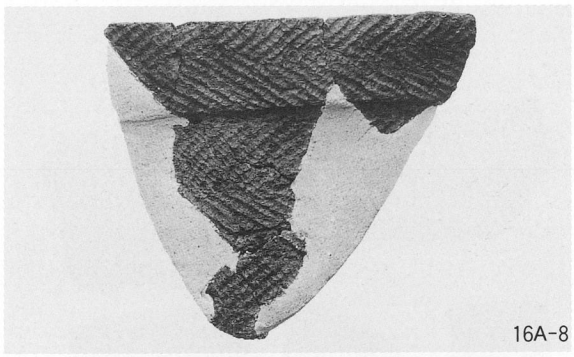


SI 5

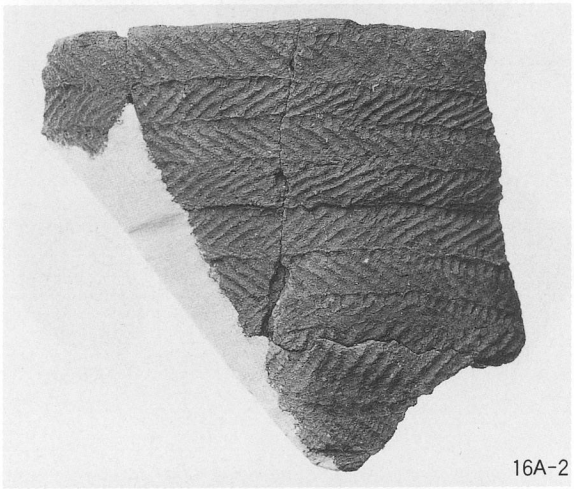


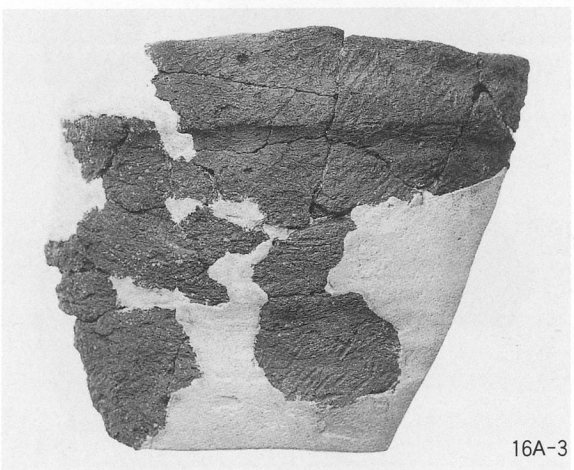
SI 16A

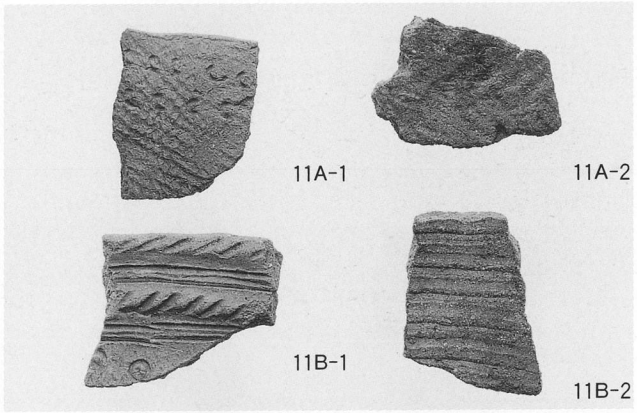
第5・10・15・16A・19号住居跡出土遺物

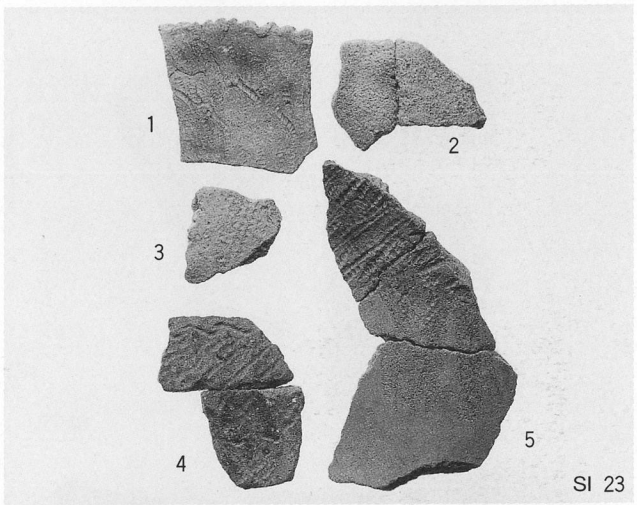

16A-8

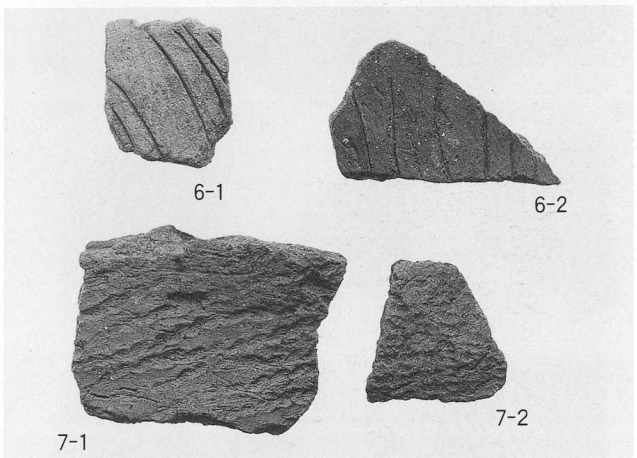
19-1

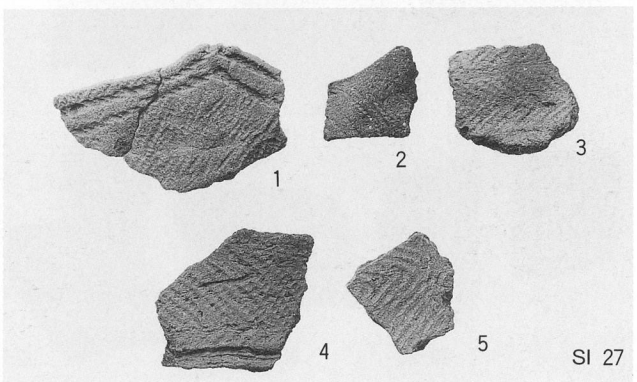

16A-2


16A-3



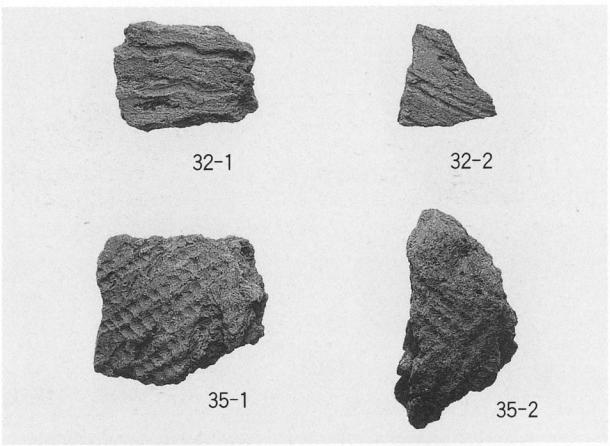


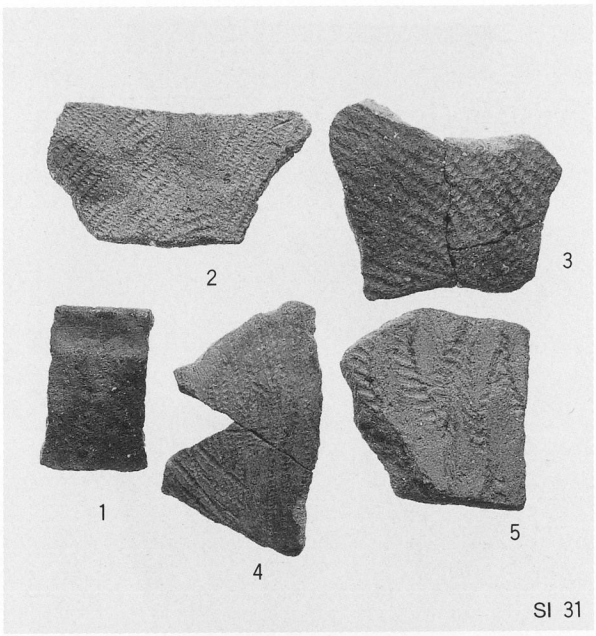


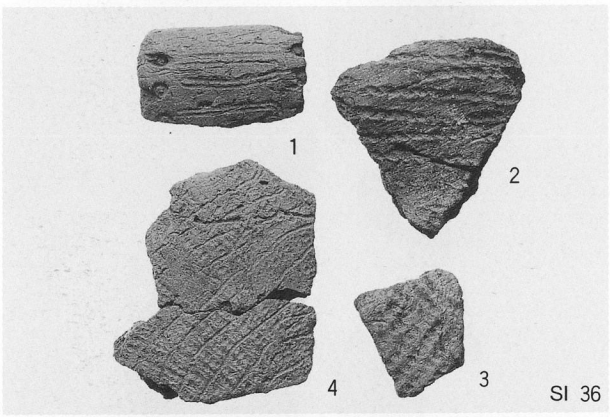


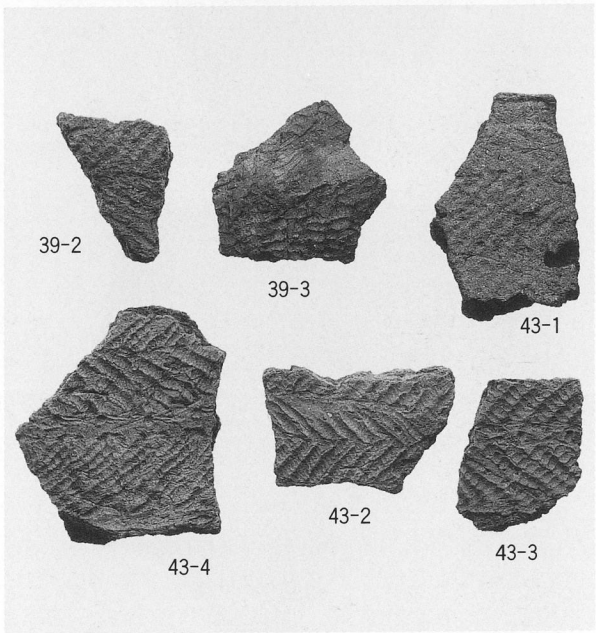
第6・7・11A・11B・16A・19・23・27号住居跡出土遺物

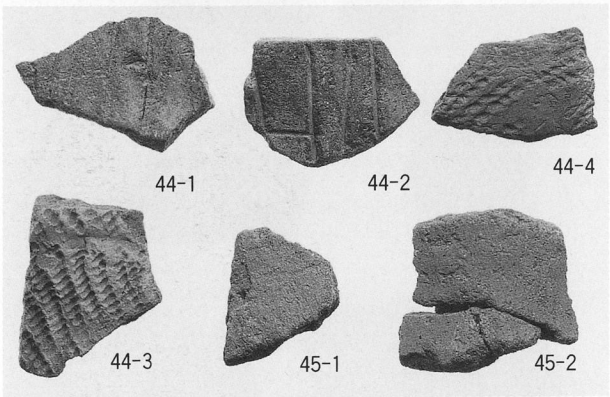
PL 10

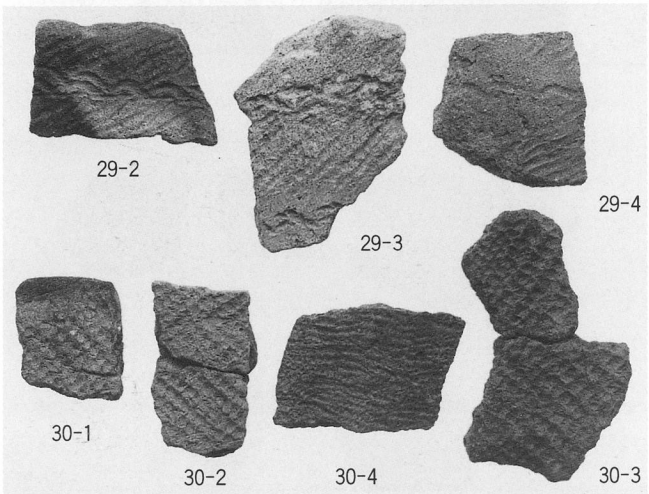


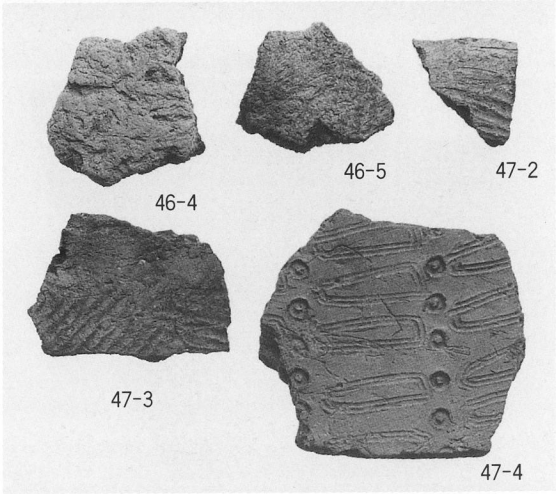




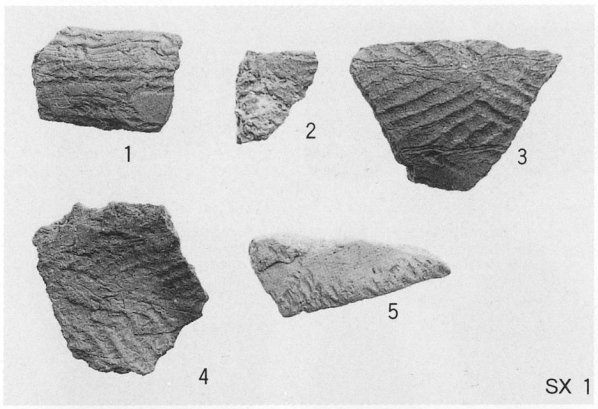


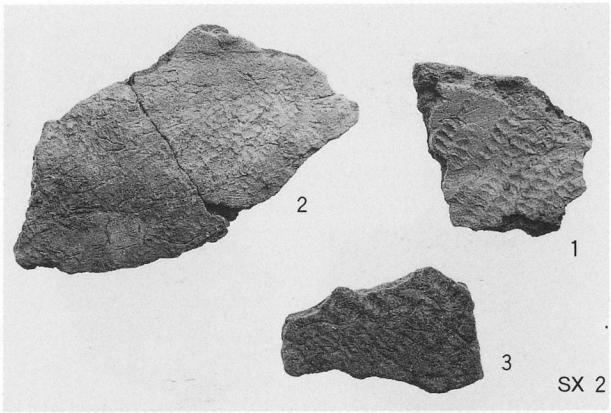


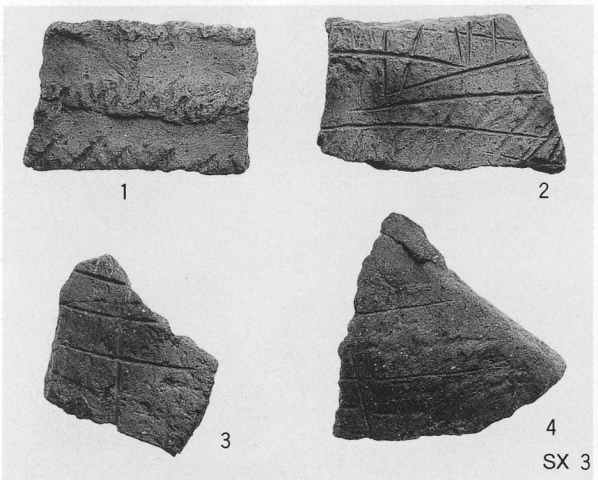


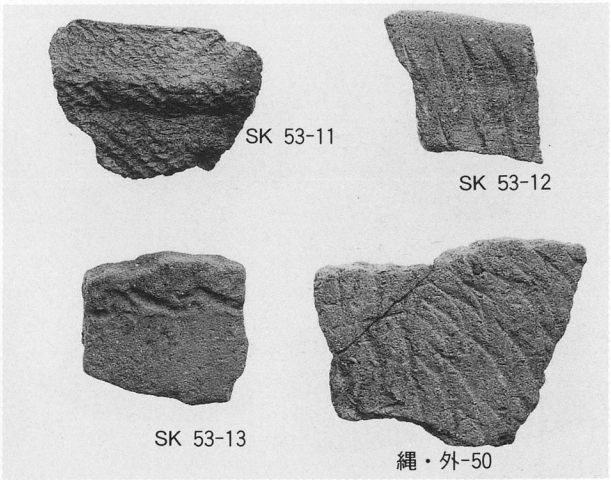


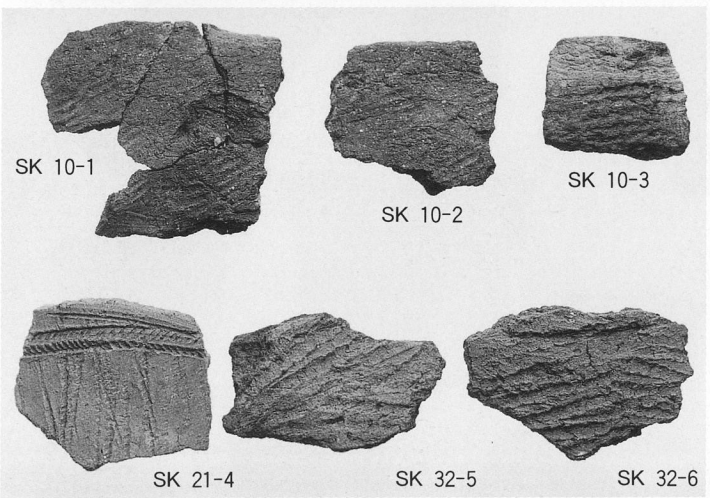
第29～32・35・36・39・43～47号住居跡出土遺物

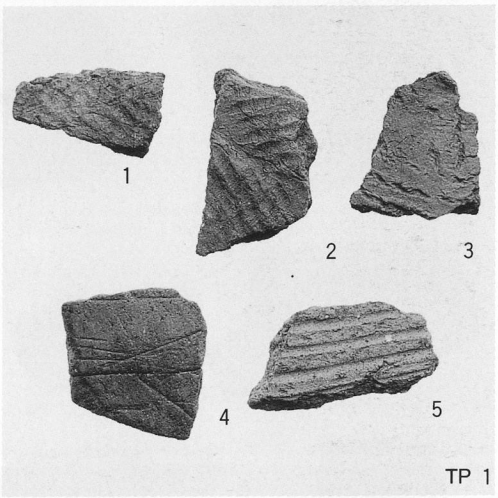


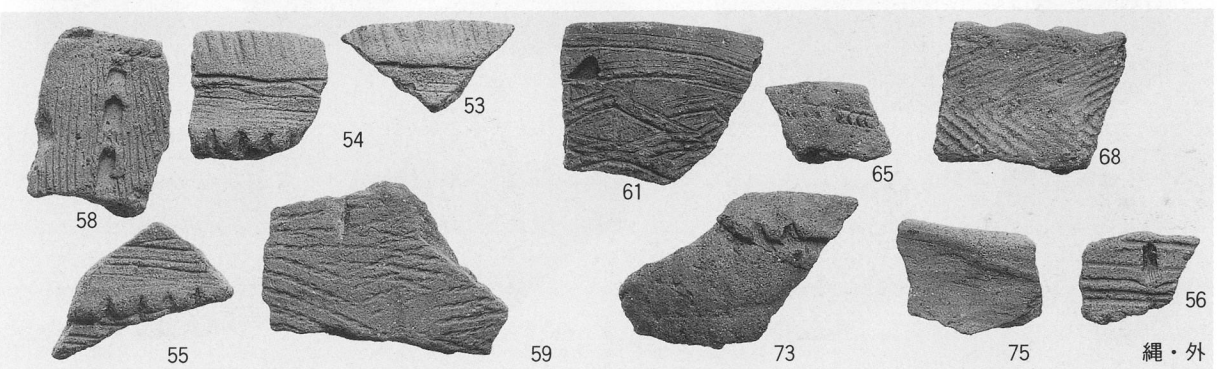






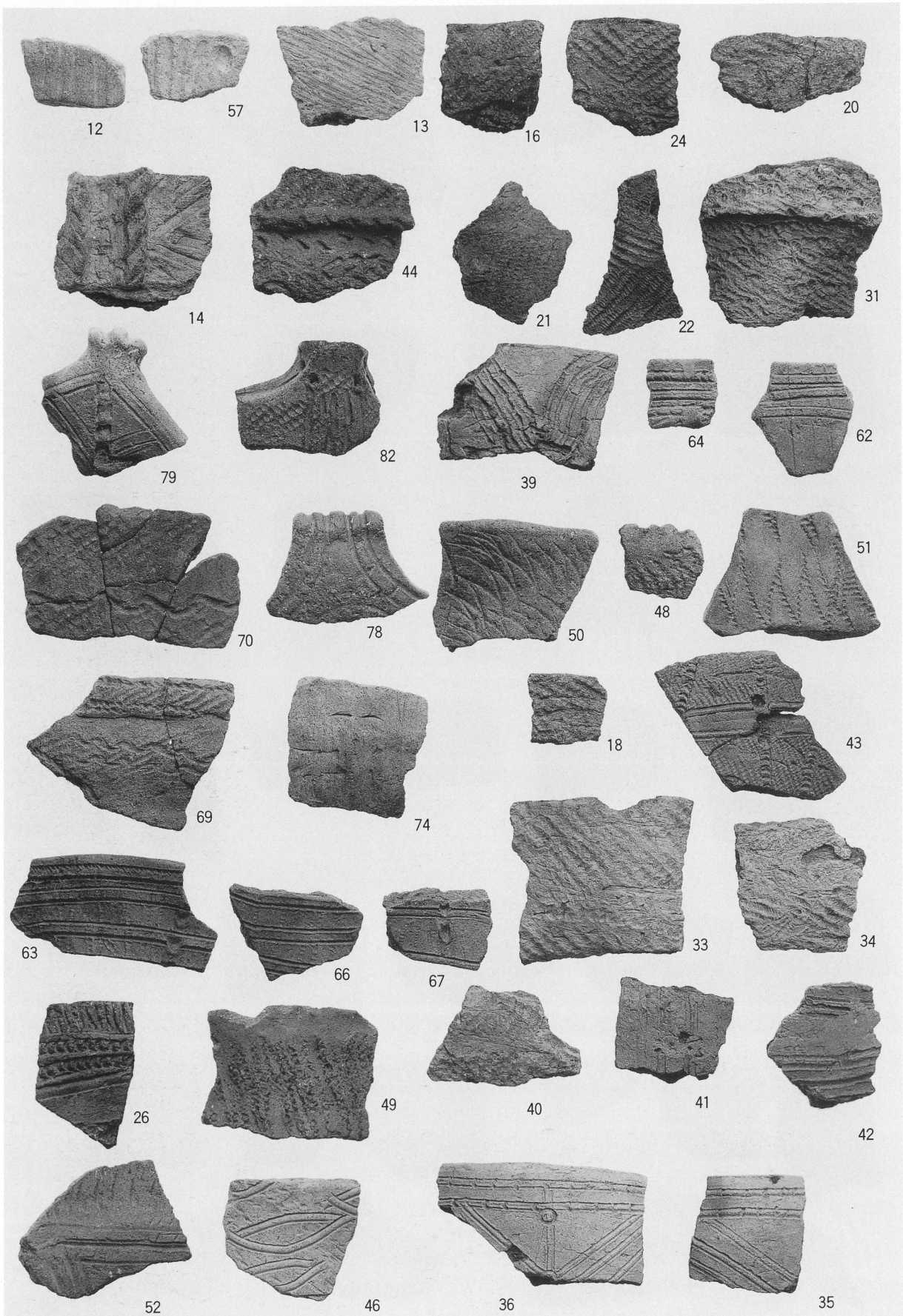




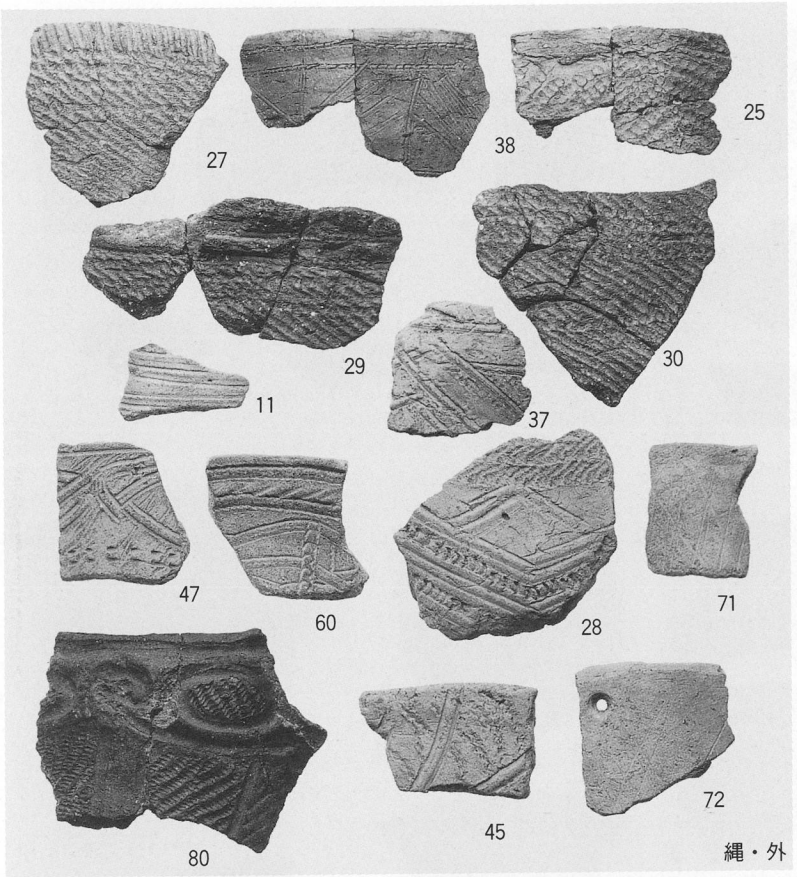


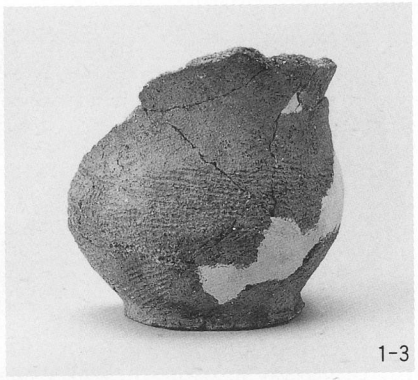
第１・３号竪穴状遺構，第１号陥し穴，第10・21・32・53号土坑，縄文時代遺構外出土遺物

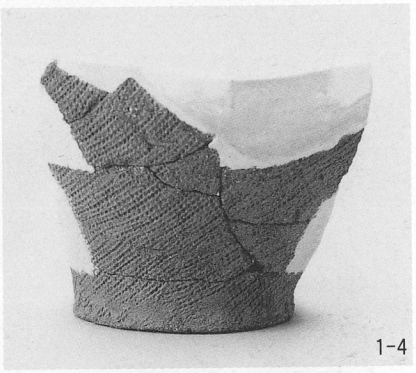
PL 12

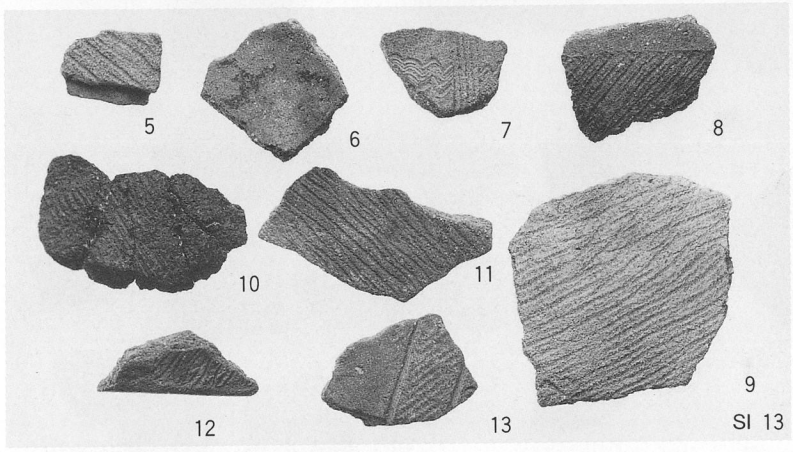


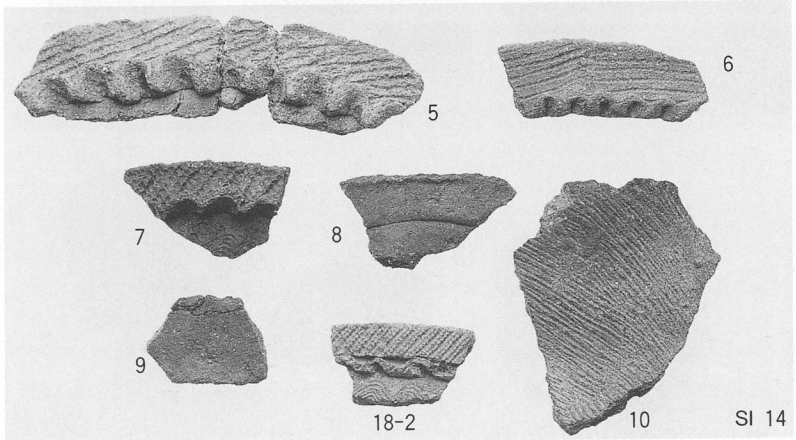
縄文時代遺構外出土遺物





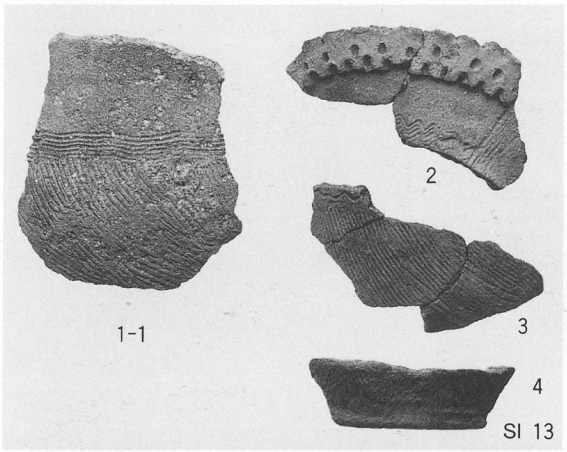


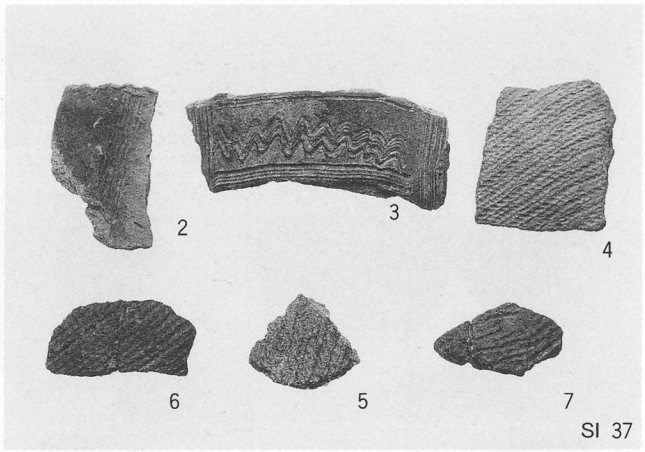


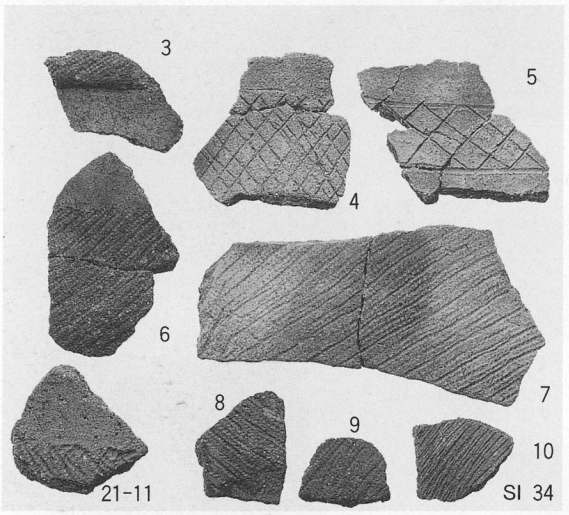


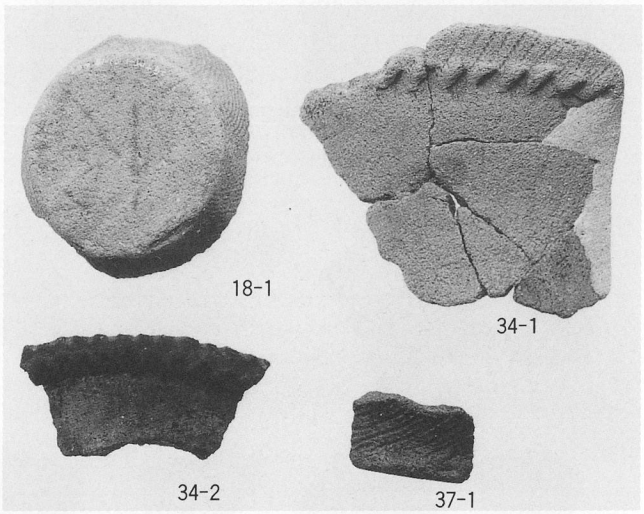
第1・13・14・18号住居跡，縄文時代遺構外出土遺物

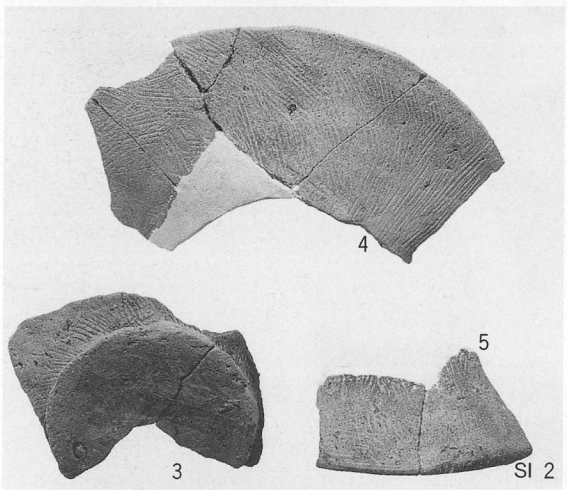
PL 14

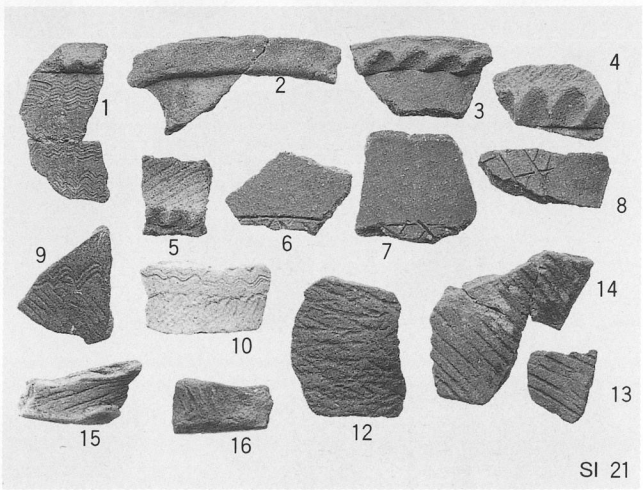


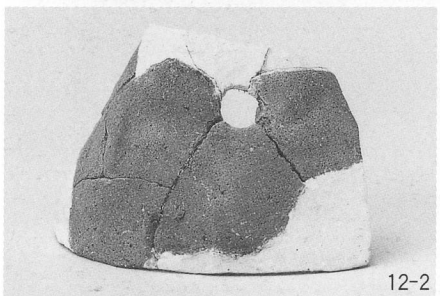


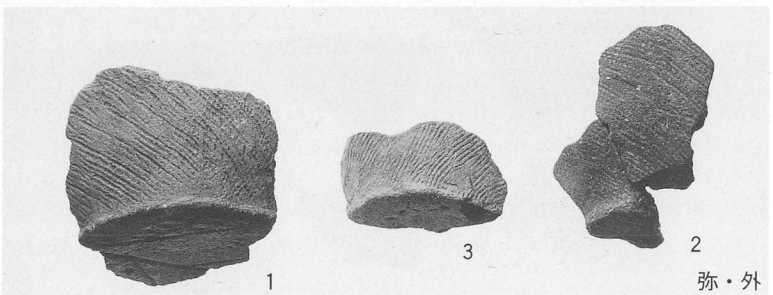




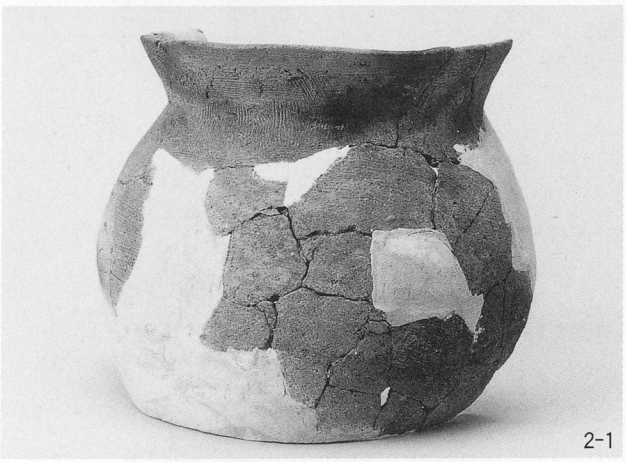


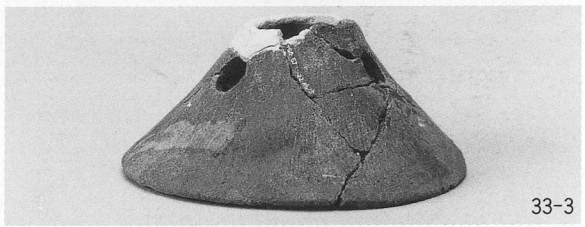






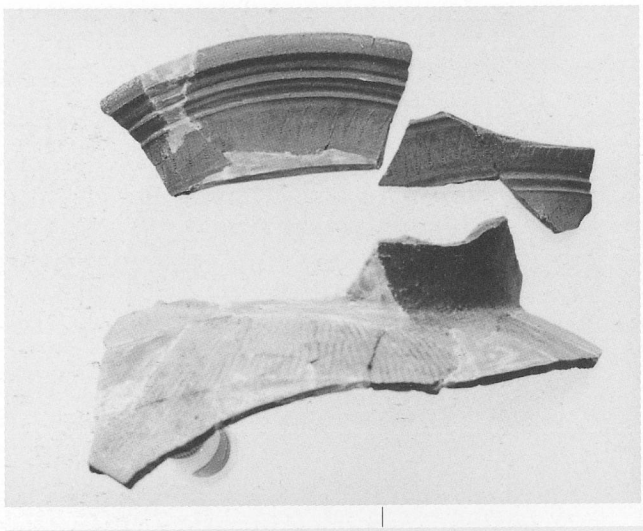
第1・2・12・13・18・21・34・37号住居跡，弥生時代遺構外出土遺物

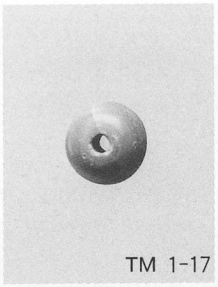


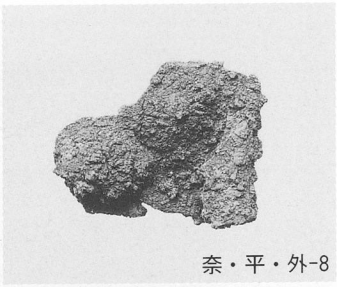


第２・４・12・33号住居跡，第１号墳，古墳時代・奈良・平安時代遺構外出土遺物

PL 16

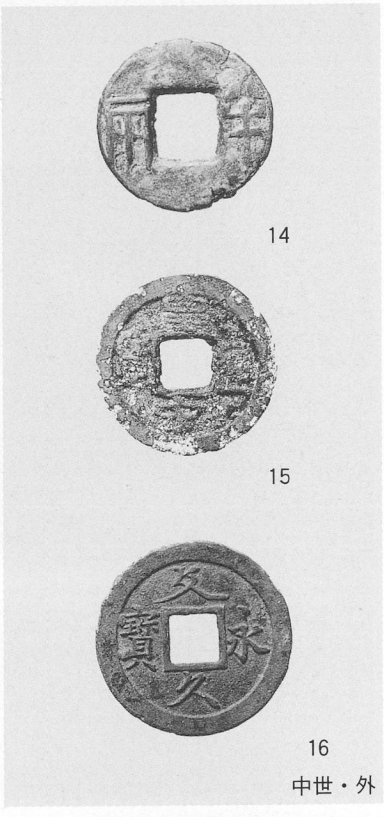



TM 1-17


奈・平・外-8

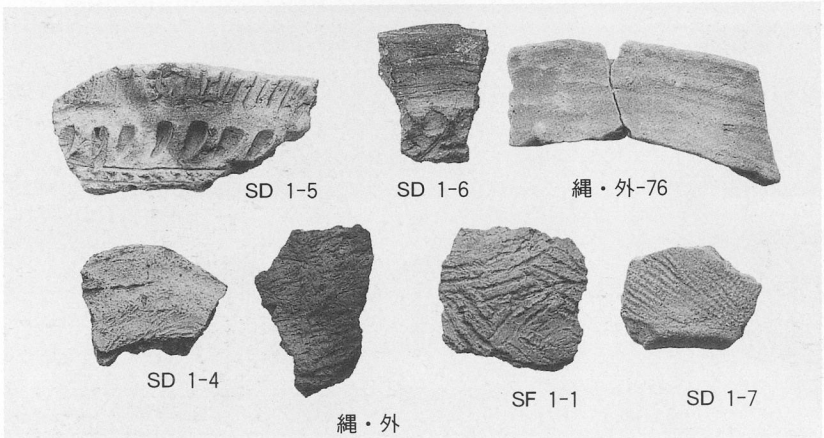
中世・外-1

TM 1-8


14

15

16
中世・外


SD 1-5

SD 1-6

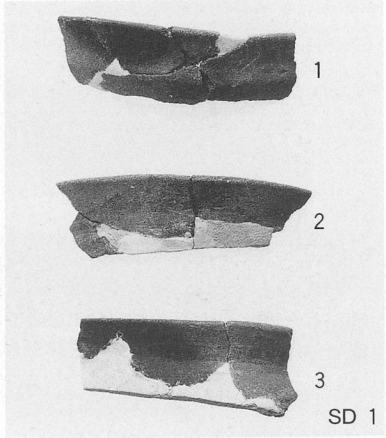
縄・外-76

SD 1-4

縄・外

SF 1-1

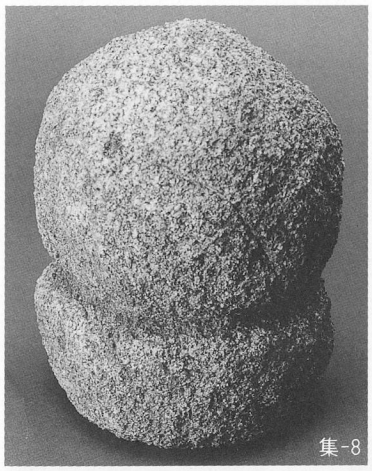
SD 1-7

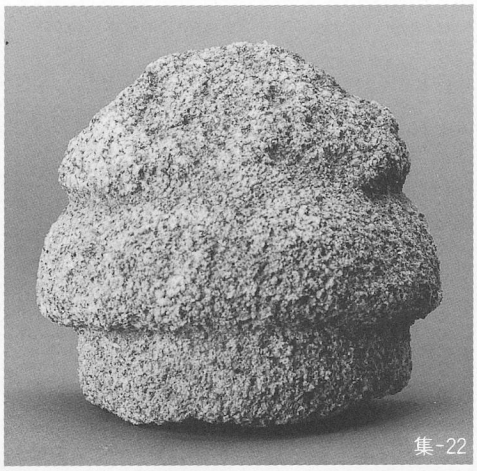

1

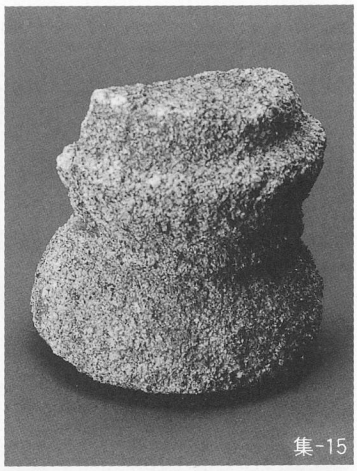
2

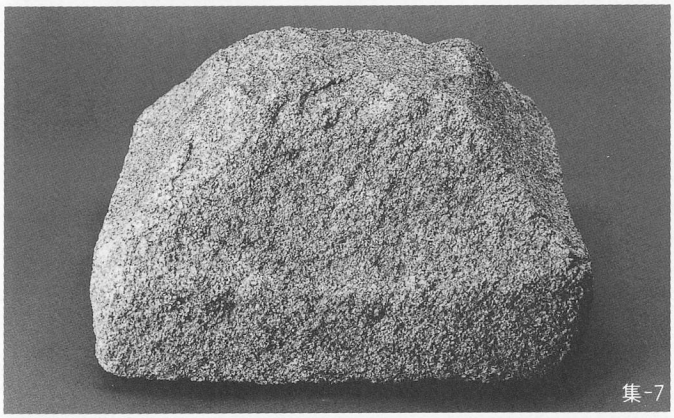
3
SD 1

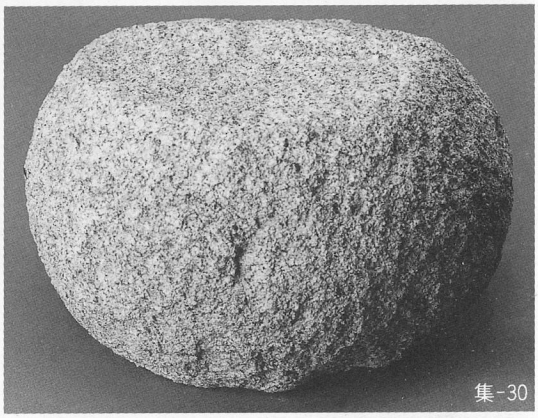
第1号墳，第1号溝，第1号道路状遺構，縄文時代・奈良・平安時代・中世以降遺構外出土遺物

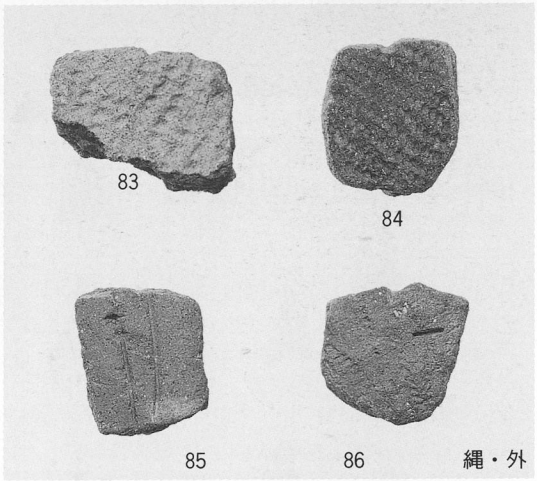


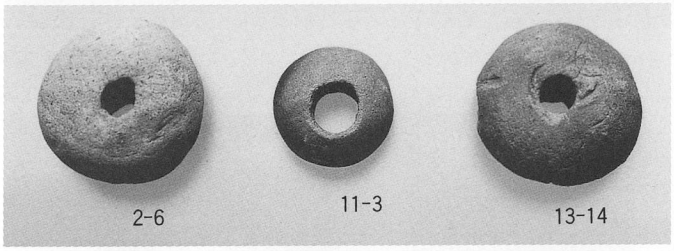


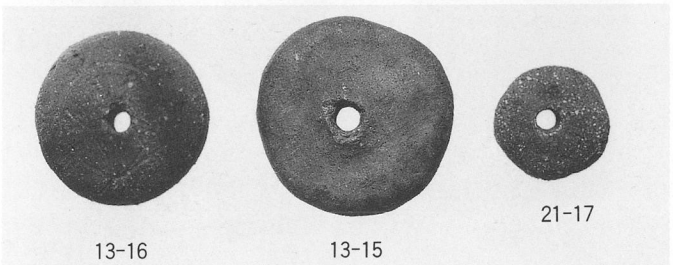


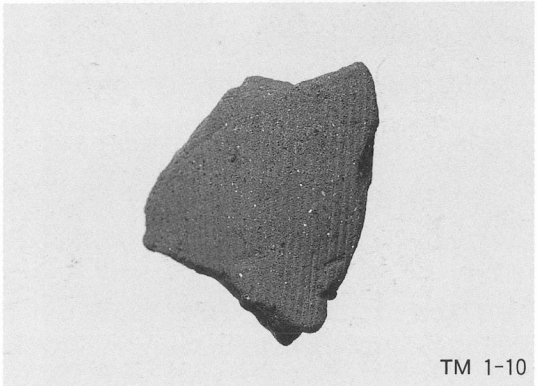






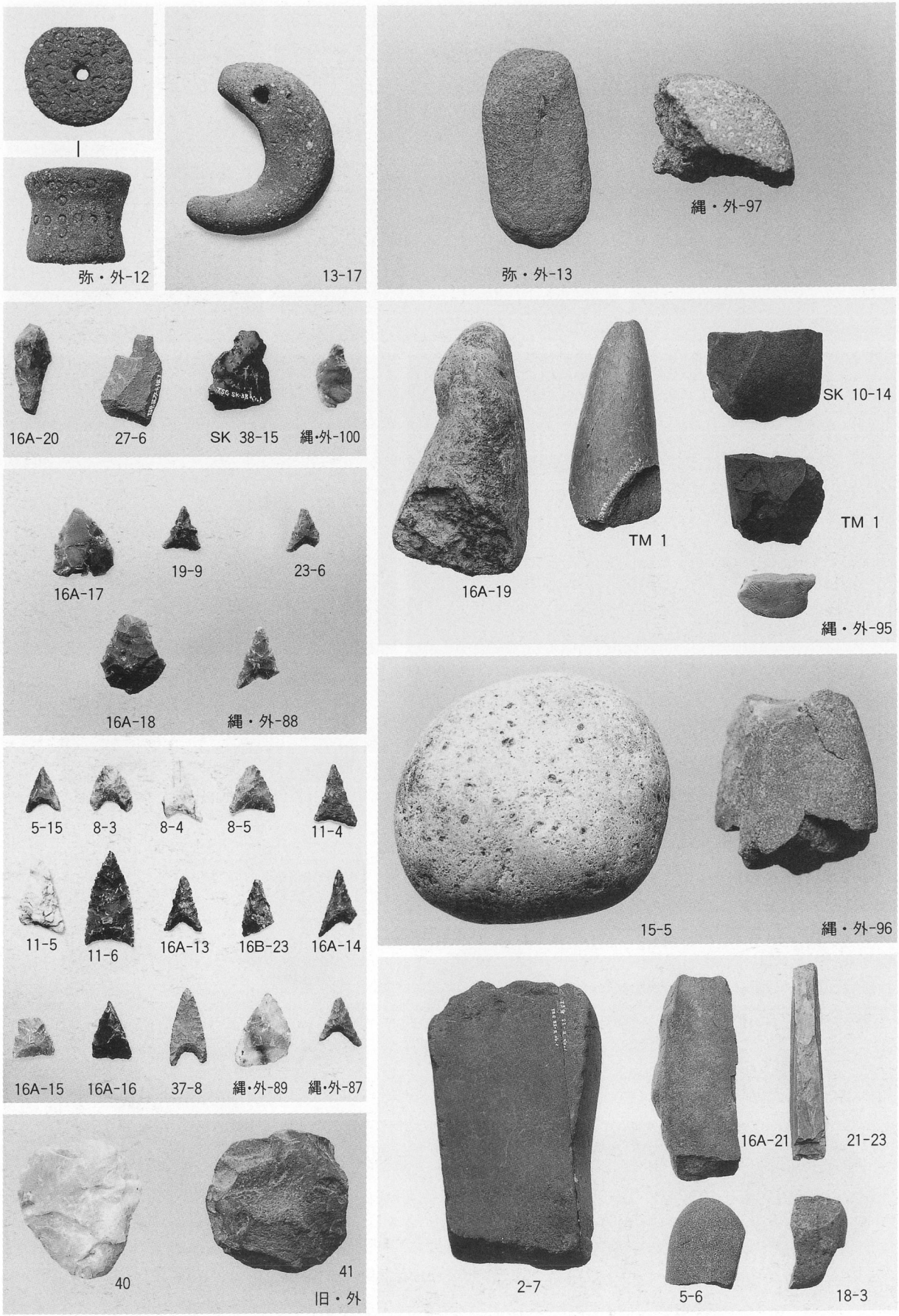




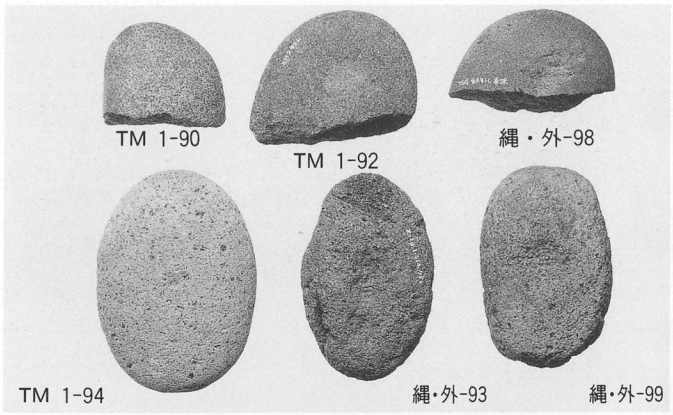


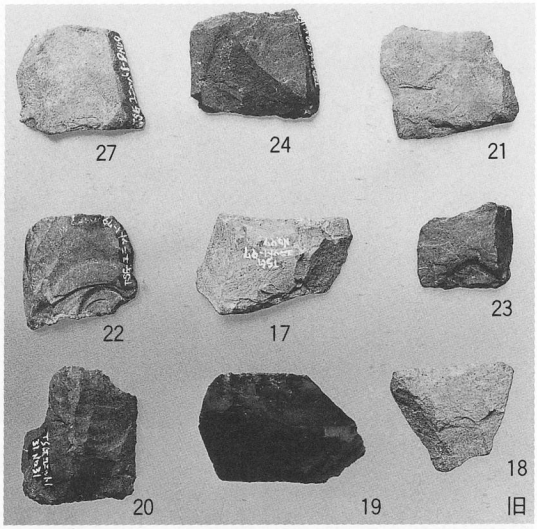
第２・11・13・21号住居跡，第１号墳，集石，縄文時代遺構外出土遺物

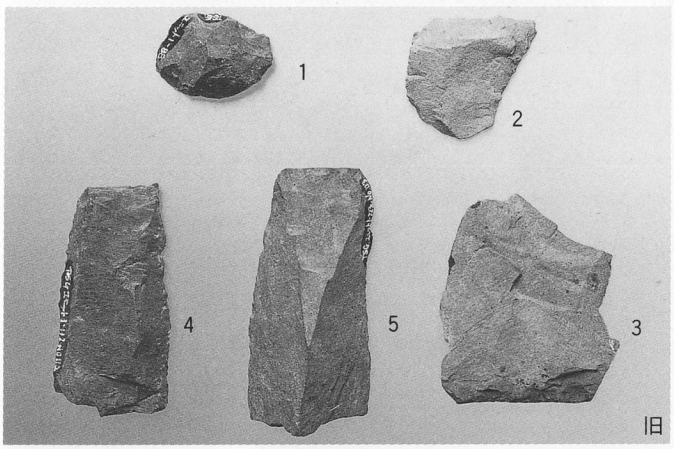
PL 18

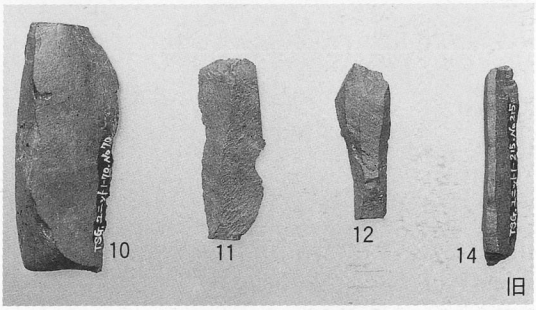


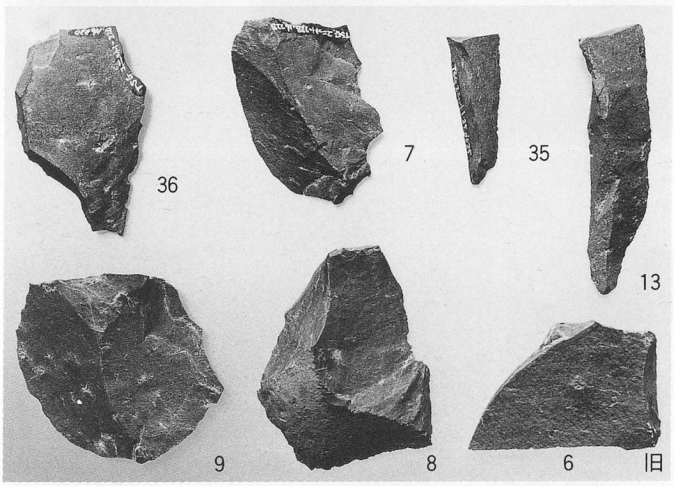
住居内出土石鏃，第10・38号土坑，第１号墳，旧石器時代・縄文時代・弥生時代遺構外出土遺物

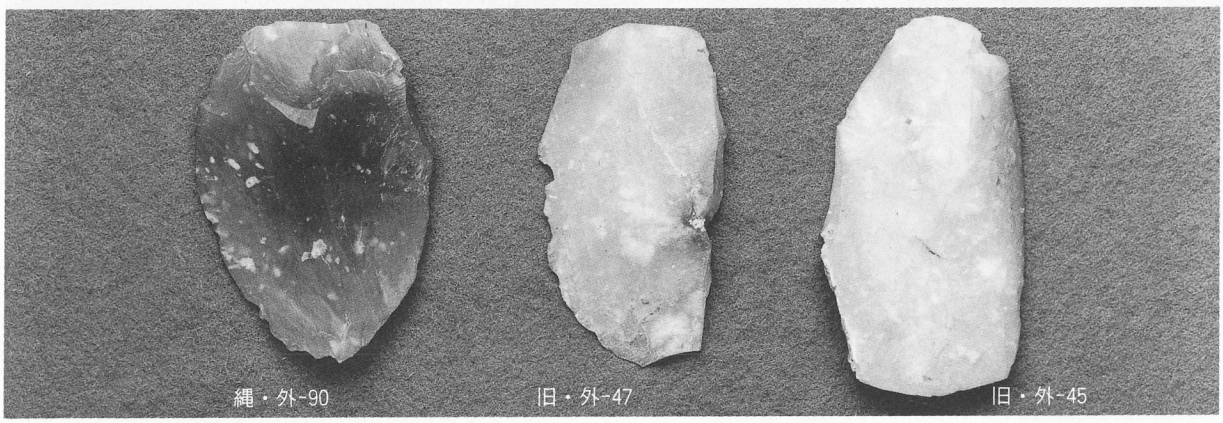






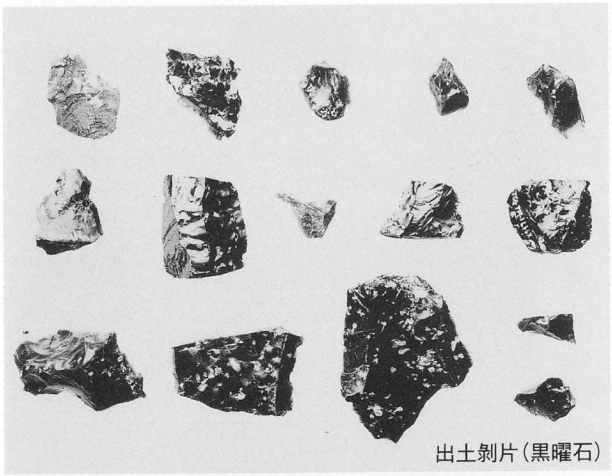


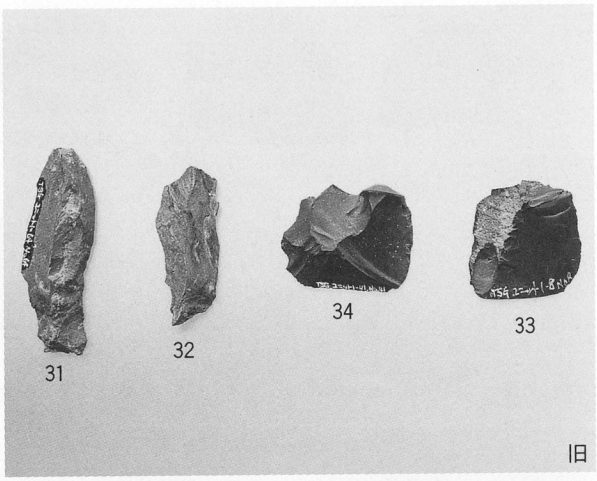




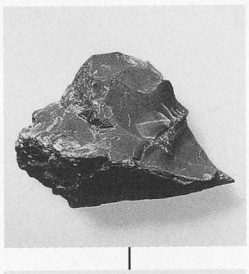
旧石器時代，縄文時代遺構外出土遺物

PL 20

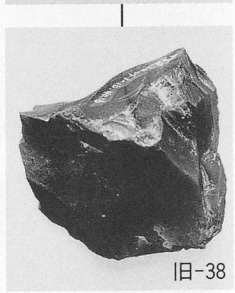

出土剝片(黒曜石)

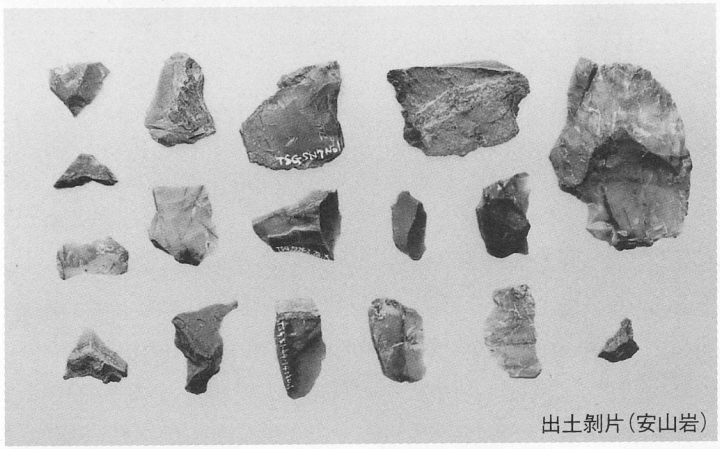


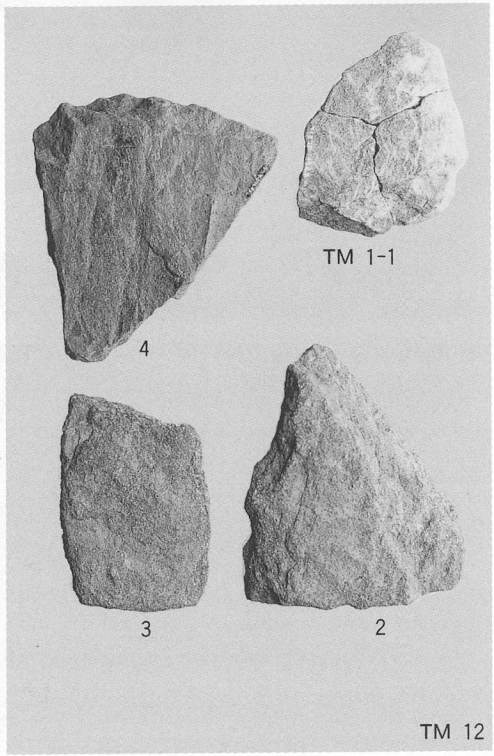
出土剝片(安山岩)

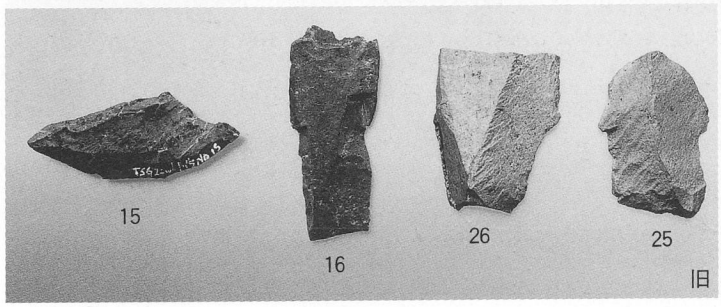


旧-37


旧-38


出土剝片(安山岩)





旧石器時代，第1・12号墳出土遺物

茨城県教育財団文化財調査報告第167集

一般国道354号道路改築
事業地内埋蔵文化財調査報告書

下郷古墳群

平成12（2000）年3月15日　印刷
平成12（2000）年3月21日　発行

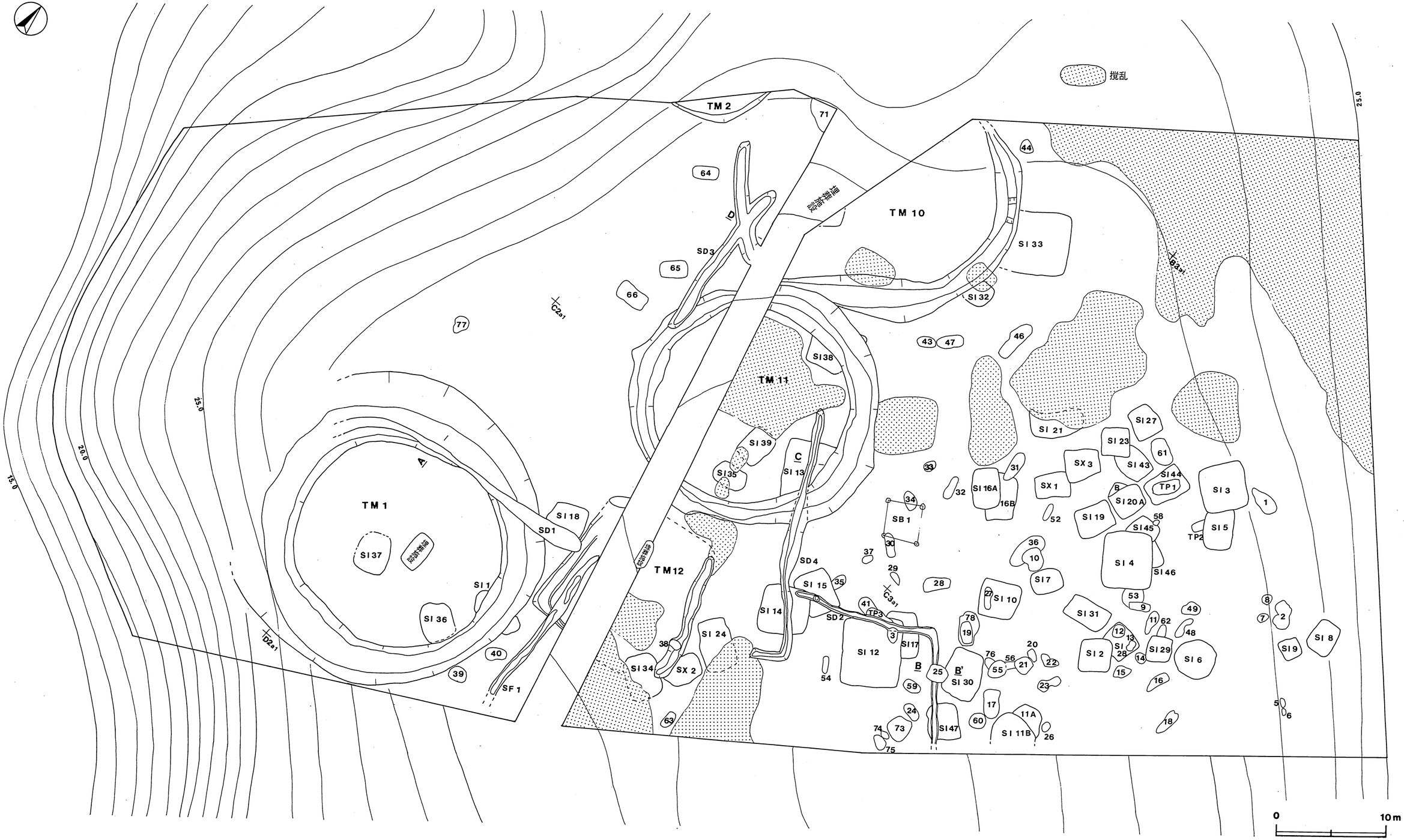
発行　財団法人　茨城県教育財団
〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2
茨城県水戸生涯学習センター分館内
ＴＥＬ　029－225－6587

印刷　株式会社高野高速印刷
〒310-0035 水戸市東原2－8－1
ＴＥＬ　029－231－0989

付　　図

茨城県教育財団文化財調査報告第167集

下 郷 古 墳 群


TM 1
TM 2
TM 10
TM 11
TM 12
SI 1
SI 2
SI 3
SI 4
SI 5
SI 6
SI 8
SI 9
SI 10
SI 11B
SI 12
SI 13
SI 14
SI 15
SI 16A
SI 17
SI 18
SI 19
SI 20A
SI 21
SI 23
SI 24
SI 27
SI 29
SI 30
SI 31
SI 32
SI 33
SI 34
SI 35
SI 36
SI 37
SI 38
SI 39
SI 43
SI 44
SI 45
SI 46
SI 47
SX 1
SX 2
SX 3
SD1
SD2
SD3
SD4
SB1
SF 1
TP1
TP2
TP3
攪乱
A
A'
B
B'
C
C'
25.0
20.0
15.0
0
10m

付図　下郷古墳群全体図